

風剣伝説①

《エルドバよりの誘い》



著：秋月しょう一郎



目次

第一章 傭兵稼業	
第一節	2
第二節	7
第三節	12
第四節	19
第二章 双生の姉妹	
第一節	26
第二節	35
第三節	41
第四節	46
第三章 襲撃！	
第一節	52
第二節	62
第三節	69
第四節	77
第五節	92
第四章 事の真相	
第一節	108
第二節	114
第三節	121
第四節	130
第五章 パーティー	
第一節	138
第二節	144
第三節	155
第四節	161
第六章 エルカトルの遺跡で . . .	
第一節	174
第二節	179

第三節	189
第四節	205
第五節	212
第六節	224
エピローグ	
エピローグ	240
《自認認証：表明表記》	
自認認証：表明表記	246

第一章 備兵稼業

第一節

交易の大動脈たる、街道の分岐路に築かれたその都市【エルドバ】は、大陸の南東部に位置する、商業国として名高い【ローランド】の第二都市だった。

この街は、古くから多くの交易商人が、その旅先で立ち寄る宿場町として利用され、またその商人達が運んで来た多くの物資が、この街の市場で売り買いされる、活気と喧騒に満ちた精力感にあふれるそんな街である。

瀟洒な煉瓦づくりの家々が立ち並ぶその街並みは、路地が入り組み、この街自体が自然に発展して大きくなった雑多な街並みであることを意味している。しかし、それは非常に簡素で、見様によっては、風情のある趣さえ漂わせている。

街の教会には人が憩い、中央広場の噴水の周りでは、鳩が戯れる。

学校へは、子供たちが足繁く通い、公園では老人がベンチで世間話をしている。

それは、どの街でも見かけられる、ありふれた光景であった。

そして、市街を縦横に貫く表通りには、様々な露天商が沿道にそって立ち並び、街の住人や旅人の目を引き付け、多くの雑踏を誘っている。

この街では、交易品の多くが、その露天商で商われている。

人々は、ここで比較的、安価な値段で、交易品を手に入れることが出来る。

それを求めて、他の都市から買い付けにくる外来の客も、いるようである。

街の人口はおよそ二十三万、その都市の威容に比べ、人の数はやや過密状態だが、この地方、特有の温暖な気候のためか、年中を通して快適な住まいを約束されている。

その為、交易で巨万の富を築いた豪商が、その職を引退しこの地へ移り住み、晩年をここで気楽にすごすと言う例も稀ではない。

その証拠に、とりわけ景色の良い街の高台にある一角には、贅を懲らしたプール付きの豪邸館が立ち並び、成金の門構えを惜し気もなく見せつけている。

また、ここは多くの傭兵が、仕事を求めて集う街ともされている。

《鋼鉄の角》、《銀の三剣》、《獅子王の爪》、《鷹の心臓》といった、組合の異なる多数の傭兵ギルドの支部が置かれているのも、その為だ。

この街に集った傭兵は、ギルドが斡旋する仕事にありつける迄は、街の安酒場で昼間から酒を呷って飲みふける、というのが通例となっている様だった。今もその通例に漏れず、街の裏通りに面した酒場街では、店にあふれんばかりに群がった傭兵達が、熱気に満ちた喧騒の大合唱音を張り上げているところだ。

その酒場街の一角に、《クレナンス》といった看板をかかげる、隠微な店がある。

クレナンスとは、この地方の古語で「またの懐かしき出会いを」という語義を意味する言葉で、古くから別れ際の去り文句として、さり気なく使われてきた言葉だ。

この酒場がその「またの懐かしき出会い」を約束してくれる場所であるかどうかはいざ知らず、未だ真昼間だというのに、その店には客足が絶えず、帯剣したむさ苦しい男たちが店の一階や二階を埋め尽くし、店の玄関にあるテラスでさえ立ち飲みの客でごった返していた。

そんな店の玄関から、一階のホールを奥に抜けて突き当たった壁ぎわの小さなテーブルでは、先程から、二人の男が何やら覇気のない虚ろな表情を隠さぬ俣、手元にある酒杯の中身をただひたすら、ちびちびと啜り飲んでいる様子だった。

その、二人の内の一人は、若者だった。

名はローダ・ブレインと言う。

今年、二十歳になったばかりの青年で、黒髪に茶褐色の瞳を持ち、顔は端正に整っているが、少し太い秀麗な眉と、引き締まった口元を見ると、男らしい精悍さが漂っている。

体格は、中肉中背で、引き締まった無駄のない身体から推測するに、この酒場に集う男たちと同様に傭兵であるのだろう。まだ若いが、どこことなく強い風格が備わったその容貌は、見る者を惹きつける何かを感じさせる、そんな雰囲気をも四辺に撒き散らしているのだった。

また、その若者の向かい側に座る、もう一人の男は、初老の老人である。

歳の頃は、六十代、前半にさしかかる、長身の男だ。

頭髪は白く、その色と同じ口髭と顎髭をたくわえている。

容貌は柔和で、笑うと人好きのしそうなその顔は、大陸、中西部域に生活する砂漠の民の末裔を思わせる、そんな顔つきをしているのだった。

名は、ジル・アダトスと言う。

老齢だが、彼も若者と同じ傭兵ギルド《鋼鉄の角》に所属する傭兵である。

彼らは、先程から相も変わらず、不味そうな酒を、ただちびちびと啜り飲むばかりだった。

この二人は、何をそんなに不快気な面持ちで居るのかは分からないが、手元にある酒杯の中身は、彼らが注文して二時間も経つというのに、まだ半分以上を残して並々と注がれている俣だった。彼らの周囲では、傭兵達が酒に酔って、大喧騒を奏でている真昼最中だ。

それによって、店内は熱気がますます上昇し、むさ苦しさを増す一方だった。

そのうち、この酒場のサービスで、店内の中央には楽隊があらわれ、傭兵の間でよく歌われる「愛しのセレヌ」という楽曲の演奏が、始まろうとしていた。

すると、今迄ワイワイと騒いでいた傭兵達は、その楽隊の演奏に興じようと、皆が店の中央に集い、今や楽曲の聴衆と化していた。

演奏が始まると、ゆるやかだが優美な旋律が酒場の店内を流れ、濃密で甘い香が辺りに漂うかのような、心地よいメロディーがその場の空気を染め上げていく。

傭兵達は、その曲に聴き惚れ、その目を細めて陶醉するかのよう、楽隊が奏でる音楽に聴き入っている。

そんな中、ローダとジルは、その楽隊の演奏する曲には何の興味も示さないのか、何やら冷めた視線で、店の中央に集う傭兵達を眺め回している様子だった。

「まったく、冗談じゃないぜ・・・」

その沈黙を破って、怒声を吐いたのは、ローダという若者の方だった。

彼は、何やら憤慨した様子で傭兵達をねめつけると、向かいの席に座るジルに対して、こう言葉を切り出していた。

「なあジル、こいつ等は、馬鹿じゃないのか？　こんな真っ昼間から音楽のご鑑賞だなんて、大層なご身分でもないのに、いい気なもんだぜ・・・」

「まあ、そう言いなさいますな、若。彼らだって悪気があってした事ではありますまい。もしかしたら、本当に知らなくて、成り行き上、そうしたって事もありますぞ」

ジルと呼ばれた老人は、腹立たしげに罵倒を浴びせる若者を、宥め諭すかの様な口調でそう言うと、苦心げに自分の髭をしごいて、手元に置かれたガラス製の酒杯に手を伸ばしていた。

「そんな事ないさ、こいつ等、俺達を二流、三流だと思って馬鹿にしているのさきっと・・・でなけりゃ、俺の言葉に一言、二言でも、答えてくれてもいい筈じゃないか？」

ローダが、先程から怒っているのは、この店に集う傭兵達から受けた仕打ちだった。

全員ではないが、ローダが話しかけた三十人、近くの傭兵達は、決まって同じ反応を示し若者を冷たくあしらったのだ。

それは、ローダとジルが訳あって、ある男についての情報を聞きだそうと、この酒場にきて一人一人の傭兵達に聞き込みを行ったところ、話を聞くたびに「あっちへ行きな、小僧」とか「そんなヤツ知るか、アホ！」とか「俺達は、いま酒をのんでいるんだぜ邪魔するな」等とあって、話を突っぱねられ、または邪険にされ、結局、聞きたい情報も得られぬままこの奥のテーブルで、二人ふてくされつつ酒杯を啜ると云うことになったのである。

ジルはともかく、ローダという若者には、それがどうにも納得がいかなかった。

何も、そんな扱いをしなくても、こっちは頭を下げて教えて欲しいと頼んだのにな、との思いがあった。

しかし、傭兵達は、そんなローダとジルを尻目に、仲間との雑談で大笑いをあげたり、鄙猥な話に耽っては好色な笑みを浮かべて、ニタニタと薄ら笑いを繰り返したりと、一向に意に介した様子はなかったのである。

よくある話だが、ごろつきまがいの傭兵達の中には、自分の力を過信し、女、子供や、まだ年齢の浅い若い青年に対しては、時には尊大に、時には横暴に、また時には陰険にといった振る舞いを為す、悪癖者がよくいると言う。

ローダたちも、そんな癖の悪い連中とやりあっても仕方ないという気持ちもあったが、どうにも気持ちがおさまらず、そんな傭兵達に対して一言も二言もいってやりたい気分だった。

「まったく、人の話も聞かないで、大笑いをあげやがって。ふざけるなってんだバカヤロー」

ローダは、まだ怒りがおさまらないのか、悪態を吐いてじゅるじゅると酒杯を啜っている。

「もう、その位にしておきなされ、若。いつまでも大人げないですぞ」

だが、そう言ってジルは、ローダの言葉を窘める。

「ああ、わかっているよジル。でも、なんか言わなくちゃ、収まりが付かないんだ」
「そうですね、しかし、たとえ相手がどんな連中であろうと、こちらが腐っては同じ穴のむじなですぞ。ここは堪えて、事を忍というのも大切なことです。若は、感情に走り過ぎですから、もっと理性という言葉を重ねなさいませ・・・」

ジルは、駄々をこねる生徒に、教えを諭す教師のような口調で、ローダを戒める。

すると、「わかったよ、もう言わないことにするさ。俺も馬鹿じゃない、大人の良識ぐらい弁えているからね・・・」と、ようやく怒りの矛先をおさめる気になったのか、ローダは、引きつった顔で無理やり笑顔をつくると、ジルに対してそう答えを返していた。

ジルは、それに満足したのか、うんうんとローダの言葉にうなずくと、何やらニコニコとした顔つきで、手元にある酒杯をぐっと呷ると、残り半分となったビールを舌で味わいながら、喉に流し込んでいた。

「だけど親父のやつ、今頃、どこで一体、何をしているんだろ？」

「アルスレイド様のことなら、心配はいりません。あの方はお強い人ですから、きっとどこかに壮健でいらっしゃることでしょう」

「でも、もう、四年にもなるんだぜ。そろそろ消息の痕跡ぐらい掴めても、いい頃だと思うけどなあ・・・。搜索の期限は、あと一ヶ月しかないんだ。いい加減みつからなければ、この街を最後に、国へ帰らなければならないんだぜ・・・」

「それは、仕方のないことでしょう。若は、イルネスク王と約束を交わしたのですから、それを反古にする事はできません」

ローダとジルは、ある男を捜していた。

名はアルスレイドという、彼らと同じ傭兵ギルド《鋼鉄の角》に所属していた傭兵だ。

『鉄の剣王』としての異名を持つ、大陸屈指の剣士だが、数年前からその消息がわからなくなり、ローダとジルはその男の消息を追って、搜索の旅に出たのだ。

それは今から、約四年も前になる。

当時、十六歳だったローダは、ある小さな王国の王城で客人としての生活をしていた頃、その父アルスレイドは、大陸の諸王国をてんてんとして傭兵としての仕事をこなすかたわら、毎月、一通はローダの手元にその消息を示す手紙を、送ってきてよこしてきたものだが、数年前のある日をさかいに、プツリとその音信が途絶え消息を絶ってしまっていた。

アルスレイドは、国々の抗争によって生じる戦役にも幾度か参加し、数々の功績をあげた歴戦の勇士だが、その頃から組合にも顔を出さなくなって久しく、一部のギルドの傭兵仲間の間では『アルスレイドは死んだ』という噂が流れ始めていた。

当時、そんな噂をどこからともなく聞いたローダは、居ても立ってもいられず、父の消息を捜す為に、ジルとともに傭兵ギルド《鋼鉄の角》の組合に入会し、今日まで、その父の行方を追って各地を旅して来たのである。

ローダとジルの二人が《鋼鉄の角》の傭兵になったのは、アルスレイドの名が『鉄の剣王』として有名であったから、組合に、その名を登録している他の傭兵達から消息の手掛かりとなる貴重な情報を、得られるのではないかと思ったからである。

しかし、今迄、ギルドの傭兵仲間にもその所在を尋ねても、アルスレイドという男の名

だけは知っているが、その消息までは知らないという者が殆どで、なかなか搜索の糸口が見つからないというのが現状だった。

そんな中、彼らがこの街エルドバに来たのは、手元にある唯一の手掛かりアルスレイドがローダに送った、手紙に記されてある、彼の歴訪地先の地名を当てにしてである。

アルスレイドは、消息を絶つ前、このエルドバの街へ何度か短期滞在していたらしく、手紙にはぶっきら棒に「今エルドバの街に居る、などと、書き記されている文面が幾つかあった。

その為、その文句を頼りに、この街で傭兵達がよく集う酒場を探し、聞き込みをしていたのである。しかし、前例にある様に、ローダたちは、この酒場の傭兵達に冷たくあしらわれ、その消息もわからずじまいであった、という経緯があるのだった。

「もう四年かあ、長いようで短かった四年間だったな。でもせっかく今まで苦勞して捜し歩いて来たんだ、このまま国へ戻るなんて何か惜しい気がするんだよな」

「そんな事いいなさいますな。イフィーナ様も、若のお帰りを首を長くして待っていることでございましょう。あなたには、将来の国を背負って立つ崇高なる使命があるのですから、ぜひとも国へ帰還してもらわねば困ります・・・」

「おい、ちょっと待ってくれよ。俺はその件に関しては、承諾したつもりはないんだぜ。それは、イルネスク王が勝手に進めている話であって、俺は何も関係があるわけじゃないんだ」

「何ですと、では、若はイフィーナ様を裏切るといえるのですか？ それは許しませんぞ。わたしが、あなたの従者となってここに居るのも、近い将来に姫と若が結ばれて次代の王国を背負って立つ、王道に即位するのを見届ける為ですからぞ。それなのに若は、いたいけな姫君を蔑ろにするおつもりですか、嘆かわしい。そんな事では、一国の男児とは言えますまい。ここは覚悟を決めてもらわねば、イルネスク王の恩義に、報いる事はできませんぞ・・・」

「裏切るだなんて、心外な事、言わないでくれ。俺だって、イルネスク王には多大な恩義を感じているんだ。でも、イフィーナとの婚儀の話と、これとは別ものだろ。育ててもらった恩で、身を縛られるなんて、まっぴら御免なんだ・・・」

「それでは若は、どの様なお心算なのですか？ イフィーナ様はあなた様の事を深くお慕い申しあげているのですぞ。まさか貴方は、その姫様を嫌っているという訳ではありませんまいな？」

「だから、好きとか嫌いとかの問題じゃないんだ。俺はただ・・・」

「では、どうだと言うのです。え？ ええっ！？ しっかりとお答えいただきますよう。この際ですからな、とことん私は、お話をお聞きする用意がありますぞ・・・」

だが、ジル彼は、執拗に言葉の連続攻撃によって、ローダを責め立てた。

途中で、答えを接げなかったローダは、巣穴に追い込まれた兎のように、進退、窮まり、二の句も継げず四苦八苦する。

彼のその表情は、見る見る苦虫を嘔み潰したように渋くなり、この状況をどう切り抜けようかと、心の中で悪戦苦闘している様子だった。

「ジル、もうその話はやめよう。ところでセルシア、そうセルシアはまだかな、もうそろそろ来る頃だと思っただけど？」

だがそして、苦し紛れに出た言葉は、それだった。

ローダは、話の主導権を奪還すべく、無理やり話題の矛先を変えると、少し間抜けな表情の佞、ジルに対してそう話を切り出していた。

しかし……

「若、話をはぐらかさないで頂きたい。今は、大事な話をしているのですぞ。そもそも若はですな……」

と、ジルは若者の退路を断つように、小言を二言、三言、繰り返すと、また話の矛先を戻して次のような言葉を発する。

「それですな、若、イフィーナ様のことですが……？」

「ああああ、もう止めてくれないか、でないと頭が……頭が痛くなってくる……」

ローダは、ジルの執拗な追求に、とうとう我慢ができなくなったのか、悲鳴をあげて頭を両手で抱えると、ガクッとうな垂れて息苦しさを感ずるよう一つの大きな溜め息を吐いた。

だが、

「なら、それならば、いいでしょう。ではこの話は、ここで打ち切ります。ですが、この事は一国の運命を左右する重大事項ですので、今後、若がお一人で考えて結論をお出しなさいませ。それまで、私は、この話に対して自分の意見を言うことは、しばらく控えますからのう。だからその事を宜しく申し上げます……」

「判ったよジル、そうする事にするよ。俺だって、何も考えていない訳じゃないんだ。あと一ヶ月間、よく熟考してみるさ、ホント真剣に……」

ローダは、彼ジルがこの件の話について、意外とあっさり引き下がったので、ほっと一息、肩の荷を下ろすと、何やら疲労困憊した様子で、椅子にもたれ掛かり額の汗を右の手で拭いとった。だがそしてローダは、ジルがまたこの話を蒸し返さないように、そ知らぬ顔で目の前に置かれたガラス製の酒杯に手をのばすと、不味そうにその中身を一口一口、啜り飲んだ。そう酒場の窓から外に覗いをたて、無言のまま彼は路地の街並みの様子を暫し時の飽くまで見据え続けて観ているようにでもあったのだがだ。

第二節

「二人とも、こんなところに居たの!？」

その声が届いたのは、ローダやジルが、二杯目の酒杯を飲み干してから数刻たった時の頃だった。突然の声に、惚けた顔をしていた二人の目の前に立っていたのは、まだ若いスラリとした姿態に薄い褐色の肌を持つ二十三才の妙齢の女だった。

彼女は、水牛の厚革を鞣した革製の胸あてを身につけ、腰には細身の剣を帯び、肩まで伸びた栗色の髪を束ねず、無造作に背中へと流している。

顔は容姿端麗で、エメラルド色に輝くその双眸と、熟れた果実を思わせるその唇が非常に印象的な女性だった。

彼女は、先程から何やら少し怒ったような表情をして、ローダとジルを軽く睨み、腰に手を当てて、その場に立ち凄んでいる様子だった。

「やああ、セルシア、ずいぶん遅かったじゃないか？ 待ってたんだぜ」

ローダは、そんな彼女に、何の悪怯れた様子もなくそう言葉を発していた。

しかし……

「遅かったじゃないわ、貴方たち？ どうしてこんなところに居るのよ。約束していた場所は、ここじゃなかった筈よ……」

セルシアと呼ばれた女は、声に少し怒気を孕んだ口調でそう言うと、二人が座る席のテーブルの端を、軽くドンと叩いていた。

「あれ、そうだったかな？」「そうでしたかのう？」

ローダとジルの二人は、声をそろえて同時にそう言う。

「もう、貴方達って呑気よね。わたしが一体、どれほど酒場街中を探し回って此処へ来たか、知ってて言っているのかしら？」

彼女は、ここへ来るまでに、二十軒、近くの店を探し回り、ようやくローダとジルの二人が居るここクレナンスの酒場を探しあてて来たのだ。ローダとジルが当初、約束しておいた三人の待ち合わせの場所とは、まったく異なる別の酒場にまできて酒を飲んでいたのだから、セルシアが怒るのも、無理のないことだった。

「いや、悪かったよ。つい足が向いてしまって、何軒もはしごしたんだ」

ローダとジルは、アルスレイドに関する情報を聞き込みする為に、何軒かの店を渡り歩いてきたのだ。しかし、納得のいく情報は得られぬまま、最後に辿り着いたのがここクレナンスの安酒場であった。もちろん、この店でもいい情報は得られなかったのだが、聞き込みもなしに捜し回っても埒があかないので、多少、くたびれ儲けという感も拭えないようであったが、致し方ない。

ローダは、セルシアに対し素直に謝ると、一つ空いたテーブルの席に、彼女を座るように促し、店の女給に追加のビールを一杯、頼むと、三人は向き合った形でようやく落ち着いたようにそこに腰を落としていた。

「まあいいわ、今回だけは許してあげる。でも二度目はなしよ。私、それほどタフじゃないんだからね、判った？」

セルシアは、そんな二人に対し、怒っても致し方ないと思ったのか、先程ローダが注文して運ばれてきた酒杯に、そっと口を付けると、一口分だけ口に含みながら酒杯を手元に置き、ローダの目を見つめて、ニコリと一つ笑顔を返していた。

「ああ、本当に悪かった、反省してるよ」

セルシアに見つめられ、気恥ずかしいのか、ローダは、照れ笑いを浮かべながら二度、謝り、頭を下げてその意を表す。

もともと、待ち合わせの場所とは別の店に行って、情報を聞きだそうと言いだしたのはローダであった。ジルは、それを止めたのであったが、ローダがどうしてもと言うの

で、渋々、付き合わされた格好となったのだ。だから、ローダがセルシアに対して謝るのは、当然のことで、本人も、それを真摯に受けとめ、悪怯れた様子もなかった。

彼女は、それに納得をしたのか、その後、文句を言う事は無かったのである。「それで、いい情報は掴めたのかしら？ 相当、聞き込みをした様だから、何か成果があったんでしょ？」

「「……………」」、「……………」」

二人は、セルシアの質問を受けて、押し黙る。「そう、その様子じゃ駄目だったみたいね。でも安心して、貴方達の代わりに私が見付けてきてあげたわ、`鉄の剣王、`に関するいい情報をね……………」
「なんだって、それってどういう事だい？ 親父の居場所が見つかったのか？」
「いいえ、ちょっと違うわ。それはね、今度、見つかった仕事の依頼主が、どうも貴方の親父さんと、昔、顔見知りだったようなのよ。それでねローダ、貴方の名前をだしたらぜひとも仕事の依頼を引き受けて欲しいと、向こうの方から頼んできたの」
「仕事の依頼を……………」

ローダは、ふと今まで忘れていたことを思い出していた。セルシアは、ローダとジルの二人とは別行動で、この街にある《鋼鉄の角》の傭兵ギルドの支部へ、仕事を探しに出掛けていたのだ。セルシアは、交渉事が向いているらしく、いつもギルドへは一人で行って割りのいい仕事を請け負ってくるのだ。

ローダとジルは、仕事のことにに関してはセルシアを信頼し、全てを任せているのだが、今度、見つかった仕事の依頼主は、どうやら父アルスレイドとの面識があるらしい。

二人にとって、これは願ってもないチャンスで、運がよければ`鉄の剣王、`に関する消息の一端が、掴めるかもしれない。

ローダは、セルシアの言葉に身を乗り出す様にして、次の言葉を待った。「そうよローダ、まだ貴方達の意見は聞いていないから、仕事を引き受けたわけでは無いけど、その依頼主が貴方の親父さんと、相当、昵懇の仲だったことは確かよ」
「ジル、やったじゃないか、これで親父の消息が判るかもしれないぜ！」
「そうですね、しかし、その仕事の内容がどんなものか判らずに、依頼を引き受ける訳にはいきません。もう少し、詳しい事情を聞いてからでないと、何とも言えませんな……………」

嬉々としたローダに比べ、ジルはいたって落ち着いた態度で、セルシアの方へと顔を向ける。

「そうよね、ジルの言う通りだわ。でね、仕事の依頼内容は、今、話すから聞いてくれる？」

セルシアの語った内容は、次のようなものだった。

仕事の依頼主の名は、ハンス・アグデプトなる人物である。

ここエルドバの街を根拠地にして、貴金属や骨董品を売り捌く豪商で、一代で巨万の富を築き上げた、齢五十数歳を越える小太りの男である。

彼には、今年で十八になる双子の娘がおり、それぞれの名を、エネア、ミネアと言った。しかし、娘といっても、その二人は養女である。

二人の娘は、まだ幼い四歳、程の頃、ハンス・アグデプトの許へ貰われて来たのだ。ハンスがまだ若いころ、彼にはアンナ・アグデプトなる妻がいた。しかし、彼女は、わ

ずか二十一歳の若さでこの世を他界し、子供を身籠もることもなくあっけなく逝ってしまっていた。

彼は、二人の間に子を儲ける事が出来なかったことを悔やみ、しばらく荒んだ生活をおくっていたが、それを見かねた知人が、養子縁組みの話を持ちかけてみたところ、最初は渋っていたハンスであったが、時の経過とともにその考えを改めたのか、その話を聞き入れて、エネア、ミネアの二人を、アグデプト家の養女として迎え入れることを決意したのであった。

その後、ハンスは再婚し、その新たな妻との間に一子もうけていた。

その子は、男の子で、名をアルジャン・アグデプトといった。

しかし、ハンスは、家の後継ぎとなるであろうその長子を、あまり可愛がらず、二人の養女を溺愛した様だった。

二人は、この街、評判の美人姉妹として知られ、父ハンスにとっては自慢の娘たちだった。

だが、最近になって、アグデプト家の館に、ある予告状とおぼしき一通の手紙が届いたのだ。

その手紙の内容は、こうだった。

『ハンス・アグデプトよ、

お前の大事な娘等の命は、我等が貰い受ける・

後日を以て、その事を起こすから覚悟されたし・・・』

イル・アデフ

それは、短い文面だった。

ハンスは最初、それは何者かが冗談でした、悪い悪戯と決め付けて気にもとめなかったらしい。しかし、その手紙が届いて三日もしない内に、何者かの手によって彼の屋敷に、爆弾が投げ込まれたのである。

その爆弾は、屋敷の二階にあるエネアの部屋に投げ込まれ、その爆風の勢いで家財道具は見るとも無惨に消し飛び、部屋を半焼して街の消防隊に消し止められたのであった。

幸いなことに、娘のエネアはその時べつの場所にいたので、被害に巻き込まれることは無かったが、二人の娘は、その出来事によって相当なショックを受けたらしく、その日から屋敷の中に閉じこもって、怯えるという毎日を送っていたのだった。

ハンスも困りはて、考えたあげく、街の警備隊には連絡せず、何を思ったか傭兵ギルドに駆け込み、娘等の身を守ってくれる、腕利きの傭兵を何人か紹介してほしいと頼み込んできたのである。それを聞いて、ギルド側は、詳しい事の経緯を録ると、納得し何人かの傭兵を斡旋してやるという約束を取り付けたらしい。

「どう、いい情報でしょう。報奨金の方は一日につきルピス銀貨、三十枚だそうよ。割りのいい話だと思わない？ 私としては、この仕事を受けた方がいいと思うのよね。最近ふところの方も、寂しくなって来た事だし・・・」

セルシアは、そう言って力説し、二人の顔を交互に見渡した。
「でも、何か変じゃないか？ その手の話なら、傭兵ギルドじゃなくてこの街の警備隊に事情を話して、屋敷の警備なり、娘の護衛なりを頼み込めばいい筈じゃないか？」
「そうですね、若。どうも何か、日わくがあるような気がしますわが・・・」

だが、ジルとローダは、疑問気にそう答えると、両腕を組み何か思案するような格好で、目を閉じていた。

「そんな事ないわよ。きっと何かの事情があって、ギルドへ依頼しに来たのかもしれないでしょ。貴方達が捜してる、親父さんの行方も分かるかもしれないじゃない？ これって一石二鳥よ、依頼主のハンスという人も、さっき会ってみて温厚そうな人だと思ったわ。多少、危険が付きまとう仕事になると思うけれど、他には良い仕事は無いのよね、実際・・・」

「どうするジル、納得できない部分もあるけど、この話し受けてみるか？」

「そうですね、セルシア嬢もそう言っている事だし、他に割りのいい仕事がないのであれば、これを受けるしかありませんまい」

「そうよねっ、そう来なくっちゃ。でね、この依頼を受けるのであれば、依頼主の方へは明日、伺うって事になっているのよ。だから話も決まった事だしさっさとこの店を出ましよう。私、嫌なのよね、こんな三流のごろつきが集まる様な場所って・・・」

そう言ってセルシアは、酒場の店内を見渡す。

するとその周りでは、先程から好色そうな笑みを浮かべて、じろじろと視線を送ってくる下種な男たちの姿が、目に飛び込んできていた。

明らかにそれは、セルシアに対して向けられた、卑猥な下心、見え見えの視線だったので、彼女は、鼻を突きだしてフンとそっぽを向き、無視を決め込んでいた。

セルシアは、この酒場の店内に入ってきた当初から、それらの視線を感じており、そのきめ細やかな滑らかな肌には、悪寒が走るのか鳥肌が立っていた。

「解った、この店を出よう」

だから、ローダとジルは、それを察したのか、椅子から腰を上げて立ち上がると、店の女給を呼んで三人分の勘定を済ませていた。

店を出る途中、男たちの何人かが、ヒューと口笛を鳴らしたり「ようねえちゃん、今晚、俺と一緒に付き合ってくれよ・・・」などと、まるで街角に立つ娼婦を誘うような口振りで、彼女に対して語りかけて来ていたが、三人は、こんな連中を相手にしても仕方ないと無視を決め込んで、そのまま外に出ていた。

そして、足並みを揃えるようにして、ここクレナンスの安酒場を後にしたのである。

だが・・・

第三節

だが、その光景に、突然でくわしたのは、ローダとジル、セルシアの三人が、クレナンスの酒場から宿泊先のホテルへ帰る途中のことだった。

夕暮れのさなか、人通りの少ない路地の裏通りに面したその一角で、数人の男たちが一人の男を取り囲むように円陣を組むと、何か意味不明な怒声を張り上げて、手元に光る刃物をぎらぎらとちらつかせている。

どうやら、刃傷沙汰らしい。

しかもそれは、一触即発の場面ようだ。

遠目から見たのだが、囲まれている一人の男は、目を見張らばかりの大男だった。

それに対して、得物をぎらつかせているのは、十人くらいの男たちだ。

十対一、普通、このような状況を見れば、明らかにどちらが優勢でどちらが劣勢かは、一目瞭然と映るだろう。

一般の常識では、数より勝るものは無いという言葉もあるように、大抵の場合、数が多いほうが優勢となる。

だが、驚きに値したのが、その大男の不敵な笑いを浮かべた表情だった。

十人もの男たちに囲まれて、しかも、その手には刃物が握られているそんな状況下で、その男は、余程の自信があるのか、脅えて命乞いをする様子でもなく、悠然とした気がまえてそれと対峙している。

たぶん、世間一般の人達がこの光景を目撃するならば、気が触れているのではないかと思うだろう。

人は、その身が劣勢になった時だけ、その本性を現すという。

その大男は、その模範的、体現者といえよう。

しかし、勇気ある体現者として……

ローダは、それを目にした時、即座に行動を移していた。

セルシアとジルの制止の声も聞かず、対峙する男たちの輪の中へ、単身、飛び込んでいったのだ。

「どちらとも、止めるんだ！！」

ローダの目的は、双方の仲裁にあった。

こんな一触即発の状況を見て、そのまま見てみぬふりをして通り過ぎる事のできなかったローダは、一瞬の躊躇もなく駆け出すと、対峙する両者の間に割り込んでそう言葉を張り上げていた。

「なんだてめえ、邪魔すんじゃねえ！」

それは、当然の反応と言えただろう。

冷たい殺気をぎらつかせて、その言葉を発したのは、十人の中のリーダー格らしい一人の痩せた男だった。

彼は、突然あらわれた闖入者に、最初は驚いた様子だったが、それがいまだ若い傭兵風情の男だと知ると、口元にニヤリと残忍な薄笑いを浮かべ、次にこう叫んでいた。

「どきな若僧、俺達は、そのうしろに居る男に用があるんだ。でないと、お前も一緒に死ぬことになるぜ！」

そう言う男は、構えた短剣を見せ付けるように、ぎらつかせる。

だが、ローダは、引き下がらなかった。

「やめろと言っているだろ、どっちが悪いのかは知らないが、十対一とは臆怯だぞ！」

そう言って、仲裁をとりなそうとしたが、今の発言が火に油を注いだ形になったのをローダは口にしたあと、初めてそれに気付いていた。

「ほおお、そんなら、お前はその男に味方するってのか？」

男たちが、一斉に身構えた。

「待ってくれ、俺が言いたいのは、どんな理由があれ傷つけ合うのは良くないって事さ。これじゃ、どちらとも血を見ることになるぜ」

ローダが言う。

「黙れ若造、講釈など聞かん。そいつはなあ、俺達の金をくすねたんだ。生かしておく訳にはいかないんだよ！」

男は、極限に目をぎらつかせ、悠然と構える大男を見ながら、吐きすてるようにそう言う。

「あんた本当なのか、こいつ等の金をくすねたって？」

ふと疑問を感じたのか、後ろを振り向きローダは、大男に対して、そう問い質していた。

「知らんな・・・俺の金は俺の金だ、言い掛かりをつけられる謂われは無いな」

「貴様ああ！」

大男の不遜気な物言いに、男たちはカッと頭に血がのぼったのか、額に浮かんだ血管をひくつかせて色めき立つ。

そして・・・

「問答無用だ、やっちまえ！！」

リーダーの合図をもとに、十人の男たち全員が動いた。

取り囲んだ包囲陣をジリジリと狭め、ローダと大男の退路を断つ心算のようだ。

「きえええい！！」

最初に斬り掛かって来たのは、二人の男だった。

一人はローダに、もう一人は大男にと、身のこなしの素早い動作で一撃目を見舞おうと肩口から袈裟掛けに斬り付けてくる。

ガシュッ！

金属と金属がぶつかり合う音、ローダは腰に佩いた中剣を鞘から引き抜くと、その攻撃を胸元の、一歩、手前で難なく受けとめていた。

ドツッ・・・！！

即座に、ローダの回し蹴りが飛ぶ。

斬り付けてきた男は、それで無惨にも後方へと吹っ飛んでいた。

それは、剣で相手を傷つけないことを配慮にいられた、一蹴りだった。

だが、男の戦意を喪失させ、しばらく動けなくするには十分な一撃といえた。

背後で鈍い音がする。大男も剣戟を手持ちの大剣で受けると、斬り掛かってきた男の顔面を拳で殴りつけ、その鼻っばしらをへし折っているようだった。

「野郎、やりやがったな！」

その光景を目撃した残りの男たちは、さらに色めき立ち、殺気だつ目を大きく見開く。

今度は、五人だった。

三人は大男、残る二人はローダにと、今度は慎重に間合いを計りながらジリジリとねじり寄ってくる。これにはローダも、緊張を隠せないでいた。

「待ちなさいよ貴方達、二人を相手に大勢で卑怯よ！」

そんな緊迫する状況下に現れたのは、セルシアとジルの二人だった。

無鉄砲に飛び出して行ったローダの行動を、遠巻きにして見ていた二人だったが、いざ戦いが始まると、そのまま無視することもできず、ローダのもとに駆け付けて来ていたのだ。

「なんだ、貴様等も、その男の仲間か……！？」

男たちのリーダーは、再び現れた二人の男女を一瞥すると、軽く舌打ちして手元の短剣を握りなおしていた。

「そうよ、貴方達の仲間じゃないことは、確かね」

そう言うと、セルシアとジルも、腰に吊した剣を同時に引きぬくと、リーダーを含めた残りの三人に対して、いつでも斬り出せるように、中腰の姿勢で身構えていた。

「上等だあ、二人や四人も同じ事だ。俺達に剣を向けた事を、あの世で後悔させてやる！！」

リーダー格の男は、そう言うと、一番、手近に居たセルシアに対してその短剣の矛先を向けて、斬り掛かっていた。

それを見て、セルシアも動いた。

彼女は、女性にしては巧みな剣捌きで相手を翻弄すると、他の男たちと戦っているローダの後に、背中合わせとなる様な位置に移動する。

そして、女性とは思えない奇声を発すると、緩慢のない俊敏な動作で、相手に対し斬り込んでいた。

「セルシア大丈夫か？ こっちの連中がすんだら、加勢してやるよ」

二人の男を相手に、防戦していたローダは、セルシアの戦いぶりを横目で見ながら、そう呟いていた。

「こっちは大丈夫よ。それより、目の前の相手に集中した方がいいんじゃない。よそ見なんかしてると、怪我しても知らないわよ！」

尤もだ。

よそ見をしていて、自分がやられては情けない話だ。

ローダは、躍り掛かってくる二人の男に集中すると、今迄にない横薙の鋭い一閃で、相手の短剣を一瞬のもとにへし折っていた。

なかなかの手練れである。

こんな芸当ができるのは、傭兵の中でもそうはいまい。

剣を折られた二人の男は、信じられないといった表情で短くなった手持ちの短剣を凝視する。

そこへ、二発の重い蹴りが、鳩尾をめがけて炸裂していた。

グヘッ・・・

二人の男が、もんどりうって倒れる。

「これ位でいいだろ・・・」

ローダは、倒れてうずくまる二人の男を一瞥すると、額に浮かぶ汗を袖口で拭くと、一息ついたように深呼吸をしていた。

「若、危ないですぞ、後ろ！！」

そこへ、一人の男が躍り掛かっていた。

ローダの隙をついたつもりなのか、全体重を体に乗せて、すさまじい勢いで突きかかってくる。

「チッ！」

ローダは、舌打ちすると、それを振り向きざまに横へ躲していた。

勢い余ってローダの脇を通り過ぎていく男・・・そこへ、剣のつかで後頭部を殴打する。

そのまま男は、もんどりうって突っ伏すように、倒れ込んでいた。

そして、動かなくなる。

「油断禁物ですぞ、若！」

「ああ、判ってる」

これで四人、あとは？

ふとローダは、右の方を見る。

そこでは、大男が、三人の男たちを相手に、奮戦している真っ最中だった。

三人から繰り出される剣戟を、手持ちの大剣を器用に操り、盾のように使って躲している。

三対一という不利な状況下でも、余裕を持って戦えるのは、大したものだ。

本来、接近戦には向いていない大剣を、あそこまで使いこなしているのは、なかなかの手練れ、とっていいだろう。

ローダは、その戦いぶりを見ながら、感心していた。

相手を剣で傷つけず戦うといった芸当は、熟練の戦士でも難しい高等技術だ。

それを難くこなすこの大男は、余程の技量の持ち主の様だ。

しばしその光景に見惚れながら、ローダは、この大男に対し、ある種の好感を抱いていた。

度胸といい、その戦いぶりといい、この男は名のある剣士に違いないと、一人そうごちっていたそんな所へ・・・「何しているのよローダ、助けてくれるんじゃないの」と、セルシアの困惑ぎみな一言が耳朶をうっていた。

最初は健闘を見せていたセルシアであったが、徐々に、相手の攻撃におされ始めたらしく、後退しながら、ローダのそばへと近付いてきていた。

相手は、さすがに男たちのリーダーだけあって、剣術の技量に長けていたらしく、次第にセルシアを翻弄しはじめ、突きの連続攻撃により優勢に出たようだ。

ローダは、それを知ると、剣を再び構えてその両者の間に割って入っていた。

「セルシアここはいい。君は、ジルを加勢してやってくれ」

「判ったわ」

そう言う、セルシアは、身を翻し後方へ飛びのき、ローダにその場を譲っていた。

「今度は、俺が相手だ！」

「いいだろ、貴様なかなか腕が立つようだが、俺には通用しないぜ」

男は、ローダに対し、十分な間合いを取っていた。

ローダから放たれる、必殺の蹴りを恐れての事だろう。男は、先ほど三人の仲間がローダの蹴りによってのされたのを見ていたらしく、小刻みな牽制を繰り返しながら、ローダの左側へと横に移動しながら、隙を窺っている。

だが、男は、なかなか活路を見いだせずにはいた。

それだけ、ローダには、隙が無かったからである。

まだ若い、ローダには戦いに対する天性の勘があるらしく、目の前の男に付け入る隙を与えず、余裕をもって対峙している。

そんな状況に、男は業をにやしたのか、一歩、前へ踏み込むと、軽い突きを入れて来ていた。

相手に、隙をつくらせる為の、誘導であるのだろう。

それを察したのか、ローダは、わざとその誘導に乗る事にした。

男が突きだしてくる剣を避けると、故意にバランスを崩したように見せかけ、相手の次の攻撃を逆に誘っていた。

男は、案の定、それに乗じてきた。

ローダが、バランスを崩したのを絶好のチャンスと見たのか、ここぞとばかりに渾身の一撃をお見舞いしてくる。

それは、ローダにとっても、願ってもないチャンスだった。

ローダは、その一撃を、体をひねって間髪、躲すと、次の瞬間には、相手の手元を蹴りあげ、その手にしていた短剣を空中へ吹き飛ばしていた。

それで、その戦いの決着は、ついていた。

手にしていた得物を失った男は、その状況に呆気にとられ、為すが俛に茫然と立ち尽くしていた。そこへ、ローダの手にした、中剣が突き付けられる。

「これでお仕舞いだ、もう手を引け。でないと命はないぞ！」

「くそうっ・・・」

男は、恨みがましい目で、ローダを見据えてくる。

ピィィィィー！！

そこへ、突然、警笛が鳴り響いた。

その音に、驚いたローダが、音のする方へ振り向くと、狭い路地の入り口の方からこちらへ駆けてくる、男たちの一団が目に入った。

みな同じ碧色の制服を着込み、武装したこの街の警備隊だ。

ローダたちの戦いを目撃した、一般市民が通報したのか、警備隊はけたたましい警笛を鳴らしながら、こちらへと駆け寄ってくる。

それを見た十人の男たちは、みな慌てていた。

倒れていた者、まだ戦っていた者も含めて、男たちは一時、茫然としていたが、リー

ダーの合図のもと、そのまま逃走することに決めたいらしい。

そして、手元の短剣を投げ捨て、警備隊が駆けてくる路地とは反対の方向へと逃げ出す。

警備隊の一人が「待てー」と声を張り上げ呼び止めるが、そんな事を聞き入れる訳がなく、男たちは、路地から大通りに出ると、人混みに紛れてあれよあれよと言う間にその姿を消してしまっていた。何人かの警備隊員が、ローダたちの横を素通りし、その逃げた連中を追いかけていったが、隊長らしき髭の男と、その部下にあたる六人の警備隊員はそこに残った四人を取り囲むようにして、手持ちの長銃を構えていた。

「お前たち、ここで一体、何をしていた!？」

警備隊の隊長らしき男が、いかにも武骨な物言いで、ローダたちに問い質してくる。「何って、ただのつまらない喧嘩さ。それ以外、何もしちゃいないぜ!」

ローダは、悪怯れた様子もなく、笑顔を浮かべると、そう言っていた。「ただの喧嘩で、なぜ手に武器をもっている。この街では、刃傷沙汰はご法度だ。これから詰め所まで来てもらうぞ。詳しい話を色々、聞きたいからな」

そう言うと髭の男は、ローダたち一人一人に手錠をかけるように命じる。

そして、罪人を連行するように、四人を詰め所の在る所まで引きずって行ったのであった。

全ての取り調べが終わったのは、時計の針が、五時四十分を回った時の頃だった。

秋の季節、この時間帯になると、辺りは、ほの暗い闇の帳に包まれ始める。

時より吹き付ける西風も、身を凍えさすのにはたる冷たさだ。

温暖なこの街の気候風土には、とりわけ珍しい寒さといえる。

それはおそらく、この街の近くに寒気団が停滞しているのだろう。

街行く人々は、みな服の襟を立てて、足早にその場を立ち去っていく。

大男とローダ、それにジルとセルシアの四人は、警備隊の詰め所の表玄関に現れると、同じように、服の襟を立ててその寒さに身震いをしていた。

煙草の煙でむさ苦しい詰め所の室内とは異なり、野外は外套が欲しくなるような冷たい寒気に見舞われている。

ローダは、吐く息を白くしながら、一つ大げさな深呼吸をすると、その場で軽くしゃみを二回、連発していた。

「悪かったな、変な事に巻き込んでしまって」

おもむろに大男が口を開く。

「そんな事ないさ、俺達こそ、余計な真似をしたんじゃないかって思ってるんだ」

ローダは、そんな大男に、自嘲気味な笑みを浮かべてそう言っていた。

「いや、俺も内心、あの状況をどう切り抜けようかと癡癡していたのさ。お前たちが間に入ってくれて、助かったのは事実だ、礼を言う」

大男はいたって謙虚に、しかも礼儀をわきまえた態度で、ローダに対してそう言葉を紡いできていた。

「でも、あんたの戦いぶり見たぜ。なかなかの腕前じゃないか。俺、感心したんだ。きつ

と名のある剣士だと思ってね」

「そうか、俺も傭兵の端くれだ。この稼業を続けてゆくには、それなりの実力がなくちゃならんからな、お褒めにあずかって光栄だよ・・・」

大男が言う。

「そうだ、あんた名前はなんて言うんだい。まだ聞いていなかったろ？ 俺はローダ、ローダ・ブレインって言うんだ」

「俺の名は、ギュセル、ギュセル・ラドカープだ」

「ええっ、ギュセル・ラドカープですって！？ それじゃ貴方《獅子王の爪》の傭兵じゃない！」

その名を聞いて、突然すっとんきょうな驚きを見せて飛び上がっていたのは、セルシアだった。普段、冷静で知的な彼女からは、予想もしなかったその態度に、ローダは一瞬、面食らったが、その驚き様に興味をかられ、ラドカープと名乗った男の顔を覗き込み、しげしげと見つめ返していた。

「では貴方は、`紅の獅子、として有名な、`傭兵大将、のラドカープですかの？」

「傭兵大将のラドカープ？ なんだい、それ」

聞き慣れないその言葉を耳にして、ローダは一人、知らぬ気な表情で、そう問い質していた。

「知らんのですか若、傭兵大将のラドカープといえば、この業界で知らぬ者はいない超有名な傭兵の中の強者ですぞ・・・戦場で数々の武勲をあげた、戦士の誉れです」

「そんな大それたものじゃないさ、驚く事はないだろ」

ラドカープは、少し照れた笑いを浮かべながら、ジルを見つめ返していた。

厳ついその容貌に不釣り合いなその表情が、見様によっては可愛らしく映る。

まだ壮年の男臭い魅力を漂わせるその容貌は、豪快な気質を満遍なく見せて、厳のごとく厳然としているが、どこことなく憎めない雰囲気漂っている。

それが、この男の、魅力とっていいのだろう。

だが、

「いいえ、そんな事ありませんぞ。貴方と肩を並べて戦ったなどという事は、同じ傭兵にとっては、誇りにも等しいことです。このような機会は、滅多にありませんからな」

そうジルが大げさに力説すると、

「へええっ、やっぱり有名な剣士だったんだ。俺の目に、狂いは無かったって事かな」

などと言って、ローダは、ギュセルの顔をまじまじと子供のように見つめていた。

「所でどうだい、せっかく知り合ったんだから、そこいらで一杯一緒にやるってのは？」

彼は、話題を変えて、ラドカープを酒の席に誘うように言う。

有名な剣士を目の前にして、深く語り合いたいのか、心なしか目が歓喜している。

強い者への憧れは、ローダがまだ幼い頃から持っていた衝動の一つだった。

それは、父アルスレイドを見て育った事による影響なのか、人格とともに優れた男の威厳という様なものに対して、子供のような憧憬を抱いている。

しかし、

「悪いが、俺は辞退させてもらう」

ラドカープは、その申し出を断っていた。

「ええ、どうして？」

それを受けてローダは、目を丸くしてキョトンとした様子で、その意外な言葉を飲み込んでいた。気やすく誘えば応じてくれると、内心、思っていたが、あっさり断られて、少し落胆の色を隠せないでいた。

「ちょっと野暮用があってな、これからそこへ帰らなければならないんだ。せっかく誘ってくれて悪いんだが、俺はこの辺でお暇するよ」

「そう、それは残念だな、せっかく知り会ったのに・・・」

ローダは感情が顔にでるタイプなのだろう。その顔は、願いが叶えられなかった子供が見せる、泣きべそにも似た落胆の表情がありありと浮かんでいる。

「まあ、そう気を落とすなよ。お前たち、しばらくこの街に居るんだろ。俺もこの街に滞在しているんだ。どこかでまた逢うこともあるだろうよ」

ラドカープは、そんなローダの心境を察して慰める様にいったのか、次の再会に期待をかける様な意味合いの言葉を投げ掛けると、肩を軽くぼんとたたいて大きくにこりと笑い返していた。

「そうだな、世間は狭いって言うし、また近いうち街角でバツタリなんて事もあるかもしれないしな・・・」

ローダは、気を取り直したようにそう言う。

「今日は、色々世話になった、ありがとよ。じゃあな」

ラドカープは、それだけ言うとローダとセルシア、ジルに軽く手を振り、颯爽とした姿で街の表通りにその厳しい巨体を投じると、うす闇の空にとけている様にして、雑踏のなかに姿を掻き消していった。

ローダたち三人は、その場に立ち尽くしたまま彼のあとを見送り、西から吹き抜ける寒風に身をさらしながら、しばらく何かの感慨にふけるかの様に佇むと、自らも踵を返す様にしてその場を後にする事にしたのである。

第四節

警備隊の詰め所のある場所から、二十分くらい歩いた所に、ローダたちの宿泊しているホテルがあった。ホテルの名は、アンボリユーヌと言い、昔この街の創始者だったアンドリユーという偉人の名をもじって、その名を付けたらしい。ホテルとしては二流だが、中級クラスの宿泊客が泊まる瀟洒な建物だ。

居心地は宿屋と比べるまでも無く、それなりの豪華さをホテルの内装は示している。

シャワー付きの個室、清潔なベット、部屋は明るく食事も美味しい。また、客室係は親切で、細々とした気配りで宿泊客に対して接してくれるので、大概の事には目が行き届いているといっても過言ではない。

ローダたち三人は、帰って来る早々、ホテルの一階の奥まった食堂で早めの食事を済ませると、各自がとった各々の部屋に引き籠もり、明日に備えて簡単な荷造りを終えていた。

そのあと三人は、ローダの部屋に集まり、今日あった出来事の詳細や、明日の仕事に関する密にいった話し合いをしている最中だった。

コンコンコン・・・

そんなところへ、唐突に部屋の扉がノックされる音が室内に響いてきた。

三人は雑談を中断して、音のする扉の方へ目を向けると、
「済みません、客室係の者ですが、お客さまに小包が届いています」

と、いって、扉のすぐ向こう側から、まだ若いと思われる男の声が耳に飛び込んで来ていた。

「こづつみい・・・？」

ローダは、怪訝な表情を顔に浮かべながら、扉の方へ歩み寄り、その扉を開くと、そこにはまだ真新しいホテルの制服に身を包んだ男が、一人、生真面目そうに立ち控えている姿が目についていた。

どうやら、その男は、最近ホテルのアルバイト要員として、仕事に従事するようになった新任の若者なのだろう。顔に少しそばかすを残した誠実そうなその若者は、業務用のにこやかな面持ちでローダを迎えると、小さくお辞儀をして扉の前に待っていた様子だった。

「小包って、一体なんだい？」

ローダは疑問に思い、その客室係に問い質していた。

「先ほど、お客さまが帰られてから、三十代くらいの男の方が一階のロビーに見えられてまして、これをローダ様に渡して欲しいと承ったのでございます」

そう言う若い客室係は、手にした小包をローダの手元へと差し出す。

「三十くらいの男の人があ・・・？」

「ええ、名前を伺ったのですが、ただその小包を渡してくれればいとおっしゃいまして、そのまま帰られてしまいました」

ローダは、それを受け取ると、その場でガサガサとその小包を振って中身を確認してみていた。それは、大人の一抱え分ぐらゐの大きさの、薄く平べったい形をした箱状の小包で、持ってみると判るが、少し重量感のある何かが中に収められている様だ。

振るとカチャカチャという微かな金属音が聞こえ、箱の中身を暗示させる響きを呈していた。

「おかしいな、なんかの間違いじゃないのか？ 俺はこの街に知り合いなんて居ないぜ」

そう言って、ローダは、小包を若い客室係に突き返す。

「いけませんお客様、ちゃんと受け取ってもらわなければ困ります・・・」

「そんな事いったって、本当に、俺、宛ての小包なのか？」

「ええ、確かに三号室のローダ・ブレイン様、宛ての小包です。先ほど見えた男の方はそ

う言っていましたので……」

「そう、それじゃしょうがないな」

ローダは、まだ腑に落ちない怪訝な表情を浮かべていたが、それを押し殺してその小包を受け取ると、しぶしぶ客室係を見返して一言どうもありがとうと言うと、部屋の扉をしめ、ジルとセルシアの許へ、その小包を小脇に抱えて戻っていった。

「一体、なんだったの、ローダ？」

二人のもとに戻ると、唐突にセルシアが疑問の声を投げ掛けて来ていた。

「いや、俺、宛てに小包らしい……」

「貴方、宛てに小包い？ どれ、貸してみて、私が開けてあげる」

そう言うときセルシアは、ローダが手にしていた小包をひったくると、テーブルの上にそっと置き、興味、深げにしげしげとそれを凝視しているのだった。

「まさか、この小包の中身って、爆弾だったりして」

ジルとローダに、一瞬、戦慄が走る。

二人は、セルシアの不気味な発言にギョッとしたりしく、固く凍結した表情のまま顔を見合わせて苦い顔をしていた。

そんな中、セルシアは、小包の箱をツツツと指で突いて、中身を確認しようとしている。

それで、中身がなんであるのか分かる筈もないのだが、セルシアは興味津々といった態度で、何度も同じ動作を繰り返しているのだった。

「でも一体、誰なの、これの贈り主って？」

「それが俺にも分からないんだ。客室係が言うには、三十代の男としか言わなかったけど、変な話だよな。俺には、この街で知り合いなんか居ない筈なのに？」

「それもそうですな、贈り主の分からぬ得体の知れない小包、これはやはりセルシア嬢が言うように、もしかしてその中身は爆弾かも……？」

そう言うときジルは、ニタッと笑い、二人を脅かすように作り笑いをしてみせていた。

「冗談だろ、俺は御免だぜ、こんなところで爆死するなんて」

「もう二人とも、馬鹿、言っていないで、いいから開けてみましょ。開けてみなくちゃ、中に何が入っているか判らないじゃない」

セルシアは、そう言うとき乱雑に小包の包装紙を破り捨てると、中に包まれている箱をおもむろに取り出す。すると現れたのは重厚な色に塗られた硬質の木箱だった。

箱の上面には、《ゴルト・ダイス社製》という文字が躍るように書き記されてあった。

「これって、何？」

最初に言葉を発したのは、セルシアだった。

彼女は、出てきた箱を不審げに見つめると、その同意を求めるようにローダとジルの二人の顔を見渡す。そして、そっと木箱の蓋に手を掛けると、それをゆっくりと上部方向に押し開けていった。

すると、そこに現れたのは、拳、三つ大ぐらいの黒くて固い金属の塊が異様な光を部屋の電灯に反射しながら、その姿を三人の前に現していた。

「これって、もしかして銃じゃない？」

「そうですな、これは銃としか思えませんな」

「なんで、銃なんかが入っているんだよ」

三人は、意外なものを見たかのような口振りで、しばらくその黒い鉄の塊を凝視してしまっていた。

それは、リボルバー式の連発拳銃で、ごく一般人ではなかなか手にすることの出来ない高価な代物だ。その一挺の銃と並ぶように、ベルト、ホルスター、百発の銃弾といった様に、ご丁寧に一式ありありと揃って箱の中に収まっている。これを見て、三人は、どうしたものかと腕組みをして、しばらく考え込んでいたが、ただ訳も解らずそれを凝視するしか他に方法が見いだせずに居るのであった。

「ねえ、これって誰かさんからの、ご丁寧な、贈り物なのかしら？」

おもむろに、セルシアが口を開く。

「そんなの分かる訳ないだろ。こんな物、一体、誰が贈ってよこしたんだ」

「そうですね、これはゴルト・ダイス社製の拳銃で、非常に高価なものですからな、一体どうしたものか？」

箱の中身を見ながら、ジルは腕組みをして、ぐうっと唸るように考え込んでいたが、事情がまいち飲みこめず、考えるのをあきらめた様子だった。

「ちょっと待って、蓋の裏に手紙があるわよ」

セルシアは、そう言うと、蓋の裏からその手紙をはぎ取ると、封を切り中の便箋を取り出して、一人、小声でその文面を読み下していた。

「ええっ、これって何なの？」

「どうしたんだいセルシア、一体、なんて書いてあるのさ」

その為、セルシアはローダに対し、無言で便箋を手渡すと、「読んでみれば判るわ」といって手を引っ込めていた。

ローダは、その便箋を見て一瞬、顔色を変えていた。

その手紙の内容には、彼らにとって予期せぬ内容が書かれていたのは、その態度を見ても明白なようだったからだ。

その手紙の内容は、こうだ。

『君たちは狙われている

この銃でその身を守れ！』

極端に短い文面だったが、その内容の指し示すことは十分に彼ら三人には判りやすかった。

しかし、突然そんな事を言われても、腑に落ちない点があるのは否めないでいた。

「俺達が、狙われているだって？ これって冗談なのか？」

「さあ、それは分かりませんが、何かの悪質な悪戯なのでしょうか？」

「そんなのおかしいじゃない、これって本物の銃よ。悪戯するには度がすぎていると思わない？」

そう言うとセルシアは、箱の中から拳銃をそっと取り出すと、ずしりと重いその感触を手の中で味わっていた。

「触っちゃ駄目じゃないか、セルシア。それは、贈り主に返すんだ」

「いいじゃない返さなかったって。狙われているかどうかは別として、この銃を持っていれば、いい護身用の武器になるわよ。せっかく呉れるって言うんだから、貰っちゃえばいいのよ。だいいち、これの贈り主って、どこの誰だか判らないんだから、返しようがないでしょ・・・」

「それは、そうだけど・・・」

セルシアの楽観的な態度に、ローダは思わず頷いてしまっていたが、自分たちが狙われているという手紙の短い文面のことを思い出すと、安易に、この物騒な贈り物に手がだせず困惑してしまうのは、当然の反応と言えただろう。

一体、誰が、自分たちを狙うというのだろうか？

ローダには、とんと心当たりはないが、贈り物の銃を見てしまうと、一概に、冗談ではすまされない、何か異様な真実味が湧いてくるのは否めないでいた。

その手紙の内容が全て冗談で、セルシアが手にする拳銃も玩具であるのなら、それらのことに対して楽観視してもいいのだが、どう見てもそれは本物である。

この小包を送ってきた人物の思惑は、一体、何であるのだろうか、思案せざるにはおられない、そんな思いがローダの頭には渦巻いて、しばらく離れないそんな状況と言えたのである。

「なあジル、俺達、誰かに狙われるような事した覚えはあるだろうか・・・？」

ローダは、自分の考えにいたたまれなくなって、ジルに対してそう話を切り出していた。

「さあ、どうでしょうか、私には心当たりなどありませんが・・・」

ジルの答えも、ローダと同じようなものだった。

狙われていると言われても、その顔をキョトンとするしか他に方法がないといった表情で、ジルも考え込んでしまっていた。

頭に浮かぶ事といえば、これまで三人がこなしてきた仕事上の事の何かだ。

その今までの仕事上で、なにかトラブルがあった訳ではないが、そこから何か割り出さないと、領けない事のように思えて、頭を悩ませる事しかできなかった。

「貴方たち、私と出会う前、何か後ろめたい事でもしていた訳じゃないでしょうね？」

「そんな事あるわけないだろ。俺達が、なにか悪いことでもするように見えるかあ？」

ローダとジルがセルシアに出会ったのは、今を遡ること三年半前だ。

まだ二人が傭兵ギルド《鋼鉄の角》の傭兵になって、半年の時が過ぎた頃、右も左もよく分からない新米傭兵だった二人に、色々なことを教え傭兵生活の何たるかをたたき込んだのは、セルシアだった。

彼女とは、ある街の仕事上の縁で一緒に各地を旅することになったが、彼女がいてくれたお陰で苛酷と評される傭兵稼業を、今迄、続けてこられたのも例え様のない事実である。

今では、二人に欠かせない仕事のパートナーとして対等の付き合いをしてはいるが、ローダとジルの二人は、セルシアに多大な感謝をしているのも事実である。

そんなセルシアに、出会う前のことを問い質されて、ひどく心外な気分悩まされたが、それが彼女の軽いジョーダンだと判っていたので、本気で怒る気はまるでなかった。「でも、本当に狙われているのなら、これから身辺に気を配らなければならないわね。嘘

か本当かは別として、それに越した事はないわ」

「ああそうだな、これから気をつけることにしよう。ジルもそれでいいだろ？」

「そうですね、何かいい迷惑のような感じもしますが、それに越した事はないでしょう」

だが、そう言うと三人は、この件に関してはこれで終わりとはばかりに、話を打ち切ると、また明日に備えての密にいった別の話題で盛り上がり、就寝も忘れて雑談を続ける事になっていたのである。その時間は夜中を過ぎ、それから朝に至るまでの間、時間の許す限り仕事上の件での当たり前の話を他愛もなく事細かに話あっていたのであった。

第二章 双生の姉妹

第一節

雲一つない青空の中を、数羽の鳥が飛んで行く。

昨日の寒さが嘘のように大気は澄み渡り、暖かなぬくもりが肌をおし包む。

街の外れの山林では、濃霧が発生していたが、ここエルドバの街にはさして影響はなく、穏やかな日差しが照りつけるごく平凡な一日が今日も始まろうとしていた。

今は、朝の六時二十分を回ったところだ。

街の中央広場にある日時計の影は、その時間帯を示すように長い尾を引いて確かに時を刻んでいる。

あちこちの家々からは、朝食の支度に水炊きをしているのだろう、それを証しだてるかのように微かな水蒸気とともに薄く白煙が立ち上り、快清に晴れ渡った青空に霧散して消えていく。

ローダたち三人は、すでに起床し、身仕度をすませ、また一階の食堂で早めの食事をとっているところだった。

メニューは、焼き魚に二切れのパン、それにオニオンスープが淡い湯気をたてて郷愁を誘う様に匂いたっている。朝食としては最適のメニューだが、ローダたちの胃袋にとっては、少し物足りないボリュームの食事だった様だ。

彼らは、食事を終えると、早々にホテルをチェックアウトし、仕事の依頼主ハンス・アグデプトの屋敷へと徒歩で向かう最中だった。

ハンス・アグデプトの屋敷は、この街の西の外れにある高級住宅地の一角に、その豪華な殿堂を構えているはずだ。

ローダたちが、宿泊していたアンボリユーヌの安ホテルからは、約五キロの道程を歩く行程となる。その辺りは、街の一等地だけあって、景色もよく、近くには湖が一望でき金持ちの道楽には申し分のない最適な場所のようだ。

夏には、その湖に船を浮かべ、遊楽にいそしむ人の群れもいるようだ。しかし、今は、秋の初旬をむかえ、その光景もこの時期みられることはない。そのかわり、湖面には、無数の水鳥の群れが空から舞い降り、餌をあさってその首を水中に突っ込み、まるで水遊びをしているかのような姿でダイブを繰り返している。

道行く歩道からは、それらがまるでパノラマ写真を思わせるかのように、生き生きと映え渡り、花や緑の木々もあいまって、一種の、幻想的な情景を漂わせる景観がその辺り周辺に一望できていた。

ローダとジル、セルシアの三人は、その歩道を西にぬけ、少しこんもりとした小高い丘にさしかかった所だ。そこから先にはハンス・アグデプトの屋敷がある高級住宅街がその視野の片隅に見えてくる頃だった。

三人は、手元の地図と、昨日、聞いてあった住所を頼りに、さらにその道を真っすぐ西へと進んで行く。

すると見えてきたのは、高級煉瓦を積んで固めた外塀と、贅のかぎりを尽くされて建てられたであろう豪華な家々が三百戸ほども建ち並んだ景観であった。

何をして収入を得ればその様な豪邸が建てられるのであろうかと、ローダは、内心、舌をまいて絶句していたが、道行く途中セルシアに『貴方には一生こんな家に住むことは無理ね』と茶化されて、一瞬ムッときてしまっていた。

道を何度か曲がり、住宅地の奥まった箇所へ出たとき、三人の目的の場所が見えてきていた。

そこは、一際、大きな敷地をもつ豪華な屋敷で、外塀は周囲、二キロもあろうかという外周を誇り、高さ二メートルはあるだろう門扉も、威風堂々としたつくりの門構えで、その存在を誇示している。裏庭には、大きなプールがあり、屋敷の東側にはバラ園がある。どこかの貴族の貴婦人が住まう華麗な邸宅といっても過言ではないその造りは、古代の王朝で用いられたアウラート様式がふんだんに採用され、名工が刻んだであろう庭の彫像も見事にその景観にマッチし、人魚を模した小さな噴水では水が滔々と流れていて。そして、敷地の中央に建つ本館と左右に一棟ずつ立ち並ぶ別館は、もはや一商人の邸宅とは思えない華美荘厳さを究めている。

ローダ達は、ハンス・アグデプトの屋敷の門前まで来ると、呼び鈴を鳴らして敷地の中の様子をしばらく観察していた。すると、敷地内の各、要所要所では、腰に剣を帯びた厳つい顔の男たちが、眼光鋭く敷地の外を見回して警戒の姿勢を現している姿が目に見え込んできていた。

おそらく、ハンス・アグデプトが事前に雇った、傭兵であるのだろう。その数はざっと見て十五人、顔付きを見れば分かるが、かなりの腕がたつ傭兵達であるようだ。

まだ朝方であるというのに、彼らは、屋敷の周辺を交替制で見回りをしている様だった。

しばらくすると、この館の使用人らしき人物が三人の前に姿を現していた。

歳は六十を越え、少し腰のまがった白髪の老紳士だが、物腰は低く、人の良さそうな気質が顔ににじみ出ている。彼は、歳のせいか、緩慢な動作で門扉ごしに構えると、ローダ達を見据えて、ゆるやかだが淀みのない声で言葉を発していた。

「あなた方、一体どんな用向きでお越しなされたのですかな？」

「あとう、私たち、傭兵ギルドの仕事の依頼の件で今日、伺ったのですが」

セルシアが、三人を代表してそう言う。

「仕事の依頼？　ほう、それでお名前はなんというのです」

「セルシアです」

老紳士の使用人は、何やら懐から古くさい手帳を取り出すと、何かを確認するかのよ様な態度でそれに目を通していった。

そして・・・

「セルシア様ですね、それならば主人から伺っております。どうぞお入り下さい」

そう言うと老紳士は、門扉を懐から取り出した鍵で開け、ローダたち三人を屋敷の中へと誘って歩みだしていた。

ローダたち三人が案内されたのは、屋敷の本館にある来客用の応接室だった。

皮張りのソファー、重厚なテーブル、室内の壁にはこの館の主人ハンス・アグデプトの肖像画であるのだろう、昨日、聞いたとおり小太りだが温厚そうな人柄の男の絵が金縁の額の中に収まり飾られている。その横には、小さめだが三人の女性と一人の男の子の絵も飾られている。

おそらく妻子の絵だ。

ローダは、その絵を見ながら、一人、色々と想像して、これから現れるであろう屋敷の主人がどんな人物であるのかを、予想をたてて楽しんでいた。

「しかし、遅いな・・・」

三人がこの応接室に通されて、もうかれこれ一時間は過ぎている。その間に、先程の使用人が何度かティーセットを運んできて三人にそのお茶をふるまってくれていたが、なかなかこの館の主人の姿は現れない。

ローダは痺れをきらし、ソファーから立ち上がって室内をウロウロと歩き回り、至る所に置かれてある調度品や骨董の壺などを眺めていたが、しばらくするとそれにも飽き再びソファーに腰を下ろすと、頬杖を付いて目をつむり、あたかも瞑想でもしているかのような態度で黙然と口を結んでいた。普段、こんな豪華な部屋にいつけないせいか、気分が高揚しているのだろう。ローダは、それを落ち着かせようと、しきりに貧乏揺すりをはじめていたが、セルシアに行儀が悪いわよと指摘されて、強制的に脚を手で押さえ付けていた。

「やあ、随分とお待たせしましたな・・・」

そこへ、三人の沈黙を破って現れたのは、この館の主人ハンス・アグデプトだった。

壁に飾られてある肖像画とそっくりなので、ローダにはすぐにそれと判った。

ハンスは、先程の使用人と一緒に現れ、観音開きの豪華な扉を開けて室内に入ってきていた。そして、ローダたち三人の向かい側となる席のソファーに腰を下ろすと、手元の葉巻に火をつけて、口から紫煙を吐き出し一息、入れるかのように深く腰を落ち着けていた。

「それで今日は、きのう私が依頼した仕事の件でいらしたのですかな？」

ハンスは、おもむろに口を開いて、そう話を切りだしていた。

「ええそうです。私たちはその仕事の依頼を引き受けようと思って、今日ここへ伺ったのですが、何か問題はありますか？」

「そうですか、それは有り難い。鋼鉄の角の傭兵は、信頼にたる人格を備えた者だけが入会できる組合と聞いていますからな、あなた方が仕事を引き受けてくれるのであれば大歓迎です。あと少し傭兵の人員を増やそうと思っていましたところですから、どうかお願いいたします。報奨金の方もはずみますから、今日からでも仕事の任についてください。他の傭兵達にも私の方から宜しく言っておきます」

そう言うとハンスは、再び紫煙を吐き出し、三人を見据えにこやかな笑みをこぼしていた。

その横では使用人がティーポットを両手に持って、ローダたち三人のティーカップへ紅茶を注いでいる。ハンスは、それを横目で見ると、どうぞ召し上がって下さいと言ってそのお茶をすすめてきていた。

ローダの観察眼によると、このハンス・アグデプトなる人物は、なかなかの紳士らしい。

一代で巨万の富を築いた豪商であるが、その地位を鼻にかけるでもなくその言動は律儀的であり、その態度も幾許の傲慢さのかけらもなくいたって低姿勢だ。

こんな豪邸に住まう大金持ちだから、態度もでかく、横柄に振る舞うのではないかと内心そう思っていたが、セルシアの言う通り温厚で人の良さそうな人物らしい。

ローダは、これならば、そのハンス・アグデプトなる人物を信頼して、仕事を引き受けられそうな気がしていた。依頼主が自分の気に食わない人物であれば、仕事なんかやっつけられないといった心情をもつローダであるが、これで納得がいったようだ。

傭兵とは、絶えず危険がつきまとう仕事の依頼が多い中、命をかけねばならないといった状況も多々あるのは確かだ。

いつ命を落とすか判らないからこそ、依頼主との人間関係はしっかりしたものにしておきたいものだと一人そう思っていると、セルシアとハンスの話はどうやら先に進んでいるようだった。

「そうすると、二人のお嬢さん方の命を狙っているという何者かの正体は、まだ掴めていないということですね？」

セルシアは、確認の意味合いを込めてそう問いただす。

「ええそうです、この街の探偵屋にあたって何か手がかりになる情報を手に入れようとしたのですが、それがまったく駄目でお手上げ状態です」

ハンスは、苦い顔をして笑顔を取り繕う。内心、相当そのことで悩んでいることを示すように、言葉には覇気は見られない。

「それで、私たちは、どの様な仕事の任に就けばいいとおっしゃるのですか？」

「そうですね、あなた方には二人の娘エネア、ミネアの護衛をつきっきりでお願いしたいと思っていますのですが、どうですか？ 屋敷の外の警備は、事前に雇った傭兵が担当しているのもう十分でしょう」

そう言うとハンスは、隣に立って控えている使用人を手招きして、何か小声で耳打ちすると、ローダ達の方に向き直ってまたひとつ小さな笑いを返すのだった。

すると使用人は、何かを言いつけられたのか、応接室を足早にでると扉の外へ消えていく。

ローダは、それを見て、一体、何があるのだろうと怪訝な表情を浮かべてそちらの方向を覗き込んでいると、それを察したのか、ハンスがローダの目を見つめて愛想笑いを返してくるのだった。

「いま、二人の娘を呼びにいかせましたので、そのまま寛いでお待ちください。ぜひ、あなた方に、紹介しておきたいのです。とくにそちらのローダ様には、何かとお礼も言いたいようなので、娘たちと親しく接していただければ幸いですのならば幸いですののですが……」

「俺に・・・礼を・・・親しく・・・？」

「ええ、私の娘どもは昔、貴方の父上アルスレイド様に命を救われたことがあるのでございます。その後は、私たち家族との昵懇な付き合いもしていただき、感謝すらしているのです」

彼が続けた話はこうだった。

ハンスはその昔、この街で貴金属や骨董品を売り捌くという商売を始めるまでは、大陸に点在する各都市を渡り歩き運んだ商品を取り引きする交易商人として名を馳せた時代があった。

その頃、ハンスは、大規模なキャラバンを組織して馬車で各都市をめぐり歩く際、妻子も一緒に引き連れて、交易の旅にでるのが常識となっていた。

キャラバンの旅は危険がつきまとう。治安の悪い街道では頻繁に山賊が出没し、多くの商人が殺され山のような貴重品が強奪されていく。

そんな時世の中、交易商人に欠かせないのは、キャラバン隊の護衛を担当する傭兵達の存在である。交易商の多くは、長い旅路を余儀なくされる中、自衛手段のために多くの傭兵を雇って、旅を安全なものにすることを常套としていたのだ。

ハンスも、交易の旅にでる際はその常識を守り、キャラバン隊に数多くの傭兵を参加させて、隊商の安全をはかることに余念はなかったのである。

そのハンスが雇った傭兵達の中に、ローダの父アルスレイドの姿も昔あった。

彼は、雇われた傭兵達の中のリーダー役としてのその任をうけ、よく立ち回り、ハンスの信頼も厚くキャラバン隊をよく指揮し、何度となく山賊の襲撃を撃退し隊商を壊滅の危機から救ったのは幾度かあった。

しかし、ある旅の途中、とある街道の山間で今迄にない数の山賊に襲われた時は、ハンスもこれで人生を終えるのではないかと思われるほど、窮地な局面に追い込まれたのである。

襲撃を仕掛けて来た山賊は、二百人くらいの屈強な男たちである。それに比べ、キャラバンの傭兵隊は五十人、どう見ても傭兵隊の壊滅は必死に思えた。御者や荷を運ぶ人足達は悉く惨殺され、護衛の傭兵隊も奮戦して山賊たちを屠ったが、数に勝るものはないように次第に劣勢に追い込まれる。そんな時アルスレイドは、すみやかな決断を迫られていた。

山賊たちの狙いは馬車に積まれた交易品である。ハンス一家や御者、人足達を逃がし傭兵隊も後退してどこか近くの村に逃げ込めば、まだ活路は見いだせると判断したアルスレイドは、戦いの先頭に立って仲間呼び掛け、隊商の荷を捨てて敗走を計ることに決めていた。

当初ハンスは、その決断に渋い顔をして拒絶していたが、その激闘の刃が二人の娘と妻にも及びそうになった時、ハンスもその考えを改めなければならなかった。

山賊の数人が傭兵達の撃退網をかいくぐって、ハンス一家に肉薄してきていたのだ。

娘二人と、その妻に向けられた山賊達の兇器を前に、ハンスは怯えて何もとるべき手段が見いだせず、ただ呆然と立ちすくむ中、その窮地を救ったのがアルスレイドだった。

彼は、ハンスの娘たちに山賊が襲いかかろうとする既の所で駆け付けてくると、その男たちを一刀のもとに斬り捨てていたのだ。泣き叫ぶ二人の娘たち、それを庇うように

抱きしめる妻の姿を目撃したとき、ハンスはアルスレイドの下した判断が生き残るための最良の手段として最善であると認めざるおえなかった。せつかく遠路はるばる運んできた積み荷を、ここで手放すのは心苦しいが、命あっての物種とあきらめアルスレイドの決断に従い荷を捨てて撤退的に逃走することに決めたのである。

その適切な判断によって、傭兵、二十人、ハンス一家と御者、残った人足達を含めて、総勢、四十三人の人々は、近くの山村に逃げおおせたのであった。

「いやあ、あの時は参りました。積み荷はことごとく奪い去られ残ったものは何もなく助かったのは命だけ。ですが、貴方の父上には感謝しているのです。今日こうして生きていられるのも、アルスレイド殿のおかげなのですから・・・」

ハンスは、感慨深げに話をしめくくると、手にしていた葉巻を陶器製の灰皿に押しつけ火を消していた。

「そうですか、そんな事が・・・」

ローダは、ハンスから父の意外な過去を聞いて、その話に身を乗り出すように聞き入っていた。父アルスレイドは、無口な男であり仕事の話に関しては一切ローダには何も語って聞かせたことはなかった。仕事、一辺倒でローダが住んでいた国に帰ってくるのはごく稀で、いつも離れ離れの生活を余儀なくされていたが、ハンスの語った内容は父アルスレイドの傭兵としての素顔を知る上での、貴重な情報源といえたのだった。

「そう言えば貴方は、父上の消息を追ってこの街に来たそうですね？」

「ええそうです。父とは数年前から音信不通状態で、できれば父の消息に関する情報の一端を貴方に聞かせてもらえれば幸いと思い、今日こうして伺ったのですが、どうでしょう？」

「そうですね、貴方の父上がこの街に立ち寄ったのは、今から五年も前になるのですが、その時、会って色々、語り合ったのですが、どうもアルスレイド殿は西の大陸に渡るとその時、言っていたような気がしました」

「西の大陸へ・・・！？」

「ええ、どうも遣らねばならない事があるとかで、色々とお悩んでおられた様で、私がお話しできるのはそこまでです。他に貴方の父上の消息を示す手掛かりは知りませんから、どうかそれでご容赦願いますかな？」

ハンスは、申し訳ないといった表情で、ローダに対し頭を下げていた。

「そうですか、いやあ、ありがとう御座います。それでは今迄、捜し回った国や街で見つからないのは当然のことでしょう。これで大分、納得がいきました」

ローダは、そう言うとハンスと同じように頭を下げ、お礼の言葉を述べていた。

「良かったじゃない、少しでも手掛かりになる情報が掴めて」

「そうだな、でも西の大陸といってもその世界は広いんだ。もっと具体的な範囲を絞った居場所が分らないと、捜しようがないのは事実だろ」

ローダは、多少、不満そうな態度でセルシアに嘯み付くと、一つ小さな溜め息をもらしていた。

父、アルスレイドが西の大陸に渡ったとなると、その捜索は困難を極めるのが必死だ。

捜索の期日はあと一ヶ月、それまでにアルスレイドを捜し出すのは完全に不可能に等しい。

このエルドバの街を最後に、搜索の旅をあきらめ国へ帰らなければならないのだろうかと、そんな思いにかられ、内心、落胆を隠せないでいたローダだった。今迄の四年間、仕事の合間に必死になって捜していたが、思った以上に搜索の成果は得られなかった。だが、ここへ来て、やはりアルスレイドの消息を示す手がかりは、漠然としている。

親父は、一体どこに居るのか？

西の大陸まで渡って搜索を続行するとなると、時間もかかり手間もかかる。

それはローダにとって、未知の領域を手探りで探す、例え様もない無力感をともなう搜索になると思えたのである。

「どうも済みませんな、貴方の力になれなくて」

ハンスは、それを見て、ローダに対し深く謝っていた。

「いいえ、そんな事はありません。西の大陸に渡ったというだけでも重要な情報ですので、貴方のせいじゃありませんよ」

ローダは内心とは裏腹にそう言葉を発していたが、顔に落胆のその思いが出てしまっている様で、ジルにまじまじと見つめられてしまっていた。

どうしたら良いのだろうか？

それがローダにとっての、本音だったからである。

「お父さま、私たちをお呼びですか？」

だが、そこへ突然、甲高い女性の声が応接室の室内に響いて、その場の空気を一変させていた。見ると、そこにはまだ、うら若い歳の可憐な少女が二人、はにかむ様な姿勢のまま扉の前に立ち控えている光景が目についた。

一方は白、もう一方はピンクと、二人、色違いで服の型は同じお揃いのドレスを着込んだ、まるで妖精の世界から抜け出て来たかのような神秘的な面影をたたえて、微笑している二人の女性の姿があった。

ローダは、その二人の少女を見て取ると、その美しさに呆気にとられ、食い入るように彼女たちを見据えると、セルシアに手の甲を抓られてふと我にかえっていた。

二人は、白磁の様な白い透ける肌に、さらりとした巻き毛の金髪、目は深い紫紺色でその顔は名画に描かれた女神の微笑のように輝いており、見るものを魅了する何か艶美な雰囲気さえも纏っているかの様な少女たちだった。

それに、注目すべきは、彼女たちの相対的な顔立ちだった。

二人は、当然、ハンスの愛娘なのだが、双子とは聞いていてもこれほどまでにそっくりであると、まるで見分けがつかない。

しかし、ただ違っているのは、双方の花の花弁のような唇には、紅と水色のルージュが色違いにしてそれぞれに点してある一点だった。

それは、故意にそうしてあるのかは分からないが、それによって確かに二人の相違を判断できるのであり、なかなか洒落た趣向のようにローダには思っていた。

「さあ二人とも、そんな所に突っ立っていないで、こちらにきてご挨拶をなさい。この方々は、これからお前たちの身の護衛を担当して下さる方々だ、よくお願いしなさい。それにこちらのローダ様は、お前たちの命の恩人アルスレイド殿のご子息だ。だからお礼を申すのだぞ……」

ハンスは、身振り手振りで説明すると、二人の娘をローダ達の前へと押しやっ、初対面の挨拶をするようにと促すのであった。

「あのう私・・・私が姉のエネアです。それにこちらが妹のミネア、その節はど・・・どうもありがとうございます・・・いのち・・・命を助けていただいて感謝しています」

水色のルージュの姉エネアが、紅いルージュのミネアを紹介し、はにかみながら緊張した辿々しい言葉づかいで、感謝の言葉を述べていた。

姉のエネアは、ローダ達の見慣れぬ顔触れに緊張しているのかどうか、顔を半ば赤らめてローダの顔を伏し目がちに上目遣いで覗き込んでくる。

そしてローダと目が合うと、恥ずかしそうに俯き、何かモジモジとした挙動を繰り返して妹のミネアのドレスの袖をひっぱって、頻りに何かを促していた。

「あのう、ローダ様は、お歳はいくつですか？ 私たちは、今年でもうすぐ十八になります、もしよろしければそれを伺いたいのですが？」

姉のエネアにかわって、紅いルージュを点した妹のミネアが姉の心中を代弁するかの様にローダに対して問いかけてきていた。

「俺の歳かい？ 俺は今年で二十歳になったばかりさ、それが何かあるのかい？」

ローダは、突然、予想をしていなかった質問にさらされて、半分、怪訝な表情でミネアの問いかけに応じていたが、ただ訳が分からず二人の姉妹に苦笑いを送ってその場をとり繕っていた。

「いえ、ただ知っておきたかっただけです。どうかお気になさらないでいて下さい。他愛もないチョットした確認事項ですので・・・」

そう言うとミネアも顔を赤らめ、姉と同じように俯いてそのまま口を閉ざしてしまっていた。

どうも彼女たちは、ローダを過剰に意識しているらしく、花を愛でる可憐な乙女のように楚々とした態度で、ローダに対して接するのだった。

「これ、お前達、そんな挨拶しかできないのか？ そんな風に礼儀作法を仕付けたつもりはないのだぞ。改めてちゃんご挨拶なさい。これではこのお三方に失礼であるのだぞ」

ハンスは、娘たちが口籠もるのを見て何か恥ずかしく思ったのか、少し強い口調で言い咎めていた。

「いいえ、構いません。さっきの言葉で十分、気持ちは伝わりました。それ以上の挨拶は結構ですよ。俺達はただの傭兵だから、畏まった挨拶は苦手ですので・・・」

そう言うとローダは、照れ笑いを浮かべて頭をボリボリと掻くのだった。

その態度を見てエネア、ミネアの二人は、俯きながらくすくすと笑い返していた。

どうもローダの頭を掻く仕草が面白かったらしく、口元に手を当てた無邪気な笑いでローダの方を見つめてくる。ローダは、その時、彼女らの天真的な魅力に惹かれてエネア、ミネアの二人の顔を交互に見比べていた。

(なかなか、良い娘さん達じゃないか・・・)

ローダの率直な感想は、そうだった。

命を何者かに狙われているにしては明るい、屈託のないその笑いは、傭兵生活で暫く、安らぎを得ることのなかったローダには、眩しい安逸の一つの光景のように思われ、無性に親近感を覚えていた。

だから、そんな二人がちゃんとした礼にかなった挨拶をしなくても、何ら気分を害することもなく、かえって好感を抱いたのは確かだ。

父親であるハンスは、不満そうな顔をしていたが、娘たちはまだ笑いが治まらないのか、頻りに口元を押さえて笑いを堪えている。ローダは、そんな二人の愛くるしい姿を見て、ハンスが溺愛するのも仕方ないなど内心そんな思いに浸っているのであった。

「どうも済みません不肖の娘たちで、私から改めてお礼を言わせていただきます」

ハンスは二人の娘になりかわって、ローダに頭を下げていた。

どうもこの人物は、筋を通さなければ居られない質らしい。

頭を下げる顔は、謙虚そのものといった感とその姿勢からは、にじみ出ていた。

「もう顔を上げてください。話は終わった事だし、そろそろ仕事を始めようかと思うのですが、構いませんよね・・・？」

「そうですか、それならば、もう一人あなた方に紹介する人物がいるのですが、ちょっと待って頂けますか？」

そう言うとハンスは、先程の使用人に目で合図を送る。

すると、その使用人は、そそくさとしてその場を後にすると、またさっきと同じように応接室の扉から出ていくのだった。

五分くらい経った頃だろうか？　暫くすると、使用人が姿を現していた。

そして、彼の背後には、身長、二メートルはあろうかという程の大男が、その姿をその室内に見せていた。

すると、

『あ、あんたは、ラドカーブ！　ギュセル・ラドカーブじゃないか！？』

その大男を見たとき、ローダとジル、セルシアの三人は、口を揃えてその男の顔を思い出し、口にだしてそう叫んでいた。

使用人が連れてきたその男は、きのう路地の裏通りで出会ったばかりの、あの大男だったからである。それがいま、ローダたち三人の目の前に悠然と構えて立っていた。

「よう奇遇だな。またお前達に、こんなところで会えるなんて思ってもいなかったぞ」

ラドカーブと呼ばれた大男は、気やすい口調でローダ達に語りかけると、そう言って友好的な態度で、ローダたち三人に話しかけてきた。それは、旧知の間柄の知己に、しばらくぶりで出会った時の喜びのように顔を輝かせ、まるで手厚く歓迎をしているかのような目で、ローダたち三人を見据えて笑みをこぼして来るのであった。

「どうしてあんたが、こんな所に・・・」

その為、ローダは半分、嬉しい気分と意外な気分とがごっちゃになった面持ちで、ラドカーブに対してそう言葉をつぶやいていた。

「どうしてって、俺は仕事の依頼でこの館の警備を引き受けているのさ・・・お前達も仕事でここへ来たんだろ？　これはおそらく何かの縁だ、仲良くやろうぜ。お前達なら大いに歓迎するからな・・・」

「ほおう、貴方達はお知り合いでしたか？　それならば話は早い、自己紹介をしなくてもこれで済みますな・・・このラドカーブ殿には、他の傭兵達をまとめあげるリーダーとしての役割を買って出ていただいています。どうか貴方達も、何か分からないことがある時は、この方に何でも聞いて欲しいとそう思っている次第で、それで宜しいですか？」

「ええ、俺たちには不満はありません。彼がリーダーであるのなら、何も心配することはないでしょう。俺たちも、何のころおきもなく、仕事に従事できることと思います」

ローダはそう言うと、改めて顔を輝かせ、ラドカープの顔をまじまじと見つめ晴れやかな笑顔をその顔に覗かせるのであった。

第二節

「あんたが、ここに雇われていたとは、知らなかったよ・・・」

アグデプト家の広い屋敷を経巡りながら、ローダは、隣を歩くラドカープに好意的な視線を送りながら気安い態度で話しかけていた。

「俺も最初は、お前達がここに来るとは思っていなかったさ・・・」

彼らの後には、セルシアとジル、そして双子の姉妹の姿もある。

「あんたは、いつこの屋敷に来たんだい？」

ローダは、ふと疑問に思い、問いかけていた。

「四日前さ、この屋敷に爆弾が投げ込まれてからすぐ次の日のことだ・・・」

彼らはいま、屋敷の本館の二階にいる。仕事始めにあたり、屋敷の間取りなどの構造をよく知っておく必要があるとラドカープに指摘されて、今はその屋敷を隅々まで回り、どこが使用人の部屋で、どこが厨房になっているか、また二人の娘たちの使用している部屋はどこなのかといった、屋敷の案内をしてもらっている最中だった。問題の爆弾が投げ込まれたエネアの部屋は、先程とくと見せてもらっていた。部屋の壁は無残にも黒焦げになり、爆発の影響で飛び散った家財道具は片付けられてはいたが、焼け焦げた匂いは今も残っておりローダたち三人の鼻孔を刺激していた。

投げ込まれた爆弾の威力が、比較的、小規模のものであったから、その程度で済んだが、それがもっと大規模なものであったのなら、屋敷の炎上も免れなかった様である。

ローダ達は、次から次に案内される各部屋の間取り図を頭にたたき込み、ラドカープがこの屋敷に来たときの経緯を聞き出しながら、今はまだ無事だった妹のミネアの部屋を見せてもらっている最中だった。

「ここが今、妹さんと姉のエネア嬢が使っている二人の部屋だ・・・よく見ておくといい、警護を担当する以上、重要な間取りだからな・・・」

どうやら、姉のエネアは部屋を失って、本来、妹のミネアが使っていた隣側の部屋へ移ったらしい。そこは、二人の姉妹が使うにしても、十分な広さをもつ部屋であった。奥には、女性が使う部屋らしく、大きな鏡台が置かれ、日当たりのよい大きな窓が北側の位置に大きく開かれている。部屋の外には小さなベランダがあり、そこには観賞用の観葉植物が置かれ、鮮やかな緑の彩りをそこに添えていた。

「ねえロード様、ここはもうこれ位にして、庭のバラ園にいきませんか？　きれいな花がたくさん咲いているのですよ」

先程から、ラドカープとロード達の後をちょこちょこことついて回っていた二人の姉妹が、少し焦れた様な態度で、そう話を切り出してきていた。

「ラドカープさん、もういいでしょう。案内もここで最後だし、私たちにロード様を貸して下さっても構いませんよね。色々とお話をしたいことがあるの・・・」

二人の姉妹は、懇願するような目でラドカープに訴えかける。

「判った。それなら俺はこれから警備の連中の様子を見てくることにしよう・・・ロードそれじゃまた後でな・・・よろしくやれよ、仕事だからな・・・」

そう言うラドカープは、踵を返して屋敷の一階へと階段を降り、その姿を消していた。

後には、ロードたち三人と、エネア、ミネアの二人の姉妹が残される。

「さあ行きましょう。今度は、私たちがお庭を御案内しますわ・・・」

ロードは、左右の両腕を二人の姉妹に掴まれ、引きずられる様にして無理矢理、歩かされていた。ジルとセルシアは、その様子を眺めながら渋々その後をついていく。特にセルシアは、ご機嫌ななめの様子で、少し刺のある視線で前を行く三人の様子を見据えているのだった。

庭に抜けて敷地を東へ行ったところに、目的のバラ園がある。

そこは、庭師によってよく手入れが行き届いた場所で、二人の姉妹が言うように、赤、黄色、白といった無数のバラが咲き誇り、広大な敷地の一角にささやかな花をそえる役目を一役、買っているようだった。

ロードには、花を愛でる乙女心は解らなかったが、確かに色鮮やかで咲き乱れるそのバラは、目を見張るものがある。

前を行く二人の姉妹は、満面の笑みでうきうきと心が躍るのか、両手を広げて「こっちよ」、とロードを誘ってくる。ロードは、内心、無邪気だなど思いながらも、先を行く二人の足取りを追って、バラ園の中に足を踏み入れていた。

「君たち、大丈夫なのかい外に出たりして。命を狙われているんだろ？」

あまりにもはしゃぐ二人の姉妹を間近に見て、ロードはふと心配に思ったのか、二人にそっと問い掛ける。

「あら、それなら貴方は、何の為にここに居るの？　私達を付きっきりで護衛して下さる為でしょ・・・」

彼女たちは、いたって呑気だ。聞いた話によると、屋敷に爆弾が投げ込まれたその日、以来、怯えて外にも出たがらないでいた様子だったらしいが、今の二人にはそんな事はつゆにも感じさせない元気さそのものがあつた。どうしてこんなにはしゃいでいるのだろうか、鈍感にもロードはセルシアに問いかけてみたが、彼女に白い目でそっぽを向かれて一体、何が言いたいんだと彼は一人、憤慨していた様子だった。

「ねえ、知っていますロード様。この街の規則では、十八歳になると殿方のところへお嫁に行けるのですよ・・・」

姉のエネアが言う。

「そりゃそうだろうね、君たちはもう年頃なのだから・・・」

ローダは、いたって素っ気なくそう答えていた。彼女たちのいわんとする意図がいまいち掴めていなかった為、仕方なかったからだ。

「それでね、私たち二人は、同じ殿方のところへお嫁に行くことに決めていますの」

今度は、妹のミネアが言った。

「えっ、それって複婚じゃないのか？」

その言葉を疑問に思い、ローダはそう言って少し驚きを示している。

「いやだ、知らないのですの？ この街の規則では、一夫多妻制度は、認められているのですよ」

二人の娘は、しれっとして言っただけ。

「へええっ、それは知らなかったな。で、誰と結婚するんだい？ この街の人かい？」

だが、ローダは、いたって鈍い。彼女たちのいわんとしている事は、うしろで話を聞いていたジルやセルシアにはあからさまに判りきっていた様だったが、当の本人はいまいち状況が飲み込めていないらしかった。

「やだ、ローダ様ったら。本当は判っていらっしゃるでしょ、私たちの心の内の気持ちが・・・？」

「一体なんのことだい、心の内の気持ちって？」

そう、ローダには、その事が、まだ判らないらしかった。

「そうだ、ローダ様には、今お付き合いなどなされている方などはいるのですか？」

そう問われて、ローダは、ジルの方を振り向きその顔色を覗いていた。

するとジルは、セルシアと同様、少し怒った顔をしてローダを見据え睨み付けてきた。

その為、一体、二人ともさっきからなんなんだよ、と、ローダはその時、内心、不満をこぼしていた。だが、ただ訳が分からず、言葉を飲み込むしか他に方法がなかった。

「ねえ、どうなのです、居るの居ないのどっち？」

そうこうしている内に、二人の姉妹は、ローダに一際、近付いてその顔を覗き込むように、身を乗り出してきている。

「そうだな、居るようで居ない、居ないようで居るってとこかな・・・」

ローダは、ある女性の顔を頭に思い浮かべながら、二人の姉妹に対してそう曖昧な答えを返していた。その思い浮かべた人物は、今は、ここに居るエネア、ミネアと同じくらいの年頃で、ある国のれっきとした王女様だ。彼女とローダとは、男と女という関係にはまだなっていないが、相当、深い付き合いであったことは確かだ。

ローダは、その王女様とエネア、ミネアを見比べて、無邪気さといい天真爛漫さといい、どこか双方には共通する何かがあるような気がして、一人、そんな考えにうつつをぬかしていた。

「ひどいローダ様、居るのか居ないのかはっきりして下さい。でないと、私たち困ります」

すると、妹のミネアが言った。

「一体、何を困るんだい？」

ローダが、すかさず問いたです。

「それはその・・・もういいです、ローダ様のいじわる」

そう言うとエネア、ミネアの二人は、恥ずかしそうに顔を赤らめ、軽くそっぽを向くのだった。それを見てローダは、一体、何事かと怪訝な表情をしていたが、二人の表情を見てこれはご機嫌をそこねたらまずいと判断し、話題を変えて二人の姉妹に別の話を切り出していた。

「あのさ、二人とも、話は変わるんだけど聞いていいかな？」

「一体なんですか？ お話ならちゃんと伺いますわ」

「アルスレイド、そう俺の親父のことなんだ。君たち家族は、俺の親父と昵懇の付き合いだったって聞いたけど、それは本当のことなのかい？」

「ええそうですよ。アルスレイド様は、私たちの命を救ってくれた時から仕事の合間などにこのエルドバの街へ来て、何度も私どもの屋敷へ立ち寄っていただき、よく遊んでもらった記憶がありますわ」

「へええ、あの親父が遊んでくれたのかい？ 一体どんなことをして？」

ローダにしては、ちょっとそれは意外な話だった。

自分の記憶をたどってみても、親父なんか遊んでもらった記憶はまるでない。

覚えている事といえば、いつも厳しい顔をして『お前は強くなれ、強くなって自分の身を自分で守れるように努力するんだ』とあって、頭を撫でてくれたぐらいのものだった。

だから二人の姉妹の言うことが、まるで嘘のように聞こえ、そんな事あるわけないと思う反面、親父はそんな事もしていたのだろうか、意外に思ったりもするのだった。

「私たちはよく、お姫さまごっこをしましたわ。アルスレイド様には王様になってもらい、色々な王国のめずらしいお話をしてもらおうの・・・それはとても楽しいお話で、色々ためになった事もありましたわ・・・」

二人の姉妹は目を爛々と輝かせて、当時の深い思い出を語っていた。

その顔には、何か想いの人を慕う乙女のようなかぐわしい表情が浮かび、遙遠を見つめる様にして、二人して互いに頷きあっている様子だった。

「その所為だと、相当、親しかった様だね、親父とは・・・」

「ええ、それはもう第二のお父さまを持ったようでした。私たちは、エーネ、ミーネの愛称で、そう呼ばれていましたのよ」

「それは羨ましいな、俺なんか愛称で呼ばれたことなんか一度もないぜ。まったく不公平もはなはだしいよな、親父の奴・・・」

ローダは多少、嫉妬にも似た感情を抱いて、一人そうごちっていた。

彼にはファザコンの気が、少なからずあるようだ。

強い父に憧れて、幼い頃はよく剣術の稽古をせがんだものだ。

それにアルスレイドは何も言わず応じてくれ、容赦なく剣を振るって何度もローダに怪我をさせたりもした。

それでもローダは、偉大な父を目標に、いずれは父を追い越して大陸随一の剣士になるのだと幼い頃から心に決め、立ち向かっていくそんな姿が今はなつかしく思えてならなかった。

今、父がここに居るのならば、幼い頃の自分よりは大きく成長した自分を見て、何とってくれるだろうかと、内心そんな事を考えるローダであったが、父の消息が分からない以上、そんな事を望める機会はないようにはなかった。

『西の大陸か・・・？』

今ローダ達がいる、ローランド国の都市エルドバは、東の大陸【アドアナ】の南半球、東内陸部に位置する中小国の中の一都市だ。そこから西に、約一万六千キロ行ったところに西の大陸がある。西の大陸は【エウロカ】と呼ばれ、東の大陸と比べ人の叡知がうみだした科学という学問が盛んに用いられ、諸王国は先進化が進んでいるという。二本の敷居をまたぎその上を走る列車という乗り物が各都市を結び、網の目のように張り巡らされたその鉄道網は、総延長、五万キロにも及ぶという。

それらの発展は、東の大陸アドアナでは夢のような話であるが、大国【アスケナサス】では、その鉄道の技術を実用化に向けて、躍起になっているという噂もある。そんな事は、ローダにとってどうでもいい事であったが、いざ父の消息に関しては、居ても立っても居られないというのが正直なところだった。

だが、

「ねえ、もうそろそろ屋敷のなかへ戻った方がいいんじゃない？　ここに居ると、いつ狙われるかも判ったものじゃないわよ」

ローダが、そんな風に、一人、想いをめぐらしている最中のことだった。

今まで黙って話を聞いていたセルシアが、突然、三人の間に割り込む様にしてローダに対し、話しかけてきていた。

「そうですぞ、若。我々は、二人のお嬢様を護衛してお守りするという義務があるのですから、危険にさらされる様な事はなるべく控えねばなりませんからな・・・」

ジルもセルシアに同調したらしく、そう言葉を述べてくる。

「そうだな、それじゃ二人とも、もう戻ろうか？　綺麗な花も見せてもらった事だし、もう十分だろ？」

その為、ローダは二人の姉妹にそう言ってその意を促す。

すると、

「ええ、ローダ様が言うのならそうしますわ」

そう言うと二人の姉妹は、愛らしい口元をほころばせて、ローダに対し笑いかけ、その意に従う旨の意を示して見せるのであった。

だが・・・

だが、それは、ローダとジル、セルシアの三人とエネア、ミネアの二人が、屋敷の敷地内のバラ園から、屋敷の玄関へ入る途中のことだった。目の前に現れたのは、まだ十歳にも満たない栗色の髪少年と、三十代、後半にさしかかる年頃と思われる雅やかな夫人の姿がそこにはあった。

「まあ二人とも、ようやく元気を取り戻したようですね。その様子だと何か良いことでもあったのですか？」

そう言葉を発したのは、金色の髪を後ろ手に束ねた、雅やかな夫人であった。

彼女は、傍らにいる少年に腕を支えられ、少し辿々しい足取りでローダ達の方へ歩みよってくる。

「お母さま大丈夫、お加減の方はよろしいの？」

その為、二人の姉妹は、その夫人に駆け寄ると、左右からその体を支える。

どうやら病弱のようだ。肩にはショールを羽織り、片手で口元を押さえ咳き込んでいる。

「大丈夫よ、それより新しい傭兵さんなのね？　貴女たちの元気のもと、彼なのかしら？　その辺では見かけない良い男なのね……」

そう言うとその夫人は、ローダをじっと見据えてくる。

ローダは、それに対し、軽く会釈をして恐縮した態度を見せていた。

「ローダ様、こちらは母のマリーネです。まだ紹介していませんでしたよね？　それにこっちの子はアルジャン、私たちの弟です。以後お見知りおき下さい」

二人の姉妹はそう言うと、また畏まってローダ達に対してお辞儀を返してくるのだった。

だからローダ達も、それにつられる様にして、お辞儀を丁寧にして返して見せるのである。

「お母さま、こちらの方々は、私たち二人の護衛を担当してくださるのですよ。こちらの若い方がローダ様、そしてアダトス様に、セルシア様です」

「そうですか、それはお世話になりますね。私どもにとっては大事な娘ですのでどうかよろしく願いいたします。私がこのように病弱の身ですから、この二人には何もしてやれなくて歯痒い思いをしていましたのです。ですが、これで少し安心することができました」

「いや俺達は、仕事だからそう畏まってお願いしなくても構いませんよ。仕事のために命を賭けるのは、傭兵の宿命ですからね……」

ローダは、気安い態度で、そのマリーネ夫人に対し話しかけていた。

マリーネ夫人はまだ若く、主人のハンス・アグデプトよりは十数才も歳の差が離れていることだろう。どうもハンスの後妻であるようだが、容姿端麗でまるで宮廷夫人のように楚々としたその物腰は、どこか良家の生まれの才女であったのだろう。今は病弱のようだが、その気品は隠し様もなく、その顔付きからはそれが顕著ににじみ出ている。

義理の娘たちとの相性もいいらしく、お互い労わり、愛し合う気持ちがその行為言動にも表れている。そんな家族の光景を見て、ローダは羨ましく思っていた。

彼には、幼い頃から母がなく、幾度となく淋しい思いをしてきた思い出がある。だから、その仲睦まじい光景を見ると、胸が一杯になり、まだ見ぬ母の面影をそこに投影して想い描いてしまうのかも知れなかった。

「おいお前、なに間抜けな面してんだ」

だが、そんな思いにひかれて、三人を見つめていると、気付かなかったが、ローダの足元に栗色の髪の子が唐突に姿を現していた。それはエネアとミネアの弟アルジャンだ。彼は、少し大人びた顔をしてローダを睨み付けてくる。

そして……

「姉ちゃん達に手を出したら、承知しないからな……！」

そう言うアルジャンは、突然ローダのむこうずねを思いっきり蹴飛ばしていた。

「あ痛っちちち……」

その為、ローダは足を抱えて飛び上がる。まったく予期していなかった出来事なので、しばし面食らって、その場にしゃがみ込んでしまっていた。

「お前、いきなり何するんだ！」

ローダは、そのアルジャンに対して、非難の声をあびせかけていた。

いきなり、何の前触れもなく、蹴りつけられたのだから仕方がない。

「まあ、何をするのアルジャン、ローダ様にそんな事しては駄目じゃない！」

その為、姉のエネアが、すかさずローダとアルジャンの間に割って入る。そしてアルジャンの肩を掴むと、自分の方へぐいっと抱き留めていた。

「こいつが悪いんだ、姉ちゃん達をスケベな目で見やがって。ただじゃおかないからな！」

「何だと、このガキンちょ！」

ローダは、さすがにその言葉に対してカチンときたのか、こぶしを振り上げる真似をしてアルジャンを迎撃する。しかし、当のアルジャンは、舌を出して憎たらしそうにあっかんべーをすると、そのまま逃げる様にして屋敷の玄関からその奥に駆け込んで行ってしまっていた。

後に残され、茫然とする一同———そして、クスクスと笑う声がする。

笑っていたのはセルシアだった。

彼女は、ローダがまだ幼いアルジャンに蹴り付けられたことが、どうしようもなく面白かったらしく、遠慮もせずに口元に手を当てて内心、笑い転げている。

それを見てローダは、「ひどいじゃないか、何も笑うことはないだろ」といって、セルシアを恨みがましい目で見つめ返したが、当のセルシアはそっぽを向いてそのローダの恨みがましい視線を無視していた。

「ごめんなさいね。あの子、姉のことになるとほんと見境がなくて困っているの・・・」

母親のマリーネが、申し訳なさそうに頭を下げてくる。

「いいえ構いません。男の子ですもの、あのくらいの元気がないと・・・」

するとそう言ってセルシアは、ローダの顔を意味ありげな視線で見つめ返すと、にっこりと笑ってアルジャンと同じように舌をだしてあっかんべーをして見せるのだった。

そう、そして、そのローダを小馬鹿にすると、知らんぷりをしてジルの顔を横見し『まったく面白かったわ』と、いう様な顔をして、未だに軽い笑いをクスクスと小さく漏らすと、最後にローダの顔をまじまじと直視して、愉快、楽しげな表情をそこに浮かべ、その日の一幕をそこで終えて見せていたのであった。

第三節

あれから、二日が過ぎていた。

それは、ローダ達、三人が、ハンス・アグデプトの屋敷へ来てから後の事である。

エネアの部屋に、爆弾が投げ込まれた日からは、既に、七日は経っているという計算だった。

その間、屋敷内には、なんら変わった様子もなく、ごく普通の平凡な日常が時間とともに過ぎていく。

警備の傭兵達は、相変わらず屋敷の見回りだけ続け、他にすることもなく、多少、手持ち無沙汰の状態、仕事に従事している様子であった。

そして今、ロード達は、屋敷の裏手にあるプールのプールサイドにいる。

そこには、備え付けのテーブルと椅子があり、ロードとジルの二人は、その椅子に腰掛け、頬杖を付きながら、ある光景を食い入るように眺めていた。

その光景とは、肌もあらわな女性が、三人、ビーチボールを追い掛け、水と戯れる瑞々しい潑刺とした光景だった。

セルシアとエネア、ミネアの三人である。

彼女等は、胸のこぼれ落ちそうな薄いビキニを着けて、今、プールの水の中にいる。

カモシカのような長い脚、しなやかにのびる白い腕、良くくびれた柔らかい腰付き、形の良いたわやかな胸が、水の合間で濡れて太陽のように輝いている。

それはある意味、破廉恥な光景だった。普通の男がそれを見るのなら、目の保養になるのはうってつけの光景とも言える。

水に濡れて、輝きを増す三人の美女が水の中で戯れる姿は、ロードの男心をくすぐるには、効果的面の趣向のようにも思えた。

最初に、水浴びをしたいと言いだしたのは、姉のエネアである。

今朝エネアは、父のハンスに頼み込み、外のプールで遊びたいと懇願して、その願いがかなったのであった。

当初は、危険だからといって渋い顔をしたハンスであったが、この一週間、まるで平穏な日々が続いたので、気をゆるしたのか、その願いを受け入れて今こうして水浴びの真っ最中というそんな事にあいっていたのであった。

しかし、その話を聞いたとき、ロードは最初、一体、何を考えているんだ命を狙われているというのに、と、ごく当たり前の反応を示しびっくりしていたが、セルシアは、そうではなかった。「それっていい考えね。私も一緒に入ろうかしら？ だって楽しそうじゃない。せっかくプールがあるんだから、使うことに越したことはないわね……」と、そう言うと、まったく無責任にも、同意を示す始末であったのである。

そしてセルシアは、二人の姉妹に水着を借りると、さっさと着替えて直ぐさま屋敷の裏手にあるプールへと、エネア、ミネアを引き連れて、真っ先に向かったのであった。

今は秋の初旬である、しかし太陽の日差しはまだ暑く、プールの水も温水なので寒さに震えるという事にはならないが、いくらなんでもシーズン違いであるだろうと思うロードであった。

しかし、当の本人の彼女達は、気にした様子もなく、何のきらいも無しに楽しそうに遊んでいる。

それを見て、ロードとジルは、半ばあきれ顔であった。

水浴びを許したハンスもハンスだが、仕事そっちのけで遊び惚けているセルシアもセルシアだ。果たして彼女には、傭兵としての自覚があるのだろうか、ロードは、内心

そう問いかけたくなるような心境に苛まれていた。

そこへ、ビーチボールが飛んでくる。

「御免なさいローダ様、ボール取って下さらない？ こっちへ投げてえ！」

ローダは、そそくさとボールを拾っていた。そして三人の方へそれを投げ返す。

「ありがとー」

二人の姉妹は、いたって元気だ。二日前、初めてあった時よりも、もっと澆刺としてきている。

ローダ達に対して、何の気兼ねもなく無邪気に接してくる二人の姉妹だが、以前よりもまして、その関係は親密なものになりつつあった。

それは、ローダ達にとって何の不满もないのであるが、こうも親しくされると、雇われ人としての自分と依頼主の娘という微妙な関係を、どう維持していいのか悩むところがあった。

ローダは、エネアとミネアの二人が、自分に対して一目惚れ的な淡い恋心に値する多大な好意を寄せているということ、二日経って初めて気付いていた。

二人の姉妹に好かれているという事は、何ら不快ではないのだが、この手の事に関しては不器用なローダは、それをどう受けとめればいいのか戸惑い気味であった。

ジルの話によれば『普通にしていればいいのですよ』と、いたって素っ気ない答えが返ってくるのであったが、ローダには中々そうはいかない。

意識すれば意識するほど、その対応はごちないものにもなり、また無視すれば無視するほど、自分は冷たい人間のように思えてしまうのである。

かといって、普通にしていなくてもそれでは何の進展も望めないではないかと、一人そう思っていると、なんだ俺は、いま以上の何を二人の姉妹に期待しているんだと、不意にその思いを打ち消している自分がそこにあった。

「なあジル、俺達、こんなところで何もせずに遊んでいて良いのだろうか？」

ローダが、ジルに問いかける。

「仕方ありますまい。二人のお嬢様が遊びたいと言っているのですから、これも仕事のうちです、お付き合いするしかありませんまい」

「でもセルシアはどうなんだよ。仕事そっちのけで二人と遊んでいるんだぜ」

「そうですね、それは困ったことですが、警備も厳重ですしあまり生真面目すぎるのもどうかと思えますけど」

ジルは、いたって淡泊に、そう答えてくるのであった。

「そうだ、ジルはどう思っているんだい？ エネアとミネアが命を狙われているという事に関して？」

ローダは、ここ数日間、釈然としない思いにかられていた事を、ジルに対して質問という形でそう表していた。

「私としては疑問ですな。爆弾が屋敷に投げ込まれたということですが、その犯人が何者か判らない以上、この件に関しては懐疑的にならざるおえないでしょう」

ジルが言う。

「そりゃそうだよな、約一週間、何の音沙汰もないと、本当に狙われているのかが疑問だよな？」

それに対して、ローダは同感であるというように、神妙な顔をして頷くのであった。

果たして、これから何かが起こるのであろうかという疑問は、依頼主のハンスを見てみると、やはり懐疑的にならざるおえない。

命を狙われているという危険性があるのに、この真っ昼間からプールでの遊泳を許すなんて、それはまるで危機感がすっぽりと消失している様で、いまいち配慮に欠けるのではないかと思われてならない。

もし、娘達を溺愛しているのであれば、固く外出を禁じて、屋敷の中で身の安全を図った方が良い様な気もするのである。

しかし、狙われている当の二人は、無防備にも破廉恥な水着を着て今はお遊びの真っ最中だ。

これでは、危機感の欠如を疑われても、仕方がないだろう。

ローダとしては、本当に命を狙われているのであれば、傭兵としての責任上、自らの命をとって、二人の姉妹を守りたいという気持ちは強い程あるのであるが、当の本人たちが、何の危機感もなく、こう無邪気に振る舞っているのを見ると、どうも調子が狂ってしまう様な気がしてならなかった。だが、仕事の依頼を引き受けた以上、どんな状況でも依頼の不履行は認められないので、あえて何の文句も言わなかったが、こんな状況において自分たちの気を引き締めて、事に対処するという気概を忘れる事は無かったのであった。

それを忘れてしまっただけでは、何時いかなる突然の状況にも対処できなくなってしまうので、傭兵としては、それは何らかの自分達の死活問題にさえもなりかねない。

だから、ローダとジルの二人は、三人が水の中で戯れる姿を見ても周りの状況をつぶさに把握し、すぐさま危険を察知して、二人の姉妹を守れるような態勢を確保することに余念はなかったのである。

すると、そんな二人の心境を知ってか知らずか、セルシアが一人、その濡れたスタイルの良い裸同然の身体を水の中から揚げると、ローダとジルの二人の前にその姿を現していた。

「二人とも、一体、何の話をしているの？」

セルシアは、先程からひそひそと話す二人の会話に興味を覚えたのか、そう言って問いかけて来る。

「何って、仕事の話だよ。俺達は君と違って仕事熱心でね、遊び惚けている暇なんてないのさ・・・」

その為、ローダは、皮肉たっぷりの言葉で意地悪にそう言葉を言い返していた。

「そう、ところでどう私の水着姿？ 結構、様になっているでしょう」

だが、そう言うとセルシアは、頭と腰に手を当てて、悩ましいポーズをとって見せてくる。

ローダの皮肉った言葉など、これっぽっちも気にしてなんかいない様子だった。

彼女は、何度も思いつくままのポーズをとって、ローダとジルにその色気を振りまいていた。

「「・・・・・・・・・・」」

その為、ローダとジルは無言である、次に思いつく言葉が言いだせないそんな態度

だった。

「どうなの？ そそらない？ 私これでも頑張ってみたのよ・・・」

そう言うと、セルシアは、軽く笑ってウインクをしていた。

なかなか魅力的な表情だ。そこいら辺の男なら、それだけで何人もなびいてくる様な、魅惑的な仕草であった。水着の合間から見える胸の谷間も、男の欲情を駆り立てるにはもってこいの武器となっている様子でもある。

ちなみに、セルシアは意外と胸が大きい。

ローダとジルはそれを見ると、呆気にとられ、しばし口をつぐんで絶句していた。それはセルシアの艶めかしい姿に心を奪われた訳ではない。その状況をあまりにも把握していないあっけらかんとした彼女の姿が、二人の心の中を空白にしたからだ。これではここへ何しに来たのか判ったものではない。彼女はまるで、バカンスを楽しむ遊楽客の様だった。

「なんだい君は、その姿が見せたくて、プールに入りたいなんて言い出したのか？」

だからローダは、何だかやるせない気分で、そう問い質していた。

「そうよ悪いかしら。私だってまだ若いのよ、あの二人にだって負けはしないのだから」

そう言うとセルシアは、仁王立ちになって、一人、威勢良く威張りこけるのである。

「そう言う問題なのか？ まったくやってられないぜ。この仕事を引き受けようと言いだしたのは君なんだぞ。もっと真面目にやってくれなければ困るんだよ・・・」

だからローダは、その彼女に対し、遂に怒ったのか、セルシアの顔を見つめて睨み付ける。

しかし・・・

「あーらそう、やっぱり私より、あのお色気娘たちの方がいいのね。せっかく私のナイスバディーを見せてあげようと思ったのに、残念だわ。どうぞあの二人に見惚れてなさい、タマとられても知らないから！」

その為、そう言うとセルシアは、ローダの言葉に対し逆に怒ったのか、そう言い残すと踵を返す様にしてプールの方を振り向くと、ザボンと水の中へその体を身踊らせて飛び込んでしまっていた。

ドドーン・・・！！

その直後だった。

耳をつんざくような、炸裂音が辺りに響き渡った。

庭に降りていた鳥達がそれに驚き、一斉にはばたき青空に飛び立っていた。

遠くの方から、鈍い地響きの音とともに、ローダ達の体を見えざる衝撃波が襲っていた。

その方向は、屋敷の方からだ。

それは、かなりの大規模な音がしたので、その方向にローダ達が首をめぐるしてみると、屋敷の西側にある別館の方から、異様に不気味な黒い煙がたちのぼり始めていた。

「一体、何だ！！」

その為ローダは、突然のことに、そう叫び返していた。

「いけません、三人を水の中から揚がらせないと！」

だが、ジルの対応は、迅速だった。

彼は、そばに立て掛けておいた剣を掴み取ると、水の中に居る三人の方へ駆け寄った。そして辺りを確認する様にして、警戒の色を強くしてみせる。

その為、ローダも、それに少し遅れながら、ジル、彼にそう付き従っていた。

「どうしたの、一体、何があったの……？」

だから、セルシアも、それを受けて水の中からそう叫んで来た。

「いいからセルシア揚がるんだ。それに二人とも早くガウンを羽織って！」

その為ローダは、不審げな顔をしている三人に指示を出す。

その顔付きは真剣になった。

彼は辺りを鋭い目付きで見渡す。

そして水の中から揚がってきた三人に、ガウンを投げ渡していた。

「もしかして、また爆弾が……」

その言葉を発したのは、二人の姉妹だった。

彼女等は、顔を半ば青くして、恐る恐るその言葉を口に出していた。

「ばくだん！？　じゃあまた屋敷に爆弾が投げ込まれたのか……？」

ローダが、半ば、半信半疑の表情で、その言葉を発する。

「おそらくそうでしょう。あの音ですから、かなりの被害があったのでは？」

ジルは、憶測を抱きながらそう言っていた。

この辺りに伝わってきた衝撃波は、相当なものであったからだ。

「判った、それならとにかく爆発があった所に行ってみよう、ここに居ても解らないだろ……」

その為、そう言うとローダは駆け出していた。

その後ジルとセルシア、そして二人の姉妹も続く。

一体、屋敷に何があったかはまだ解らないが、一同の顔には不安の色がありありと浮かんで、それを隠しようがなかったことは事実であった。

第四節

ローダ達、五人が、屋敷の方へ駆け付けると、そこは地獄のような惨状が現出されていた。

本館を挟んで西と東にある別館のうち、西側の方から火柱があがり、黒煙を吐き出しながら濛々と燃えている。

火はまだ、別館の全体を覆いつくす迄には至っていないが、北側の一部屋が見るも無残に消し飛び、そこにはポツカリと大きな穴が開き、大鎚によって穿たれた様に破壊されていた。

どうやら部屋の窓枠ごと吹き飛んだらしく、地面にはガラスの破片が散乱し、へし折れた木枠なども一緒にぶちまけられている。

その光景に、ローダ達は呆気にとられていると、屋敷の本館の方からラドカープと館の主人のハンスが駆け付けてきていた。

「爆弾だ！ 早く火を消すんだ・・・」

ローダは、ラドカープに指示され、慌てたように水を探していた。

屋敷の警備をしていた傭兵達は、もう既に火の消火活動に入っているらしく、バケツやホースを手にして水をぶちまけている。

ローダとジル、セルシアも、ようやく探し当てたバケツを片手に裏庭に走ると、プールから水を汲みだし、火が燃えている別館との間を何度も往復し、消火活動に専念するのであった。

最初の内は、なかなか衰えを見せなかった火の勢いだったが、二時間にもわたって消火活動を繰り返すうち、ようやく少しだが鎮火の兆しが見えてきていた。

それからかれこれ、もう一時間、消火に努めると、やがて火は完全にかき消され、後には黒焦げになった一部の柱が水をしたたらせ、消し炭になった部屋の一角からは水蒸気が微かに立ち上るまでになっていた。

「一体これはどういう事なのですか、ラドカープ殿。あれほど警備は厳重にして欲しいと再三にわたって言っておいたではないですか！ それをこんな失態をおかすなんて・・・」

ようやく火を消し終わると、ハンスはラドカープに食って掛からんばかりの勢いで、非難の声を声高に上げていた。

「俺としては万全を期したつもりだ。この厳重な警備をかいくぐって爆弾を投げ入れた方を誉めるべきだろ・・・」

ラドカープは、平然とした態度でそう言ってのけていた。

その顔には、悪怯れた様子はなく、ハンスに非難されてもいたって意に介した様子もなかった。

その時、ローダは、ラドカープの言う通りだと思っていた。

彼は、警備を担当する傭兵達に、事細かな指示を出して何度も屋敷の見回りをするように、口が酸っぱくなるほど指示していたのを覚えている。

それなのに、警備の目をかいくぐって、爆弾が投げ入れられたということは、いかなる芸当なのだろうかと、首を傾げたくなるくらい難しい事のように思えてならなかったからだ。

ハンスも、それは判っていた様子で、その後は何も言わずただ唇を噛みしめているばかりだった。

始めは、激情にかられラドカープに食って掛かっていたハンスであったが、次第に本来の落ち着きを取り戻し、今はいつものように穏やかな表情に戻っている。

「いやあ、済みませんでした。つい我を忘れてカッとなってしまって失礼なことを申し上げました。どうか忘れてください、私も感情的になったことを謝ります・・・」

そう言うとハンスは、意外とあっさりラドカープへ頭を下げていた。

当のラドカープも、怒った様子もなく、無言でその行為を受け入れ聞き流している様

子だったのである。

所変わってここは、ローダ達が最初にこの屋敷にきて、案内された応接室にいる。
今は、使用人が運んできていた熱いお茶をすすって、その喉を潤しているところだ。
爆弾が投げ込まれ焼け焦げになった別館の事後処理もすんで、傭兵達は、また屋敷の警備に没頭しているはずだ。焼け跡は、何の手も加えずそのまま放置されることになったらしい。

手を加えるといっても、すぐには手が付けられず、どうにも出来なかったからだ。
ローダ達が、今この場所にきてここに居るのは、ハンスに話があるといわれて呼び出されたからである。

ローダ、ジル、セルシアの三人は、神妙な顔をして押し黙るハンスを前に、少し居心地の悪いまま、三人掛けのソファーに腰を下ろしていた。

「あのうハンスさん、話があるって言うから来たのですが、どの様なご用件なのです？」

セルシアが、押し黙るハンスの顔色を覗いて、おもむろに口を開く。

「・・・それがですな、今から話すことはここだけの話にして、他の誰にもしゃべらないことにしてほしいのですが、いいですか・・・？」

「それは構いませんが・・・」

三人は、お互いの顔を見合わせてから、怪訝な表情をして頷く。

そして次に、ハンスの口からどんな言葉が出て来るのかを、少々、間抜けな眼差しのまま待つのであった。

「実はですな、うちの二人の娘を連れて、どこか遠くへ逃げてもらいたいのです・・・」

ハンスは、ためらいがちな態度で、その言葉を切りだしていた。

「ええっ、連れて逃げるって、どういう事ですか!？」

セルシアは、少し驚いた様子で、ハンスにその事を問い質していた。

ローダとジルも同感らしく、身を乗り出してハンスの顔をジッと見つめ返した。

「どうもこうもありません・・・言葉通り、この屋敷、以外のどこか人の目につかない遠くへ、娘たちを連れて逃げて欲しいのです・・・」

「それはもしかして、二人の娘さん達の命を狙っている者達の間目から、二人を逃れさせようという事なのですね・・・？」

セルシアは、ハンスの心の内を察したのか、丁寧な口調でそう問いかけていた。

「ええ、私はもうこれ以上、娘たちを危険に晒したくはないのです。幸いにも投げ込まれた爆弾は、二人を傷つけることはありませんでしたが、これから先どうなる事かわかったことではありません。そうなる前に、危険をなるべく回避したいのです。ですからどうか私の願いを聞き届けて戴けないでしょうか？」

ハンスは、苦渋の選択をしたようである。その証拠に、額にはそれほど暑くもないのに冷や汗をびっしょりかき、手にしたハンカチでそれを拭いている。目は虚ろがちで、語る口調もいくぶん疲れが見えるようだった。顔色も悪く、少々、青ざめて痩せこけた老人のようにも見える。

ローダ達は、そんなハンスに対して、深い同情の意を示すのであった。

二人の娘たちの命を狙う者達は、明らかに殺意を持っているように思える。

二度目に投げ込まれた爆弾は、一度目の時よりも、その威力がいくぶん強化してあるようだ。

一度目の時は、部屋の壁を焦がす程度にとどまっていたが、二度目は、部屋自体を破壊し残骸を外へ吹き飛ばす程であった。

だからハンスが、この話を持ち掛けるのも無理はない。

それは、娘の命を固く守るための、画期的な選択肢とも言えなくもないからである。「どうでしょうか、お金ならいくらでも出します。全財産とはいきませんが、あなた方が遠くへ逃げられるような分だけの金を用意しますので、どうか承知して欲しいのです・・・」

ハンスは、真剣に語りかけてくる。

だが・・・

「そう言われても困ります。だいいち、娘さん達が承知しないでしょう」

セルシアに変わって答えていたのは、ローダだった。彼は、ハンスの気持ちを十分、判ってはいたが、そう答えるしかなかった。

「ハンスさん、あなたは本当に娘が可愛いのなら、手元において守ったらどうですか？

俺達に頼んでもあてもないし、逃げるといっても路頭に迷うのがおちですよ・・・やはり安全なのは、雇った傭兵達を信じて、この件が済むまで屋敷にこもり一歩も外に出ないことです。屋敷の中が必ずしも安全だとは限りませんが、他に方法はないでしょう。弱気になっては駄目です。ここは一緒に意を決して、娘さん達を守ろうじゃありませんか。俺達も出来る限り協力を惜しみません。元気を出して顔をあげてください。依頼主がこんなじゃ他の傭兵達に示しがつかないですからね・・・」

ローダは、弱気になったハンスを、諭すかのような口振りで丁寧の説得をこころみていた。

今の彼には、そう言うしか、他に適当な言葉が思いつかなかった所為でもある。

どうもハンスは、相当、追い込まれている様子で、その苦渋の色を隠せない。

それだけ二人の娘を、溺愛しているのだろう。

ローダにしてみても、エネア、ミネアの姉妹が、このまま命を落としてしまう様なことがあってはならないと思っている。

しかし、いま言った方法でしか、二人の身の安全を守れないのも確かだ。

ハンスは悩んだあげく『連れて逃げてくれ』という、そのような答えを導きだしたようであったが、ローダ達、三人にとって、その申し出はどうてい受け入れられない無理な話であるのだ。

せっかく仕事の依頼を引き受けたのだから、二人の姉妹の護衛という当初の目的を、傭兵としての自分たちは、最後まで貫徹しやり通さなければならないといけない。

ここで安易に逃げ出してしまうえば、命を狙う者達の思うツボにもなりかねないからである。

だからローダは、ハンスの申し出を、受け入れる気にはなれなかった。

それは当初の意志を、大きく曲げる事にもなるからである。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その為、そうローダに言われると、ハンスは下を向いてそのまま押し黙ってしまっていた。

ローダの言葉が、かなり効いた様だ。

そしてハンスは、しばらくすると正気を取り戻し、いく分、息も落ちついて聞こえるようにもなっていた。

額にかいていた冷や汗も、今は見られず、顔色も赤みを取り戻して来たようだった。

そしてハンスは、顔を赤らめ恥ずかしそうに頭を掻くと、次の言葉をローダ達に語りかけてくる。

「いやあ、あなたの話は尤もです。つい弱気になってしまって恥ずかしい。私としては、もうこれ以上、後はないと思ってしまっていた様で、突拍子もない事を口走ってしまいました。ですが、これで分かりました。あなた方を信頼して、ここで守ってもらおうしありません。娘たちも、これからは外へ一歩も出さず、屋敷のなかへ止めておきましょう……」

ハンスは、そう言うと落ち着いたように軽く息を吐く。そしてローダの方を見つめて、苦笑いを一頻り繰り返すのであった。

「そうですねハンスさん、馬鹿な気は起こしてはいけません。私たちは雇われの身ですが、傭兵としての義務は守るつもりです。ですから、もう二度と先程のようなことは口になさらないで下さい。そうでないと、自分たちの本分を、発揮できないのですからね……」

「分かりました、そう致します。しかしあなたは立派な人だ、父上と似ていらっしゃる。私も昔はよく、アルスレイド様に何度か意見されたことがあります。さまざまな教訓を語って聞かされた覚えがあります。やはり血は争えませんが、あなたのご指摘は尤もですから肝に銘じておきましょう」

そう言うとハンスは、ローダ達に深々と頭を下げ、金輪際もう弱音は吐かない事を誓うように、口元を引き締め謝罪の意を示し表すのであった。

第三章 襲撃！

第一節

二度目の爆弾が投げ込まれた、その日の夕刻、ローダ達を含めた傭兵達は交替制で早めの夕食を済まし、今はハンス一家が家族五人で屋敷の一階にある奥まった大部屋を使用し、使用人にかしずかれ夜のディナーを満喫しているところだ。昼間の惨事で屋敷内は一時、騒然としていたが、今はすっかり平静を取り戻し、いつものように温和な空気が屋敷内を支配している。

ローダ達、三人は、ハンス一家の食事が済むまでの間、大部屋の扉の前で待機中だ。屋敷の外はすっかり日も暮れ、時計の針は六時五十分を回ったところだった。

二十分後、ハンス一家もようやく食事を終えたところなのか、おもおもに席を立ちだし、エネアとミネアの両姉妹は、さっそくローダの所にやってくると心配気な表情をその顔に浮かべながらおもむろに口を開くのであった。

「ねえローダ様、私たち本当に大丈夫なののでしょうか？ 次には本当に殺されてしまうのではないかと夜もおちおち眠ってられないそんな気がしてならないの……」

妹のミネアが、暗い面持ちでローダに対し話しかけてくる。

その顔は陰りがちで、話す言葉にも覇気は見られない。

『一体、私たちどうしたらいいの？』と、不安を隠し切れないそんな風な表情だ。

顔色も、心なしか少し青ざめている様子だ。

昼間のように、嬉々としてはしゃぐ元気も今は見られず、深く落ち込んでいるといった感じが見受けられる。

「大丈夫だよ、俺達がついているじゃないか。それに外には大勢の傭兵達が屋敷を厳重に警備しているんだ、めったな事にはなりはしないから安心しているといいよ。そんな疑心暗鬼にならなくても安全は保障されているんだ。ほら元気をだしてしっかりしなきゃ駄目だよ。綺麗な顔が台無しじゃないか」

ローダは、いたって優しく丁寧な口調で、二人の姉妹を勇気づけていた。

本当に大丈夫かどうかは、ローダにとって何の根拠もなかった。だが、そう言わなければならないと理性が訴えかけているようで、二人の姉妹を安心させるにはそれが一番と思うので、そう言葉が出ていたのである。

命を狙っている連中が、どんな奴らなのか解らない以上、まるっきり安心することはできないが、恐れてしまえばこちらが負けになってしまう。

そうならない為にも、今は気を引き締め、準備を怠らないことが一番なのである。

「あなたは恐くないのですか、ローダ様。私たちは恐い、だから必ず守ってくださいます？ アルスレイド様が、私たちの命を救ってくれた時のように……」

すると、二人の姉妹の瞳が涙目の時のように潤みだす。それは絶体絶命の危機に陥ったお姫さまが、異国の王子に救いを求めるかの様なそんな眼差しは、お願いというよりも懇願に近い、いたいけな眼差しのようにも思えて、ローダはその眼差しを受けると、こくりと頷き二人の姉妹を抱き留めて、温かみのある真摯な笑みをうかべてその瞳をジッと見つめ返していた。

「大丈夫よ二人とも、こう見えてもローダは剣の腕は達者なのよ。貴女達を守くらい造作もないことだわ。だから安心して、悪いようにはならないわ。決して貴女達を見捨てるようなことはしないから……」

その為セルシアも、二人の心情を慮ったのか、声のトーンを和らげて話しかけていた。

彼女は、女性として弱い立場にある二人の姉妹に親近感を覚えるのか、妹を思いやる姉のような包容感のある態度で、そう言葉を紡いでいた。

彼女からしてみれば、何の罪もない二人の姉妹が危険に曝されるのは忍びないのであろう。

弱い立場の人間を守る、それが傭兵としての宿命のようにも思える。

理由はどうあれ、エネアとミネアが命を狙われているということは確かだ。

だから、この愛くるしい二人の姉妹を、死なせてしまうには惜しい。

セルシアは、肩までのびた軽い栗色の髪をいらいながら、そんな思いにかられて二人の姉妹を交互に見つめ返すのであった。

だが、そんな時である。

ピーイイイイッ！！

甲高い笛の音を合図に、外を警備していた傭兵達が、何やら慌ただしく駆けずり回る、そんな足音が、ローダ達の居る廊下の壁を通して伝わってきていた。

「あの笛の音は……？」

ローダは聞き耳を立てて、その笛の音の出所を確認している。

「どうやら、何かあったようですな……」

ジルは緊張気味な面持ちで、そう言葉をつぶやいていた。

その笛の音は、何か異変が起こったら吹くようにと、傭兵達にもたせてある笛だ。

有事の際、少しでも早く危機を報せるためにラドカープの提案で、何人かの傭兵がそれを所持されてある。

その笛の音が響いているということは、外で何かあったらしい。

耳をすますと、かすかに金属が打ち合う甲高い音が聞こえてくる。

「敵だ！ ……敵襲だ！ ……」

だが、そこへ駆け付けてきたのは、一人の男だった。

彼は、外で警備を担当する傭兵の中の一人だ。

名はアレクといい、ラドカープに言われて報せにきたのだろう。

彼は、息急き切って屋敷中を走り回ると、大声を張り上げて屋敷の中の人間に警戒を促し、敵襲に備えるようにと、指示を出すのであった。

「敵襲って、一体どういうことなんだ……？」

ローダは、報せにきたアレクを掴まえて、そう問い質していた。

「おそらく暗殺者だ、二人の娘さん達の命を狙って来たんだろ……相当てだれの連中らしいぞ……」

アレクは、荒い呼吸を整えながら、ローダに対してそう答えを返していた。

「それで、相手は何人くらい居るんだ……？」

ローダは、またアレクに対してそう問い質す。

「二十人ぐらいだ。もう外では戦いが始まっているぞ！　いずれ屋敷のなかにも踏み込んで来るかもしれない……気をつけろよ……」

アレクはそう言うと、濁いた唇をなめとり、潤いを取り戻そうとしていた。

外で甲高い金属音が響いていたのは、警備の傭兵達と襲撃者達とが剣戟を交えている音であったようだ。それに加えて、怒声を張り上げる声や、まだ笛を吹き鳴らす音が屋敷の中にまで響いてくる。それを聞くと、ローダは、素早く行動に移してジルに対して次のような言葉を叫んでいた。

「ジル、ハンスさんや使用人たちを、大部屋に集めよう……その方が守りやすい」

ローダは、そう言うと二人の姉妹を連れて、大部屋の方へと走りだしていた。

ジルとセルシアも、ハンスやマリーネ、アルジャン達や、使用人たちを呼びに屋敷の奥へと走っていくと、なんとかその居場所を捜し当て、みんなで大部屋に集まるように呼び掛けて奔走していた。

五分ぐらいがして、ようやく全員が大部屋に集結すると、集まった人々は皆、口々に不安な言葉をローダ達に投げ掛けて怯えている様子だった。

「ローダ殿、本当に大丈夫なのでしょうか？　このような状況は初めてですので、不安が拭いきれません。二人の娘が命を落とすような事になっては、私はこのさき生きてはいけません。どうか不手際のないようお願い致します」

ハンスは、緊張した面持ちで、そう言葉を発していた。

「大丈夫だ、俺達が必ず守る。だからみんな落ち着いてここでじっと待つんだ……」

ローダは、みんなが落ち着いて怯えないように、毅然とした態度で指示を送っていた。

ここで皆が、バラバラな行動をとってしまったら、ここへ集めた意味がなくなってしまふ。

二人の姉妹が狙われているとはいえ、他の使用人たちやハンスたちにも襲撃者の脅威が及ぶかもしれない。

ましてや、人質などを取られてしまつたら、元も子もないので、それらを警戒しての方策だった。

「お父さま、私たち恐いです……どうして命を狙われなければならないの？」

エネアとミネアの両姉妹は、声を震わせて父親であるハンスに泣きついていた。

爆弾が投げ入れられた時と違って、今度は鬼気迫った襲撃である。

二人の姉妹が怯えるのも、無理はない。

下手をすれば、使用人たちも含めたハンス一家、全員が殺害されてもおかしくない状況といえる。ローダは、危機感を抱くのか、その眼付きは険しいものになり、セルシアとジルも緊張の色を隠しきれなかった。

「兎に角みんな、ここを動かないようにするんだ。勝手な行動は控えてくれよ。でないと

守れるものも守れなくなってしまうからね・・・」

それを聞いて、ハンス一家や使用人たちも、青い顔をして緊張していた。

ローダの厳しい発言に、同調したかのように身を寄せ合って固まってしまっている。

これから起こりうる出来事が、まるで悪夢であるかと思うように、みんな押し黙って、その恐怖に堪えかねて我慢しているといった表情をしていた。

この部屋に集められて、既に五分は経過しているように思える。

ローダ達、三人は、既に抜刀し胸の前で剣を構えている。

いつ部屋のなかに踏み込まれても、それですぐ斬り出せる用意は万全であった。

部屋に集められたみんなは、固唾を飲んで時が過ぎるのを待つ。

さらに一分・・・二分・・・三分・・・そして四分が経過する・・・

その直後だった。

突然、目の前の大扉が開かれると、脱兎のごとく襲撃者が乱入して来ていた。

それは全身黒づくめの男たちで、手には短刀を持ち、研ぎ澄まされた鋭い刃がその刀身をのぞかせていた。

全部で六人、顔を覆面で覆っているなのでその容貌は判らないが、その男たちから立ち上る殺気は尋常ではなく、多くの人を殺めてきたと思われる殺しのプロだけが持ちえる独特の空気をまとっている。

「お前達、何者だ・・・！！」

襲撃者が室内に入ってくるなり、ローダはその緊迫を破るように叫んでいた。

相手の正体を、確かめるためだ。

だが案の定、黒づくめの男たちは一言も言葉を発しない。

「誰に頼まれて来た・・・？」

そう言葉がでたのは、この連中が手練れの暗殺者と聞かされていたからだ。

これは推測なのだが、この者達はただ雇われているだけであって、その裏にはおそらく何者かの首謀者が糸を引いているのだろうとローダは見ている。

彼らの独特の身のこなしからすると、一流のそれに匹敵すると思われる。

その目は、上空から地上の獲物をとらえる鷹のような鋭い目付きをしており、中腰姿勢で短刀を構え、すぐにでも斬り掛かってきそうな気配を見せていた。

ローダとジル、セルシアの三人は、ハンス一家や使用人たちを守りながら、十分な間合いを取ると、息を止めて相手を見据えていた。緊迫した空気が室内を押し包み、誰一人、口を開かない静寂に満たされる。

ただ窮屈に息を吸う音だけが聞こえ、その音が妙に耳に残って、その静寂を突き破りそうだった。

ローダ達、三人は、その襲撃者と黙って対峙する。

相手の出方を探る睨み合いが続き、さらなる緊張の度合いがまして室内をただならぬ不穏な空気が支配していた。

しばらくすると、襲撃者たち六人が流れるように動いていた。

それは獲物をその眼前にとらえ、その標的に向かって忍び足する猛獣のように、じりじりとすり足でローダ達に近付いてくる。

ローダもそれに釣られるように、一歩前へその足を踏みだすと、警戒の色を強くして

堅く身をこわばらせるかの様に身構えていた。

「きえええええい！！」

その時、息急き切った気合いの掛け声とともに、襲撃者のうちの二人の男がその短刀を振りかざしながら、素早い動きでローダに対し斬り掛かってきていた。

シュッ！

その瞬間、ローダは横薙ぎの鋭い一閃で、その向かってきた相手に牽制の一撃を見舞う。

すると、その斬り掛かってきた二人の男は、動きを凍りつかせ、彫像のようにその身をこわばらせると固まってしまっていた。

斬り掛かってきたその二人が、たたらを踏んで後ずさる。

それだけローダの一閃が鋭かったせいだろう、牽制の一撃とはいえ、それに襲撃者は、多少、面食らったようにあとずさると、不用意に飛び込まないように十分な間合いを取って、再び対峙の姿勢を明らかにしていた。

二人の姉妹は、その光景を固唾を飲んで見守っていた。

襲撃者を目の前にして、その心境はほとんど恐怖が支配していたが、ローダのことが心配なのか、両手を胸の前で組むと神に祈りでも捧げるように目を閉じて、呪文のようなものを口ずさんでいた。その顔には陰りがあるが、まるで本物の女神が天上の至高神に助けを乞うているような、そんな光景が現出されつつあった。

その光景を知ってか知らずか、ローダは、この緊迫した状況のなか、まるで勝利を確信したかのように軽く薄笑いを浮かべていた。

それは、この緊迫する状況下で、恐怖に苛まれ気が触れたわけではない。

ただ相手の技量を、さっきの一瞬で、見極めてしまったが為に出た笑いだった。

『これならばやれる』ローダは、心の中でそう口ずさむと、その緊張を破って自分の方からその襲撃者に対して斬り掛かっていた。

「いええええい！！」

ローダの放った一撃が、襲撃者の一人を狙って振り下ろされる。

その直後、その男の肩口から腹筋にかけて、赤いまがまがしい一線が描かれる様に思えた。

しかしその襲撃者は、身を難なく翻しその一撃を避けていた。

ローダの放った斬撃が、空をきる。

ザシュ！

だが次の瞬間、どこから繰り出された剣戟かも判らぬまま、その男の胸部には真一文字に赤い裂傷が走っていた。それは目に見えぬ、何者かが為した、神業のように鮮やかな軌跡を残して一直線に横へと抜けて止まっていた。

それはローダから放たれた、斬撃だったのだ。

一度目の一振りは軽い牽制として斬り付け、二撃目の剣戟で相手の胸板に裂傷をあてる、二段構えの戦法であった。

それで相手の命を、絶命させるつもりは毛頭なかったが、動きを封じしばらく戦えなくするには十分なる一撃といえたのである。

それでその男は胸元を押さえ、仲間の戦線から離脱し、後方でうめきを洩らさずく

まっってしまった。

おそらく、その黒い覆面の下では、苦悶の表情が描かれているのであろう。それを証しだてるかのように、その男の息は荒く、慌ただしく胸元を上下させて息を吸い込もうとしている。

その光景を見た他の五人は、一瞬ひるんだように後ずさるが、再び短刀を握り直すと、また対峙の姿勢を明らかにし、先程よりも鋭い視線でローダを見つめ返してくるのだった。

「命が惜しかったら手を引くんだな・・・俺は手加減はしないぜ」

ローダも、鋭い目付きで相手を威嚇すると、そう言って警告を発していた。

だが相手は、その言葉を聞き入れた様子はなかった。

あくまで戦う気ようだ。男たちは、仲間内の中で、何やら目配せを交わし合うと、部屋いっぱいには散開してじりじりと詰め寄ってくる。

そして次には、五人の男たちの方から即座に動いていた。

三人はローダに、残りの二人はジルとセルシアにと、裂帛の気合いのこもった掛け声とともに躍り掛かると、烈火のごとき攻撃で短刀を振りかざし斬り掛かって来ていた。

それを見て三人は、それぞれの手持ちの剣でその攻撃を受けとめる。

ガシュ！

激しい火花を散らすほどに、両者の剣の勢いは感情のごとく激昂していた。

そこへ二撃目が、すかさず繰り出されてくる。

三人は、それも難なく打ち躲すと、相手から繰り出される剣戟を出来るだけ受け流しながら前へ進み出て、巧みにフェイントを織り交ぜて急所を狙い手持ちの剣をふるっていた。

だが、相手もなかなかの手練れだ、そう簡単には隙を見せることはない。

短刀を巧みに操り、独特の戦法で斬り掛かってくる。

ローダは三人の襲撃者と剣を交えながら、横目でジルとセルシアの戦いぶりを確認していた。

ジルとセルシアが窮地に陥ったら、すぐさま助けに入ろうと思ったからである。

しかしどうやら、大丈夫ようだ、二人は健闘している。

力は拮抗しているが、一人ずつの相手に引けはとっていない様だった。

ローダは安心して、目の前の三人の男たちに、意識を集中することにした。

三人の男たちは、今、じりじりと包囲網をちぢめ、ローダの隙をうかがっている。

そして三人のうちの二人の男が、意を決したように斬り掛かってくる。

その動きはほぼ同時だった。ローダは一方の剣戟を体をひねって巧みに躲すと、もう一方の男から繰り出された一撃は、手持ちの剣で受けとめ、前傾姿勢のまま態勢を整えていた。

そこへ三人目の男が、短刀を逆手に持ち、ローダの頭上からジャンプして躍り掛かってくる。

ローダは、それを見て、一瞬ためらったのち後方へ飛びのいていた。

さっきまでローダがいた場所に、短刀が空を斬る。

難なく躲したローダは、その勢いをかって前進すると、一番、手近にいた一人の男に

対して直ぐさま斬り掛かっていた。

グザッ！

肉を断ち切る鈍い音が、ローダの耳朶にうちつける。

それでその男の左腕は、ものの見事に切断されていた。

その男が、苦渋のうめきを洩らして、床に這いつくばる。

斬り捨てられた腕は、宙を舞ってその男の目の前に落ちてきていた。

両断された断面からは、血がとうとうと溢れだし、絨毯が敷かれたその部屋の床を生暖かい真紅の液体が流れ落ちていく。

ローダは、そのうずくまる男を一瞥する。

するとその男は、ローダを恨めしそうな目で睨み付けると、斬り落とされた腕を片手で押さえて、苦渋のうめきを洩らしているのだった。

残る二人の男が、その場に凍りつく。

「まだやるのか、これ以上やると命はないぞ・・・！」

ローダは、まだ余裕の表情で、対峙する残りの二人の男へ剣を突き付けていた。

二人の男たちが、一瞬たじろぐ。

だが、まだその男たちは、戦意を喪失してはいなかった。

さらに短刀をローダの前に突きだすと、口から意味不明なうなり声をしぼりだして、敵対心を顕わにしている。

ローダは、その声を無視し剣をおろすと、次のような言葉を発して相手を敵つい表情のまま見下していた。

「お前たち、一体、誰に頼まれてここへ来たんだ・・・答えろ・・・答えなければこの程度のことで済まないぞ！！」

男たちは、黙ってローダの言葉を聞いている。

だが、やはり押し黙ったまま、言葉を発しようとはしない。

不用意な発言で、自らの正体がばれるのを恐れての事だろう。

覆面の下の表情は、よく判らないが、やはり暗殺者らしくその口は堅い。

二人の男は、先程ローダによって胸を斬り付けられた男を抱き起こすと、またその三人でローダに対し、短刀を片手に身構えていた。

どうやら、退く気はないようだ。

ローダもそれを察したらしく、再び剣を構えると、中腰の姿勢のまま相手の出方を窺って慎重に間合いを計っていた。

三人の襲撃者が、一斉にローダに対し斬り掛かる。

ローダは、一歩、退くと、横薙ぎの一閃で牽制する。

しかし、それをかいくぐった二人の男たちが、ローダに対して肉薄し、その短刀を振り下ろしてきていた。

ローダは、その攻撃を体をひねって躲す。

そして難なくその二人の間を擦り抜けると、強力な回し蹴りで一人を横へ吹き飛ばし、もう一人の肩口を斬り付けて、その腕にかなりの深手を負わせていた。

しかし、それだけでは終わらない。

先程の牽制で出鼻をくじかれた男が、ローダの横合いから短刀を腰だめに構えて、そ

のまま突き込んで来ていたからだ。

ローダは、その捨て身の攻撃をぎりぎりのところで躲すと、剣の柄でその男の横っ面を殴打し、後方へと吹き飛ばしていた。

その男は、もんどりうって倒れこみ、口から血をしたたらせながらしばらく動かなくなる。

そして、痙攣をおこしたように、体をひくつかせて、その場で苦汁を嘗めていた。

これで合計、四人の男が、床に倒れたことになる。

だが戦いは、まだ決着はつかないでいる。

胸を斬り付けられた者、腕を切り落とされた者、また肩口を斬り付けられた者、剣の柄で横っ面を殴打された者達は、不死身の様にむくりと立ち上がると、荒い息のまま眼光を鋭くローダを見据えて、さらなる戦いに備えて身構えるのであった。

なかなかしぶとい奴らだ。

ローダは内心、舌をまき、四人の男たちを見据えて息を整えていた。

後の方では、ハンス一家と使用人が、固唾を飲んでその戦いを傍観している。

その戦いの行方が、どうなるか、細心の注意を払って注目している。

今はまだ、ローダ達の方が優勢だった。

殺気では及ばないが、ジルとセルシアも奮闘を見せている。

斬り掛かってくる男たちを、巧みな剣捌きで圧倒しているようだ。

相手は手練れの暗殺者であるが、剣技においては、ジルもセルシアも引けはとっていないようである。二人は、相手の隙をついて、何度も斬り付け受け流し、攻防を繰り返している。

そして、次第に相手を追い込むと、剣で相手の胸元を斬りつけながら、渾身の一撃を見舞っている。ローダのように、洗練された戦いはできないまでも、よく相手の行動を見切り激戦している様子だった。

そんな中、ローダと対峙する四人の男は、懐から何かぎりりと光るものを取り出すと、それを一斉にローダに対して投擲してきていた。

手投剣である。

シュッ！

空気を切り裂いて投擲されたその手投剣は、一直線に向かって、狙い違わずローダに迫ってくる。ローダは、それをはずかずに構えて、手持ちの剣でたたき落としていた。

ギン！

硬質な金属音をともなって、四本の手投剣が床の上に転がる。

その一瞬の隙をついて、四人の男たちが一斉にローダへ斬り掛かっていた。

今度の攻撃には、隙がない。

ローダは、その攻撃を避けきれないと判断すると、あえて特攻し活路を開くことにした。

斬り掛かってくる四人のうちの一人に、狙いを定めると、猛烈な勢いをもって剣をめったやたらに振り回しながら突き掛かっていく。

その意表をついたローダの挙動に、四人の男たちは思わぬ危険を察知し、一時、立ち止まりその動きを停滞させていた。

そこへ、すかさずローダの斬撃が飛んでくる。

素早い攻撃だった。

その攻撃を予測できなかった、四人のうちの二人が、背中と腕を斬り付けられて、苦悶の表情のまま、血をした垂らせて立ち尽くしていた。

ローダが、もう少し本気を出していれば、二人の首は宙を舞っていたことだろう。

あえてそうしなかったのは、この場を死体の山で埋め尽くしたくなかったからだ。

ローダは、この六人の襲撃者が、襲撃をあきらめて逃げ出してくれることを望んでいた。

エネアとミネアや、その弟のアルジャンたちに、死んでいく男たちの光景を見せたくなかったからだ。

彼女たちは、おそらくこのような惨劇の光景とは、無縁の世界で生きてきたことだろう。

ローダ達が、戦う姿を見る目は驚愕に値している。

その光景にしばし目をそむけながら、父親のハンスに抱きついておののいている様子だ。

だが、ローダは内心、癡癡した面持ちで男たちを見据えていた。

しかしこれ以上、立ち向かってくるようなら、その命を奪うことも辞さないと思っていた。

「もうやめろ、お前達に勝ち目はない。命を惜しんだ方がいいんじゃないのか!？」

ローダは、そう言って男たちに、手を引くよう語りかけていた。

当の男たちは、それでさすがにたじろいだのか、それ以後、斬り掛かってくる事はなかった。

すると横合いで、また苦鳴を洩らす声がする。

ローダが、声のする方へ振り向くと、今ジルが戦っていた相手を斬り付けて、手傷を負わせた様子だった。

それを見た黒装束の男たちは、さすがに怯んでいた。

こうも簡単に襲撃が阻止されるとは、思っていなかったらしく、唇を歪めて苦渋の色を表すと、一人の男が懐から黒い拳大の固まりを取り出して、それを床に叩きつけ、仲間男たちに大声をだして呼び掛けている。

「退却だ! …退けい…退くんだ!!」

床に叩きつけられた物体からは、小さな炸裂音が室内に響く。

するとその直後、その固まりからもうもうとした煙が立ち上り、ローダ達の視界をさえぎり始めていた。

「くそう…煙幕か!？」

ローダは、煙によってしみる目を、なんとかこじ開けながら、六人の男たちの動向をうかがっていた。

どうやら彼らは、襲撃をあきらめて、この大部屋から脱出を図っている様子だ。

大部屋の扉からや、廊下側の窓から、身を乗り出して逃げ出していく。

ローダはそれを見て、後を追う気にはなれなかった。

襲撃者達は撃退できた、それだけで二人の姉妹の命は、助かったからだ。

後を追って斬り倒しても、死体の山が築かれるだけだ。

これを機に、その後の襲撃をあきらめてくれればいいと、心で念じながら逃げていく男たちの後をただ見送っているだけだった。

ジルとセルシアも同感だったらしく、もはや手持ちの剣を鞘に収めると、ローダと同じように、その男たちの後を見送っている。

先程の戦いで、その息はあがっていたが、次第に呼吸も軽いものになり、やがては落ち着いたように平常時の息遣いを取り戻していた。

「ローダ、大丈夫か……!？」

そこへようやくラドカーブと、それに付き従うかのように、数人の傭兵達が大部屋の扉をくぐり抜け走りよって来ていた。

どうやら彼らも、襲撃者を撃退し、こちらに駆け付けてきた様子だった。

その息は荒く、呼吸を整えるまでに、多少、時間をくっている。

傭兵達が手にしているおもいおもいの剣には、血糊が付着していた。

おそらく彼らも、襲撃者を相手に奮戦していたようだった。

その顔には、疲労の色が浮かんでおり、いく分、血の気もひいているようにも思えた。

「どうやら、うまく撃退できたようだな……」

ラドカーブが、ローダを見据えてそう言葉をかけてきた。

「ああ、なんとか追い返したよ。で、そっちの方はどうだったんだい？」

ローダは、外の傭兵達の戦果を聞きたくて、ラドカーブにそう問い質していた。

「二三人、軽い怪我をした程度で済んだが、後の連中は大丈夫だ……」

ラドカーブは、そういうと抜き身だった大剣を鞘に収めていた。

拭き取ったのかその剣に、血糊は付着していない。

ラドカーブは、まったく疲労の色を見せていない様子だった。

彼がタフなのかどうかは判らないが、他の傭兵達と比べても、その肉体は強靭にできているのではないかと思われた。

ローダは、その様子を見て、心なしか安堵の色を浮かべていた。

ラドカーブ達は、上手く立ち回り、襲撃者達を撃退していたようだ。

ローダは、後を振り向き、ハンスたちの様子を覗いていた。

彼らは、襲撃者が去って本心から安堵しているようで、額の汗を拭いさると、その緊張を解きほぐし、その場にへたり込むように腰を落としていた。

これで初めての襲撃が、幕を閉じたのである。

この後、第二の襲撃があるかどうかは、まだこの時点ではわからないが、当初の不安は少なからず拭い去られたといっても過言ではなかった。一同は、次の襲撃が実現しないように心から神に祈りを捧げ、平和な日常が続くことをせつに願い、その時、深く深く頭を垂れる事しか今は他に何も出来なかったのであった……

第二節

襲撃のあった夕刻から一夜明けて、今は正午過ぎの昼下がりであった。

屋敷の警備は、昨日、襲撃があったばかりで、更に厳重な見回りが行われていた。

ローダは、ジルとセルシアを屋敷のなかに残し、屋敷の東側にある芝生の上で一人の少年と顔を突き合わせて対峙していた。

目の前にいる栗色の髪の少年は、アルジャンである。

彼は手に、短めの木刀を持ち、ローダに対して構えている。

ローダも、それよりも長い白木の木刀を手に、自然な態勢で立ち構えている。

「イヤァーッ……」

木刀を手にしたアルジャンは、気合いの掛け声とともにローダに対して斬り掛かっていた。

ローダは、それを軽く受け流すと、余裕の表情で押し返しアルジャンを逆へと後退させていた。

「たぁぁー！」

アルジャンから繰り出される二度目の攻撃も、難なく躲し、ローダの横を勢い余って通り過ぎていくその彼の頭を小突いて、からかうように舌を出しておどけてみせる。

「ちきしょう……」

アルジャンは、それに対して頭にきたのか、何度もローダに木刀で斬り掛かって一撃を見舞おうと躍起になっていた。

暗殺者による襲撃があった後から、アルジャンのローダを見る態度が極端に変わっていた。

最初はローダを、二人の姉をたぶらかす気に食わない奴としてしか見ていなかったアルジャンであったが、昨日の襲撃、以来その見方を百八十度、転回させて、今は尊敬の眼差しでみているようであった。

昨日のローダの戦いぶりを見て、アルジャンはあるものを感じ取ったのか、今日になって剣術の稽古をして欲しいとローダに申し出てきていたのだ。

そして今ローダは、アルジャンに剣術の何たるかを教えているところだった。

「踏み込みが甘いぞアルジャン、そんなんじゃ相手を倒すことはできないぞ……」

ローダが、アルジャンに対して、先生のように教えるを論している。

それに対してアルジャンは、指摘された言葉をふまえながら、次の攻撃をローダに見舞って斬り付けていた。

だが、それも難なく躲されてたたらを踏む。

少年の身では、それで精一杯であるのだろう。

ローダに軽々と躲かれていても諦めることはなく、何度でも立ち向かって来るその姿は、自分の幼少の頃と似ていてとても懐かしい光景のように思っていた。

ローダは、口元をほころばせ、軽い笑みをつくる。

アルジャンのその顔は真剣そのもので、いっちょまえに、気合いの掛け声までもかけて斬り掛かってくる。

ローダは、そんなアルジャンに対して、根気強く何度も稽古的になってあげていた。

ローダがアルジャンに剣術の稽古を申し出られた時、なんで剣術の稽古をしてもらいたいんだと問いただして見て得られた答えは、『俺も強くなって、姉ちゃん達やマリーネ母ちゃんを守ってやりたいんだ』と言うことだった。

その言葉を聞いてローダは、『お前はこの家の跡を継いで、商人になるんじゃないのか？』と問い質すと、アルジャンは『俺は商人なんかにはならない。傭兵になって世界一の剣士をめざすんだ』といて、息巻いていたのであった。

だからローダは、その少年の言葉に共感を覚えたのか、剣の稽古を付けてやることを承諾したのであった。

アルジャンは、幼いながらもなかなか筋があるようだ。

ローダは内心、感心しながらも、剣の手を緩めず手厳しく剣の心得を諭し、打ちかかって来るアルジャンを軽く返り討ちにするのであった。

「どうだアルジャン、剣の道は厳しいんだぞ。そんな事じゃ、世界一の剣士にはなれはしないな・・・」

「そんなの分かってらい、絶対、上手くなってみせるからな！」

口は悪いが、男としての心意気を感じ取ったローダは、今度は敵に対峙する時の間合いのとり方を、教えてやることにしていた。

「いいかアルジャン、剣を構えるときの基本は力みすぎず、また緊張はせずに、体をリラックスして余計な力が入らないようにして構えるんだ。そして相手が動いたら間合いをとって、その隙を見極める。その時、相手に決して自分の弱みを見せては駄目だぞ。でないとその隙に付け込まれて、相手を有利な立場に立たせてしまう事になるからな・・・」

アルジャンは、ローダから講釈を受けると、さっそくそれを実戦で試したくなっている様子だった。

ローダを敵に見立てて向き合うと、言われたとおり体の力を、極力、抜く、そしていつでも斬りだせる態勢を整えていた。

その目付きは、真剣そのものだ。十歳にも満たないにわか剣士は、ローダに言われたことを忠実に守り、そこに再現しようと努力している。

「なかなかいいぞアルジャン、それなら敵もびびって逃げだすかも知れないぞ・・・」

ローダに誉められて、アルジャンは少々ご満悦のようだった。

その笑う笑顔は、やはり少年のそれのようだ。

普段は大人ぶって虚勢を張っているように見えるが、やはり子供の域を脱してはいない。

父親のハンスは、この子をあまり可愛がっていないという話だが、一体どういうつもりなのだろうと思う？

少しませているが、姉と母親、思いの、いい子じゃないかとローダは思うのである。

だがローダは、そんな思いに一人うつつをぬかしていると、気付かないうちにアルジャンがローダの近くへよって来て、服の袖をひっぱっている。

「なあ、どうしたんだよ、剣の稽古をつけてくれよ……」

ローダは、それで我に返り、アルジャンに対して「すまん、すまん」と謝っていた。「ずいぶんご熱心なのねアルジャン、剣の稽古ははかどっているのかしら？ ローダ様に教えてもらっていいわね……ちゃんとお礼をいいなさいよ、失礼のないようにね……」

だが、そこへ唐突にあらわれたのは、マリーネ夫人だった。

彼女は、清楚な白い服を着込み、ローダとアルジャンを対照的に見やると、ほほえましい笑顔で二人を見つめ返してくるのだった。

その後ろには、ジルとセルシア、エネアとミネアの両姉妹もいる。

母親のマリーネの散歩がてらに、少し外へ出て来ていたのだろう。

二人の姉妹は、外に出られたことが嬉しいのか、息をいっぱい吸い込み大きな深呼吸をしている。昨日から、ハンスによって、屋敷の外への外出を禁じられていた二人の姉妹であるが、まだ昼間であり、外の警備も厳重にしているということで、ちょっとした息抜きもかねて少しの間、母のマリーネの後についてきた様子だった。

一度目の襲撃も、ローダ達、傭兵によって見事に撃退されていたので、当初の不安は拭いさられ、いくぶん解放的な気分が芽生えたのであろう。

昨日のおびえた二人の姉妹の表情とは違って、今は水をえた魚のように、嬉々とした表情で、外の解放感を満喫している。

二人の姉妹は、感情の起伏が激しいようだが、それがまた彼女たちの魅力であるのだろうと、ローダはそう思っていた。

一同は、ローダとアルジャンのところまで来ると、足を止めて、二人の様子をしげしげと見つめている様子だった。

「よかったわねローダ、可愛らしい弟子が一人できて……」

セルシアが、意味深な目付きで話し掛けてくる。

「ああ、なかなかのもんだぜ。きっとアルジャンには、剣術の才能があるんだよ。飲み込みが早いからな」

そう言うとローダは、アルジャンの頭をかきむしって、その栗色の頭髪をくしゃくしゃにしていた。

当のアルジャンは、誇らしげな顔をして胸を張っている。

上手くて当然だといったげに、精一杯の虚勢を張って、二人の姉と母親のマリーネに見せ付けようとしていた。

「駄目よアルジャン、そんな威勢を張っても。ローダ様の教え方がいいのでしょ……まだ子供なのだから、謙虚な姿勢で教えてもらいなさい。わかった？」

だが、姉のエネアが、その弟をたしなめるように言う。

「わかっているよ姉ちゃん……どうせ俺は子供さ、でも俺だって男なんだ絶対、強くなってみせるからね……」

どうやらアルジャンは、姉に対して頭が上がらないようだった。

そう言うとアルジャンは、少々、膨れっ面をして、頭の後ろに手を当てると、つまらなそうにその場を行ったり来たりし始めるのであった。

「あ、そうそう、ローダ様。あなたにお客さまのようですよ。先ほど主人があなたを呼んで来るようにと申ししておりましたから、客間に行ってみて下さいな」

マリーネ夫人は、思い出したようにそう言うと、ローダに促すようにその言葉を紡いで来るのだった。

「俺に客だって？ 一体、誰だろう……」

ローダは、怪訝な表情をして首をかしげていた。

このエルドバの街で、知り合いなど、思いつかなかったせいでもある。

ローダが三度、応接室に入ると、黒いスーツを着込んだ三十代ぐらいの男が一人、皮張りのソファへ腰を下ろしている姿が目に入った。

ローダは、何も言葉を発せず、軽く会釈をしてその男と同じように向かい側のソファに腰を下ろす。

『この人は、どこかの遊び人なのか？』

その男の身なりを見たときに感じた、第一印象はそうだった。

金の腕時計にネックレス、着くずした赤いカラーのシャツに上下、同じ黒の高そうなスーツを着込んでいる。

その甘いマスクからは、笑みをこぼし、頭髪は茶髪に染めているのだろう、微かにウエーブしたその髪は、男であるのに肩の位置まで伸ばされていて、うざったい様に耳元を隠している。

そんな男が、俺にいったい何の用なのだろう？

見知らぬ風体の男を前に、多少、緊張した面持ちでローダは怪訝な表情を浮かべていた。

「あんた一体、俺に何の用なんだ……」

ローダは、意を決するように口を開くと、その男に言葉を発し問いかけていた。

「まず自己紹介しなくちゃならないね……俺は、カイル……カイル・ルヴェッツァーニて言うんだ。君はローダ・ブレインだろ？ 噂はかねがね聞いているよ。《鋼鉄の角》の傭兵ギルドに所属しているようだけど……親父さんのアルスレイドは、もう見つかったのかい？」

カイル・ルヴェッツァーニと名乗った男は、飄々とした態度で自己紹介をすると、ローダの父アルスレイドに関する話題を口ずさんでいた。

「初対面なのに、あんたはなぜ俺の親父のこと知っているんだ。どこの誰だか知らないけど、何か胡散臭いな。もしかして何かのスパイなのか……？」

ローダは、多少、不機嫌に、語気を強めてそう問い質していた。

この男の軽薄そうな態度も気に食わないが、初対面であるのに父であるアルスレイドを自分が捜しているといった事を何故だか知っている。

それがローダにとって、何よりもこの男に対する警戒心をかきたたせることに繋がっていた。

一体こいつは何者なのだろうと、心の中で自問自答してみると、ローダは疑いの眼差しでルヴェッツァーニの顔を睨み付けていた。

「おいおい、そんな恐い顔をしなくてもいいだろ。俺は怪しい者じゃない。強いていえば

君の味方かな・・・この前、君に忠告しといてやったろ護身用の武器と一緒にね・・・」
「ちゅうこく・・・？」

ローダは、そう言われて何の事かさっぱり判らず、多少、不恰好な顔をして、怪訝な表情を浮かべていた。

「そうさ、手紙、読んでくれたんだろ。君たちが狙われてるって書いておいたじゃないか。忘れたわけじゃないだろ。ゴルト・ダイス社製の拳銃もつけて贈ったはずさ」

「拳銃？　じゃああの拳銃と手紙は、あんたが送りつけた物なのか？」

ローダは、あることを思い出していた。ハンス・アグデプトの屋敷に初めて来る前の日、ローダとジル、セルシアの三人は、アンボリュューヌという名の安ホテルに宿泊していた。

その時のその夜、ホテルの客室係が届けにきた小包の中に、一挺の拳銃と手紙が添えられて取められていたのだ。

客室係が言うには、その小包の贈り主は、三十代くらいの男の人だと言っていた覚えがある。

その拳銃の贈り主の名前は、その時は判らずじまいであったが、今このカイル・ルヴェッツァーニの言葉を聞くと、どうやらその贈り主は彼らしい。

ローダは謎が解けて安心する反面、このルヴェッツァーニなる人物に、相当の警戒心を抱いていた。一体なんの為に、あの物騒な代物を送ってきたのであろうか？　それにこの男の先程からの言動、怪しい点がいくつもある以上、この男をローダが警戒するのは当然の事といえたのである。

「一体なんの心算なんだあんたは・・・あんな物騒なものを送り付けてきて・・・俺達の内情をよく知っているようだけど、どういう事なんだ！？」

ローダは、ルヴェッツァーニに対して食って掛からんばかりの勢いで、その言葉をまくしたてていた。

「何度も言うけど、俺は怪しい者じゃない。今日ここに伺ったのは、ローダ・ブレイン、君に忠告をしようと思って来たんだ・・・今、依頼されている仕事をやめて、すぐにこの街を出た方がいい・・・でないと、とんでもない事になるぞ・・・」

ルヴェッツァーニは、言葉を選びながら慎重にローダを説得するように言葉を紡いでいた。

その顔は、軽薄そうなわりには真剣な眼差しで、その言葉を語りローダの信頼を得ようと努力でもしているようにも覗えた。

「何、言っているんだあんた、俺をからかっているのか？　初対面だからって、俺を馬鹿にするとただじゃおかないぜ・・・」

しかしローダは、その男をまったく信用していない様子だった。

この手の遊び人風情の男は、ローダがもっとも嫌う人種の中の一人だ。

軽薄で自意識過剰、女を見るとすぐにでも手を出してまた飽きれば次の女に乗り換える。

そう疑われてもおかしくない程、この男の雰囲気はそれにぴったり合っている。

人のライフスタイルに、文句を付けるつもりはないが、どうしても好きになれそうにはない。

まったく場違いな場所に出てきて、ごたくを並べているとしかロードには見えなかった。

「どうやら俺は、君に信頼されていない様だね……？」

カイル・ルヴェッツァーニは、それを察したのか、少々、癖癖した様子で戯けてみせていた。

ロードに、鋭い目付きで睨まれながらも、堪えているその姿はなかなかのものだ。

彼には、少し何やら思うところがあるようで、軽く頬杖を付きながら俯くと頻りに瞬きをしながら考えに没頭してしまっている様子だった。

「当たり前だろ、どこの誰とも判らない奴にいきなり仕事から手を引けなんて言われても、誰が信じるか……信頼を得たいんだったら、まずあんたの素性を語るんだな……」

ロードは、そんな男に強い態度で、ぴしゃりとそう言ってやっていた。

このままのりくらしと訳の判らない話をされるのは、真っ平、御免だともいいたげに、語調を強めると、そのルヴェッツァーニに正体を明かすよう語りかけていた。

「参ったね君には、それじゃ少しだけ明かすけど、聞いてもらえるかな俺の話を……？」

「ああいいさ、話すんだったらさっさとしてくれ。俺はあんたほど暇じゃないんだ、でないと俺はこの部屋を出ていくぜ……！」

「分かったよ、実をいうと俺は、ある組織の内情を探っている者なんだ」

「ある組織の内情？」

「ああ、東の大陸ではあまり知られていないが、西の世界では影の結社として有名な組織さ……その組織の名は【イル・アデフ】、別名`黄金の蛇、とも呼ばれている。イルアデフは西の裏社会を牛耳っているともいわれ、数多くのエージェントを抱えそれらの人員を大陸中に派遣して、裏工作を行っているといわれている。彼らの活動の目的は、俺も少ししかよく知らないんだが、今回きみが仕事の依頼を受けた、エネア、ミネアの襲撃事件は、その組織による仕組まれた茶番劇だと思われる。ロード、君はその組織に狙われているんだ。狙われている理由については、君の父アルスレイドが深くかかわっていることは確かだ。だから今すぐ仕事の依頼を破棄して、この街を出た方がいい。それは君の身の為でもあるんだぞ……」

ルヴェッツァーニは、自分の台詞を喋ると、そこで一息ついたようにテーブルに置かれていた使用人が置いていった冷めた紅茶を、一口、啜り飲んでいる様だった。

ロードを見据えるその眼差しは、真剣味をおび、琥珀色の瞳が強く輝いている。

自分は冗談など言っているつもりはないんだ、とでもいいたげに顔を引き締めると、ロードの表情を覗うように、その軽薄そうな視線を軽く投げ掛けてきていた。

「イルアデフだって？ 確かこの屋敷に娘の命を狙うという予告状が届いた時、その予告状の差出人の名義が、そんなような組織風の名前が記されていたっては聞いたけどな……」

ロードは、三日前にセルシアに聞いた、ハンスの話思い出していた。

その組織の名前について、確かに聞き覚えがある。

でも、そいつらが命を狙っているのは、エネア、ミネアの両姉妹じゃなかったのか？

しかし目の前のルヴェッツァーニが言うには、その組織が狙っているのはロードだという。

しかも、それに行方不明のアルスレイドが、深く関わっているらしい。

ローダは最初、ルヴェッツァーニが何を語っているのかが解らなかった。

イルアデフという組織に狙われているといっても、何ら自分には身に覚えがなかったからである。

一体この男は、何が言いたいのだろうと、なかば半信半疑でその話を聞いていた。

彼の語る言葉に、少しでも嘘があれば、必ず見抜いてやるという気構えでルヴェッツァーニを睨み付けていたが、当の本人はしれっとした態度でその視線を躲すと、また次のような言葉をおもむろに語りだすのであった。

「イルアデフ、つまり『黄金の蛇』という組織は、目的の為なら手段を選ばないそんな組織だ。君は、俺の言葉に疑いを持つのは当然のことだろう。俺もいきなりある組織から狙われているなんて言われても、信じないかもしれない。でもこれは本当のことなんだ。組織は、ハンス一家を利用して、君をおびきだし、用意周到な罠をしかけて手ぐすねを引いているのさ。

だから悪いことは言わない、この件から手を引け。そうでないと、君の身の安全の保障はないぞ……」

ルヴェッツァーニは、再三にわたり今度の仕事の依頼から手を引くようにと、そう訴えかけて来ていた。

「話は判った。俺はその『黄金の蛇』とか言う組織に狙われているんだな……でもあんたは何なんだ。俺達の内情を詳しく知っているようだけど、初対面の相手に、あれこれと助言してくれるのは一体どういう目的があるんだ。そのことを聞かないうちは、納得できないね……」

ローダは、そう言うと、無言の圧力をルヴェッツァーニにかけていた。

相手の心臓を射抜くほどの眼差しは、ローダの今の心境を如実に表している。

ローダは、ルヴェッツァーニの双眸を捉えると、そこから目を離さず一点を見つめ返していた。少しでもうろたえた表情を見せれば、この話は全て無かったことにしようと思っていたからだ。

「君は相当、疑り深いんだね……実を言うとこれは秘密なんだけど、俺はそのイルアデフという組織と敵対関係にある組織の一員でね。一年前から君の父アルスレイドとイルアデフの相関関係を調べていて、ある時うわさを聞いたのさ。アルスレイドの息子が、その父を捜して傭兵稼業を続けているって……それで更に調べていくうちに、君の存在を知ったんだ。どうやらイルアデフの奴らも、君の存在を嗅ぎ付けて行動に移したようだよ……俺としては、君を救いたいんだ。君の仲間のジルとセルシアも含めてね……」

「へええ、そうかい、それじゃあんたは、俺達の救世主てところなのか……？」

ローダは、皮肉も含めて、ルヴェッツァーニにそう言っていた。

警戒心は、まだ解いてはいない。

この男に、心を許してはいけないという、自分の勘がそう訴えかけているようで、ローダはその自分の勘を信じようとしていた。

「そんな大げさなものじゃないさ……そうっつけどんな態度をするなよ……俺としては、君たちの身の安全を図りたいだけなんだ……」

そんなローダの気持ちを知ってか知らずか、ルヴェッツァーニは相変わらず飄々とした態度で、言葉を紡いでくる。

ローダとしては、多少、耳を傾けようという気もなくはない。だが、このルヴェッツァーニの人間性が、妙に引っ掛かって、どうしてもそこまでいかない様子だった。

「あんたの言っていることは、いまいち納得できないんだよ。まだ全てを語っていないそんな気がするぜ……俺達を救おうとする理由がよく判らないし、隠し事するくらいなら最初から俺達に接触しない方がいいんじゃないのか？」

「もっともな話だ。君の言うとおり、俺はまだ全てを明かしてはいない。でも今の君には、明かせない事情があるんだ。それを察して、俺の言ったことを受け入れてくれると有り難いんだが……？」

「やだね、俺はあんたみたいな軽薄な奴の言うことなんか、聞きたくないね！」

そう言うとローダは、ソファを蹴って席を立ちだしていた。

もうこの話は、聞きたくなかったからだ。

ルヴェッツァーニの話が、真実かどうかは別として、彼は、ローダの理性にどうしてもそぐわない人種に思えてならなかった。

それに、先程から聞いていると、話の核心についての部分は巧みにぼかされているという気がする。そうである以上、このまま話を続けても鰻掴みになりかねないと思っていた。

ローダは、踵を返すと、応接室の扉へと向かって歩きだしていた。

そこへ、ルヴェッツァーニから声がかかる。

「まってくれ、最後に一つだけ忠告させてくれ。ラドカーブ……ギュセル・ラドカーブには気を付けろよ。彼は必ず君を裏切る。そうなる前に気付いてくれ、手遅れにならないようにね……」

第三節

少し風が出てきていた。

木々の合間を縫って吹き抜けるその風は、梢をゆらし葉音を響かせる。

秋の初旬、この時節になると、エルドバの街では天候の影響でこのような風が吹く場合がある。それは心地よい乾いた風で、時より吹き付けては新鮮なすがすがしい空気を運んでくる。

屋敷の二階ミネアの部屋では、二人の姉妹が、いま一人の指導教師を前に顔をこわばらせ緊張した面持ちを呈していた。

風が北側の窓を抜けて室内に入り込んでくるが、その風も、今の二人の姉妹にとっては心地よいとは感じられないそんな状況にある。

指導教師、つまり二人の姉妹の礼儀作法を教える先生が、エネア、ミネアの二人を睨んで極端に渋い顔をしていたからだ。

その指導教師は女性であり、まだ歳の頃は四十前にさしかかったばかりの顔のきつい女だった。彼女は、眼鏡をかけ少し顎の尖った顔を二人の姉妹に突き付けながら、呆れ返った表情をして深い溜め息を漏らしていた。

「何度、言ったら分かるのです。あいさつをする場合は軽く膝を曲げ、ドレスの裾を引いて腰を少し落とすのです。さあやってみなさい」

その女は、飲み込みの悪い二人の姉妹を叱責すると、一連の所作を促し再度、試みるように言い付ける。

すると、二人の姉妹は、言われた通りドレスの裾を軽く引き上げると、何度も教えられたその所作を演じてみせる。しかし、その動作は硬くどこかぎこちない。

まるで彫像がダンスを踊っているような、そんな立ち振る舞いだ。

それを見た指導教師は、更にその表情を険しくして、二人の姉妹をねめつける。

「どうしてこんな簡単な事ができないのですか？　これは、日頃の鍛練がなっていない証拠です。先週わたしが言い置いていた、所作の練習を怠っていたからでしょう。まったくしょうがありませんね。こんなこと、子供だってできますよ……」

女指導教師は、二人の姉妹に厳しい口調で言葉を紡ぐと、右手の指揮棒で左の掌をペンペンとたたいて、また叱責を繰り返していた。

今、二人の姉妹が、必死になって御苦労しているのは、毎週、月曜日の午後になって行われている、礼儀作法を習うために割り振られた時間帯であったからだ。

エネアとミネアの二人は、この時間、街に在住する高名な先生をおよびして、礼儀作法を定期的に習っているのだ。

商家の娘であっても、どこへ出しても恥ずかしくの無いよう、宮廷夫人、並の礼節を身につけさせようと、ハンスの方針で学ばせているのだ。

だが、二人の娘にとって、それは迷惑な話であった。自由奔放な性格の両姉妹にとっては、型にはめられた礼儀作法は、極端に苦手な分野の一つになっていた。だからこの時間が、彼女たちにとって、一番、嫌いな時間帯だったのだ。教えにくる先生も厳しく容赦がない。親身になって教えようとしている様でもあるのだが、二人の姉妹がそれについて来れないと、先程のように苦い顔をして怒るのである。それが何よりも恐ろしくて、エネアとミネアは渋面をつくって、困惑するしかなかったのである。

そのような光景を横目で見ながら、ローダは、部屋の片隅の壁にもたれて、一人、考えに思いをめぐらしている様子だった。

今は、ジルとセルシアも、その隣で同じように、退屈そうにし壁に背を向けて控えている。

エネアとミネアの不器用な仕草に、多少、苦笑してその光景をちらちらと眺めているローダであったが、その心はここにあらずといった表情で、先程から頻りに腕組みをしてそれを何度も組み直している様子だった。

ローダは、昨日のカイル・ルヴェッツァーニの言葉が気になってしょうがなかった。

彼の目の前では、終始、強気で通していたローダであったが、本当のところは疑問と懐疑でいっぱいなのだ。ルヴェッツァーニの話した内容が、全て本当であるのなら、この先どうなるか分かったものではない。この話は、既に隣にいるジルとセルシアには話してある。

それは、昨日の夜の事だ。

やはりハンス一家が、いつもの大部屋で夜のディナーを満喫している時間帯に、その部屋の廊下側の窓際の位置で、ローダはそれとなくジルとセルシアにその時の話の様子を切り出して意見を求めたのであった。

……………

『なあ、そのカイル・ルヴェッツァーニの話なんだけど、どう思う？』

ローダは、その日、セルシアに対し、困った表情で問い掛けると少し苦笑いを洩らしていた。

『そうね、話自体はよく出来ていて「黄金の蛇、だなんて如何にも裏組織を思わせる組織の名前なんか出てくるけど、それほど気にする事はないんじゃない。ねえジルそうでしょ？』

そう言うとセルシアは、やはり昨日ジルにそれとなく話題をふった。

『そうですな、でも、もしそのルヴェッツァーニという男が本当のことを言っていた場合、少々、困った事になるような気もするのですが……？』

ジルはいたって冷静に、その話を分析していた。

まず最初に、そのイルアデフという組織が狙っているという対象のことだ。

このハンスの屋敷に、送り付けられた予告状には、エネアとミネアの両姉妹の命を狙うという意味合いの言葉が書かれていたそうであるが、その狙いの対象が二人の姉妹ではなく、本当のところはローダとジル、セルシアの三人が標的であるということ。

次にその組織の狙いが、ローダの父アルスレイドの動向と深くかかわっているという点。

それに、そのイルアデフという組織と対抗する、ある組織があって、その組織に組しているルヴェッツァーニという男は、ローダ達、三人を救おうとしているという事だった。

しかし、いざ分析してみても、いぜん腑に落ちない点が、その三つの事柄に対して共通するように存在している。

それは『一体、どんな目的があって、そうなるのか？』という事だ。

組織が、ローダ達を狙っている点にしても、アルスレイドがそれに深くかかわっているという事にしても、そしてルヴェッツァーニがローダ達を救おうとしているという事にしても、どうしてもそれをそうさせる為の、目的というものが欠如しているようで納得のいかない事のように思えて仕方がなかった。

もし、ルヴェッツァーニの言う話が本当なら、イルアデフ「黄金の蛇、という組織が、ローダ達、三人を狙うわけ、アルスレイドが組織にどう関わっているのか、ルヴェッツァーニがなぜローダ達に肩入れをしようとするのかという事を、詳しく知りたいと思っても、当のルヴェッツァーニは昨日ローダが怒ってその席を立ちだし、そのまま話を打ち切ってしまった事により、すぐに帰ってしまっていた為、もう確認するすべは残されていなかった。

ローダが、もう少し我慢強く彼から話を聞きだし、事のしだいを確かめてさえいれば、こんなことに悩む必要は無かった気もするのであるが、今となってはどうしようもない。

ジルとセルシアにとっては、そのルヴェッツァーニなる男がどのような人間性の男なのかという事を、直接会ったわけではないので知るよしもなかったが、ローダの観察眼のみでそれを判断しなければならない為、少々その実像に幕がかかった状態になるのも致し方なかった。

それにローダは、最後にルヴェッツァーニが言った言葉を、ジルとセルシアには何も言わず隠していた。それは、ラドカープがローダ達を裏切るといった、にわか信じがたい事に関する言葉であった。

ローダは、それを聞いた時、そんな事は絶対にあるはずがないと、あからさまに不快な態度を示して、ルヴェッツァーニの言葉を自分の心の内の中で否定していた。

ラドカープは、出会ったときから信頼にたる人物であり、その傭兵としての技量とともに、人間性もよくできた尊敬に値する男として見込んでいたからだ。

しかし、それを否定されるような言葉を聞いて、ローダは、ルヴェッツァーニに対して深い疑問を感じるとともに、強い嫌悪感を抱いてしまったことは確かだ。

それだけでローダは、カイル・ルヴェッツァーニの人間性に見切りを付けて、まるで信憑性のないほらを吹く、いけ好かない奴だとジルとセルシアにわめき散らしていた様だった。

ジルとセルシアにしてみれば、その日ローダのもとを訪れたそのカイル・ルヴェッツァーニなる男が、嘘をわざわざ言うために足を運んで来たとはとても思えなかった。

しかも、護身用の武器として拳銃までも贈り付けてきているのだから、まず間違いなくなんらかの目的があって来たのだらうと思えてならない。

しかしその目的が一体、何なのかがどうしても分からない。

ローダとジル、セルシアの許に、ルヴェッツァーニがいかなる本心の目的で接触してきたのかを示す判断材料が無いために、いくら頭を悩ませても、心当たりになることは思い浮かぶことは無かったのである。

.....

その為、ローダが今、エネア、ミネアの両姉妹の不恰好な立ち振る舞いを見ながら、頭を悩ませているのも、それがどうしても頭のなかに引っ掛かって離れないためであったからに他ならなかった。

「ローダどうしたの？ また昨日の話のことを考えているんじゃないでしょうね？」

すると、セルシアは、そんなローダの悩ましげな態度を見て取ったのか、今、怪訝な表情のまま彼にそう問い質していた。

「ああ、ちょっとね。どうしても気になることがあって・・・」

ローダは、それに対し、覇気のない言葉で答える。

「よしなさいよ、いくら悩んでも答えなんて出ないわよ・・・昨日、決めたように、その話はこれからの様子を見てからって事にしたじゃない・・・」

セルシアは、ローダに対し小声で話し掛けていた。

エネア、ミネアや、ハンス一家には、この件に関する事は内緒だった。

この話は、何の信憑性もないし、これが法螺だったら馬鹿を見るのはこっちだからだ。

「そんなに悩まなくても、いずれ答えが自然と判ってくるでしょう。もし私たちが狙われているのであれば、相手もなんらかの行動を見せてくる筈です。それまで待つ方がいいのではないですか？」

ジルもセルシアと同意見らしく、同じような言葉を投げ掛けてくる。

しかしローダは、それでも釈然としないのか、腕組みを崩さぬまま沈痛な面持ちで再び考えに没頭してしまうのであった。

そうこうしている内に、ようやくエネア、ミネアの礼節指導の時間も終わり、指導教師の女先生は、身仕度を調べ帰りの支度に専念している様子だった。

「それでは、エネア、ミネアお嬢様、私はこれでおいとま致しますが、今日、教えたことはまた次回ここへ伺ったときにテスト致しますので、それまで自主的によく鍛練なされてしっかりとした礼節を身につけていて下さいませ。今日のような拙い作法では、お恥ずかしいかぎりですから、その事をよく踏まえることをお願いしておきますよ」

そう言い残すと指導教師は、踵を返して部屋から出ていくのであった。

後に残されたエネアとミネアの両姉妹は、お互い顔を見合わせて吹き出すようにぶつと笑うと、緊張を解き、またいつもの自由奔放な二人に戻っていた。

仕付けに対しては鬼のような指導教師がいなくなって、心から清々しているようだ。

ローダとジル、セルシアも、見ていて退屈極まりないその礼節の指導を終えてほっと一息つくと、グーンと背をのばして身体をほぐしていた。

「ねえローダ様、恐い先生も帰られたことだし、これから屋敷の三階にいきません？」

そこからは、綺麗な湖が一望できるのですよ」

二人の姉妹が、無邪気に話し掛けて誘いを入れてくる。

「ああ分かった、それじゃ行ってみよう。たまには息抜きも必要だからね」

ローダは、それに意外とあっさり応じ、ジルとセルシアと共に二人の姉妹に連れられて部屋を出、三階への階段を一つずつあがって行くのであった。

三階の一つの部屋に入ると、そこは共用のフロアとして使われている広い部屋であった。

数日前、ラドカーブに案内されて、一度この部屋の間取りを見ている三人であったが、今あらためて見てみると、やはり北側の窓は大きく、そこから景色を一望するには最適な造りになっていた。

五人は、その北側の窓にはべると、目を凝らして遠くを見つめる。

すると見えるのは、高級住宅街の豪華な街並みと二人の姉妹が言うように、遠くに湖が一望できた。その湖面は、西から照りつける日の日差しによってきらきらと瞬き、宝石のような輝きを見せている。

その為ローダは、「なるほど綺麗だね」と一言いって、二人の姉妹に笑いかけるが、それはどことなく白けている感じがして、その場の空気がシーンと静まり返ってしまっていた。

どうもローダは、まだ昨日の話を考えあぐねている様子で、セルシアとジルには呆れられたように見られて、少々、ばつが悪いように頭を搔くのである。

「どうなさったのローダ様？ 先程から元気が無いような気がします、何かお悩みでもあるのですか？」

二人の姉妹は、ローダを心配そうな顔で覗き込むと、その潤った紫紺色の目をキョトンとさせて見つめ返してくる。

「いや、なんでもない。少し気になる事があったけどもういいんだ・・・」

だからローダはそう言うと、その場の空気をとりなすように一頻り笑ってみせていた。

「ローダ様、唐突なのですけど、一つ聞いてもいいかしら？」

そこへ姉のエネアが、話題を変えて話し掛けてくる。

「ああ、なんだい？ 話なら聞くよ・・・」

「その右手の掌にある不思議な紋様なのですけど、それって刺青ですよ？」

エネアは、ローダの右の手元を見つめると、珍しそうにしげしげとそれを見つめてきた。

「これの事かい？」

そう言うとローダは、あらためて右の掌を二人の姉妹の前に、かざしてみせた。

そこには、丸い外円の中にまた少し小さな円があり、その円周に沿って複雑な文字と思われる紋様がぎっしりといっぱいに刻まれている。

そして中央には《109》という番号らしき文字が大きく印され、二人の姉妹の目を自ずとそこへ引き付けていた。

「これって、一体、何の意味があるのですか？」

今度は、妹のミネアが尋ねる。

「実は、俺にも解らないんだ。まだ俺が小さい頃からこの右の掌に彫られていたらしいんだけど、いつ何の為に彫られたかは判っていないんだ・・・」

ローダは、自分でも不思議に思いながら、その右の掌を見つめる。

「そうなのですか、私たちはまたあなたが囚人だったのではないかと感じてしまいましたわ。よく肩のところに番号が刻印されるでしょ・・・」

「そうだね、でも俺は囚人になった経験は一度もないよ・・・」

ローダは、二人の姉妹に囚人と思われたのは心外であったが、彼は怒るふうでもなく淡々としてそこで説明をして見せていたのであった。

「そうだ、ローダ様って、子供の頃はどんなお子さんだったの？」

すると、エネアとミネアはそれとはまた話題を変えて、今度もまた興味、深げにそれをそれとなく聞き出して来ていた。

「子供の頃？」

「ええ、可愛い子だったのでしょうか？」

二人の姉妹は、にこりと笑う。

「そうだな、可愛いかどうかは分からないけど、よく女の子に意地悪をして泣かせていた記憶があるなあ・・・」

「女の子を泣かせていたのですか？」

「ああ、子供の頃のことだからバカで、そんな悪意は無かったんだろうけど、その女の子の鏡台の中の物に小便をかけて全部、水浸しにしたり。蝙蝠を数十匹、捕まえてきて部屋の中をその蝙蝠の糞だらけにしたり。ムジナの剥製のめん玉をくりぬいて、その女の

子に投げつけて酷く怖がらせたりと色んな事をしたさ・・・」

ローダは、悪怯れた様子もなく、当時の深い思い出を苦笑いを交えながら、つと語っていた。

「それで、その女の子はなんて名前なのですか？」

「イフィーナさ、レスターナ王国エルフレット・イルネスク王の第一王女、イフィーナ・イルネスクなんだ・・・」

「ええっ、王女様なの!？」

「そう、俺はその王国の王城に居候していた、ちんけな子供だったのさ・・・」

「ではローダ様が愛する人は、そのイフィーナ姫なのですね？」

その為、そう言う二人の姉妹は、嫉妬にも似た感情を表し、ローダが起こすであろう次の反応を食い入るように見つめてくるのであった。

「そ、それは違う・・・俺達は、そ、そんな関係じゃないんだ・・・」

だがローダは、めずらしく、狼狽したように慌てて否定する。

それはあたかも、迷惑千万であるというような顔をして、その表情を極端に歪め否定的な態度をとっていた。

「それはどういう言い草ですか、若。事の次第によっては許しませんぞ!」

だがそこへ、三人の話に割って入って来たのは、ジルだった。

ジルは、腕組みをして、怒った表情の様なままローダを睨み付けてくる。

それは意味深な表情だったので、ローダはまたかとジルの剣幕に顔を顰め癖癖していた。

レスターナ王国では、イフィーナの父イルネスク王が、ローダとイフィーナの結婚の儀の件に関する話を勝手に進めていた。ジルは昔からイフィーナの専属の護衛の付き人で、彼女が幼いころから身の回りの警備の役を任されていたのだが、イフィーナとローダの結婚の儀の話が聞かされて、手を打って喜んだものなのだ。

ジルにしても、イルネスク王にしても、ローダをイフィーナの夫にふさわしい男と見込んで、イルネスク王の後継者として、次代の王国を引き継ぐ王にとの呼び声が高かった。

レスターナ王国は、東の大陸の北に位置する小さな王国だ。

王位選びも世襲制ではなく、王位にふさわしい者であれば誰でも選定される事になっている。

その為、地位や血縁などを気にしなくても、王位に就ける仕組みになっているのだ。

だからローダを次代の王にという呼び声が高かったのも、イフィーナとは幼なじみで気心が知れているという事もあり、またローダは傭兵としての英雄アルスレイドの息子ということもあって、申し分がないという事だからだった。

現にイルネスク王も、その王位に就くまでは、一介のしがたい傭兵だった。

その傭兵が、いかにしてその国の王冠を戴く至高の王になったかは、ローダは詳しくは知らないが、彼が若い頃、レスターナの建国に大きく寄与していたという事だけは知っている。

そしてイルネスク王とローダの父アルスレイドは、傭兵仲間でもあり親友でもあった。

その為ローダは、幼い頃からレスターナの王城へ王の客人として預けられ、育てられてきたのだ。イルネスク王の娘イフィーナは、ローダのことを慕っており、ジルもロー

ダとイフィーナが結ばれることを切に望んでいる。

またイルネスク王も、ローダのことを我が子、同然の様に気に入っており、一人娘の夫として相応しいとそう思っている考えだった。

そんな経緯があるため、ジルは、ローダがイフィーナとの関係を否定すると、すぐに睨みをきかせてローダを戒めようとするのである。

だからローダは、それに対し当惑して癡癡するしかなかった。

イフィーナのことは嫌いではない。いや、どっちかといえば好きであろう。だが結婚をしてしまうと、レスターナの王に祭り上げられてしまう為、どうしてもローダはそれが嫌で嫌でたまらなかった。

ローダが、約四年前、父のアルスレイドを捜すと言って国を出たのも、半分はその状況から少しでも遠くへ逃れたかった為でもある。

だが、そんなローダの目付役という立場で、その旅にのこのこと付いて来たのは、ジルであった。ジルは、ローダの従者というかたちで、捜索の旅に同行し、そのローダの傍を一時も離れようとはしないのだ。そして事あるごとにイフィーナとの仲の関係を話題にのぼらせては、ローダに、イフィーナとの結婚を承諾させようと躍起になるのである。

だからローダにとって、それは何かいい迷惑の何ものでもなかった。

最初のうちは、口うるさい監視役が常時そばに侍っている様で生きた心地がしなかったが、次第に慣れてくると傍にいてもそれほど気になるわけでもなくなっていた。

だが口喧しいのは、未だに直ってはいなかったのだ。

「ジルその話はやめようぜ。どうせいくら話しても埒が明かないんだ」

その為ローダは、そう言うとはげんなりとした態度で、苦虫を噛み潰したような表情にその時そうなるのである。

「しかしですな若、そもそも自覚がなさすぎますぞ」

だがジルが言う。

しかし・・・

「ジル忘れたのか？ この件に関しては、しばらく意見しないってそう言ったじゃないか」

「そ・・・それはそうですが・・・」

ローダにそう言われて、ジルはそこで黙りこくってしまう。

「もうやめようぜ、言い争ってもしょうがないだろ」

だからローダは、内心、勝利を確信しながらジルに対し、話を打ち切る勧告を捻り出していた。

ローダは、ジルを打ち負かす方策を見付けて、多少ご満悦のようだったのだ。

「判りました。言わないと決めた事ですからな、そうするしかありませんまい」

するとジルも、自分が前に言ったことを覆す事はしない様だった。

多少、悔しそうに唇を噛むと、ローダを恨めしそうな目で見ていたが、それもやめて仕方なくそっぽを向いて素知らぬ様な顔を見せてくるのだった。

「二人とも、一体、なんの話をされているのですか？」

そんなローダとジルの二人のやりとりを見て、怪訝に思ったのか、二人の姉妹は興味、深げに話し掛けてくる。

「いや、何でもないんだ。ただのつまらない内輪もめさ・・・」

だがローダは、そう言うと、二人の姉妹ににっこりと笑ってみせていた。

そうそれは、多少、気まずさを隠す愛想笑いだったのだ。

「そうなのですか、でも喧嘩はなさらないで下さいね。お二人が険悪な表情をしているのは、見たくありませんから・・・」

だから、そう言って、二人の姉妹もにっこりと笑って微笑みかけてくる。

「ああ、分かっているよ。喧嘩なんかしないよなジル」

「ええ、そうですとも、これっぽっちもそんな事はありませんぞ」

するとローダとジルはそう言うと、お互い視線を交わす様にして顔を向き合わせると、引きつったその顔に無理矢理、笑みをつくって、睨み合っているのか、はたまた、笑いあっているのか傍から見ても判らない複雑な表情をして、顔を相互に突き合わせそこで仲直りでもするかのように親しく接している様な態度を示して見せていたのである。

第四節

次の日の夜、アグデプト家では、ささやかな宴が催されている様子だった。

屋敷の一階にある大部屋の豪華なテーブルの席には、先程からハンス一家、五人とローダ達、三人が、思い思いの席に腰をおろして座っている。

その席には、茸のリゾットや魚のムニエル、かぼちゃのスープや鳥の姿焼きなどが所狭しと並べられて、豪華な食事時の空気を撒き散らしていた。

テーブルの中央には、三段構えの大きな苺ケーキが幅をきかせ、蠟燭に火が灯されている。

その脇には、手洗い用の水受けがおかれ、水に部屋の照明が反射して天井にその波紋を投げ掛ける様に輝いていた。

ローダ達、三人は、その場に少々、恐縮した形で座り、使用人たちの手によって次から次に運ばれてくる、豪華な食事の品目を目で追う様に眺めていた。

しばらくすると、ハンスがおもむろに席から立ち上がり、グラスを片手に持って今宵の宴の快哉を声高に叫んでいる様子だった。

「今夜は、エネア、ミネアの大人になった証しを祝する会なので、そちらのお三方も、気兼ねなくここに並べられた食事を、存分に堪能していただきたい」

そう言うとハンスは、手に持ったグラスを天井に突き上げ、乾杯の音頭を取るのであった。

ローダ達、三人も、それに習い、グラスを片手に乾杯の掛け声を発して、その場の礼式に順応する。

この会は、エネアとミネアの両姉妹の、十八回目の誕生日を迎えて催された誕生日会だ。ローランド国の規定では、男女とも十八歳になると大人の仲間入りを許され、酒の席などにも同伴し出席できるようになっている。

ようやく二人の姉妹も、その年頃を迎え、父親のハンスも嬉しさを隠しきれない様子だった。

その顔はほころび、ご機嫌な表情でグラスにシャンパンを注ぐと、頻りにそれを飲み干している。

娘のエネア、ミネア達や母親のマリーネ、アルジャンは、乾杯の音頭を終えると、さっそく運ばれてきた食事に手を出して、舌鼓を打っている様子だった。

その様な光景を見ながら、ローダ達は、何か場違いな場所に迷い込んだ子猫のように辺りをきょろきょろと見渡すと、何だか落ち着かないそんな風体を顕わにしていた。

「ハンスさん、本当にいいのですか、このような場所に私たちが同席しても？」

その言葉を投げ掛けたのは、セルシアだった。

彼女は、少々、畏まった態度で恐縮すると、グラスを傾けて目を細めているハンスに問い掛けていた。

「ええ、構いません。あなた方は、娘たちの護衛を担当してくださる立場ですから特別です。どうぞ遠慮なさらず、食事に手を付けて下さい。冷めてしまうと、味が落ちますからね」

そう言うとハンスは、またグラスにシャンパンを注ぎ足すと、一気にそれを飲み干して軽く目を細めるのであった。

果たして、こんな事していて良いのだろうか？

ハンスに勧められて、三人は、遠慮がちに手元の食事を口へ運びだしていたが、外で警備を担当する傭兵達をさしおいて、この豪華な食事のご相伴にあずかるなんていう事は、どこか気が咎めて、恥ずかしいような気もするのであった。

ラドカープを含めた警備担当の傭兵達は、今、屋敷の外で篝火を炊き、周囲が真っ暗の闇のなかを、その篝火の明かりを頼りに警備の巡回を行っている。

二回にわたって屋敷に爆弾が投げ込まれ、また一度目の襲撃も無難に撃退できていたが、二人の娘の命を狙っている相手方の動きは、今のところ見られない。

だが、その相手方の動きが、神出鬼没であるために、またいつ襲撃があるか判らないので、屋敷のまわりの警備を厳重にして、守備を固めておくには越したことはなかった。

外で警備を担当する傭兵達にも、ハンスの屋敷に出入りしているコックの手によって作られた食事が振る舞われているが、今ローダ達が食している豪華な食事とは異なって、ごく普通の食事のようだった。

その為、外の傭兵と同じ雇われの身であるのに、自分たちだけが特別にこんな豪華な食事の席に同席していいのだろうか、首を傾げて恐縮していたが、ハンスに「これも仕事のうちと思って、どうかご相伴に与って下さい」と言われたので、セルシアも慣れない自己流の作法で、料理を満喫しているところなのだ。

今、口にしてしている料理は、申し分なく美味しいの一言につきる。

超一流のコックを雇っているだけあって、その味は、折り紙付きなのだ。

その為、ジルとローダもセルシアと同じ考えだったが、不慣れな席に身を固くして、ど

うやら美味しく舌鼓を打っている様子だった。

ハンスは、一度目の襲撃の際、屋敷内に乱入してきた襲撃者達を見事な手際で撃退したローダ達を見て、一目置くようになったのか、なにかと特別扱いするようになっていた。

外で警備を担当する傭兵達にも、その襲撃の際には功労があったのではあるが、ローダがアルスレイドの息子ということもあり、多少、鼻眞にしている観も拭えない。

だがローダ達にしてみれば、あまり特別扱いされると、他の傭兵達に申し訳ないという気持ちがあるのであるが、依頼主のハンスが勝手にしていることなので、あえてその事をおくびに出して言うことを避けていた。

ハンス達に気に入られるのは不快ではなかったが、こちらは雇われている立場なのだ、あまり凶々しく振る舞うのも気が引けて、なるべく礼儀を逸脱しない程度に身構えて立ち振る舞いをしようと心がけていた。

だが、ハンス一家は、家族同然の付き合いを望んでいるのか、このエネアとミネアの十八回目の誕生日の宴の席に、ぜひとも同席して欲しいと申し出てきていたのだ。

それは、二人の姉妹を守ってくれた感謝もその中には含まれているようだが、ローダ達にとっては、多少、迷惑な気もしていたことは表だって口にはしていない。

そんな事を知ってか知らずか、ハンス一家は、他愛もない雑談も交えて手元のスプーンやフォークを動かしている。

宴も中盤にさしかかり、一同の満腹度も程なく満たされ始めた頃だ。

使用人の手によって運ばれてくる料理も、野菜の盛り合わせ等といったボリュームの軽い料理が中心となってきている。

ローダ達、三人の緊張も解れ、いつしか目の前に出される食事に夢中になっている頃、目の前の食事を早くも平らげたハンスが、ナプキンで口元の汚れかすを拭いながら、おもむろに口を開いて話し掛けてくるのであった。

「いかがですか、料理はよく堪能していただけたでしょうか？ 私どもとしては、襲撃を手際よく撃退してくれたあなた方に、感謝の意を込めてこの料理を作らせたのですが、お気に召しましたかな？」

ハンスは、そう言うと、ナプキンを手元のテーブルへと置き、両肘を突いて顎の下で手を組むと、そのまま人の善さそうな目を輝かせ、その視線をローダ達、三人に向けてくるのであった。

「ええ、とっても美味しい料理ですよ。私たちの様な一介の傭兵が口にするのは、出来すぎた食事です。こちらこそ、この様な会に同席させていただき感謝しています」

セルシアが、三人の代表として、ハンスにお礼の言葉を述べていた。

それは、決して社交辞令で出た言葉ではなく、本当に光栄であると思ったから出た言葉であった。

ハンスは、その言葉を聞くと、嬉しそうにうんうんと頷きながら、顎をしゃくり上げると、また次の言葉を含めて語りかけて来るのであった。

「あなた方には、まだ、この仕事の件が済むまで活躍してもらわなければなりません、どうか二人の娘たちの事はよろしくお頼み申します。エネアとミネアが無事なものも、貴方達のおかげですからな・・・」

そう言うとハンスは、ハハハと豪快な笑いを室内に響かせて、笑いたてるのであった。

「そのような言葉をいただいて、恐縮です。私たちも、傭兵としてできうるかぎりの事はしますが、不手際の無いよう心がけていきたいと思っています」

「いやいや、頼もしいかぎりです。さすが一流とうたわれる《鋼鉄の角》の傭兵ですな。聞くところによると、《鋼鉄の角》の傭兵ギルドへ傭兵として入会するには、その前に厳重な審査が行われると聞きますが、それは本当のことなのですか？」

「ええ、そうです。私たちも、その審査を受けてそれに合格しました」

セルシアは、少々、控えめな態度でそう答えていた。

傭兵ギルド界では、近年、良質の傭兵を依頼主へ斡旋するという謳い文句が叫ばれ始め、腕っ節の強さだけではなく、人格もすぐれた傭兵の登用が重要になってきている。

一昔前までは、腕っ節、自慢の無法者が傭兵ギルドに入会し、幅をきかせていたが、最近では《鋼鉄の角》などや《獅子王の爪》等といった、傭兵の質を重視する傭兵ギルドが台頭をし始め、ごろつき紛いの傭兵達は、それらのギルドに入会を許されなくなってきている。

三流のギルドはともかく、一流のギルドに入会するとなると、傭兵達は、決まって人格審査が行われ、その基準に満たない者は、入会を許されない仕組みになっている。

それは、仕事の依頼主に、最後まで仕事の遂行を投げ出さない信頼にたる傭兵を斡旋しようとする、傭兵ギルド側の思惑と、信頼できないごろつき紛いの傭兵志願者を、ギルド界からしめだす意図が含まれていた。

仕事を傭兵ギルドに依頼する立場の人々にとっては、ごろつき紛いの傭兵よりも、信頼にたる傭兵を雇った方がいいに決まっている。

その為、ギルド側も、組合に入会させる傭兵の人選には、慎重を期している。

《鋼鉄の角》や《獅子王の爪》といった傭兵ギルドは、その先駆けとして大陸中に支部を持つ大規模な組合である。

そこから斡旋される傭兵の質も良く《紅の暁》や《戦士の勇気》といった三流に位置する傭兵ギルドなどよりは、比べものにならないほど信頼されているのが現状だった。

ローダとジル、セルシアも、その一流と称される《鋼鉄の角》の傭兵ギルドに、その名を連ねることが出来たのは、人格とともにその実力を買われての事だった。

ハンスが、そのような話を持ち出したのも、雇ったこの三人を称賛する為であり、傭兵としての腕を見込んでの事だった。

ジルはともかく、ローダとセルシアはまだ若いのに、人並み以上の働きが出来るとは大したものだと、ハンスは思っているのである。

「あなた方を雇って、本当に良かった。三流の傭兵じゃ、いまいち安心出来ませんからな……」

ハンスは、ローダ達を前にして、何度も褒めちぎっては豪快な笑みをこぼすのである。

ローダ達も、その言葉を照れ臭そうに聞いている。

誉められて嬉しくないという人は居ない様に、ローダ達もその口で、少し照れ笑いを浮かべて見せるのだ。

そうこうしている内に、宴も終盤を迎え、グラスと高級ワインが使用人の手によって運ばれてきて、一同に赤い液体が振る舞われていた。

これは、五十数年ものの五つ星、高級ワインらしい。

ローダ達も、少しだけそれのご相伴にあずかり、微酔気分を満喫している。
エネアやミネアも、十八になって初めての酒を口にし、ご機嫌の様子だった。
顔が火照り、赤く色づく様は、初体験を済ませてはにかむ乙女の姿のように新鮮味に溢れており、ローダ達、三人の口元をほころばさせていた。

食事も片付けられ、後は思い思いに席を立ち、宴の席は散会になっていた。
ローダも、微酔気分をさますため、廊下側の窓辺に立って外の新鮮な空気を吸い込んでいた。

するとそこへ、一人、姉のエネアが近付いてきて、ローダの傍らへちょこんと立ち尽くしている様子だった。

「一体どうしたんだいエネア、ミネアとは一緒じゃないのかい？」

エネアとミネアは、いつも片時も離れず二人、一緒に行動するので、ミネアを一人置いて姉のエネアだけが、ローダの許に来る事に違和感を抱いたローダが、彼女にそう問い質していた。

「ええ、ちょっと気分が悪いのです。ですから二階の部屋で少し休もうと思うのですが、一緒に付いて来てもらえますか？」

エネアは、青い顔をしてそう言う。
「それはいいけど、さっき、お酒、飲みすぎたんじゃないか？」

ローダは、彼女のことが少し心配になって、そう問い質していた。
きっと初めての酒を飲んで、悪酔いしたのだろうと思い、エネアの手を取ると肩を支える様にして後ろから抱き寄せていた。
「多分、そうかも知れません。少しの間、部屋で横になれば、気分も晴れるような気がしますから、部屋まで付き添って来て下さい……」

そう言うときエネアは、ローダの肩に寄り掛かる様にして、部屋まで付き添われ、重い足取りでその場を後にするのであった。

二階の部屋は、少し薄暗かった。
ローダは、部屋に入ると、さっそく照明のスイッチを壁伝いに探して、明かりを点けようとしていた。しかし、エネアにベットの脇にあるスタンドの明かりを点けてといわれたので、ローダは、それに頷きそこへツカツカと歩み寄って、明かりを点けてみる。
すると、スタンドからは蠟燭の炎のような光が照射され、部屋、全体が淡いオレンジ色の光、一色で照らしだされ、家具の陰影がくっきりとそこに浮かびあがっていた。
「さあエネア、こっちへ来て横になるんだ。気分が悪いときは、そうするのが一番いいからね……」

そう言うときローダは、エネアの手をとって歩かせる。
そして、ベットのすぐ脇にまで来ると、彼女をお姫さま抱っこした形で抱えあげ、清潔そうな白いシーツの上に、寝かせようとして前かがみになった。
だがその直後、エネアに「待って！」といわれたので、ローダは彼女を抱き上げたままその場で動きを止め、怪訝な表情をして立ち尽くしてしまっている様子だった。

「ローダ様、しばらくこのまま抱っこしていてくれませんか？ 私、何だか気分が高揚し

て寝られそうにないの」

そう言うときエネアは、はにかんだ様に甘い微笑を一頻り繰り返していた。

「でも、横になった方が良いんじゃないか？ 君は酔っているんだろ？ そうしないと、なかなか気分は晴れないよ」

「いいえ、私は本当は酔ってなんかいないの。実を言うとローダ様、私は、あなたと少しだけ二人っきりになりたかっただけなの。それはいけない事かしら？」

すると、そう言いつつエネアの表情に、先ほどまでとはうって変わってある一つの顕著な変化が生じていた。

彼女の水色のルージュに彩られた可愛らしい口元が、まるで酷薄的な弦月の形に歪められたかと思うと、その表情は一変して、ひどく淫靡な囁きを呈するそれに変化していた。

その時ローダは、それを見て、一瞬、気圧された感じを受けていた。

エネアが、笑っているのだ。

それも淫猥な娼婦が、男を誘うときに見せる、甘い淫らな微笑をそこにたたえながらである。

「どうしたんだいエネア、今の君は何か変だぞ。やっぱり今すぐ横になった方がいい」

だから、そう言うときローダは、やはり彼女をベッドの上に寝かせようとしていた。

しかし、次の瞬間エネアは、ローダに抱き上げられたままとたれ掛かるように、彼の首の後に手を回すと、体を故意に密着させる形でそのまま抱きついて来ていた。

ローダは、それを受けて硬直する。

そして、思わぬエネアの行動に目を丸くして、意外な表情のままその場に立ち尽くしてしまっていた。

「駄目よローダ様、今の私は普通のエネアではないの。今の私の気持ちが、あなたには判って・・・？」

そう言うときエネアは、また淫らな笑いを繰り返す。

「今の気持ちって、それは一体どういうことだい？ 俺は一体、どうすればいいのさ」

ローダはその時、ひどく狼狽する。

エネアの言わんとするその真意が、つかめず困っていたからだ。

それに、エネアの先程からの言動、今のエネアは明らかに変だ。

最初は、酒に酔って少しふざけているのかと思ったが、ちょっと何かが違うのだろうか？

彼女の微笑を浮かべるその表情は、まるでローダに誘いをいれているように、甘く輝いている様だった。

それはまるで、愛欲と退廃の神、イリスを彷彿とさせるものであった。

イリスの神は、甘い囁きで相手を悩殺し、意中の男を淡い桃源郷へ誘う淫らな女神だ。今のエネアは、まさにそのイリスに酷似したような態度をとっている。

その本意とするところは、どこにあるか分からないが、ローダには、彼女がそのイリスのような、淫らな乙女のように思えてならなかった。

「私がしたいのはね、ローダ様、こういうことなの・・・」

エネアが、不意に言葉を紡ぐ。

すると彼女は、抱きあげられた格好のまま、ローダの顔にそっと自分の顔を近付けると、彼の口元に自分の唇を近づけて、紫紺色の瞳を見開いたままローダに軽く口付けをしていた。

その為、両者の間に、一瞬の沈黙が流れる。

エネアは、ローダの唇に自分の唇を押し当てると、そのまま更にローダに強く抱きつき、二人の体を密着させていた。

だが、次の瞬間、ローダは驚いたようにエネアから自分の唇を離すと、咄嗟的に抱き上げていた彼女を、部屋の床の上に突き放してしまっていた。

エネアが、すっと床の上に立ち上がる。

「何をするんだエネア、突然こんな事するなんて、どうかしているぞ！」

ローダは、酷く狼狽しながら、そうエネアに批難の声をぶつける。

突然エネアに、口付けをされたのだから、それは仕方のない事であるだろう。

しかし「やだローダ様って、意外とシャイなのね。ちょっと唇を合わせただけじゃない。そんなに驚くことないでしょ」と、そう言ってエネアは、また軽い微笑をその顔にたたえてはにかむので、ローダはそれを見てある種の不安をその胸に感じ取っていた。

「ねえローダ様、あなたは私のことをどう思っています？　好き？　それとも嫌い？」

エネアが、ローダに対して唐突に質問をしてくる。

「好きか嫌いかって、一体それを聞いてどうするんだ。今はそれに答える事は出来ないよ」

それを受けてローダが、困ったようにそう呟く。

「そんな、私はあなたの本心が聞きたいの。私はあなたのことが好きよ。その気持ちに嘘、偽りはないわ。だからその証拠を見せてあげる」

そう言ってエネアは、ローダの手を無造作にとると、それを自分の胸の双丘にそっと触れさせて、また淫らな微笑を一つ繰り返すのだった。

ローダの手の平に、彼女のやわらかな胸の感触が伝わる。

「ねえ、どう？　判るでしょ、私の胸の膨らみが？　好きにしているよ」

エネアは、正気ではなかった。

彼女は、狼狽するローダを見据えてはにかむと、小悪魔的な表情をその顔に浮かべて、誘いを入れてくる。

「やめるんだエネア、やっぱり君は変だぞ。どうしてしまったんだ」

ローダは、そんなエネアに拒絶の姿勢を顕わにする。

それはいつもの自由奔放でいて、可憐なエネアのイメージとはうって変わった大胆な行動に、不審なるものを感じ取ったからだ。

ローダは、エネアの胸に触れていた自分の手を、さっと引っ込める。

そして、エネアの傍から恐れるように身を退くと、二三歩、後ずさって、ある一定の間合いを置いていた。

だがその直後、エネアは、落胆に近い表情をその顔に浮かべる。

彼女は、ローダに拒絶されたことが相当ショックであったらしく、その証拠に手を血がにじむくらい強く握り締めて、多少、焦れた眼差しをたたえたままローダのことを見据えてきた。

それだけ彼女にとっては、それは不本意な事であったようだ。

エネアが、言葉を紡ぐ。

「ローダ様、どうして私の思いを受け入れて下さらないの？ 私にそれだけ魅力がないから？ それともやっぱりセルシアさんの事が好きだから踏み切れないの？」

そう言うとエネアは、なにか悲しい表情をする。

それは、いつも明るいエネアにしては、酷く悲哀に満ちた態度であった。

そんなエネアに、ローダは、次のような言葉をかけて、慰めようとする。

「いいかいエネア、俺はね、君のことが嫌いじゃない。でも、君はいま少し変なんだ。きっと、お酒を飲んで悪酔いしているからだと思うけど、こんな大胆に迫ってくるなんておかしいんだよ」

今のローダの心境からしてみれば、目の前のエネアはやはり、どこかおかしい。

何か、タガが、外れてしまっている様にさえ感じる。

それをローダは、エネアが酒に酔った為に、そうなっているのだと思っていた。

エネアがローダに口付けをしたのも、また自分の胸に手を触れさせたのも、それは全て酔った勢いでした、悪戯心のように感じていたからだ。

だからローダが、エネアを拒絶したのも、彼女を嫌いだったからではない。

正気ではないエネアに、なにか怪訝なものを強く感じたからそうしたのである。

だがエネアは、ローダにそういわれても、逆にその情欲に火を点けたのか、その淫靡な眼差しを強めると、今度も更に大胆な行為にうって出ている。

「ローダ様、あなたはそう言うけれど、本当は私に魅力を感じていないのではない？ 私はセルシアさん程グラマーではないから、きっとそうなんでしょう？ でも、こうすればどうかしら？ 私がこの服を取りさえすれば、きっとあなたも私に魅力を感じて愛してくれるに違いないわ・・・」

そういうとエネアは、何を思ったか、自分の着ている純白のドレスを脱ぎ捨てると、薄い透けるような水色の下着、上下、一枚だけになって、その裸同然とっていい柔らかな裸体をそこに曝し出していた。

エネアの白い柔肌が、スタンドから漏れでている淡いオレンジ色の光に照らされ、ローダの目の前に惜し気もなく映し出される。

それは、情欲をかき立たせる、とても淫らで美しい光景の様でもあった。

「・・・・・・・・・・」

だが、それを見てローダは、絶句する。

まさかエネアが、その様な行動にうって出るとは、思っても見なかったからだ。

いくら酒に酔っておかしいからといって、ここまでするのは、少しやり過ぎではないかとさえ思えた。

だが、エネアは本気なのか、顔を極端に赤らめると、その下着姿のままローダに一步また一步と近付いて、迫り寄ってくる。

そして彼女は、ローダのすぐ近く目の前まで来ると、ぴたりとその歩みをやめてローダの顔を覗き込んで来ていた。

「どう、これならば私を愛してくれますか？ 私は本気なの。だからこのままベットにつれていってけません。体をよせ合えば、きっと強く感じあえると思いますわ。お願いだから私を抱き締めて・・・」

そういうとエネアは、ローダにもたれ掛かるようにして、抱きついて来る。

そして、体を密着させるように胸をローダに押しつけると、上目遣いでローダを誘惑して、甘い囁きを発して来ていた。

だがそんな中、ローダはある迷いを見せていた。

エネアのあからさまな求愛行動に、困惑を隠しきれなかったが、これ以上、邪険にすることも出来ず、この場をどう対処していいか分からなかったからだ。

「エネア？ エネア、君は本当にあのエネアなのかい？ 俺にはまるで、君が別人に見えるよ。こんな風にせまるなんて、本当の君じゃないみたいだ。お願いだから、止めてくれないか？ こんな事されて、俺は困るよ」

そういうとローダは、酷く落胆した態度で、エネアにそう話し掛けていた。

ローダにしてみれば、あからさまに情欲を示してせまってくるエネアに、とても受け入れがたい淫らな行為を感じたからだ。

いくら酒に酔っているとはいえ、これでは安易に体を売る娼婦と同じではないかと思う。

だがエネアは、それに反発し、次には敏感な反応を示して、やはりローダを困らせるがごとく、聞き分けのない言葉を口走っていた。

「やっぱりあなたは、私のことが嫌いなのね！？ 私がこれほど愛しているというのに、この思いを受け入れてくれないなんて酷いわ！！」

そう言ってエネアは、泣きじゃくり始める。

その紫紺色の深い瞳に、涙を浮かべると、取り乱したように声をあげていた。

だが、その時である。

ローダは、ある一種の気配を感じ取っていた。

「誰だ！ 誰だ、そこに居るのは！？」

そう言ってローダは、部屋の北側にある窓のカーテンの方に、その意識を集中する。

そこに、ある人の気配を感じていた。

先程までは、エネアの事にかまけて気が付かなかったが、今はそれを感じていた。

どうやら、何者かが、部屋の床に届きそうな大きめのカーテンの後に隠れて、潜んでいるように思えた。

その証拠に、そこからは、酷く淀んだ殺気にも似た気配が感じられていた。

「出てこい！ そこに居るのは判っているぞ！ 何者かは知らないが、俺の目は節穴じゃない。出てこなければ剣でおまえを斬り付けるぞ！！」

そう言ってローダは、剣のつかに手をのばして、抜刀の姿勢をとっていた。

すると、しばらくの間があって、そのカーテンの裏側がもぞもぞと動きだす。

そして、そのカーテンが一際、大きく裏返ったかと思うと、そこからは一人の中年男性とおぼしき一つの人影が、身を翻しながら躍り出て来ていた。

それを見てローダは、その男に警戒の色を示していた。

見た事のない男だ。

顔に傷のある酷く痩せた男であるが、彼は、薄汚れた茶色のローブを羽織り、カーテンの近くでローダの隙を窺うように、中腰の姿勢をとっている。

そしてその手元には、丸い形の透き通る硬質の球を持っていた。

水晶球だ。

男が手にしている丸い固まりは、よく磨き上げられた真球体の黒水晶であったのだ。

だからローダは、それを見て怪訝な表情を浮かべていた。

こいつは一体、何者なのだ？

そして一体、誰？

見た目からすると、まるで薄汚れた衣服を身につけている、浮浪者の様な風体を示しているが、一体こいつは、どうしてこの部屋に居るのが疑問であったからだ。

「おまえは一体、誰だ！ 見たことのない顔だが、この屋敷の関係者じゃないだろう」

そういうとローダは、そのローブの男と向き直る。

そして、更に警戒の色を強くして身構えていた。

だが、ローブの男は、そのローダの問い掛けには答えなかった。

彼はただ、背を丸くして中腰の姿勢のままの状態を維持すると、次にはある不思議な行動を示して、手元的水晶球に手をかざしていた。

男は、意味不明な言葉を、もぞもぞと唱えだす。

すると、男が手にしていたその水晶球が、怪しい輝きをともなって光りだしていた。

その光は、強い深紅の血の色をした、不気味な妖しい光であった。

だが、その直後、ローダは、後ろに何かの気配を感じたと思った次の瞬間、突然、何かの強い力で、後ろから拘束されてしまいその身動きがとれず、その場に立ち尽くしたまま固まってしまっていた。

ローダが、首だけを後ろにめぐらして探りを入れる。

すると、ローダの肩越し近くに、エネアの顔があったので、彼は、それに驚いてその顔をまじまじと凝視してしまっていた。どうやら、エネアが、下着姿の格好のまま、ローダの背後から、その胸を押しつける状態で手を前側に回し抱きついて来ている様子だったのだ。

しかも、そのか細い両腕に、とても人間のものとは思えぬ強力な力を漲らせてである。

だから、それによってローダは、身動きがとれない状態に陥っていた。

背中には、エネアの柔らかな発達した胸の感触が伝わってくるが、今はそんな事に気をとられている場合はなかった。

「エネア、君は一体、何をするんだ！」

ローダは、驚きの表情を隠さぬまま、エネアにそう言って疑問の声を投げ掛ける。

だがその時、ローダは、エネアの表情にある一つの変化を感じ取って目を丸くしていた。

エネアのその紫紺色の瞳が、赤く輝いていたのだ。まるでそれは、ローブの男が持つ水晶球の光と呼応するかの様にだ。

だからそれを見たとき、ローダには、ある一つの考えが頭に浮かんでいた。

『たぶん彼女は、操られているんだな・・・？』

先程から様子がおかしかったのは、恐らくその為だろう。

だから、そう思うとローダは、ローブの男とエネアを交互に見る。

そしてその事を、百パーセントに近い確率で確信していた。

おそらく、目の前に居るローブの男は、妖術師なのだろう。

妖術師とは、奇怪な術を駆使して、人心を操作したり、動物や魔物などを使役したりする闇の人種だ。ローダの稚拙な知識では、西の大陸エウロカには、その妖術師による闇の暗殺者集団があると聞く。この男が、その暗殺者集団の一員であるかどうかは判らないが、目の前の男は、紛れもなく奇怪な術を使う術師だった。

その彼がいま、呪文を唱え、そのあやかしの術でエネアを操っているのだと、ローダにはそう思っていた。ローダは、それを察すると、危機感を覚え、身を左右に振ってどうにかエネアの束縛から逃れようと試みる。

しかし、その試みは失敗していた。

それだけエネアの力は強力で、その束縛から逃れられそうに無かったからだ。

だが、そこでローダには、ある名案が思い浮かぶ。

ローダは、エネアの束縛から身を振って逃れられないと思うと、今度は身をなんとか翻して、仰向けになる形で、自分の体を勢よく床の上に投げ出していた。もちろんエネアも一緒に巻き添えにした形である。するとエネアは、丁度ローダの背中と床の上に挟まれた格好で倒れこみ、つよく体を上下から圧迫された形になり「ウッ」という小さな苦鳴を洩らして、床に転がっていた。そして一瞬だが、その衝撃で、エネアの腕の力が弱まりを見せる。

その隙にローダは、身を翻して立ち上がり、エネアの束縛から逃れていた。

そして、何の躊躇することもなく、今度は脱兎の勢いで駆け出すと、走りながら剣を抜刀して、呪文を唱え続ける妖術師に対して斬り掛かっていた。

ザン……

ローダの放った斬撃が、空を斬る。

妖術師は、そのローダの攻撃を、意外に素早い動きで身を翻して躲すと、後方へ退いていた。

「チッ……！！」

ローダは、そんな妖術師に対して、軽い舌打ちをする。

まさか、先程の一撃が、間一髪で躲されるとは、思ってもいなかったからだ。

この妖術師は、ただの妖術師ではない。

おそらく、あやかしの術を駆るとともに、何らかの体術も心得ているのだろうとそう思った。

ローダの狙い澄ました一撃を避けるなんて、普通では考えられなかったからだ。

だが、そんな中、目の前の妖術師は、また何事もなかったように意味不明な呪文の詠唱を唱え出し始めている様子だった。

それを見てローダは、やはり警戒の姿勢をとる。

今度は一体、何が起こるんだ？

ローダは、それを見て不審な思いを抱いていた。

だが、その直後、ローダは殺気を感じて後ろを振り返る。

すると、そこには先ほど床に倒れていたはずのエネアが、やはりその双眸を紅の血の色に染め上げた姿のまま、そこに立っている光景が目飛び込んで来ていた。

彼女は、無機質の人形のように、その手をだらりと下げると、感情のない冷徹な視線でローダを見据えてくる。

そして、更に、その双眸を赤い血の色に一際、強く輝かしたかと思うと、次には得も言われぬ俊敏な動作で、ローダに対し躍り掛かって来ていた。

エネアは、足を大きく振り上げると、そのままの態勢でローダの側頭部に重い蹴りの一撃を見舞って来る。

それは素早い、彼女の渾身の一蹴りであった。

しかしローダは、それを即座に察知すると、速やかに横へとステップしそれを躲す。

だが次の瞬間、間髪入れず、今度はエネアの左回し蹴りがローダの鳩尾をかすめる。

その一蹴りは、プロの格闘家、顔負けのやけに鋭い一撃であった。

そして、それは見事にローダの体にヒットし、ドカッという鈍い不気味な音を残して、横に擦り抜けていた。

ローダが、その顔に苦悶の表情を浮かべる。

そして、鳩尾の部分を苦しそうに押さえると、そのままの格好でその場に蹲ってしまっていた。

だが、それは、仕方のない事だろう。

それだけエネアの蹴りは、重くずしりと来るものであったからだ。

しかしその時、妖術師は、してやったりという残忍な笑みをその顔に浮かべ笑い立てていた。

そして更に、呪文の詠唱を高めると、エネアを操って次の攻撃を画策する。

多分、今度は、エネアは、踵落としをローダに見舞うつもりのようなのだ。

そのしなやかな足を、高々と自らの頭上付近まで振り上げたかと思うと、蹲って苦悶の表情を浮かべているローダに対して、即座に振り下ろす。

ガッ・・

だが、ローダは、その攻撃をまともに食らう馬鹿ではなかった。

鳩尾の鈍い痛みにも耐えながらも、ローダは気丈に振る舞うと、エネアの足を取ってその攻撃を、既のところで受け止めていたのだ。

そして次の瞬間には、エネアは、ローダに足を取られた格好のままバランスを崩して、床に尻餅をつき倒れ込んでいた。

そこへすかさずローダが駆け寄って、彼女を床の上に組み敷くと、のしかかる様にして押さえ込みの態勢にしていた。

そしてローダは、なんとかしてエネアを正気に戻そうと、懸命に彼女に対して呼び掛けを始めていた。

「エネア、聞こえるかい？ 俺はローダだ。お願いだから、正気を取り戻してくれ。君は妖術師の術によって操られているんだ。だから気をしっかり持って、その術の束縛と戦うんだ！！」

そう言うとローダは、エネアの様子を覗う。

もし彼女が、少しでも正気の部分が残されていれば、ローダの呼び掛けに対して、必ず何かしらの反応があると思ったからだ。

だがエネアは、ただ身を振って激しく暴れ動くだけだった。

そう、ローダの呼び掛けが、聞こえていないのかもしれない。

しかしローダは、その暴れるエネアを押さえ付けながらも、また呼び掛けを続けて

いた。

「お願いだエネア、正気を取り戻してくれ。でない俺はどうしたらいいかわからないよ。君を傷つけることは出来ないし、それに見捨てることも出来ないからね」

そう言うとローダは、何を思ったかエネアをのし掛かる態勢の儘、押さえ込む状態を維持すると、咄嗟的にエネアの唇へ、自分の唇を押し当ててそのまま軽い口付けを試みていた。

するとその直後、エネアにある一つの兆候が芽生えていた。

彼女は、暴れるのを止め、四肢に漲っていた力を萎えさせると、ローダのその行為に対してある意味、受け入れとも思える体勢をとっていたのだ。

どうやら、ローダの咄嗟的な行為が、功をそうしたらしい。

エネアは、今やローダの体に身を預ける様にして抱きつくと、まるで至福の時を満喫しているかのように、その瞳には歓喜の色をたたえて為すがままにされて身を任せている。

そして、血の色をしていたその双眸も、いつしか本来の紫紺色のな輝きを取り戻すと、急速にその鬼火のような赤い眼差しは消えて無くなりつつあった。

「エネア、正気に戻ったのかい？　俺のことが判るか！？」

ローダは、エネアの唇から自分の唇を引き離すと、そう言ってエネアに優しく問い掛けて、本来の正気を取り戻させようと努力していた。

するとエネアは、まだ虚ろだったが、ローダのその問い掛けに無言で『うん』と小さく頷くと、そのまま疲れきったかのように気絶していた。

おそらく彼女は、その深い意識のなかでは、妖術師の術と激しく葛藤していたのかも知れない。その為、酷く精神力を消耗しきって、気絶したのではないかと思われる。

だがエネアは、確かに正気を取り戻して、先ほど『うん』と頷いた様子だ。

だから、それを思うとローダは、これならばもうエネアが妖術師の術に操られないだろうと察して、彼女を床の上にそっと寝かせると、立ち上がってローブの男を鋭い目付きで睨み返していた。

その頃、ローブの男といえば、ある焦りを見せていた。

先程から呪文の詠唱を続けているが、その術の効果が望めなくなって来ていたからだ。

エネアを操ろうとしても、何の手応えもなく、ただ虚しく言葉だけが紡がれるだけだ。

どうも、先程のローダのエネアに対する口付け行為で、彼女の術に対する抵抗力が強まってしまったらしい。

術は、強力な対抗意識をもつ者の精神に触れると、その術の効果を望めなくなってしまふ。

おそらくエネアは、ローダの真摯な情愛を受けて、妖術師の術に打ち勝ち、そのまま気を失ってしまったのだと思われる。

それでは妖術師も、術を仕掛ける対象を見失って、ただおろおろとするばかりで、多少、狼狽の色を見せていた。

しかしそんな中、ローダは、いま、真剣な顔つきで妖術師との間合いを慎重に計っている様子だ。彼は、じりじりと妖術師に対して近付くと、次には意を決したように剣を振りかざして躍り掛かる。だが、ローダは、先程、妖術師に難なく攻撃を避けられてしまったこともあり、今度は、その失敗を繰り返さないように、相手の一挙手一投足をつ

ぶさに観察してから斬り掛かっていた。

ザン・・・

ローダの斬撃が、妖術師の胸元すれすれのところを掠める。

しかし運悪く、その太刀筋は読まれていた。

だが、気を取り直してローダは、二撃目を即座に放つ。

すると、それが見事、妖術師の右腕をとらえ、そこに深い裂傷を与えることになった。

それを受けて妖術師は、また狼狽したように腕を押さえながら後ずさっていた。

そして彼は、まるで猫類の様な俊敏な動作で北側の窓まで移動すると、そこで何を思ったか、ローダに対し、小馬鹿にした笑いを呈してみせて来たのだ。

「一体、何がおかしいんだ、貴様！」

だからローダは、そう言うとき妖術師を見据えて睨み付ける。

彼に笑いたてられたのが、気に障った様子であったのだ。

だが、

「ククク、わからないのかい。これはある意味、囷なのだよ」

妖術師は、腹の底から笑いたてるような不気味な声で嘲笑を繰り返すと、そう言葉を紡いでローダに対して、馬鹿にした様な視線を投げかけて来ていた。

「囷だと？ それは一体、どういうことだ！！」

その為、ローダがそう言って怒る。

すると、

「要するにね、外の傭兵たちは、私の術によって全員、眠らしてあるという事だ。今頃、一階では、別動の暗殺者が乱入して、屋敷内を包囲している頃だろう」

そう言うとき妖術師は、満足した様に横柄な態度をとって、また皮肉った様にローダの事を馬鹿にした様な態度を見せていた。

「なんだと、それじゃこれは罠か！？」

「そう、しかしこれで私の役目は終わった。だからこの辺で、お暇させてもらおう」

そして、ローブの男はそう言うとき、部屋の窓枠に手を掛けて、そこから突然、身を翻し二階から地上へふわりと降り立ち、完全に地面へと着地していた。

その後、そのまま脱兎の勢いで駆け出すと、外の薄暗い闇の中を疾駆し、やがてその闇に溶け込むかのごとく、姿を消して行ってしまっていたのである。

だがその時、ローダといえば、妖術師のあっけない逃走によって「待て！」と呼び止めることも出来ず、その場に立ち尽くしていた。

しかし次の瞬間、我に返ると、エネアのことを思い出し、そのそばに駆け寄ると、彼女を床から抱き起こし、そのまま正気を取り戻させるために体を振って揺すり起こそうとしていた。

「エネア、大丈夫かい？ 俺だよ、ローダだ。目を覚ましてくれ」

そう言うときローダは、彼女の頬を軽くたたく。

それは、エネアの目を、覚まさせる為にした行為だった。

「エネア、早く起きてくれ。頼む・・・早く」

そしてまた軽く、その頬を掌でたたく。

「うっ、うううう……」

すると、少しだが、エネアが正気を取り戻したかのように、その目を開きかけ呻きの声を発していた。

「しっかりするんだエネア、俺は、ここに居るよ！」

そして、

「ろ・・・ローダ様、私、こわい！！」

するとエネアは、完全に目を覚まし、突然ローダに抱きついて、その体をぶるぶると小刻みに震わせて怯えていた様子だった。

どうやら彼女は、妖術師に操られていた時の記憶があるらしい。

その為、今はひどく怖がっている様子で、その顔色は血の気が引いて青くなっている様子だった。

しかし・・・

「いいかいエネア、俺の話聞いてくれ。俺は今から一階に行かなければならない。だから君は、しばらくここで待っているんだ。一階に下りると、危険だからね」

そう言うとローダは、足早に、その場をたち去ろうとする。

彼は、エネアだけでなく、妹のミネアの身の心配もしていたのである。

だが、

「待ってローダ様、わたしを一人にしないで！」

と、エネアが、そう懇願するような眼差しで、ローダに訴えかけて来たので、彼はその歩みを止めて、エネアの方を振り返っていた。

「でも、一階に、襲撃者が乱入しているかもしれないんだ。だから早く行ってあげないと、ミネアの身の命が、とても危うい事になってしまうんだ」

そう、ローダはそう言って、エネアに諭しを入れている。

すると、

「それなら私も、あなたと一緒にいきます。ここに一人で居るのは心細いの・・・また誰かに狙われるのではないかと思うと、とても恐いわ！」

そう、そうやってエネアは、半分、泣きそうな表情で、そうローダに対し縋り付いて来ていた。

「判った、それじゃ今すぐ服を着るんだ。そして一緒に一階へ行こう。でも俺の傍を離れちゃ駄目だよ。でないと、君の身に危険が及ぶような事があってはならないからね。だから、なるべく警戒して、自分の身の安全を図る方がいいんだ・・・」

「はい、わかりました。いますぐ服を着ます・・・どうかローダ様、私を一人にして見捨てないで・・・」

その為、そう言うとエネアは立ちだして、そそくさとして、先程の脱ぎ捨てた服を身につけた。そしてその後、ローダと一緒に部屋を出ると、二階から一階に通じる階段を足早にとぼして降りて行き、妹のミネアの心配をしてローダの守りを頼りにし、必死の思いで屋敷の中を駆け抜けた。彼女は、そして女性にしては懸命な動作で脚を動かすと、ローダの後について決して離れない様に追い縋り、階段に敷かれた赤い絨毯を踏みしめ、その心にとっても大きな不安を抱いて、妹のミネアがどうなったか懸念し、極度の疲労の色をその顔に浮かべて見せていたのである。

第五節

二階のミネアの部屋から階段をつたって一階へ降り立つと、ローダは、正気に戻ったエネアを引き連れて人の気配を探っていた。

すると、先程、豪華な料理が並べられ宴を催した大部屋の方から、人のざわめきともつかぬ声が聞こえて来たので、ローダは何の躊躇もなくそちらの方向へと走りだす。

その後を、エネアも懸命に追い掛け、ローダのそばを離れずに付いていく。

走りだして、一分もしない内に、屋敷の大部屋の扉が見えてきた。

その開け放たれた観音扉の向こう側には、第一回目の襲撃の時と同じように、刃物をぎらつかせた黒覆面、黒装束の男たちが、ざっと見て数十人、円陣を組むように部屋中を取り囲むと、その場を制圧でもしたかのように殺気を漲らせて中腰の体勢をとっている。「きゃーあああああ！！」

そんな中、突然、甲高い女性の悲鳴が屋敷内に響き渡った。

ミネアの悲鳴だ。

ローダは、よからぬ予感を胸に抱きながら大部屋への扉をくぐり抜けると、そこには今し方、起こったであろう凄惨な光景が現出されていた。

一人の女性が、黒装束の男たちに囲まれて、床に血を流して倒れている。

(まさか、ミネアが刺されたのか！？)

ローダは、ふと身を乗り出すようにして、遠目から倒れている女性の姿を確認する。

髪の色が黒い、どうやらミネアではないようだ。着ている服から推測するに、この屋敷に出入りしている使用人の一人だろう。ローダは安堵した半面、たとえ様もない怒りを感じていた。

屋敷内の人間の一人が、殺傷されたのだ。

しかも、ローダが今この部屋に飛び込んでくるまでの、直前の出来事だ。

彼は苦い顔をして、その顔をしかめる。

『遅かったか・・・！？』

ローダは、心の中で独語していた。

後ろから付いてきたエネアも、それを見て絶句している様子だった。

その秀麗なか細い眉を曇らせて、口に手をあてて驚きを隠せないでいる。

「くそう、お前ら、ただじゃおかないぞ・・・！！」

ローダは、苦悩を搾り出すような声で、そう男たちに対して叫んでいた。

すると、その声に驚き、黒装束の男たちは一瞬びくと身体を震わせると、一斉に扉の方へと振り向く。

そこには、険悪な顔をしたローダと、いまだ驚きを隠せないでいるエネアが立っていた。

男達の短刀は、その場に居合わせるハンス一家や使用人たちの首もとへ突き付けられている。

どうやら人質らしい。

その場には、セルシアとジルの姿も見受けられるが、彼らは、人質をとられているため剣を構えたまま立ち尽くして手がだせない状態で、何をしても無駄である事を意識させられていた。

問題のミネアは、ハンスの後ろに隠れて怯えている。

その目は涙目に近く、目の前で使用人の一人が殺傷されたのを見て、相当ショックだったのか、今にも失禁しそうな表情でぶるぶると震えている。

ローダは、そのミネアの顔を見て、心底、気の毒だと思った。

寵愛を受けて何の苦勞もなく育った少女が、こんな殺傷の場に居合わせて、何の罪もない使用人が傷つけられたのを目撃したのであるから、その心が痛むのも無理はない。

ローダは、隙あらば駆けだして、その男たちを片っ端から薙ぎ倒し、制裁を加えてやりたいという衝動に駆られていたが、人質をとられている以上その場から身動きがとれないでいた。

黒装束の男たちは、ざっと数えて二十人はくだらない。

先程の妖術師の言う通り、これだけの男たちが屋敷内に乱入してきているのを見ると、外で警備を担当していた男たちは、皆、妖術師の呪術によって眠らされているのであろう。

その証拠に、外では何の騒ぎも起きていない。

襲撃の際に吹き鳴らすべき笛の音も、聞こえはしなかった。

傭兵達の、まとめ役でもある、ラドカープの姿も見受けられない。

ローダは、進退窮まり、手元の剣を苛々と玩ぶしか他に方法が見いだせないでいた。

黒装束の男たちは、ローダの存在に気付くと、その中の数人の男たちが前に出て、ローダを迎えうっていた。

ローダは危険を察知し、後ろ手にエネアを庇いながら後ずさるが、このままエネアを連れて逃げ出すことも出来ず、前面に剣を突きだして相手を牽制する。

しかし、相手に怯んだ様子はない。人質をとっているという優位性がある為か、それとも数で勝っているという自信があるためかは知らないが、その状況が覆りそうにはなかった。

襲撃者の内の三人の男が、ハンス一家や使用人たちに短刀を突き付けそれを取り囲み、残りの十七人の男たちが、ローダ達やジル、セルシアに短刀を向け対峙している。

どう見ても、この様な状況を切り抜けるには、至難の業のように思える。

「お前ら卑怯だぞ、人質をとるなんて・・・！」

そう言うとローダは、今の正直な気持ちを吐露していた。

その言葉を口にしたところで状況が好転する筈もないのだが、思わず出てしまった言葉だ。

このままでは、エネアやミネアと共に、ハンス一家や使用人たちにも危害が及ぶ可能

性がある。いくら剣に自信があったとしても、これだけの人数の男たちを相手に、どう立ち回ればいいのか、その方策が見いだせないといっても過言ではない。

相手の動向を覗きながら、ローダは、後ろのエネアが狙われたときのことを考えて、大部屋の扉の近くからそれを庇うように立ち位置を確保しておいた。

エネアが狙われれば、万事休すだ。そうならない為にも、今おかれている状況を把握しておかなければならない。ローダは、そう考えると、中腰姿勢をとりジルとセルシアを見た。

彼らは今、ハンス一家に程近い、厨房と大部屋の出入り口の奥まった場所に構えて剣を突きだしている。当然、人質をとられて動けない状態だったが、やはりローダと同じように相手側の動向を窺っている様子で、その表情は峻しい。

ローダは、そのジルとセルシアに対して、なんとかして活路を見いだしてほしいと目で合図を送ってそう訴えかけていたが、それが功をそうしたかは判らない。

そうこうしている内に、黒装束の男たちが、何やらひそひそと仲間同士で囁き始めていた。

微かに聞こえてくるその言葉の端々では、「やっちまおうぜ・・・」とか「仲間の仇だ・・・」等という言葉が確かに耳朶に伝わってくる。

一分か二分、しばらくそのような会話が交わされた後、男たちの話によりやく結論が出たのか、何人かの男たちがローダにすり足で近付くと、短刀を片手に睨みをきかせてきていた。

「おいお前！ この前はよくも仲間をいたぶってくれたな・・・今日この場でその借りを返させてもらうぜ！！」

その男達の中の一人が、険悪な声を響かせてローダにそう言い放って来ていた。

それを聞いたローダは、「なんだ仕返しか？」と、多少、迷惑そうな顔をして洗面をつくっていたが、状況が状況だけに悠長な態度をとってられる立場ではなかった。

「あんたら、俺に用があるんだったらそこの人質を放せ・・・でないとまた痛い目を見るぜ・・・！！」

ローダは、強気だった。

今おかれている状況を分かってはいるつもりだったが、相手側の物言いが、まるで自分たちが被害者の様に言っていると聞こえたので、少々、頭にきてそう言い放っていた。

第一回目の襲撃の際、そもそもエネアとミネアの命を狙って屋敷に乗り込んで来たのは、この男達、もしくはその仲間の方だ。それを剣で斬り付け追い払ったのはローダ達であったが、自分たちがまさか相手に恨まれているとは思ってもみなかったのも、それはちょっと筋違いであろうと思わずにはいられない。

手酷く傷つけられて恨むぐらいなら、最初から襲撃など仕掛けてこなればばいい。

いざ戦いになれば、どちらかが傷つくことになるのは必然といえる。

それが嫌なら、襲撃などに加担しなければいいのである。

しかし、それらの男達は、まるでローダをやっと出会えた仇敵を迎えるような眼差しで睨んでくる。

おいおい、俺はこの前の男たちの仇役って訳か？

ローダは、そんな男たちを、何だかやるせない気持ちで蔑んでいた。

きっと俺は、相手の立場からすれば、この男たちの仲間を傷つけた悪人に映っているのだろうと、内心、迷惑そうな思いを隠せないでいた。

敵討ちをするのであれば、もっと正々堂々と渡り合えないものかと、多少、憤慨する気持ちもある。しかし、相手はそんな事は気にしていないのか、あくまで人質をとったまま多人数でローダに敵対する様子だ。

これでは多勢に無勢、恰好の餌食になりかねない。

ローダが、一人そう思っていると、男たちは動きを見せていた。

手に持つ短刀を鞘に収め、腰に吊してあった分銅付きの鎖鎌を数人の男が手に持ち替えると、それを頭上でぶんぶんと振り回し始めていた。

回される鎖は、分銅の影響でみるみる遠心力が付き、高速で回転している。

それをざっと見て、四人の男が同じ動作を繰り返して、ジリジリとローダとの間合いを詰める。ローダは、それを見て危険を察知し動こうとした時「動くな！ 動けば人質の命はない・・・」と、黒装束の襲撃者の一人に言われたので、そのままの姿勢のまま硬直してしまっていた。すると、四人の鎖鎌の男たちは、一斉にローダに対して分銅を投げ付けていた。

投げ付けられた分銅は、その繋がった鎖と共に、ローダの手足に狙い違わず絡み付く。

右と左の腕の一つずつ、また右と左の足の一つずつが絡み付き、合計、四つの鎖に拘束されて、本当に身動きがとれなくなってしまっていた。

四人の男たちが、その鎖を手元にぐいっと引き付けると、ローダは不恰好な形で四本の鎖に誘導され四肢が引かれる形になる。

腕は、前方に扇形の角度で突きだされ、足は、大の字に開き踏ん張りが利かない。

それは、丁度、磔になった死刑囚の心境だった。

男たちは、そのローダの姿を見てニヤリと笑った。

ローダが、そのような状態のまま四肢に力を入れて少なからず抵抗をしてみせると、新たに二人の男がローダの前に進みでて、二人、同時にして短刀を腰だめに構えると前傾姿勢をとって狙いをすましていた。

この俣では殺られる。

どうやら、その二人の男たちは、そのままローダを短刀で串刺しにするつもりの様だ。

両者の間に、緊張が流れる。

「死ねッ・・・！！」

冷たい掛け声と共に、二人の男が一斉に突進し、そのままの勢いを駆って短刀を前に突きだしてきた。

ギラリとした白刃の兇器が、ローダに差し迫る。

しかし、その短刀がローダの身体に触れるか触れないかの一瞬の時、その現象は起こった。

躍り掛かる二人の男たちが、その頬に微かな空気の揺れを感じたかと思った次の瞬間、突然に、横殴りの強い何かの力によって男たちは吹き飛ばされ宙を舞っていた。

二人の男が、猛烈な勢いで部屋の壁に激突する。

その口からは血へどを吐き、その衝撃で激突した壁の一部は陥没していた。

風である。

男たちを襲った目に見えぬ力は、突然、強力な突風をともなって生じた横殴りの猛烈な強い風であった。

その風は、大の男を二人さらい横へ軽々と吹き飛ばす。

ローダを串刺しにしようとして突進したその二人の男は、壁に激突した影響で一瞬、息が止まっている。

激突の瞬間、バキッという音がして鈍い不気味な衝撃音を響かせると、その風はスッという収束音を残して消え去っていた。

風によって吹き飛ばされた男たちは、床に倒れのたうつ様に一頻り暴れる。

どうやら、壁に激突した衝撃で、身体中の骨が砕けてしまったらしい。

その他に、内臓破裂も起こしている様だ。

外見からの見た目ではそれと判らないが、その男たちは、壁ぎわの床の上で身体をびくびくとひくつかせ、やがて絶命したようにその活動を停止していた。

それは、突然の出来事だったので、見ていた者はみな唾然とする。

黒装束の男たちは言うまでもなく、ハンス一家や使用人たちもその状況を見て絶句してしまっていた。

一体、何が起こったのだ・・・？

皆が、そんな疑問に頭を悩ませている次の瞬間、またもや微かな空気の揺れが生じていた。

その空気の揺れは、やがて風になり強大な力を巻き起こす。

ブフォウ・・・

そこには、猛風が吹き荒れた。

部屋中に置かれた調度品や花瓶の骨董など、また壁掛けに至までの全ての物がその風の風圧を受けて、倒れたり、吹き飛んだり、割れたりして、部屋中に散乱する。

そして風と共に、埃が舞い上がる。

皆が唾然とする中、今度は、ローダに鎖鎌を投げ付けてその身体を拘束している四人に、見えざる力が襲いかかる。

風は、ローダの身体を取り巻くようにそこから発生すると、彼の体を宿主とする様に強烈な突風へと変化し、その四人の男を猛烈な勢いで吹き飛ばしていた。

ドドッ・・・！！

ローダを拘束していた四人の男が、一度にもんどり打って後方へ背中から床に叩きつけられる。

咄嗟の事に、対応しきれなかった男たちは、したたか背中を打ち付けて床の上で悶絶していた。ローダは、四人の男が吹っ飛んだことによって、その身の自由が回復される。

腕と足に絡み付いた鎖を振りほどくと、剣を構えて、残りの男たちと対峙していた。

ローダのその顔は、まるで凶相的に満ちている。

冷徹な視線で、相手の黒覆面におおわれた顔面を凝視すると、次のような言葉を吐き捨てる。

「俺をあんまり怒らせない方がいいぞ・・・なかなか加減できないんでね・・・全員あの世いきになるから覚悟しろよ・・・！」

そう言い放つとローダは、ブンと一振りその場で剣をふるっていた。

白刃が空を斬る。

すると、その刀身からは、思いもしなかった烈風が巻きおこる。

一人の黒装束の男に、一直線にその烈風が走り抜けて直撃していた。

ローダの剣から放たれて、その男に烈風が到達するまで、コンマ以下、零点一秒の差異も経たない。

まさに、迅速の必殺剣だ。

その烈風をまともに食らった男は、短刀を持っていた右腕を、肩の位置から切断され、赤いまがまがしい鮮血が辺りに飛び散る。

凄まじい切れ味とスピード、その烈風は、剃刀の切れ味を誇って瞬間的に走り抜ける風の刃だ。烈風によって切り裂かれたその男は、ハンス一家や使用人たちに短刀を突き付けて人質をとっていた三人のなかの一人だった。

その三人の中の一人を、ローダは故意に狙って烈風を放っていた。

それは、人質を解放したいが為である。

人質を相手側の切り札にされては、こちらが身動きがとれず劣勢にさらされる。

そうならない為にも、今、何が起こったのか判らぬまま呆然としている者達の目の隙をついて、斬り付けるべき時だった。

今の際を逃せば、活路はない。

ローダは、腕を斬り落とされて悶絶している男を一瞥すると、すかさず、二撃目三撃目を放っていた。

ローダの剣から、また烈風がほと走る。

ザシュッ・・・

その烈風も、狙い違わず二人の黒装束の男に瞬時にして到達すると、鋭い切れ味を残して後ろへと突き抜けていた。

一人は首、もう一人は足にと、その烈風の直撃をくらい無惨にもその首と足は両断され、二人の男は、その場に血を噴きだしながら倒れこんでしまっていた。

人質をとって、短刀を突き付けていた三人の男たちは、ことごとく床を舐めた。

まさにそれは、瞬間的な神業とっていい。

黒装束の男たちは、未だに信じられないといったように口元をあんぐりさせていると、ローダが、ジルとセルシアに指示を出すように叫んでいた。

「ジル、セルシア、みんなを頼む・・・」

二人は、ローダの言葉を聞くなり、即座に動いていた。

人質に短刀を突き付けていた三人が倒れたことにより、ジルとセルシアはローダと対峙していた残りの襲撃者と、ハンス一家や使用人たちの間に割って入って、再び人質がとられないようにガードを固めていた。

相手は未だ十数人いる為、二人では心許ないが、居ないよりはマシだと思いながらジルとセルシアは、みんなを後ろへと下गरらせて対峙の姿勢をとる。

「貴様！ 風使いか！？」

ようやく我に返った襲撃者達の中の一人が、うわずった声を響かせてそう叫んでいた。「だったら何だっていうんだ・・・あんたら俺の異名を知らないのか？ 俺は《風のローダ》って言うんだ。以後おぼえておきな、死んであの世に去ったとき何かに役立つかも

しれないぜ！！」

そう言うときローダは、相手を嘲笑うかのような微笑を漏らしていた。

挑発である。

相手の注意を、自分の方へ一心に向けさせるための演技だった。

その言葉を聞いて、案の定、黒装束の男たちは頭にきたのか、殺気立つ眼差しでねめつけると、全員がローダを注視して白刃を光らせて来ていた。

黒装束の男たちが、動く。

人質のことなど、つゆとも感じず忘れてしまったかの様に、すり足で近づくと、ローダを扇形に包囲し始めていた。

だが、男たちは、ローダの風術を警戒して、不用意には近づかない。

男たち全員が、短刀をはす掛けに構えると、彫像のように固まってしばし緊迫した睨み合いが続いていた。

「何だ、攻めてこないのか腰抜けが・・・それじゃ手元の刀が泣くぜ！」

数は、倒れている者も含めて十五人、あとの五人は、大きな痛手を負った者が二人と既に息絶えている者が三人である。

腕と足を烈風によって両断された二人は動くことが出来ず、その場でのたうつ様に苦しんでいる。首を両断され、また壁に突風を以て叩きつけられた者は、無惨にも即死の状態のそれであった。

まだ、数の面では、劣勢に立たされているとわかっていい。

しかしローダは、強気の姿勢を崩さない。

人質をとられない為にも、自分がうまく立ち回ってこの場をきりぬけたい。

そんな中、ローダの物言いは功を奏していた。

相手は、ローダだけを倒そうと躍起になっている。

ローダの辛辣な言葉が、襲撃者達の心を熱くさせているのだ。

ジルとセルシアも、ハンス一家や使用人たちを庇い、固唾を飲んでローダと黒装束の男たちの動向を見守っている。

(ここが正念場だな・・・)

ローダは、そう思いをめぐらせると、自分の方から斬り出す決意を固めていた。

「攻めて来ないのなら、こっちから行くぜ・・・！！」

三度、風が巻き起こっていた。

ローダは、意識を集中するように、手持ちの剣を前面に押し出す。

すると風は、竜巻が巻き起こるように左旋回を始めると、皆が着ている服をぱたぱたとなびかせながら、その風力を強めて成長する。

次第に巨大化するその風の渦に翻弄されながら、男たちは、床に両手をつかばかりの態勢で、前傾姿勢をとっていた。

両足を床に踏ん張り、その強風に吹き飛ばされない様にその体制を維持すると、その風に逆らって前進してくる。

そんな中、さらにローダは意識を集中して風を操っていた。

突然、突風が巻き起こる。

巻き起こった風は、強力な風圧となって数人の男たちを吹き飛ばしていた。

その隙に、ローダは床を蹴る。

そして、疾風のごとき素早い身のこなしで、男たちに駆けると、剣を横様に一闪して同時に二人の男を斬り捨てていた。

斬り付けられた男たちは、凄まじい鮮血を胸元から迸らせ、脆くも床に崩れさっていた。

ローダは、次の標的を目で追っていた。

今度は、右手側に居る三人の男だ。

ローダは、その場で振り向きざまに再び横に剣を一闪すると、その剣先からは突発的に烈風が巻きおこり、鋭い弧を描いて放たれていた。

二人の男は、それを避け切れずにその身体を刻まれて、胴が真っ二つに切断されていた。

酷いようだが、その男たちの内臓が床に飛び散り、鮮血で絨毯を赤黒く染め上げている。

ローダに狙われた三人の内の一人は、その時、横様に転がるように退避したので、その烈風の刃からは逃れていたが、飛びずさる時に足をひねった様子で、苦悶のうめきを洩らしている。

しかしローダは、そんな事に気を留めてはいなかった。

まだ襲撃者たちは居るのだ。

先ほど突風によって吹き飛ばされた男たちも、床からむっくりと立ち上がり、短刀を構えて敵対心を顕わにしている。

意表をついた突風の攻撃をくらい、まだだいぶ足元がおぼつかない様子だったが、頭を、二三次、横に振ると、正気を維持し足に力を入れて床のうえに立つ。

ローダの攻撃に後れを取った事で、自尊心を深く傷つけられたのか、荒い息遣いのまま戦闘意欲を高めている様子だった。

ローダは、続けざまに三発の烈風を放つ。

その烈風は、びゅんと言う風きり音を発して男たちに迫る。

ビシュウウ！！

一発目は、見事、相手の喉元を切り裂きその男の命を奪っていたが、残りの二発は、標的をそれ、壁を深くえぐってその刃は無形の空気となって霧散してしまっていた。

いや、標的をそれたのではなく、狙われた二人の男たちが既のところ、その烈風を避けて飛びのいていたからだ。

相手も馬鹿ではない、一流の暗殺者らしく、ローダの攻撃法をだいぶ見切ってきたようだ。

男たちは、横に移動しながら風を避け、ローダに近づくと白刃を煌めかせる。

ローダの一瞬の隙をついて、四人の男が横合いから飛び掛かる。

ザン・・・

しゅうう

男たちの放った短刀が、空を切ったかと思うと、次にはその場にローダの姿は無く掻き消えていた。

飛び掛かった四人の男たちが、目を見張り標的が目の前からいなくなったことで辺り

を見回しおろおろとしていると、彼らの背後で気配がした。

『しまった！！』

男たちは、そう叫ぼうとしていた。

しかしそれは、声になることはなく、くぐもったうめきとなって口から紡ぎだされると、次の瞬間には、異様に鋭い鋼の一閃によって首と胴を切り離され二度と動かぬ屍となって床に倒れていた。

驚異的である。

それは人間の反射神経を、極端に逸脱した神速的な動きであった。

男たちには、今のローダの一連の動きが見えなかった。

ローダは、四人の男たちの短刀を避けると、その反動を駆って、そのまま横様に剣を一閃すると、一人、一刀のもとに四人の男たちをそれぞれその剣で両断していたのであった。

その動きと共に、その剣の切れ味も凄まじいものがある。

ローダの手に持つ剣は、ごく一般に売られている普通の剣だ。

しかし、その刀身には、何者かの神が宿っているかの様に今や白く輝いている。

それは、ローダから放たれる風の魔力と同じ力が加わっているのかは判らないが、その切れ味は、重さ一トンもある巨岩さえ易々と斬り裂くだけの威力を秘めているようにも思える。

斬り付けられた男たちは、絶命していた。

傷が骨まで断ち切られ即死の状態である。

ローダは、情け容赦がない。

あくまで襲撃者達の、殲滅をめざしているようだ。

だがその頃、さすがに残りの男たちは怯みを見せていた。

最初は、人質を取り、数の上でも優位に立っていると確信していた男たちであったが、ここまで相手が超人的に強いと、その意を削がれ戦意を喪失しても不思議ではない。

あれだけいた仲間が、今は六人にまで減っていた。

後の二人は、痛手の状態で戦うことは出来ない。

しかし失敗は許されない——それが男たちの間に流れる、共通の観念だった。

『だいぶ、手強い相手のようだね……』

だが、それは突然の声であった。

ローダを攻めあぐねて立ち尽くしている黒装束の男たちに届いたその声は、その彼らの脳に、直接的に響き働きかける特殊な声であった。

噎れた老人を思わせるその声は、男たちの鼓膜を通さず、頭のなかにギンギンとした響きを以て直接、紡がれてきた。

男たちは、その声を知覚したとき、びくんと少し驚いた態度を見せると、極端に緊張した様子でその身体を竦めていた。

『どうも攻めあぐねているようだが、私の力が必要かね……？』

再び男たちの脳内に、直接的な響きを以て言葉が紡がれて来る。

男たちは、その声を聞くと、嫌悪に似た態度で顔をしかめていた。

『いや、あんたの力は借りん。この場は俺達だけでなんとかしてみせる』

男たちの中の一人が、頭の中だけでそのような言葉を語り主に返している。

その言葉には、多少、刺が含まれているように突っ放した言い方だった。

『しかしこの仮では全滅も免れないぞ……それでもいいのかね？』

そう言われると、男たちは、黙って俯いてしまっていた。

その時、男たちの様子を覗っていたジルとセルシアは、その変化に気付いていた。

男たちの様子がおかしい。

先程まで、あれだけ殺気を漲らせていた男たちが、今は、蛙が蛇に睨まれた時のようにうろたえて、手をだらりと下げてしまっている。

ジルとセルシアが、一体、何があったのかと、怪訝な表情を浮かべていると、「お前は一体、何者だ……！！」と、ローダが、突然に叫びだしていた。

黒装束の男たちが、突然、驚いたような挙動を見せる。

それは、隠れて行っていた悪戯がばれて、ばつが悪いような子供の態度に似ていた。

男たちの視線は、自然とローダに注がれる。

『ほおおう、私の声が聞こえるのかね……これは大したものだ。私の念話は、お前に語りかけたものではないのだが、どうも漏れ出てしまったらしい……』

その声の主は、その言葉から意外であるといった意味合いの響きを洩らすと、嘲笑うかの様に、ハハハと笑ってみせていた。

『しかし、さすがは王家の血を引く者だけの事はある……やはり、風を操れるのもその血統の為なのかな？』

姿が見えぬその語り主は、何か恍惚とした言葉の響きを見せる中、それはあたかもローダに対して問いかける様な意味合いの言葉を発すると、語尾に疑問符をうってその言葉を締め括っていた。

「何を訳の判らないことを言っている。姿を見せろ。どこかに隠れているのは、分かっているぞ……」

ローダは、虚空に向かって語りかけていた。

彼は、先程から、誰かに見られているような視線を肌で感じ取っていた。

矢のように鋭利で、重くのしかかるような違和感は、ローダの肌を鳥肌を立てさせている。

最初は、何かの錯覚かの様に思っていたローダであったが、先ほど黒装束の男たちと何者かの会話が頭のなかに聞こえて来たことにより、何か見えざる人の力が働いているという感覚を覚えていた。

ローダには、確かに聞こえていたのだ、嘎れた老人のようなその声が……

しかし、ローダと黒装束の男たち以外、その声は聞こえていない様子だった。

ローダが、何処ということもなく虚空に向かって一人で話し掛けている姿を見て、ジルとセルシアやハンス一家たちも、怪訝な表情でローダを凝視している。

まさか、気が触れてしまったのではないかと、ジルとセルシアが心配そうに眉を曇らせていると、またローダの頭のなかに、あの直接的な言葉の響きが流れ込んできていた。『どうも威勢がいいようだ……でもとくと見せてもらったよ君の秘められた力をね……どうも君は今までその力を隠していた様だけど、やはりリムル・オール直系であることは確かようだ。君はおもしろい逸材だよ。今すぐにもその秘められた能力をもつ

と詳しく確かめたいのだが、それは後のお楽しみとしてとっておく事にしよう。その方がなにかと都合がいいからね……』

そう言うと、その何者かとも知れぬその声の主は、なにか意味深な含みを残して会話を打ち切っていた。

ローダにとって、その声の主が語った言葉の意味は、いまいち理解できなかったが、彼は、この声の主こそ、今度のエネア、ミネアを狙った襲撃事件の首謀者の一人のように思えてならなかった。

「待て、まだ話は終わってないぞ。お前が何者なのか、その正体を明かせ。でないといつ等の命はないぞ……」

こいつ等の命とは、ローダの目の前にいる黒装束の男たちのことである。

ローダは、その暗殺者達の命と引き換えに、事の真相を探ろうとしていた。

今度は、逆にローダがあたかも人質をとって、見えざる声の主に話し合いの主導権を一方的に握る勧告した形になっていたが、それは脆くも失敗に終わったようだった。

次に語られた、見えざる声の主の言葉が、それを告げるように紡がれていたからだ。『それは構わないよ……彼らは、死を覚悟して事に臨んでいる者達だ……死んでも文句など言うまい……君の好きにするがいい』

そう言って、見えざる声の主は会話を打ち切っていた。

もう、その声は聞こえてこない。

その言葉を聞いていた黒装束の男たちは、意を決したかのような眼差しで立ち凄んでいる。

そして男たち同士で、小声で何やらコミュニケーションをとると、再び対峙の構えでローダにその短刀を向けてきていた。

どうやら、最後まで戦いは避けられないようだ。

ローダは、多少、迷惑そうな顔をすると、一息、深呼吸をしていた。

そして、戦いが始まる。

男たちが、全員、一丸となって、ローダに対し躍り掛かっていた。

しかしそれは、ローダの一方的な展開になる。

戦いが避けられないと知ったローダは、また得意の風術を駆ると、軽い爆風に似た風圧を男たちに浴びせていた。

そのローダを中心にして、外円に放射された爆風は、必死の形相で躍り掛かってきた男たちを薙ぎ倒し、後方へ吹き飛ばす。

しかし男たちは、それでもむくりと身を起こし、立ち上がってきていた。

彼らは、ローダに近付けないことを悟と、今度は懐から手投剣を取り出し一斉に投擲してきた。

男たちは、プロのお手並みで軽々とその動作をこなす。

その狙いは、ローダの喉元を目標にし、的確に突き刺さるはずだった。

だが、やはり風が、ローダを守護している。

瞬時に一陣の風が吹き、横に流れたかと思うと、あたかも硬質の金属同士が触れ合うような「キン」という音が立て続けにおこり、その六本の手投剣は本来の軌道をそれあらぬ方向へ弾き返され失速して床に落ちていた。

男たちは、苦渋の唸りを洩らす。

通常の相手なら、今の投擲で、そのいく数本かは相手の喉に突き刺さり命を奪っていただろう。

しかし、今の相手は尋常ではない。

プロの暗殺者の正攻法を以てしても、彼を倒すことは至難の業だ。

今も風は、ローダの体を取り巻き、室内を旋回している。

男たちは、その擦れ合う風音を聴き、それがまるで悪魔の囁きのように聞こえ心胆を寒くして身を強ばらせている。

そんな中、ローダは、自ら動きを見せていた。

彼は、無造作に剣を薙ぐと、立て続けに烈風を三発、相手側に放つと、男たちの動向を窺った。

男たちは、案の定、それを予測して思い思いに横へ飛びずさり、その烈風が横すれすれを掠めていく。

ローダは、その隙に床を蹴って跳躍していた。

そして、疾風の勢いで相手との間合いを瞬時につめると、袈裟掛けに斬り付ける。

しかし、その標的となった相手は、それに気付き手持ちの短刀でそれを受ける。

二人は、二三度、剣戟を繰り返すと、両者とも後方へ退き間合いを取っていた。

すると、その横合いから、突然、別の男が腰だめに短刀を構えて突きかかってくる。

ローダは、それを既のところまで身を翻し避けると、その反動を利用して突きかかってくる男の背後から一刀両断的にその背中を縦に斬り裂いていた。

深々とした赤い筋が、その男の背中に刻まれる。

男は、無惨にも床を舐め、そして動かなくなった。

その後も、ローダと男たちの死闘は繰り返されていた。

男たちが、短刀で攻めると、ローダは剣術と風術でそれをやり過ごし男たちを翻弄する。

また、ローダが攻勢にでると、男たちは必死になって防戦に撤していた。

そのような戦いが何度か続くと、戦いの行く末は見えてきていた。

ローダが死闘の末、最後の男を斬り付けて、その相手の命を奪っていたのだ。

いざ、戦いが終わってみると、そこには累々とした死体の山が築かれ、部屋中を埋め尽くしている。最後に、その場に立ち尽くしていたのは、ローダただ一人だった。

二十人、近くの男は、既に斬り倒され、唯一、生き残ったのは二人の男だけであった。

ローダの放った烈風によって、片腕と片足を切断された男たちだ。

だが、運よく生き残ったのはいいが、その後は詰問攻めがまっていた。

ローダとジル、セルシアは、その二人の男たちにつかつかと歩み寄ると、剣を突き付けて睨みを利かせる。

男たちは、立ち上ることが出来ずその場でローダ達を見上げると、心底、悔しそうに奥歯を噛み締めていた。

ローダは、そんな二人の男たちの正体を明かすために、頭からすっぽり被っていた黒覆面を、おもむろに剥がすと、室内の電灯の下にその顔を曝していた。

二人の男の素顔が、顕わになる。

そこに現れたのは、何の変哲もないありふれた顔だった。

一人は、中年の四十代、前半くらいの男だ。

髪は、汗によってべったり額に張りつき、彫りの深い顔立ちに口髭を生やしていた。

肌は赤黒いが、今は出血の為か、貧血状態で顔色は青ざめている。

顔面中央の鷲鼻が特徴的で、その鼻を除けばなかなかの男前かもしれない。

そして、もう一人の男は、若い二十代くらいの青年だった。

髪は金髪で、短く切り揃えられ、顔立ちは顔面が殴られた様にへこんだ顔をしていた。

目元にはそばかすが浮き、年のわりには幼年期の幼い面影が残されている。

二人の男は、黒覆面を剥ぎ取られたことにより、電灯の光に眩しそうに目を細めふてぶてしい態度でローダ達、三人を見据えると、時折、痛む傷口をおさえ苦悶している。

そんな中、ローダは、容赦なく二人の男に詰問をしていた。

「お前達、一体だれに頼まれてここへ来た！？ 答えろ！！」

語気を強めて語るローダの口調は、なかなかの威圧感がある。

しかし、当の男たちは、苦悶の表情を浮かべながらも、しれっとした態度で堅く口を結んでいる。

どうやら、詰問に答える気はない様だ。

ローダは、仕方がないので、気が進まなかったが相手の急所を攻めることにしていた。

赤黒い肌の中年の男の肩口を足で踏み付けると、グッと力をこめて踏み躪っていた。

腕を切り取られた肩口から、再び血があふれだす。

「ぐううッ・・・」

男は、一際くぐもった苦悶の唸りを発すると、目を白黒させて悶絶していた。

「どうだ、答える気になったか！？」

ローダが、すかさず詰問を繰り返す。

しかし、応答はない。

ローダは、男たちの口の堅さに癡癡して、ジルとセルシアの顔を覗いていた。

ジルとセルシアもこれ以上、詰問を繰り返しても、ダメだというような顔をしてローダにその旨を伝えてくる。

ローダとしては、どうしてもこの襲撃の真相を明かしたいと思っていたが、男たちが口を割らないとなると、他に方法はない。

仕方がない諦めるかと思い、ローダが男たちの方を振り向くと、そこに異変を感じて目を丸くしていた。

二人の男たちが、がっくりと首をうなだれて、ぴくりとも動かない。

ローダが慌てて男たちの体を振って、揺すり起こそうと思ったが、すわりのない首がガクガクと前後に揺れるだけだった。

どうやら、二人とも、自分の舌を噛み切ったらしい。

その証拠に、口元からは、赤い一筋の液体が垂れて尾を引いている。

顔は青ざめ、既に絶命している状態だ。

ローダは、それを見て残念に思う反面、二人の男を悼む気持ちも多少なりとあった。

いくら戦った相手であっても、死んで「ざまあみろ」という心情は持ち合わせていない。

ローダは、二人の男たちの死体を床に寝せると、丁寧に手を合わせて黙祷していた。

これで、男たち全員が死んだ事になる。

しかし、襲撃の事の真相は、まだ謎に包まれたままだ。

その為、ローダは、深い溜め息を漏らすと同時に、これから先、事の次第がいかなる状況に変転するかを遠く慮り、堅く口を結び男たちの死に顔をじっと見つめ返すことしか出来なかったのである。

そう、その時、時すでに遅くしてからなのだったがだ。

第四章 事の真相

第一節

翌日、ローダ達は、ハンスも含めラドカープやそれに付き従う数人の傭兵達を交え、屋敷の三階にある一室を開け放って、昨日の襲撃の際の気になる点を話し合う為に会議を催していた。

昨日の襲撃の際、ローダが斬り捨てた襲撃者達の死体は、夜のうちに使用人たちや傭兵達を狩りだして、街外れの山林に墓標を立てずに埋めてきていた。

その作業は朝方までかかり、皆は眠い目をこすりながら今この場に顔を合わせている。

外で警備を担当していた傭兵達といえば、案の定、昨日ローダを罠にかけた妖術師の手によってその神経をマヒさせられ眠らされていた様だった。

傭兵達は、襲撃者を屠りその後、外の様子を見にいったローダ達の手によって、その意識を取り戻すまで、不覚にも眠りこけていた様子だったが、傷一つ負わなかったのは幸運といえた。

しかしその時、そこにはラドカープの姿はなく、ローダ達はその姿を探し回っていると、程なくして彼は姿を見せていた。

ラドカープの話によると、彼が屋敷の見回りをしている時、怪しい男が屋敷の二階から飛び降りて、敷地の外へ逃げていったというのだ。

彼は、それをやはり怪しいと思って追跡を試みると、湖のほとりで見失い仕方なく屋敷に引き返してきたというのだ。

ローダは、その話を聞いたとき、その逃げた怪しい男というのは、おそらく自分が取り逃がした妖術師だろうと目星を付けていた。

その男は、エネアをあやかしの術で操り、ローダに戦いを仕向けた張本人であったが、彼はミネアの部屋の二階の窓から飛び降り逃走を図っていたのだ。

しかし、ラドカープの話には、どうも腑に落ちない点がある。

それは、どうしてラドカープだけが、妖術師の術によって眠らされずにいたのだろうかという点だった。

ローダは、その事を不審に思い、彼に問いただしてみたが、ラドカープもその事に関してはよく判らないといったきり、口を閉ざしてしまっていた。

ローダにしてみても、それ以上、ラドカープを疑う気はなかったので、その事に関しては突き詰めずに不問のままにしていたが、その時のラドカープの態度が妙におかしかったことだけは覚えている。ハンスは、娘が無事であったこともあり、そんな些細なことは気にしていないらしく、妖術師を追跡したラドカープに労いの言葉をかけて、それで事を済ませてしまっていた。

そして昨日、襲撃者達の手によって殺傷された使用人の一人は、今日、柩にその遺体を入れられ、街に住む家族のもとへささやかな慰安金とともに帰されていた。

彼女は、不運にも息を引き取っており、そのような措置がとられたのだ。

家族には真相を伝えず、死んだ理由を不慮の事故によるものとしてその一件を収めようとしたが、それで納得がいったかどうかは判らない。

だが、その死んだ使用人には申し訳ないが、ローダの活躍で死傷者が独りですんだことは不幸中の幸いで、ハンスたちにとっては喜ばしいことでもあったのは確かだ。「では、あなたは襲撃者の中に、その妖術師なる男が混じっていたとおっしゃるのですね……？」

ハンスは、怪訝な表情を浮かべながらも、手にもつ葉巻を燻らせながら紫煙を吐き出しつつ、ローダに対したずね返していた。

「ええそうです。少なくとも二人は確実に居ると思われまますので、以後、気を付けた方がいいように思われるのですが、皆の意見を聞きたいと思うのです」

ローダは、そう言うところに集まった一同の顔を見渡し、何か意見はないかと、次の反応を待っている様子だった。

だが、ラドカーブを含めた傭兵達は、口を重く閉ざし俯き加減で黙りこくっている。

昨日の失態が、今も尾を引いている様子だ。

その妖術師なる男の術に落ちて、眠らされていたのは一生の不覚だったらしく、沈痛な面持ちのまま腕組みをしている。

それは、傭兵としての本分を發揮できなかった、自分たちに対する怒りのようなものにも思っていた。

「しかし、それが本当の事だとすると、今後、不用意な行動は出来なくなりますな……」

そう言葉を紡いだのは、ジルだった。

彼は、口元の髭をさすりながら一頻り考えをめぐらすと、そうおもむろに言葉を切り出していた。

「そうよね、相手があやかしの術を使う得体の知れない妖術師となると、剣の腕しか振るえない私たちには、手に負える相手かどうか判らないものね」

今は、しばし楽観的な態度で事を運ぶセルシアも、今度ばかりは、沈痛な面持ちでこの会議に参加している。彼女にしてみれば、出会ったこともない妖術師が、どんな力を秘めているか判らなかつたので、その妖術師の実像を、多少、誇大的な想像を以て推察しているように思われたが、それはそれとして良しとするしかなかった。

妖術師とは、一般にはよく知られていない、影の部分が多く付き纏う人種の者達だ。

一般の表舞台には顔を出さず、裏組織や闇の結社との繋がりも高いと思われている。

その活動は、謎に包まれており、暗の部分の色濃く出た不気味な存在と認識されているのは、事実だ。それが今回の襲撃に加担していたとなると、不安が無いといっっては嘘になる。

その為、今後の警備の方針を変えねば、また今回と同じ二の舞を食らわされる事になりかねない。だから、今は、今後どの様な警備の方針を以て、事に対処して、備えていかなければならないかを、この機会に綿密に取り決めなければならなかつた。

ローダは、昨日エネアが、妖術師の術に操られて自分を襲ったことや、襲撃者との戦い

の際、また、別の妖術師の声が聞こえてきたことを、ここに集まった一同に話していた。

二階のミネアの部屋に現れた妖術師は、どうやら小物であったらしいが、襲撃の際、聞こえてきた声の主の男の方は、相当の呪力を秘めた妖術師らしい。

これは、ロードの推測ではかった尺度であったが、その話を一同は耳にすると、沈痛な面持ちを隠しきれない様子だった。

「だが、警備の方針を変えるとんでも、一体、どうしたらいいと思ってるんだ。俺には、今までの方針を守る以外、他に方法はないと思うがな……その妖術師が、次にどんな罠をしかけてくるか判らないが、こちらは、その妖術師に関してはど素人とも言ってもいい。剣の力で守りしか、他に方法はないのではないか？」

ラドカープの物言いは、正論だった。

今までの警備をかえてみたところで、剣の心得しか知らない傭兵達にとっては、寝耳に水の話とっていい。妖術師の術に対して、どう対処すればいいのか、判る奴は居ないだろう。傭兵は、ただの傭兵なのだ、剣の道、以外、知る術はない。

相手は妖術師、あやかしの術を使って、姿を眩まし闇討ちをしかけてくるかもしれない。

その程度のことなら、お手のものだろう。

襲撃してくる相手が、剣の力が通じない相手であるのなら、どうしようもないのだ。

今後、どの様な術を仕掛けてくるかは判らないが、襲撃者の中には妖術師がいるということ念頭において事に対処すれば、昨日のような失態を繰り返すことは無いのではないかという傭兵達の意見もあった。

しかし、この話は物別れに終わり、結局、ラドカープの言うとおりに、今までの警備の方針を引き継ぐ形で、会議は終了ということになっていた。

そんな中、傭兵達は、屋敷の一階へ降り、また外で警備をするために玄関をくぐって庭に出て行ってしまっていた。

ロード達も、ハンスと供に会議に使われた一室を出ると、さっそくエネアとミネアの両姉妹の姿を探していた。

しかし、その必要はなかったようだ。

エネアとミネアは、三階の階段のところでロード達の話し合いが終わるのを見計らって、多少、手持ちぶさたの体で待っていた様子だった。

二人の姉妹は、ロードが部屋から出てくると同時にかけ寄ってきて、べったりとそばに侍って離れない。

それは、ロードのそばに居ればいちばん安全であると思うのか、もしくは好きな男性のもとに付きっきりで侍っていたいものなのかは判らないが、どうもおそらく両方の意味合いがあって、そうしていると見るほうが正解に近いらしかった。

ロードも、そんな二人の姉妹を嫌がることもなく、気安く接しているのだが、ジルとセルシアは、複雑な表情をしてそれを見守っているという姿勢が定着しつつある。

ジルとセルシアにしても、二人の姉妹のことは嫌いではない。

しかし、あまりにも二人の姉妹の好意が露骨なので、ジルにしてみれば、イフィーナという結婚を約束された女性が居るといのに、他の女性にうつつをぬかしている様なロードに対しては、なんて不本意な男女関係であるのだという目で見ると見る向きもある。

それに、セルシアにしても、ローダと二人の姉妹がべとべとする態度を見ていると、まるで自分に対して嫌味でも言われているようなそんな心境になり、あまり面白くないというのが正直なところだった。だが、二人の姉妹には何の悪気もないので、今の両者を見守りつつ傍観している姿勢は崩さないでいた。そして、ローダも、そんな二人の姉妹に対し、妹にでも接しているような軽い気持ちで、その関係を保っている様子だ。

ローダには、ローダなりの考えがあり、それに基づいて行動しているのである。

そうこうしている内に、姉のエネアの方が、ローダの耳に口寄せして、何か小声で話し掛けていた様子だった。

「ねえローダ様、先程の会議で、昨日、私があなたにした行為の話については、公言ならなかったのでしょうか・・・？」

「ああしなかったよ。そんな事、とてもじゃないが言える訳ないだろ。うまく話をぼかして、その事には触れなかったから、誰にも知られていないよ。安心して大丈夫さ」

ローダは、エネアに対し、小声で丁寧な言葉遣いを選び、そういつていた。

昨日、エネアが妖術師の術によって操られ、ローダに下着姿のまま迫ったことは、皆に知られてはならない話だった。いくら妖術師に操られての事であっても、なにか淫らな行為を暴露する様で、気が引けてならない。

それにエネアは、まだ年頃の娘だ、娘の仕付けにはうるさいハンスにその事が知れたら、ひどく叱られるのではないかという危惧があった為、どうしてもその事は隠さねばならない一件であった。ローダにしてみても、その事がジルになど知れたら、それこそ白い目で見られるのは必然だ。その為、その事はローダとエネアの二人だけの秘密にしておき、他の誰にも話さないというのが約束事であったのだ。

「よかった、私もうどきどきして、落ち着いていられませんでした。もしお父さまなどにその事が知られたら、もう一生お嫁にいけなかもしれないと思ってしまいました」

エネアは、半ば本気で、その事をローダにうったえていた。

もちろんその事は、妹のミネアにも内緒のことだ。

エネアとしては、仲のいいミネアにもその事を隠したい事の様らしい。

「ハハ、それは大げさだよ。だいいち君は操られていたんだ、何も悪いところはないんだから、いいじゃないか」

ローダが、しれっとした態度でそう言う。

「でも、知られたら困ります。だって、恥ずかしいことなのですから・・・」

エネアは、そう言うと、俯いてしまっていた。

羞恥心の為か、耳まで赤くなっている。

「ねえ二人とも、一体、何の話をしているのですか？」

そんな二人だけの、小声での会話が気になったのか、妹のミネアが、ローダとエネアの間に首を突っ込んでくる。

「何でもないのでミーネ。たいした事じゃないわ、気にしないで・・・」

エネアは、ミネアを愛称のそれでそう呼ぶと、慌てたようにその場の話題を取り繕う。

しかし、「まあひどい、二人だけで一体、何をコソコソしているの？」

ミネアは、話をはぐらかされた事で不満の体を表し、少々ふてくされた表情をして眉をしかめていた。

「そう言えば昨日、二人して二階の部屋にいたようだけど、そこで何をしていたの？
もしかしてエーネ姉さんは、ローダ様と二人っきりで逢い引きなんかしていたんじゃないの？」

ミネアの勘は、鋭かった。

ローダとエネアは、その時、確かにそれに近いことはしていた。

しかしそれは、ミネアが言う逢い引きとは少し違い、本当のところは妖術師の術によって操られていたエネアが、ローダに対し一方的に迫っただけの事だった。

ミネアは、不審の目でローダとエネアを覗き込んでくる。

するとそこへセルシアも、その話に、首を突っ込んできていた。

「へえーっ、意外とローダって手が早かったのね。その手のことに関しては奥手だと思っていたけど、案外、遊び人じゃない……エネアちゃん気を付けなさい、彼はとんだ狼かもしれないわよ……」

セルシアは、明らかに皮肉っていた。

彼女は、なにか不満があるらしく、白い目でローダだけを非難している。

それは、ひどく素っ気ない態度で、そのエメラルド色に光る双眸が冷たく微笑んでいるかの様だった。

「なんだ、ひどい事、言うなよ。俺はただ、エネアが気分が悪いって言うから、部屋に連れて行ってあげただけさ……狼だなんて、心外な事、言わないでくれ」

ローダは、そんなセルシアに対し、半分、本気で怒っていた。

セルシアにしてみれば、冗談で言った心算だったが、ローダはそれとは受け取らなかった様子だ。

「どうだかね？　あなたって、意外と信用がないから、なにかエッチなことでもしていたんじゃないの？」

セルシアは、更にわざと皮肉って、そんなような言葉をローダに対し吐きだしていた。

それは、ローダに対し、不満をぶつけるいい機会だったので、その言葉に容赦はない。

彼女は、軽く舌を出してあかんべーをすると、意味深な目付きで、ローダの反応を楽しんでいる様子だった。

「ええっ！　それって本当？　私はローダ様をととても紳士的な方だと思っていましたのに、そんな事するなんて、信じられない……」

すると、それを聞いていたミネアが、セルシアのその言葉を真に受けて、非難の声をあげてきていた。一体、彼女の言った「そんな事、とは、どういう意味なのかは判らないが、ミネアは、自分なりの勝手な想像を膨らまして顔を赤らめている。

どうやら、よからぬ想像をしているようだ。

ミネアは軽蔑の目でローダを見据えると『ぶいっ』という態度で、そっぽを向いていた。

しかし彼女は、ローダを心の底から憎めないのか、上目遣いの目で彼を見据えなおすと「本当にエッチな事、していたのですか？」と、多少、興味津々な態で聞きなおしてきていた。

「セルシア、あまり勝手な事、言わないでくれよ。ミネアが、誤解しているじゃないか。俺達は、君たちが考えているようなことは何もしていないから、そう変な方に勘ぐらな

いでくれ・・・」

ローダは、ミネアにあまりにも真剣に質問されたので、癡癡した態度で、セルシアに不満の言葉をぶつけていた。

彼にしてみれば、とんだ言い掛かりもはなはだしい。

その時の出来事に関しては、秘密にしてあるが、セルシアにまるで変態でも見るような目で見られるのは、心外である。

ローダにしてみれば、自分はいつも理性にかなった行いをしていると思っている。

それはよくジルに、感情的にならず理性を重んじろと指摘されるが為であるが、その事を念頭において、なるべくそうしようと心がけている。

それなのに、エネアとの関係を疑われて、納得がいかなかった。

「じゃあ一体、何してたって言うの？ 何もなかったって言うのなら、二人でコソコソ話をすることはないんじゃない？」

「それはそうだけど・・・」

だが、さすがにローダは、セルシアにはたじたじだ。

こんな女性を、将来の伴侶にしたら、一生、尻に敷かれるのではないかと内心、思わずにはいられない。セルシアは、姉御肌、丸出しである。彼女は、ローダを弟のように見ているのか、しばし姉のように接してくるときもある。

ローダは、何も悪いことはしていないが、そんなセルシアに何か負けたような気がしていた。

変に疑われた仮では嫌だったが、セルシアに対抗すると、また何を言われるか判らないのでそう言葉がでていたのだ。

「なあジル、なんとか言ってやってくれよ。これじゃ俺、一人がまるで悪者みたいじゃないか・・・」

ローダは、これ以上セルシアにはかなわないと思うと、後ろで話を聞いていたジルに対し、助けを求めていた。

しかし、

「そんな事、私は知りませんな。若が、コソコソするのが悪いのです」

それは、いやに冷たい態度だった。

そう言われてローダは、まるで親友を失ったかのように落胆する。

ジルも、セルシアの味方らしい。

セルシアはともかく、ジルまでも敵にまわしてしまうと、またうるさい小言を聞かされそうで、困ったことになりかねない。

しょうがないので、ローダは、黙りこくることしか出来なかった。

「ねえ皆さん、もうその話は終わりにして、お茶にでもしませんか？ 西の大公国ナパシムから取り寄せた、カモールのお茶の葉があるのです。それを煎じて飲むと、とても美味しいですよ・・・セルシアさんもアダトス様も一杯どうですか？ 私たちが、手によりをかけて入れますので、一緒にお茶にしましょう・・・」

「それはなかなかいい話ね。それじゃ一杯、頂こうかしら」

セルシアは、即答で応えていた。

彼女は、お茶には目がないのだ。ローダとジルの間では、無類のお茶好きと知られて

いる。

その為か、セルシアは、先程の話などそっくりそのまま忘れてしまったかのように嬉々とする、エネアに対して、お茶に関するうんちくをべらべらと語りだしている様子だった。

ローダは、それでエネアに救われたかたちになり、内心、感謝していた。

その後、ローダを窮地に追い込む話題は上らなくなり、お茶の話題に終始したからである。

第二節

「まずい……」

ローダが、そのお茶を口にした時の第一声はそれだった。

「あら、お気に召しませんでしたか？」

エネアは、まるで旦那に古女房が気安い態度で話し掛けるように言い放つと、ローダに対しそう問いただしていた。

「これって本当にお茶なのかい？ 何か酸っぱい味がするんだが、気のせいかな？」

ローダが、極端に渋い顔をして口から舌を覗かせると、ひーひーとそれを乾かしている。

別に、辛い訳ではないのだが、そのお茶の独特の味わいをその行為で打ち消そうとしているようだ。

「何、言っているの、美味しいじゃない。あなたの味覚ってまだまだね。このお茶のいいところは、この酸味の利いたのが特徴とっていい代物なのよ。分からないの？」

セルシアは、ローダを馬鹿にすると、まるでお茶の専門家であるかのような口調で講釈する。

すると……

「そうかなあ、俺はやっぱりオーソドックスに紅茶が一番、味わい深いと思うけどな……」

と、ローダは、多少、不満の体を表していた。

「なあジル、美味しいと思うかこれ……」

「そうですね、少々、癖のある一品のようですが、飲めないことはありませんぞ」

そう言うとジルも、苦い顔をしてそのお茶を不味そうに啜っている。

内心、ジルの中でも、このお茶はどうやら不評の様だった。

その証拠に、ローダと同じように、舌を出してそれをひーひーと乾かしている。

刺激が強いせい、舌をマヒさせる効果があるらしい。

「これは、カモール産のアプリリカというお茶です。少々、癖がありますが、飲み馴れるとなかなかやめられない味のある一品なのです。お茶の葉には、酸味が多分に含まれていて、美容と健康に良いということで評判がいいのです。貴族などの上流社会では、貴婦人がよく好んでこのお茶を飲みますが、なかなか一般では手に入らない高級品です」

妹のミネアが、セルシアの言葉を補完する形で、お茶の葉に関する知識を披露していた。

彼女が言うには、このお茶は高級品であるということだったが、ローダとジルにはどうも馴染めそうになかった。

これなら、普通のお茶を飲んでいたほうが、余程、味わい深いというような気もする。しかし、せっかく二人の姉妹が入れてくれたお茶なので、最後まで飲み干そうと決めていた。

ローダ達が、いま居るここは、屋敷の一階にある奥まった場所の厨房の中である。

アプリリカというお茶の葉は、よく料理にも使われるらしく、この厨房の保管庫に備蓄されて置かれている為、今ここでお茶を飲んでいるのである。

そこには、めずらしく、マリーネ夫人と弟のアルジャンの姿もある。

二人は、このお茶を飲み馴れているのか、平気な顔をしてそれを啜っている。

マリーネ夫人は、優雅だ。

それに比べ、アルジャンは乱雑さが目立つ。

まだ子供であるから仕方がないが、ティーカップからお茶をこぼすと、クロスでそれをエネアに拭き取ってもらっていた。

だが、どうもアルジャンは、先程から頻りにはしゃいでいる様子だった。

何故、はしゃいでいるのかというと、それは、ローダがアルジャンのすぐそばでお茶を飲んでいるからかもしれない。

アルジャンは、二度目の襲撃以後、ますますローダを尊敬の眼差しで見ようになり、最初、見せていたこまっしゃくれた態度もとれて、今は敬語を使って話し掛けてくる様になっていた。

それだけローダの戦いぶりが目に焼き付き、まだ幼いアルジャンにとっては、鮮烈だったのかもしれない。

ときおり剣術の稽古をせがむと、ローダは文句も言わずそれに応じてやっていた。

ここ数日間で、ローダは、アルジャンに対しいろんな事を教えてやっていた。

ローダに、剣術を教えてもらっているときのアルジャンは、真剣そのもので、前に言っていた様に、本当に傭兵を目指しているかのようだ。

アルジャンは筋がいい、それはローダも認めるどころだったが、彼が本当に傭兵に向いているかは疑問だった。

傭兵になるには、剣の腕はもちろんだが、傭兵仲間との折り合いも付けていかなければならない。

傭兵には、変わり者が多く、ローダも最初はその事で結構、苦勞を強いられてきたのだ。

ローダは、人付き合いが苦手な、傭兵社会の規律に馴染むには、長い時間を要したのは確かなことだ。傭兵として仕事をするには、いろんな事が試されてくる。

判断力、危機回避能力、決断力、順応力、その他、諸々の諸能力を兼ね備えて、初めて一流の傭兵として受け入れられるのだ。

ローダもまだまだその域には達していないが、ギルド入会当初よりは、格段に成長してきたことは確かだ。

そんな世界で、アルジャンがやっていけるかは疑問だ。

傭兵の世界では、図太い神経を多少なりともたないと、とてもやりきれない世界ではない。

だが、傭兵になるかならないかはアルジャンが決めることであって、ローダが口出しすることではないので、その事に関しては黙って見守っているというのが正直なところだった。

だが、傭兵の世界といえど地獄ではない。

新米傭兵を、歓迎してくれるという向きもある。

それらの事をよくふまえて、傭兵になるかならないかを決めればいいとローダは思っている。

アルジャンは、まだ幼いので、それらの事が分かるか分からないかはその成長に任せる事にして、今後、どの様な訓練を積みばいいかが問題であった。

やはり、よき師をもってそこから学ということも必要だが、豊富な人生経験も欠かせない。

ローダは、アルジャンに、この先ずっと師匠として教えてやることは出来ない。

いずれはこの街を離れなければならないし、この先、傭兵稼業を続けていくかどうかは分からないからだ。

ローダが国へ帰れば、イフィーナとの婚姻話が待っている。

下手をすると、一国の主になり上げられるかもしれない。

国王になりたい奴はともかく、ローダにはその気はさらさらない。

自分は、そんな柄じゃないというのが、ローダにとっての本音であったからだ。

「でも、ローダ様は本当にお強いんですね・・・まだ若いのに、お見事でしたよ昨日の戦いぶりは・・・」

だが、そう言葉を発したのは、マリーネ夫人だった。

彼女は、薄い唇を上下に開くと、えも言われぬ優雅さを漂わせてローダに対し話し掛けてきていた。

「いいえ、そんな事はありません、自分はまだまだです。ただ運がよっただけのことでしょう。人質を取られていると知ったときは、焦りましたからね・・・」

ローダは、謙遜しながらその言葉を紡ぎ返す。

「そんな事ない、すごいよ。二十人もの相手を蹴散らしてしまうんだから、絶対、天才だよ！」

そう言ってくれたのは、アルジャンであった。

彼は、目を爛々と輝かせ、マリーネ夫人とローダの会話に首を突っ込んでくる。

アルジャンは、この手の話になると黙っていられない様子だ。

しきりに目をぱちくりさせると、ローダの顔を覗いて、好奇の目で見つめてくる。

そんなローダは、恥ずかしいのか、頭をボリボリと掻き押し黙ってしまっていた。

「運悪く命を落とした使用人には心底、気の毒ですが、今後、ご遺族の方達には定期的に慰安金を送って、その死を弔いたいと思っていますのです」

マリーネ夫人は、沈痛な面持ちでそう言葉を紡いだ。

「それは最善の考えですね。きっとご家族の方も、その気持ちを解ってくれることでしょう」

ローダは、そのマリーネ夫人の心境を察して、丁寧な口調でそう言っていた。

「でも、昨日の風はすごかったよね。あれって、一体どうやったら風を巻きおこすことができるの……？」

アルジャンは、無邪気にそう言ってローダに問いたです。

それがアルジャンにとって、一番、聞きたかったことでもあったからだ。

「それは、意識を集中することによって風を操るのさ……意識の奥底で軽く念じて、風の精霊を使役する術を見いだすんだ……精神を日々、鍛練することにより、大気の脈動を掴み、それを我がものとする不思議な力さ……」

「へええっ、そうなんだ。僕にもそんな事ができるかな？」

「それは分からないな、俺は、子供のころから気付いたときには、その能力が使えていたんだ。どうもそれは先天的な能力らしく、今では戦いの際、役立ってくれていたことは確かさ……」

ローダは、淡々として、その秘められた能力の一端を語っていた。

ローダが、その能力に目覚めたのは、五歳の時だった。

彼には、幼い頃からよく口笛を吹く癖があり、その口笛がきっかけで気付いた能力であったからだ。

ローダが口笛を吹くと、それに呼応する形で風が吹いた。

最初は、偶然で吹いた一陣の風だと思っていたが、不思議に思い、二三度、強弱を加えてまた口笛を吹いてみると、確かにそれに呼応するように風が吹くのだ。

幼少の頃のローダは、まだその意味がよく分からず、面白がって何度も口笛を吹き風を操ることを楽しんでいて。

しかし、だんだん成長するにつれてその能力に疑問を感じはじめた頃、ローダは完全にその風を操る能力を獲得し始めていた。

風は、無形の大気が、その温度差などの影響で動くことによって吹く気まぐれな現象である。

その風の現象を司っているのは、世界に遍く秩序として厳然と存在する精霊力のたまものだ。

ローダは、その精霊を使役する術を身につけ、知らず知らずのうちに意識の奥底でそれを操れるようになっていた。

それは、魔術に近いものがある。

しかし、魔術は呪文の詠唱によりその力を発動させる手続きが必要だが、ローダにとっては風を使役することは、意識の集中によって得られるごく当然の事のように簡単な出来事であった。

ローダが、十五歳になると、精神を鍛練することにより、より強力な使役を可能とするまでになっていた。

剣の刀身から烈風を放つ技も、その頃、身につけた自己流の技だ。

当初は、その能力を誰にも言わず隠していたが、いざ窮地に陥ったときなどは、その力を躊躇わず使っていた。

その事は、ジルとセルシアもとうの昔に知っている。

何故そのような力が自分にあるのかと云う事は、分からなかったが、改めてその事をつきつめたことはない。

だが、その能力を使って、身を護れることは例え様のない事実だ。

現に、昨日の襲撃者達を全員、屠ったのも、風の力を操れる能力のおかげだからである。

ローダは、その能力に疑問を感じつつも、いつも風と共にあることを実感していた。

襲撃者は、ローダを「風使い」と称したが、それは的確に当を得た言葉のようでもある。

ローダは、自分ではただの剣士だと思っているが、それと同時に魔術にも類する術の能力を秘めているのだ。

だからアルジャンが、その事に興味をもつのは頷ける。

彼にしてみれば、ローダは、風を操る無敵の剣士のように見えたことだろう。

強くなりたいと望むアルジャンにとって、それは高い理想を目指し、それに向かって進もうとする者の淡い憧れの目標の様に思っていた。

強くなりたいと思うのであれば、それを自分も獲得して、風使いと称されたい。

それがアルジャンの、正直な思いであったのだ。

「ねえ、ローダさん、僕にも風を操る方法を教えてくれないかな？」

アルジャンが、ローダの顔色を覗いながら、謙虚な姿勢でそう頼み込んできていた。

しかし、

「いや、それは駄目だと思う。剣術はともかく、風術は精霊の力を感じ取れる先天的な能力がないと駄目なんだ。それに、自分でもこの能力についてはよく分からないし、人に教えられるとはとても思えないからね、残念だけど諦めてくれ」

そう言って、ローダはその申し出を断っていた。

「そうなんだ・・・」

アルジャンは、さも残念そうな口振りでそう言うと、落胆した様に下へ俯いてしまっていた。

「そんな落ち込むなよアルジャン、剣の稽古ならいつでもつけてやるから、それでいいだろ・・・」

ローダは、アルジャンを励ますかの様にそう言う。

「うん、僕、強くなれるかなローダさんの様に・・・」

アルジャンは、ローダの言葉により、少なからず気を持ちなおしていた。

その顔は、希望に満ちているような顔である。

風術はともかく、剣術だけでも教えてもらえるのなら、アルジャンにとってそれは喜びに値することなのだ。

尊敬するローダに、それを教えてもらえるのなら、間違いはないと思っているのだ。

「それは、努力しただいな。剣の稽古を欠かさなければ、成れるんじゃないか？」

ローダは、嘘は言わない。

アルジャンが、このまま剣術の稽古をしていけば、それなりの剣士に上達するだろう。彼を何度か指導した立場のローダから見ると、それはそう難しいものじゃない様に思える。

だから、その才能を伸ばすためにも、人並み以上の鍛練が必要だった。

「分かった、そうする。日々、鍛練が必要だもんね……」

アルジャンは、子供のくせに、悟ったようにそう言うと、にっこり笑い返していた。

それは、子供らしい親しみのある嬉しげな笑いだった。

ローダは、そんなアルジャンの頭に手をあてて、その髪をくしゃくしゃにしてかき乱していた。そして、ローダも同様に笑みをこぼすと、アルジャンの瞳を見つめ返していた。

それはローダの、アルジャンに対する、親愛の情を表す行為だったのである。

「ところで話は変わりますが、きのう妖術師がエーネを操ってローダ様を襲ったということは、本当のことなのですか？」

しかし、今度は、アルジャンにかわって、母親のマリーネが唐突に話題を変えてローダに対し話し掛けてきていた。

「ええそうです。それは本当のことですよ……」

「でも変ね、襲撃者達の狙いはエーネとミーネのはずでしょ。それなのに、エーネを操ってローダ様を襲わせるなんて、一体どういう了見なのでしょう？ 何か目的が違っているような気もするのですが、私の思い過ごしでしょうか？」

マリーネ夫人は、自分が疑問とするところを明晰に推察して、ローダにその旨を述べてきた。

「確かにその点はおかしいですな。狙いはお嬢様方なのに、その当の本人を操って若を襲わせるのは、どうも釈然としない気がします。何かよからぬ思惑が働いていると思っても、それは仕方がないのではないのでしょうか……」

ローダにかわって発言していたのは、ジルだった。

彼も、マリーネ夫人と同意見らしく、腕組みをしてウーウーと唸りながら、その釈然としない妖術師の思惑を考えあぐねている様子だった。

「でもそれは、ローダと皆を引き離すための罠なのでしょう。ローダがいれば、襲撃がうまくいかないと考えたから、そうしたんじゃないの？ きっとそれは考えすぎなのよ……」

だが、セルシアは、楽観的な態度でそう言い放っていた。

彼女からして見れば、その妖術師の行動は、ローダを仲間から引き離すための別要員の、存在として、襲撃に参加していたと見ている。

現に、ローダがいなかった事により、襲撃者達は屋敷内に乱入し、人質をとることが出来たのだ。

しかし、その後ローダの活躍によって、乱入してきた襲撃者達は、みな屍にされ屠られていたが、運悪く一歩、間違えれば、襲撃者達の手によってミネアは命を落としていたかもしれないのだ。

「マリーネ夫人、事のしだいはともかく、皆の命が助かったのですからいいんじゃないありませんか？ 相手は得体の知れない連中です。どんな手段で襲撃を仕掛けてくるかは、その時になってみないと判りません。疑問に思うのも尤もですが、考えすぎるのはどうか

と思いますよ……」

しかし、ローダは、落ち着いた態度でそうっていた。

彼にしても、マリーネ夫人が抱く疑問には一理あるように思えるが、いくら詮索しても答えが出るわけではないので、その事に関しては考えない方がいいように思っていた。「そうですね、やっぱり私の思い過ごしかも知れません。でもやはり、次の襲撃は果たしていつあるのでしょうか？ 今後、襲撃がなければそれに越した事はありませんが、今の私にはそれが何より気掛かりでならないのです……」

マリーネ夫人、彼女は、不安気であった。

一度目の襲撃に続き、二度目の襲撃があったことで、だいぶ神経がぴりぴりして気に病んでいる様子だった。しかもローダ達と襲撃者の戦いを目撃しているの、人が死んでいく姿をまざまざと見せつけられ、相当、気分を害しているのも確かだ。やはり夫人も女性である。人が倒れて血を流す場面は、直視できないといい。またそれと同時に、エネアとミネアの心配もしなくてはならない。その為、病弱の身には、何かと堪えるのは事実だった。

「その事なら心配はいりません。三度目の襲撃があるのならば、自分たちは全力であなた方をお守りします。ですから、不安にならずに楽しんでいてください。私どもも、最善を尽くし努力しますので……」

その為、ローダはそう言う。

「そうですか、それはありがとうございます。でも、自分達の身も大事にしてくださいね。あなた方にもしもの事があつたら、私は、夜うなされてしまうかもしれませんから、その事をよろしくお願い申します」

それは、マリーネ夫人なりの、ローダ達に対する労りの言葉でもあった。

ローダ達は、よく立ち回ってくれている。

とくにローダには、感謝の言葉を隠せない様子なのだ。

彼は、第一回目の襲撃および二回目にわたるまで、獅子奮迅的な目覚ましい活躍をこなしてくれていた。ローダが居なかったら、今のハンス一家はなかったであろうと思わずにはいられない。

それに、ハンス一家は、皆ローダ達を家族の一員かの様に思っている節がある。

こうしてお茶などをマリーネやアルジャン、エネアにミネアの二人と一緒にあってご馳走になっているのは、その証しといえた。

ハンス一家は、いい家族だ。

善良的で、気安く、金持ちであっても奢るところがなく、至って謙虚だ。

その為、ローダ達から見れば、彼等は理想の家族といってもいい位である。

そんな家族であるからこそ、ローダ達も、傭兵として命をかけられると思っていた。

だから、マリーネ夫人の配慮は、逆にローダ達が感謝してしまうほど優しい言葉の響きのようでもあった。

命に代えて守ろう……

それは、ローダにその決意を促すほど、その言葉は、大切なものの一つに思えてならなかったからである。

第三節

その日は、あいにくの雨であった。

空にはどんよりとした雲がわだかまり、天から降り注ぐ日の光をさえぎっている。

気温もだいぶ低く、肌寒い空気がエルドバの街、全体を覆いつくし、ひっそりと静まり返っている様子だった。

雨は小降りであったが、じくじくとした湿気は肌をべとつかせ、不快指数を高めている。

しかし、湖畔に集う水鳥の群れは、意気揚々と水中の餌をくちばしで掻いっばんでそれを食している。

そんな中、ローダとジル、セルシアの三人は、また屋敷の一階の接客用の応接室でやわらかな皮張りのソファの上に腰を下ろし、向かい側の一人の男を睨み付け、まるでこれから戦いが行われるかのような不穏な空気を撒き散らしながら向かい合っている。

三人の向かい側に腰を下ろしている人物は、白い上下のスーツに黒のシャツを着込んだ三十ぐらいの男だ。

名を、カイル・ルヴェッツァーニという。

約数日前、一度この屋敷を訪れている男だ。

ローダ達は、使用人の老紳士に來客の旨を告げられ、今こうしてここにその男と顔を突き合わせているという具合だった。

彼はこの前、ローダと会ったときと同じように相変わらず金の腕時計とネックレスをじゃらじゃらなびかせながら、遊び人、風情の風体を顕わにしている。

ローダは、そんな男を見据えながら、『またこの男かよ・・・』と、極端に不機嫌な表情を隠し切れない様子だった。

ジルとセルシアを含めた三人の中でも、彼は一番、険悪そうな顔をしている。

それは、二度とこんな奴に顔をあわせたくないという心境が如実にあらわれていて、客人の前だというのに、その態度を崩そうとはしていない。

それとは別に、ジルとセルシアは初めて会う目の前の男を品定めするような目付きで、つぶさに彼を観察している。

この前、ローダにそのカイル・ルヴェッツァーニの人物像を聞いていたので、それを実際に再確認する意味合いがあるのではあるが、そんな態度を見て当のルヴェッツァーニは困惑した表情で椅子に腰掛けている。

しかし、それも束の間、テーブルの上に灰皿が置かれてあるのを見ると、懐のうちポケットから煙草を取り出してそれに火を点け、紫煙を撒き散らしている様子だった。

「それで、今日は一体、何の用で来たんだ・・・？」

そんなカイル・ルヴェッツァーニの態度を見据えながら、ローダは、無愛想にそう問いただしていた。

「そうだね・・・それじゃまずそちらのお二方に自己紹介をしなければならないね？」

ルヴェッツァーニは、ローダの顔を一瞥すると、知れつとした態度でそのわきに座るジルとセルシアに目を向けて、そう口走っていた。

「それは結構、もう既にあなたの話はこちらのローダに伺っております。今更、自己紹介はいいですから、話の要点だけを簡潔に述べていただけますかな？」

そう答えたのはジルだった。

彼もローダと同様、ルヴェッツァーニを第一印象的によからぬ風体の男と品定めしたのか、その言葉は事務的で冷たく突っ放した言い方であった。

それにセルシアの方は別に、その男には何ら興味も示さず普通に見ている様子だった。

彼女からして見れば、この遊び人風情の男はよく街角で見かける軟派な男たちと同類で取るにたらない存在としてしか感じないのであろう。

あえて嫌悪感示さなかったが、どうでもいいといった表情だった。

「あんた、今日はどんな目的があってここへ来たかは知らないが、この前のように話をはぐらかすのだけはよしてくれよ・・・」

ローダが、多少、怒りをまじえてそう話を切りだしている。

ジルとセルシアの二人も、ルヴェッツァーニが語る話には興味があるのか、身を乗り出す様にして彼が口を開くのを待っている。

当初、ルヴェッツァーニがこの屋敷にきて、会いたいと指名してきたのはローダだけであった。しかし、今ジルとセルシアの二人もこの席に同席しているのは、彼らもルヴェッツァーニの話の直に聞いてみたいと思ったからで、無理やりこの場に同席してローダを交えた三人でその男と対峙している。

ルヴェッツァーニもその事に異論はないのか、ジルとセルシアが同席しているのを嫌がってはいない様子だ。

だが、少なからず気圧された感じは、持っている様だ。

「実は今日、伺ったのは、ローダ、君に知らせたいことがあって来たんだ・・・」

「知らせたいこと・・・？」

ローダは、怪訝な表情を浮かべる。

「ああ、君の父アルスレイドの事なんだが、判ったんだよ彼の消息が・・・」

ルヴェッツァーニは、何気なくその言葉を発していた。

「なんだって、親父の消息が判ったって一体どういうことなんだ!？」

驚いたのはローダだった。

彼は、身を乗り出す様にして叫ぶと、ルヴェッツァーニの目を見据えて問いただしていた。

「君には前にも言っただろ。親父さんがイルアデフという組織と深くかかわっているって。それでそのイルアデフという組織が、君の親父さんを軟禁しているらしい」

「軟禁？ それじゃ親父は、その組織に捕まっているということなのか？」

「そういう事になるね・・・」

ルヴェッツァーニは、何ら感情をこめず素っ気ない言葉遣いでそう答えていた。

「で、それはどこなんだ？ 軟禁されている場所は・・・？」

ローダが、真剣な顔付きで問いただしてくる。

しかし、ルヴェッツァーニは慌てず、一呼吸、間合いをおくと次の言葉を語っていた。

「俺達が調べた情報によると、それは西の大国【ディルガーム】帝国らしい・・・」

「ディルガーム・・・？」

「そう、ディルガーム帝国には、イルアデフという組織の本部があるんだ。彼らは、そこを拠点に活動をしている。しかし闇の組織だ、その本部がどこにあるのか迄は判らないが、この情報は、親父さんを捜している君の助けになるだろうと思って今日ここへ伺ったのさ」

それは初耳だった。

ディルガーム帝国は、西の大陸の北端に位置する軍事大国だ。

事実上、西の世界の覇者としてその存在を知られている帝国である。

噂によると、まだ十七歳の若い皇帝が帝国を治めているということであったが、どうやらその政権は腐敗政権に近いらしい。

若い皇帝は、政治にあまり関心を示さず、後宮に美女を囲い享樂に耽っているという悪い噂もある。帝国の首都は、肥沃な大地として知られるムーンライトのアステークにある。

その都市は、五百万都市として知られ、煌びやかな榮華を誇っているといわれている。

ルヴェッツァーニは、その国のどこかにローダの父アルスレイドが捕らわれていると知っているのだ。

「なる程、その話を聞いてアルスレイド様の消息に関してはよく判りました。しかし、何故、そのようなことを私たちに教えてくれるのでしょうか。私たちにどんな見返りを期待しているのです？」

ローダにかわって、発言していたのはジルだ。

彼も、ルヴェッツァーニの行為に疑問を感じるらしく、何かよからぬ思惑があって今日ここへ来たのだろうと思い、そう問いただしていたのだ。

「見返りだなんてそんな事はないさ。俺はただ好意でその事を教えに来たんだ。他に他意はないから安心してくれ。これで俺を信用してくれるとありがたいんだが、どうかな？」

ルヴェッツァーニは、ジルの言葉を聞いてそれを否定していた。

彼は、少々ジルの言葉に癖癖していたが、悪怯れた様子もなく笑顔を浮かべている。

おそらくそれは、疑いを晴らそうとしての愛想笑いであったが、その笑顔がローダ達、三人に受け入れられたかは疑問だった。

「それは無理ね、あなたがどんな目的を持って私たちに接触してきたのかを話さない限り、信用なんかできないわ」

それは、セルシアの発言だった。

彼女も、その男を信用できない様子で、その様な言葉を紡ぐと冷たい視線でルヴェッツァーニを見据えている。

「そうだ、俺達は真剣なんだ、あんたみたいな遊び人風情の男の言う事など信じられる訳ないだろ。俺達に好意を持ってくれる事はありがたいが、コソコソと隠し事をする奴に

とやかく言われる筋合いはないね・・・」

そこへ、追い討ちをかけるように、ローダの発言が続く。

ローダは、いくらルヴェッツァーニが好意を示したとしても、はなっからこの男のことを信用などしていなかった。

しかし、親父の消息に関しては興味をそそられ、問いただしていたのも確かだ。

「そうか、それじゃ、今回の仕事の依頼から手を引くつもりはないんだね？」

「ああ、ないね。何度も言うように、隠し事をする奴の言うことなど聞く気はない！」

ローダは即答で応える。

その有無を言わさぬ口調は、ルヴェッツァーニがこの前ローダと二人で話をした時に感じた疑問の真相を明確に語らないかぎり、改善される兆しは無いといえたのである。

「君達には参ったな、分かったよ、それじゃ事の真相を明らかにすればいいんだね？」

ルヴェッツァーニは、諦めにも似た溜め息を吐き出すと、意外とあっさりそう言っていた。

「ああ、話してくれるのなら、あんたのことは信じてやってもいいぜ・・・」

それに対しローダは、毅然とした態度でそう言うと、少しばかりその鋭く睨み付けていた眼光を軟化させる。そして、ルヴェッツァーニの言葉を条件付きで受け入れる姿勢を、渋々と承諾するのであった。

「わかった、じゃあどこから話せばいいか迷うところなんだが、俺が所属している組織の事について話そう・・・」

ルヴェッツァーニは、その言葉に一度、数秒間の間合いを置くと、次のような言葉をおもむろに紡ぎだしていた。

「実はね、俺が所属している組織とイルアデフという組織は、本をただせば目的を同じにした一つの組織だったのさ」

「同じ組織・・・？」

「そう、俺の所属している組織は《バドニス》とって、やはり西の大陸エウロカにその根拠地を置く慈善団体なんだが、その本体は、昔《アルカーナ》と呼ばれた救世的思想をもつ一大組織の下部組織として働いていたのさ。イルアデフという組織もバドニスと同じくアルカーナの組織に組み込まれた下部組織であったんだが、実は意見の食い違いをある手段の相違事から必然的に生じさせて、アルカーナという組織の中で両者は派閥闘争を始めるようになり、結局その二大派閥はバドニスとイルアデフという二大組織に分裂し、別々の働きをするようになったんだ。

バドニスは孤児や難民、貧民、老弱者などの救済を目的として活動をし、その組織を拡大してきた慈善組織だ。また世界に科学力によって得られる恩恵をもたらそうとその普及と研究に努める学び舎の里でもある。

要するに、バドニスは、人類の繁栄を望む理想主義者が寄り集まってできた団体だ。

その目的と理想とは、かつて大陸全土にわたって史代、稀に見る栄華を誇った古の王朝【リムル・オール】の支配者たちが残した遺跡の遺産に隠されている高度に洗練された科学力を復活させ、人類の繁栄に大きく貢献させようとする遠大な理想といえる。

だが、イルアデフは違う。彼らは、リムル・オールの高度な科学力を復活させようとする目論んでいるのはバドニスと何ら変わりはない。

しかし、イルアデフの連中は、その科学力を私利私欲の為に使おうとしている。

それをどうしても阻止しなければならないんだ。

分かるかいローダ、君にその事が？

それが俺達バドニスの、目的としている遠大な計画なんだ……」

ルヴェッツァーニは、そこまで言うとき軽く唇を結びその渴きを潤している様子だった。「なるほど、あんた達の組織の目的はそのリムル・オールなんかと言う王朝の科学力を復活させて、人類の繁栄に大きく貢献させようというんだな。しかしその事と俺達にどういう接点があるんだ？」

ローダは、ルヴェッツァーニの言っていることがいまいち腑に落ちなかったので、そう問いただしていた。古の王朝リムル・オールなどという言葉がでてきたので、大陸の歴史には疎いローダには、なんの事かさっぱり分からなかったが、バドニスというルヴェッツァーニが所属している組織の目的は判った。

しかし、その話のどこにローダ達が関わってくるのかは、どう見ても疑問に思わずにはいられなかった。

「リムル・オールは、約一千年前に滅んだ古代王朝だ。その強大な権力で大陸全土を支配し栄華を誇ったが、今では大陸各地に都市として機能していた街の廃墟が残されており、当時の繁栄は嘘のようにその屍をさらしている。

しかし、その王朝が滅ぶ寸前、リムル・オールの王族や高官たちは、ある一つの封印を残して国の大事な遺産を地下深くに埋蔵したんだ。

その遺産には、莫大な財宝と洗練された科学のノウハウを記した膨大な書物が隠されていると謂われている。

かつてリムル・オールは、何万人もの人が居住できる都市を空に浮かべたという実例もある書物には克明に記されてあるんだ。

その為、それらの技術を可能とするその膨大な書物の発掘は、計り知れない高度な文明の力をもたらすことは間違えない。

そして、それを手に入れる為には、その封印を解かねばならない。

そこで、その事に深く関わってくるのが、君なんだ……」

「俺がか……？」

「そう、君はアルスレイドのことを、父親だと信じているね？」

「そんな事、当たり前だろ。俺にはアルスレイド以外、親はいないんだ」

ローダは、一瞬、ルヴェッツァーニが何を言いたすか疑問であった。

だが、次の瞬間、その言葉を聞いて絶句した。

「実はそれは違うんだ。君は信じるか信じないかは分からないが、君の父アルスレイドは君の本当の父親じゃないんだよ」

ルヴェッツァーニは、淡々とした口調でそう言うと、ローダの表情を覗くように見つめ返してきた。

ローダは、目を丸くして一瞬の間、何を言われたかその真意が判らずキョトンとする。

だがしかし、ローダは、次には我に返ってやっとその言葉を紡ぎだした。

「親父が俺の本当の親父じゃないって、どういう事なんだ！！」

その顔付きは怒りに満ちていた。

それは突然、突拍子もないことを言われて、驚きを隠せない表情とあいまった一種の困惑的な戸惑いの表情もそれにプラスされて銅像のように強ばってしまっていた。

「まあそう怒るなよ。この話は確かな信憑性がある話なんだ。俺もこの事に関しては君の心情を慮って言いたくはなかった話なんだが、事の真相を明かす為には避けては通れない話なんだ」

それは、ローダの怒りと困惑を逆撫でせず、微妙な諭しをいれた紳士的な物言いではあった。

ルヴェッツァーニは、ローダがこの話を聞いて驚くのを予測していたらしく、なるべくそっとその話題に触れたつもりだったが、やはりローダを怒らせてしまったようだ。

「それってどう言う事、もっと分かりやすく説明してくれない？」

だがそこへ、両者の話題に口を挟んできたのは、セルシアだった。

彼女は、怒りを隠しきれないローダを宥めると、ルヴェッツァーニに対し、さらに核心に迫った話を続けさせようと、その事に関して詳しい説明を求めている。

「実はね、アルスレイドは、ある研究室から子供を連れだしてそのまま行方を眩ました逃亡者なんだ……」

「逃亡者……？」

「そう、それは、約十九年前、まだバドニスとイルアデフが一つの組織だったアルカーナ時代の頃、そこではある研究が行われていたんだ……」

「その研究って、どんな研究なの……？」

「超常的な力を持つ人の研究さ……人の中には稀に不思議な力を先天的にもった子供が生まれてくる場合がある。アルカーナは、そういった異能の子供たちを集めて研究をしていたんだ。それは新しい人種による優れた文明社会を築くための布石的研究だったらしい。つまり、その優れた子供たちの中の一人がローダ、君だったという事なんだよ……」

ルヴェッツァーニは、そこで言葉を区切る。

そして、琥珀色の目を細めて、まだ怒りおさまらないローダを見据えていた。

「それじゃ俺は、ててなしの研究体だったとでもいうのか……！？」

ローダが憤慨した態度で、ルヴェッツァーニを睨み付ける。

「おそらくそういう事になるね。アルスレイドの本名は《イルバルト・ナスタム》とって、若い頃からアルカーナで働いていた組織の一員だったらしい。俺はまだバドニスの新参者だから、当時のことはよく知らないんだが、アルスレイドが組織を離反し君をその研究室から連れだしたのは確かなことなんだ」

「それで、俺は、そのリムル・オールとの封印と、どういう関係があるんだ？」

「それはね、君はアルカーナの研究室にいた子供たちの中でも特別な存在だったのさ。」

アルカーナは、古代リムル・オールの遺跡の発掘も手掛け、今は既に滅びきった都市の廃墟をくまなく調べていたんだ。そんなおり、リムル・オール王朝の首都【デラルーム】の王城の廃墟の地下で、王族の墳墓を調べていたとき、一人の赤ん坊を発見したんだ。

その赤ん坊は、今の技術では見たこともない生命維持装置みたいなケースの中に入れて発見されており、そこで一人眠っていたらしい。

どうやらその赤ん坊は、リムル・オール王朝の王家の血を引いているらしく、生命維

持装置のケースのネームプレートには《ユ・デラウ・ウェン・イローダ》と書かれていたんだ。

それは古い言葉で、風を操る者、イローダ、という意味らしい。

おそらく、それが君の本名だ。

そして、リムル・オール王家の紋章は『風』だ。

彼ら王家は代々、風を操り気象を操作する技を身につけていたと謂われている。

要するに君は、リムル・オール王朝の王家の血を引く眷属であることは間違いないんだ。

これはその君の発見当時からわかった事なんだが、リムル・オールの王族が為した封印とは、その王族の血筋によって開かれるということらしい。

その為、イルアデフの連中は、君の行方を血眼になって探していたのさ……」

そこまで言うトルヴェッツァーニは、一つ軽い深呼吸をする。

そして静に話を聞いていたローダ、ジル、セルシアの三人の顔を見渡し、以後どの様な反応を示すのか、その表情を盗み見るように覗き込んで来た。

「どうだい？　これで事のあらましが判っただろ。ここまで話したんだ俺を信じる気になったかな？」

「「「……」」」

三人は、押し黙ったままだ。

ルヴェッツァーニの話した内容が、自分たちの理解の範疇を越えた遠大な話であったので、頭が混乱しているのかもしれない。

しかし、話の大まかなディテールは掴めたといってもいい。

ローダ達、三人は、しばらく椅子に腰掛けたまま腕組みをすると、かなり苦い顔をして考えに没頭してしまっている様だった。

「話は判った。俺はその古代王朝の王族の血を引いている眷属だというんだな。しかしその事を証明する証拠はどこにあるんだ？　俺が赤子の頃、そのアルカーナという組織の研究室に居たということは何を以て証明できるんだ？」

「それは君の右の掌を見れば判ることさ。そこには番号が記されてあるはずなんだ。円形にそって記された古代語と、109、という数字が刻まれているはずだろ？」

そう言うトルヴェッツァーニは、ローダの掌をのぞき見るように窺っていた。

「これの事か？」

そんな中、ローダは、自ら率先して右の掌を差し出し、ルヴェッツァーニにそれを見せ付ける。

「そう、それだよ、それが何よりの証拠だ。そのナンバーはアルカーナの研究員が子供の識別に利用するために割り振ったナンバーだ。特に百番台の数字が刻まれている子供は、その能力が優秀な子とされていた」

「で、それであんたは、俺に何を望んでいるんだ……」

「それは君に、仲間になってもらいたいさ。おそらくイルアデフは君の王家の血統を利用して、リムル・オールの遺産をあばき、それを我がものにしようと思っているようなんだ。俺達バドニス者にとっては、それを看過して見過ごすことは出来ないんだ。なぜなら、イルアデフの連中は、それを手に入れたら何をするか判らない奴らだ。だから、

本格的にイルアデフが君を狙う前に、その身の安全をはかりたいと我々は思っているのさ……」

「ジル、この話しどう思う……？」

ローダは、あまりにも話が複雑なので、自分自身の考えに自信が持てなくなり、隣に座るジルに対し意見を求めていた。

「どう思うと言われましても、こんな話をされてもいまいち実感が湧かないのではないですか？ 話の信憑性に関してはあるかと思いますが、全てを一概に信じろといっても無理なことでしょう」

ジルは、淡々とした口調でそう言う。

するとそこへ、セルシアも口を差し挟んでくる。

「やはりそうよね。ローダ、あなたがリムル・オールの王家の血統を引き継いでいるということなんかまるで信じられないのよね。だって結構ローダってまぬけでしょ、それに不精者だし、女の子には弱いし、勘は鈍いし、方向音痴だし、子供には馬鹿にされるし、お洒落にはうといし、融通はきかないし、そんなあなたが高貴な血統の一族だなんてとても思えないわ」

「おいおいそれは酷いじゃないか……俺だって古代の王家の血を引いているなんて云われても信じがたいが、それは言いすぎだぞセルシア。俺になんか恨みでもあるのか？」

「まあまあ二人とも、言い争いをしている場合ではないのですぞ。今は大事な話の真っ最中なのでですから、もっと神妙な態度で応じてください」

「ハハ、君たち面白いね、どこかの道化師か何かかい……？」

しかしローダ達、三人は、ルヴェッツァーニのその言葉を無視して、再び姿勢を正して向き直っていた。

「ところでルヴェッツァーニ、あんたはさっき、俺に仲間になれって言ったけど、それはバドニスの為に働けということなのか？」

ローダが、それとなく真剣な顔付きで問いたです。

「いや、それはちょっと違う。俺達の組織が目指している目的の為に、協力してほしいんだ。もちろん、そちらのジルとセルシアにもご協力、願いたいんだが、どうかかな？ 君たちも俺が話した企業秘密を知ってしまったんだ、イルアデフの連中にますます狙われるかもしれない。もしよかったら、俺達バドニスの組織で匿ってやってもいいんだ」

それは、ローダ達の身を案じた、気安い誘いでもあった。

しかしローダ達は、その誘いに対し良い顔はせず、易々とそれに乗じてくる様な表情は見せなかった。

「悪いがそれは出来ない。俺達は傭兵だ、自分の身は自分で守れる。それにまだあんたを信じられる気分じゃないんだ。もう少し様子を見てからでないと何とも言えないね」

ローダは、きっぱりとそう言い切っていた。

その顔付きは断然、否定的である。

彼としては、ルヴェッツァーニの言葉を信じていいようにも思えてはいたが、未だに警戒心を解くことが出来ず、その気になれなかった。

「おい、ちょっと待ってくれよ、こっちは秘密を明かしたんだぜ。それでもまだ君たちは俺を疑うというのか？」

「ああ、たとえあんたの言っている事が本当であろうと、俺達には俺達なりの信念がある。それにまだ俺達は、狙われているという実感が湧かないんだ。そうである以上、このまま仕事を続けるしかないんでね、折角だが仲間にはなれない」

「でも、君たちは狙われているんだぞ。君たちがアルスレイドの消息を追いながら傭兵稼業を続けているということは、イルアデフの連中にはつつぬけなんだ。秘密主義をもっとしているイルアデフの連中にとっては、君たちがこのまま独自にアルスレイドの消息を追うことで彼らの組織の秘密にせまり、ひた隠しにしている組織の内情が世間に漏れることを恐れるかもしれない。ローダはともかく、ジル、そしてセルシア、君たち二人に関しては命の危険にさらされるかもしれない。そうならない為にも俺達バドニス、君たちの身の安全を図ろうと思っているんだ。だからこの話し受けいれる方が無難だと思うんだけどな・・・」

ルヴェッツァーニは、真摯な姿勢で言葉をまくしたてていた。

それは他愛もない冗談なのではなく、心底、危機感を抱いてジルとセルシアを擁護しようとしている様な向きでもあった。

しかしジルとセルシアは、いまいち乗り気ではない様子だ。

それはそうかも知れない。

秘密を明かしたとはいえ、即座に信じろというのが無理な話である。

二人は、ローダの顔を覗くと、毅然として次のような言葉を述べていた。

「私たちをあまりみくびって欲しくはないわ。こう見えても傭兵ギルド《鋼鉄の角》の傭兵なのよ、自分の身を護るすべぐらい心得ているわ」

「そうです、相手がいくらイルアデフという闇の組織であろうと、やはりまだ得体の知れないバドニスなどの擁護など受けたくありませんな・・・」

それは、どこから来る自信であるかは判らなかつた。

しかし二人は、ルヴェッツァーニの言葉を、受けいれる気にはなれない様子だ。

それは頑なな否定の姿勢ともいえなくはなかつたが、ルヴェッツァーニの甘い言葉には、そう易々と乗る気にはなれないという意思表示でもあった。

「そうか、それなら仕方ないね。でも覚悟は決めておいたほうがいいよ。イルアデフの連中は狡猾だ、いつどの様な方法で君たちを狙ってくるか分からない。その為よく身边には気を付けるべきだね。そうでないと取り返しのつかないことにもなりかねないから」

さすがにルヴェッツァーニは、それ以後の説得をあきらめたのか、そう言葉を紡ぎだすと、渋々、忠告をつけ加えていた。

ジルとセルシアに頑なに拒まれては、返す言葉が見つからなかつた為であろう。

しかしルヴェッツァーニは、完全に落胆はしていない様子だった。

その軽薄そうな琥珀色の目を細めると、意味ありげなニュアンスを含めてローダ達、三人を見つめ返す。

そして、その甘いマスクの唇を歪め、シニカルな笑いを浮かべたかと思うと、灰皿に煙草の火を押しつけ、おもむろにそれをもみ消し、しばらく寛ぐように腰を椅子に沈め、吸い込んでいた煙を無造作に吐きだしてはソファに深々と身を預けていた。

それはいやに余裕のある態度であった為、ローダ達、三人は怪訝に思ったが、あえて何も指摘はせず、そのまま話を打ち切っていた。

その笑いが、どのような意味をもっているかは三人には不明だったが、あまり気持ちのいい笑いではなかったことは確かで、ローダは内心それを無視しルヴェッツァーニの術中に陥ることを拒み、無感情な表情を装ってその彼の瞳を何気なく見つめ返し、無言の抵抗を試みているのであった。

第四節

曇天から降りしきる雨、それは応接室の窓から外を覗くと灰色に染まった陰鬱の世界をそこに現出させている。そこから見える景色は、全て不明瞭な幕を張ったベールに包まれて今にも色褪せて崩れ落ちてしまう様なそんな錯覚さえ覚えていた。

朝から降り続けるその雨は、今では本降りになり、雨足はひたひたと音をたてて降りしきっている。

緑のたわやかな木々は、その雨を受けて色濃くその身を彩りその存在を誇示しているが、不明瞭にわかかったその世界では、それさえも薄ぼやけて一種のまだ貧弱な若木のように枝を天に向かって走らせ空をささえているかの様にも見えた。

ローダ達、三人は、まだ先程の応接室にいる。

遊び人、風情の優男、カイル・ルヴェッツァーニは、今し方、帰ったところだ。

その所為か、三人の緊張もやわらぎ、今はすこし平常時の明るい表情を取り戻している。

しかし、ルヴェッツァーニによって事の真相を明らかにされた為か、いくぶん沈痛な面持ちも残されているように思っていた。

「しかし、さっきの話、本当のところどう思うかな？」

ローダは、心なしか覇気のない口調でそう言うと、ジルとセルシアの二人の顔を覗いていた。

「正直なところ疑問だらけですな。若かりムル・オールなどという古代王朝の王族で、あのアルスレイド様が、赤子を連れだした逃亡者であるなんて一概に信じていいものか迷うところがありますからな・・・」

ジルは、少し戸惑いを隠しきれない様子で、ローダのその質問に答えていた。

彼は、ルヴェッツァーニの言った言葉を全面的に信じられない様子で、顎の白い髭をしきりにしごいている。

それは、実感がなく、語られた真相が何かの夢物語のように曖昧として重く肩ののしかかってくるような感覚に苛まれていた。

「でも私としては意外に信憑性のある話じゃないかと思ったわ。だってルヴェッツァーニはローダの掌にある紋様の秘密を知っていたし、そのリムル・オールの王族が風を操

る能力者であるということも語っていたわ。ローダは現実に風を操ることができるでしょ？ その点からしてみてもリムル・オールの眷属であるということは意外と確かなことじゃないかしら。その事に対してどう思う？ あながち嘘、偽りはないように思えるけど……？」

「確かにそうですが、でも彼の所属するバドニスという組織が本当に慈善組織であるのかということはどう思うのです？」

「その事に関しては私うわさで聞いたことがあるのだけど、西の世界ではかなり有名な組織らしいわよ。エネムヨルグスという教団と手を組んで慈善事業に乗り出しているようだけど、かなり民衆に受けいれられている組織だし、これといって悪い噂は聞かないわ。

でもイルアデフという組織に関しては謎のままといってもいいわね。その連中がどのような思惑を持って動いているかは判らないけど、彼の言うとおりに今後、身边には気を付けるべきよ」

そう言うとセルシアは、ローダの顔を覗く。

彼の意見を聞いてみたいと、そう思ったからだ。

しかしローダは、自分で話題をふったにもかかわらず、先程から頬杖をつき何か考えあぐねている様子で俯いてしまっていた。

「ねえ、どうしたのローダ？ さっきから暗いわよ」

それをみかねたセルシアが、ローダの肩をゆするようにして注意を促す。

するとローダは重たく顔を上げて、まるで亡霊のような表情をしてジルとセルシアの顔を見渡していた。

「一体、何を考えているのローダ、辛気臭くなるのはよしてよ。私たちまで暗くなるじゃない……」

「ああ悪かったよ、実を言うと親父のことを考えていたんだ……」

「もしかして、あなたの親父さんが本当の親父さんじゃないって事について？」

「そうなんだ、本当のところを言うと俺も前々から薄々は感じていたんだ。俺とアルスレイドは本当の親子じゃないんじゃないかってね。でもルヴェッツアーニにそれを指摘されて一瞬カッときたけど、内心じゃやっぱりそうだったのかとそれを一応認めていたんだ。だからもし話が本当であるのだとしたなら、なんで親父はアルカーナっていう所の研究室から俺を連れ出したのかが気になって考えていたのさ……」

「そうよね、でも気持ちは判るけどしっかりしてよね。私たちはあなたを頼りにしているのよ。命を狙われるかもしれないんだからそういじいじと落ち込まないでもらいたいわ……」

「わかっているよ、考えても仕方ないし仕事に差し支えがあってはしようもないからね。考えるのは止めにするよ……」

ローダは、一人、悩んでいた様子だったが、セルシアに発破をかけられて少し気を取り直しそう口走っていた。

事の次第はどうあれ、ウジウジとしていてもしょうがない。今は仕事のことには専念しなければと、ローダは自分の掌で顔をたたいて気合いを入れ直し、立ち上がって腕をブンブンと振り回していた。

それは、彼としての自己流の気合いの入れ方であったが、ジルとセルシアはその姿を

見てプツと吹き出し親しみの笑みをこぼしていた。

「あら、三人とも、やはりまだここで話をしていたのですね？」

だが、

と、その時、突然、三人がいる応接室の扉の方で声が聞こえてきていた。

開け放たれた儘になっていたその扉の横に立っていたのはエネアだ。

その後に、ミネアと屋敷の主人ハンスの姿も見受けられた。

そして老紳士の使用人が一人、手元にティーセットを抱えてそこに立ち控えていた。

「やあ、お三方、話をしている途中で悪いのですが、私どもも話があって来たのです。お邪魔でしたかな？」

ハンスがツカツカと応接室に足を踏み入れ、歩みよりながらその言葉をかけてくる。

「いいえ、そんな事はありません、ちょうどいま話が終わったところです」

セルシアは、そう言ってソファから立ち上がると、ハンスに対し向きなおっていた。

その後につられるように、ジルとローダも立ち上がってハンスを迎える。

ハンスは、そそくさとして三人の向かい側のソファの前に立つと、何の躊躇いもなくそこへ腰を下ろしていた。

そして、ローダたち三人にもその場に座るように促すと、使用人を手招きしてお茶の準備をするように命じていた。

エネアとミネアは、立ったままハンスの傍らに控えている。

一体、何の話であるのだろうと三人は怪訝な面持ちでおずおずとソファの上に再び腰を落としていたが、ハンスがおもむろに話を切り出してきたので聞き耳をたててそれに応じようと姿勢を正していた。

「実はですな、話というのはここ、二三日中に、この屋敷でささやかなパーティーをひらきたいと思ってその事を事前にあなた方に確認しておきたいと思ひ話をしに来たのですが・・・」

「パーティー？」

三人は、一斉にハンスの言葉を聞きなおしていた。

パーティーなどといわれたので、一体、何の話があってハンスがここへ来たのかと怪訝に思っていた三人であったが、それを聞いて一瞬、気を削がれた形になり、多少、自分たちの耳を疑っていた。

「いやなに、親類縁者や仕事上の知人などを集めた貴族社会における社交会のまね事です。ざっと数えて百人近くの客人を招いて催す顔見せ的なパーティーですが、これは毎年この時期になると恒例で行っている我が家のしきたりです、欠かすことの出来ない私どもの重要な慣わし事なのです」

ハンスは、そこまで言うと思をつぐ。

そして、目の前の三人の反応を待って口をむすんでいた。

「で・・・では、この屋敷に人が集まるという事なのですね？」

セルシアは当然のことを口にだしていた。

パーティーといえば、多くの人々が来賓として訪れる社交の場なのだ、人が集まって当然の事といえる。

しかしそれは、セルシアやジル、ローダにしてみてもは突拍子もない話であったので、自

ずとそれを聞き返していたのだ。

「そういう事になりますな・・・この事は既に警備の傭兵達やラドカーブ殿にも話してあります。あなた方が先程の客人とこの部屋で話をしている間にね・・・」

「ですが、ここでパーティーを催すとなると何かと警備の方が大変ではないのですか？」

「それは尤もです。しかしまた新たに傭兵ギルドの方から傭兵を十人程度、雇いましたので、その方々にも当日の警備を担当してもらい、守備をしっかり固めますので心配はいらないでしょう」

「そうですか、でも、パーティーなどひらいて大丈夫なのでしょう吗？　いくら警備の人員を増やしたとしても、人が大勢、集まる中でもしも三度目の襲撃があったとしたら混乱は否めませんよ・・・」

「それについてはラドカーブ殿にも言われましたよ。娘たちが狙われている以上、パーティーなどひらくのは危険すぎると指摘されました。ですが、私どもとしましては仕事上どうしても知人たちとそういった形で交友を深めるのが常道でして、何度も言いますが欠かせない慣例行事の一つなのです」

「ハンスさん、俺は反対ですよ、いくら警備の人員を増やしたからといってパーティーなどをひらけばこちらに隙ができ、警備や護衛に支障がでるのは必然です。どんなに腕の立つ傭兵でも、その隙に付け込まれば万事休すといっているでしょう。だから、この話は見合わせた方が無難です。お嬢さん方のことが心配なら、これは当然の事であると思いますよ・・・」

「しかし、これはもう決まった話でして、何かとご指摘のところもあると思いますが、どうか話を受けいれてくださいませんか？　またあなた方が活躍していただければ間違いは起こらないとそう思うのですが・・・」

「そんな、俺達を過大評価しないで下さい。一度目と二度目の襲撃がどうあれ、俺達たちは万能ではありません、意外なところで失態をおかすかもしれないですよ。それをよく踏まえてもらわないと困ります」

「しかしですな・・・」

ハンスは、ローダの言葉を受けて困ったように顎をしゃくり上げていた。

彼としてみれば、ローダ達がこのまま話を受けいれてくれれば何の問題はなかったが、思わぬ反対意見にあい言葉が躊躇している様子だった。

それも、ローダ達がエネアやミネアの身の安全を図りたいという心情からでた反対の意思である為、ハンスもその事に文句のつけようがなかったのであるが、やはり思わぬ壁にぶちあたったためか渋い顔をしている。しかし、どうしてもハンスとしては、パーティーをひらかなければならない事情があるためか、ローダ達を納得させるための言葉を探そうと「ウー」と唸りながら思案している様子だった。

だが・・・

「大丈夫ですローダ様、私たちのことなら心配はいりません。パーティーの当日はあなたの傍を付きっきりで離れませんから、それならいいでしょ？　この前のように気分が悪いなどといいませんから、どうか父の言葉を受けいれてください」

それはエネアの言葉だ。

彼女は、命を狙われている当事者でありながら、父親であるハンスの言葉を後押しす

る形で援護をおこなっていた。

それは、横に控える妹のミネアも同意見らしく、頻りにうんうんと頷いていた。

彼女たちは、二度にわたる襲撃で命の危険に晒され身の寒い思いをしたというのに、そんな事はつゆにも感じさせない態度で、何事もなかったかの様にけろっとしている。

そんな二人をローダの立場からしてみれば、なんて危機感のない姉妹なのだろうと、心の中でその心情を疑わずにはいられなかったが、二人の姉妹のたつてのお願いなので邪険にすることも出来ず、ハンス同様、頻りに頭を悩ませ考えあぐねている様子だった。「でも危険だよ、相手には妖術師がいるんだ。それでもいいというのならもう反対はしないけど、以後、気を付けた方がいい。でないと何時どこで狙われるか判ったものじゃないからね」

だが、しばらく考えて出た答えはそれだった。

ローダにとっては、二人の姉妹を守ることが雇われ傭兵としての義務であるが、その二人に言われたのではそうするしか他に方法がなかった。

ジルとセルシアにしてもローダと同意見なのか、あえて口を差し挟むことはしなかったが、二人とも渋い顔をしているのは見え見えだった。

「いやー、よかったです。あなた方に反対されて一時はどうなるのかと思いましたが、これで心おきなくパーティーを開催することが出来ます」

ハンスはそう言うと、嬉々として手を打って喜んでいた。

それは端から見ると、いやに大人げない子供じみた仕草に映ったが、それでハンスは喜びを表現しているのだと思い何も言わなかった。

ローダ達は、雇われの身であったからハンスの申し出にそれ以上、反対することは出すぎた真似だと思いきやそう言っていたのだが、最終的に決めるのはハンス自身である。

彼が決断すれば、パーティーの開催は決まったようなものなのだ。

ローダ達には、それを強引に拒む権利はない。

ハンスは、彼なりにローダ達に敬意を表してこの話を事前にしておきたかったのだろうと思えるが、それはそれとして今、考えるべきは、そのパーティーがひらかれる当日の警備と護衛の方針であった。

パーティーがひらかれるのであれば、屋敷内は客人で埋め尽くされる。

当然、屋敷の外だけでなく、中の方も警備の人員を配置しなければならなくなる。

ハンスは、どの様な考えを持っているのかは判らないが、パーティーの当日はエネアとミネアを付きっきりで護衛しなければならないだろう。

二度目の襲撃のような失態は、もう侵すことは出来ない。

ローダ達が、付きっきりで二人の姉妹の護衛をすれば、狙われる危険はだいぶ回避されることはできる。

しかし、かといってそれが全面的に安全であるとは限らない。

この前のように、人質をとられてしまえば、身動きがとれないのだ。

二度目の襲撃のときは、襲撃してきた黒装束の男たちに油断があった為、一人の使用人をのぞいては、人質に危害は加わらず傷を負うことはなかったが、今度がまたそうとは限らない。

それに不気味な存在なのが妖術師だ。

ローダの見たところでは、妖術師は二人いる。

また襲撃があるとすれば、その連中がどう関わってくるのかが最大の難問でもある。

今度は、どのような形で襲撃に妖術師が加担してくるのが問題なのだが、警備の傭兵達もその事はよくわきまえているはずである。

また前のように眠らされることは無いだろうと思えるが、意識をしっかり持たないとこの前の二の舞を演じるかもしれない。

それはどうあっても避けたい事であったが、傭兵達を信じて任せるしか他に方法はない。

この様な状況を鑑みると、この時期にパーティーをひらくなどという事は、多分にリスクが大きいといえる。しかし、それはハンスのたつての願いなので、くつがえす事は出来ない。

それに話の筋は変わるが、本当か嘘かローダ達はイルアデフという組織に狙われている可能性もあるのだ。

そんな事もあり、ローダ達は頭を極端に悩ませ考えあぐねるしかなかった。

パーティーの当日の警備は、今後、警備の傭兵達やラドカーブも交えて話し合えばいい。

だが、ルヴェッツァーニの言った言葉が頭に引っ掛かり離れない部分もある。

イルアデフという組織が本当にローダ達を狙っているという証拠があれば頭のもやもやが晴れる様な気もするが、今のところは様子を見るしかない。

その為、今回はまた襲撃があるのなら、それがエネアとミネアを狙った襲撃なのか、それともローダ達を狙った襲撃であるのかをはっきりさせたい部分もある。

だから、いずれにしても今後、気を抜くことの出来ない正念場になる様な気がしてローダ達、三人は、二人の姉妹を見つめながら重苦しい溜め息を吐き出すのであった。

事の真偽はどうあれ、イルアデフという組織の、今後の出方を待つしかないのである。

第五章 パーティー

第一節

三日後、ハンスが新たに雇った十人ほどの傭兵達も含めて、屋敷内の警備が厳重に行われパーティーが開かれていた。

屋敷には、夕刻からぞろぞろと招かれた客人たちが、豪華な二頭立ての馬車で乗り付け、黒のタキシードや色とりどりの華やかなドレスで身を包んだ男女が、つぎつぎと訪れてくる。

訪れる女性のほとんどは、きらきらと輝く宝飾品を身につけ、男性はカフスに懐中時計それにネクタイピンが輝いている。それは、ハンスが貴金属品を扱っているせい、その彼の店で買い上げた宝飾品の品々であるようだ。

パーティーに、参加する客人の顔触れは様々だ。

齢八十を越える老人や、まだ若いカップルなども多数、招かれている。

それらは、全てハンスの仕事上の関係者や友人でもあるようだ。

また、その中に、このエルドバの街の有識者の姿も見受けられる。

ハンスは、骨董品や貴金属の販売を手広く手掛け、それらの人々にも顔が利く様だった。

訪れる客層を見ると、ハンスの交友関係が如実に判る様で、はたから見ていると、かなり面白い顔触れが揃っている。

先程も言った有識者を筆頭に、街の長老、会計士に弁護士、商工会の職員に常連顧客、また伯爵夫人に、その他の有力貴族、それにいかがわしい金貸し業者に街の情報屋など、あらゆる分野にわたって顔をそろえている。

それに、遠方の街からわざわざ足を運び、泊まりがけで来る客人もいくつか見られるようだ。

それらの人々や、縁戚にあたる人は、屋敷の別館にあたる東側と西側の建物で、今夜、宿泊してもらうことになっている。

西の別館は、この前の爆弾騒ぎで、一部、炎上し黒焦げになっていたが、その場所を除けば、まだ使用に耐えられる筈でなんら支障はない。

宿泊する客人からは、その炎上した理由を問われそうだが、うまく言葉を濁して誤魔化すしかない。それで、万事うまく行くはずで、そうこそそする事ではないだろう。

そうこうしている内に、屋敷にはぞくぞくと馬車が乗り付けられ、客人たちが詰め掛ける。

パーティー会場になっている場所は、屋敷の一階にある吹き抜けのホールだ。

そこは、屋敷の一番、奥に面した汎用フロアーであるが、こんな時にしか使われない、

遊びの為の場でもある。いつもパーティーをひらくには、このフロアーがもってこいの場所で、こういった社交の場には、おおいに役立つ。そのフロアーは、屋敷の他のどの部屋よりも調度品が豪勢で、故意に特別、見栄えがする造りになっている。

ホール内には、円卓がいくつか並べられ、水色のクロスで装飾され、その一つ一つに花瓶と美しい花が飾られ、華やかな演出がなされている。

数は、全部で十テーブル。すべてがお揃いで、ハンスがじきじきに選んだアンティーク物の円卓だ。こういった小物にも、こだわりを持つことから覗えるが、ハンスは根っからの良識的な成金のようだ。天井には、巨大なシャンデリアが、淡い光をともし、豪華な彩りを添えているが、それは、アグデプト家の豊かな財力を、暗に誇示しているように燦然と輝いているようだった。見ようによっては、七色に光るクリスタルが使用され、洗練されたシルエットをもつシャンデリアであるが、ホールの大きさを考えれば、これでぴったり当てはまる代物であった。

パーティーの開催時刻は、夜の七時からだ。

早々に訪れた客人たちは、使用人によってホールに誘導されると、さっそく同じ客人たちどうしで、他愛もない雑談にうつつをぬかしている。

中には、この場で久方ぶりにあった知人と顔を合わせた事により、喜びの声を張り上げて、抱き合っている人の姿も見受けられた。それに、ひそひそと話をする者、時間を気にして、手元の時計を見やる者もいる。

ハンスは、このパーティーを顔見せ的なパーティーといていたが、あながちそれは嘘ではないようだ。屋敷に集まったほとんどの人々は、久しぶりに会った知人を見ると、嬉しそうに挨拶を交わしたりしている。

そんな光景を、横目で見ながら、警備の傭兵達とラドカーブ、それにローダ達、三人は、ホールの二階に位置する踊り場の手摺りの上から、ぞくぞくと集まる客人の顔触れを観察し、溜め息を漏らしていた。

観察して判ったことの一つは、人の数が多いということだ。当初、ハンスは、百人程度の人が集まるとっていたようだが、この様子だと、その倍の二百人は下らない。

それだけハンスの交友関係が、多岐に亘っていることを示していたが、こう人の数が多いと、屋敷の警備に支障がでかねない。

この日の警備の方針は、既に決めてある。

三日前、皆で集まって、話し合っていたのだ。

それは、簡単明瞭である。

外の警備は、ざっと数えて五人の傭兵達に任せ、あとは新たに雇った傭兵達、十人も含めて、屋敷内の警備だ。

それに、ローダ達、三人は、エネアとミネアの付きっきりの護衛を担当し、その傍を離れない方針である。

これだけの人が集まると、その警備も手薄になりそうであるが、限られた人員しか居ないので、それは仕方のない事であろう。

新たに雇った者も含めて、傭兵の数は総勢、二十五人。一応、警備の目的は、襲撃者に備えるものではある訳だが、集まった二百人、近くの客人の身の安全を図りつつ行うことは、ハンスに事前に指示されている。

今日この日の為に、遠路はるばる足を運んできた者達もいるので、客人に危険が及ぶような事になっては、申し訳ないというハンスの気持ちもあるのだらうと思われる。

だが、この様な華やかな会にとっては、傭兵の存在はさぞかし浮いて見えることであろう。

次々に来館してくる客人たちは、傭兵の姿を見て取ると、一体、何事があるのであらうと怪訝な表情を浮かべていく。中には、あからさまに顔をしかめて嫌悪する態度を表明する者も、大分いる。傭兵達は、この日の為に正装などしている訳がない。

みな、着古した汚い服を着て、警備の任に当たっている。

それは、当然、ロード達、三人にも当てはまる事実だ。

三日も洗っていないような薄汚れたシャツに、所々しみが浮いている様なズボンを着ている。さすがにセルシアは、女性だけあって、身だしなみには気を付けている様子だったが、それでも、確かにその服装は身なりのいい状態とは言えなかった。

だが、ラドカープは、あまりそのようなことは、気にしてはいない様子だった。

彼は、先程から腕組みをすると、じっと来館してくる客人に見入っている。

その厳つい武骨な表情からは、何か近寄りたがたい空気が滲み出ていたが、それはいつもの事だ。ロードは、そんなラドカープに、今、疑問に思っていることを正直にぶつけてみていた。

「なあ、ラドカープ、果たして、今日中に奴らの動きがあるのだろうか……？」

「さあそれは判らん。今日くるか明日くるかは相手方しただい。俺に聞かれても答えようがないさ……」

ラドカープの答えは、素っ気なかった。

しかし、その口調は、どことなく優しい。

彼は、厳しい顔をしているわりには、案外、気は良いのだ。

「でも、これだけ人が集まるんだ。これじゃ警備も楽じゃないよな……」

「そうだな、でも、気は抜けないぞ。相手は神出鬼没だ、並の相手じゃない。しかし、いついかなる時でも泰然としているのは傭兵の基本だ。でないと、咄嗟の時に後れを取るからな……」

「判っているさ、俺も傭兵の端くれだ、その心得は身に染みついているよ」

ロードは、素直に頷く反面、改めて彼の横顔を見つめていた。

ラドカープを見ていると、父アルスレイドの事を思い出す。

彼から醸し出る、男気の哀愁がそれを誘うのだ。

ラドカープも、アルスレイドと似たような、雰囲気を持っている。

剣士としての威厳というか、頑なさというか、そんなものがまず近い。

それは、傭兵が年を重ねる程、そうなってくるものなのかは判らないが、ロードにはその哀愁なるものに、一種の憧れを抱く要因にもなっている。

あのルヴェッツァーニは、一度目の来訪の際、ラドカープには気を付けろよと、一言、忠告を残して屋敷を後にしている。ロードには、その言葉が未だに頭の片隅から離れずに、残っているのを覚えている。

実際の話、それは一体どういう事なのかは、ルヴェッツァーニに問い質してみないとよく判らない。

だが、ルヴェッツァーニは、ラドカープが裏切るとまで言い切っていたのだ。
それが、もし本当のことなら、一体、何の為に裏切るのでしょうか。
ルヴェッツァーニからは、色々な疑問が提示されたので、未だに頭は混乱している。
考えても考えても、答えがでない迷宮に陥った気分にもなる。
もしかしたら、ラドカープは、（イルアデフとの何らかの関係があるのか？）と、考えたくもない疑問が頭をよぎる時もある。
しかしローダは、ラドカープが好きだった。
男として、彼を尊敬する気持ちと、憧れる気持ちが十二分にある。
最初のうちは、ルヴェッツァーニの言うことを、頭から否定していたローダであったが、真相を明かされた事により、それも出来なくなっていた自分を知っている。
ラドカープを疑いたくはなかったが、本当のところは、どうなのだろうと、彼に直接、聞いてみたいという衝動にも駆られるが、それは出来ない。
そんな事をして、もし違っていたら、ラドカープに申し訳がないという思いがあるからだ。
だから、それは自分だけの胸の内に、しまっておく事にしておいていた。
何度も言うことだが、それらは、いずれ時間が経てば、その時間とともに判ってくるのではないかと思えるからだ。
そうこうしている内に、ようやく時計の針は六時三十分を回っていた。
屋敷の玄関に入ってすぐのところに置かれている振り子時計の鐘が、一回うち鳴らされているところを見ると、それは明らかだ。
屋敷に来館してくる客人も、ほぼ出揃いはじめている。
あと三十分もすれば、パーティーが開催されるだろう。
先ほど、ラドカープは、外の警備の様子を見てくるといって、外へ出て行ってしまっていた。
彼も、色々と忙しい。傭兵達のまとめ役でもあるので、様々な指示をだしてより効率よく警備をすすめなければならない。その為、傭兵達の間を駆け回って、連絡を取り奔走するのだ。
ローダ達も、屋敷の二階の踊り場から、客足を眺めているのにも飽き、今は一階のホールへ降りてきて、屋敷内の警備を担当する傭兵達も、思い思いにあらかじめ決められた自分の持ち場へと、向かっていく。
屋敷の主人ハンスは、街の有識者と雑談をしている。
ちなみに、彼の服装はタキシードではなく、異国風の情緒漂うタペットという服装をしているが、それは彼に良く似合っている。
マリーネ夫人やアルジャン、そしてエネアとミネアは、華やかなパーティーに見合うドレスを身につける為に、二階から下りて来ていない。
今はおそらく、使用人と一緒に、着付けの最中のようなのだ。
かれこれ一時間は出てこないで、相当めかしこんでいる様子だ。
その為、ローダたち三人は、手持ち無沙汰の体で一階のフロアーをうろちよろしていたが、屋敷の外の様子も気になっていたのも、まだ時間もあることから外に出てみることにしていた。

外に出ると、満天の星の空がローダ達を出迎えてくれていた。

そこに見えるのは、名も知らぬ星座たちだ。

強く光る星、淡く光る星が、無数の光点となって夜空に映えている。

そのしんと静まりかえった深い夜空を眺めると、心を洗われる思いがし、ゆるんだ身が引き締められたりもする。

ある書物では、漆黒に覆われた黒い夜空は、神の叡知を表す道標と謂われている。

悠久の昔から、徐々にその位置を変えてきた星座から、その事を鑑みると、あながち頷けなくもない。

西の空を覗くと、ほぼ真円に近い《ダナト》の月と、北には半分にぼっくり欠けた《サーナ》の月が、二つ顔を覗かせている。

東の大陸アドアナの世界の一部では、ダナトは男神、サーナは女神とされている。

この地方の神話では、太陽神《メタトル・アルファス》から、この二つの月は生まれた事になっているが、ダナトは軍事、産業、火、破壊、陰の属性を持ち、サーナは豊穡、経済、水、再生、陽の意味を持つとされている。この二神は、お互い夫婦神で、普段はお互い反目し合っているが、ある時期には惹かれあい親しく交わる時があるとされ、ローランドで月神信仰が盛んなのは、二つの月が満月となり交じり合うときには、吉兆が訪れるといわれているが為でもある。

その信仰は根強く、その時がくると、民衆は七日間の断食をして神に祈りを捧げるのだ。

それは厄除けの儀式でもあり、信仰心が試される時でもある。

また月に向かって祭壇を儲け、アクメニクという木の葉をそこに供える。

それは、魔除けの意味もあって、二つの月の門《ラディス》が開かれる際、その時、魔物も一緒に降臨するという、言い伝えがありそうなのだそうだ。

ローダは、司祭ではなく天文学者でもないのに、今はそんな事はどうでもいい話であるのだが、しばらく夜空を見上げながら、レスターナの王城にいた時、教育係に聞かされた神話の一端を思い出していた。

ローダは、そういった神話の学習に関しては不真面目で、膨大にあるとされる神話のエピソードや逸話は、記憶の片隅にうっすらとだけ覚えているだけだった。しかし、二つの月ダナトとサーナの神の由来は、意外と忘れずに残っていた様子で、ひよんなことから頭に浮かんできていたのだ。

しばらくすると、ローダ達は、ラドカープの姿を探して歩きだしている。

別に、これといって用事がある訳ではないのだが、それと一緒に警備の傭兵達の様子も、どんなものかと覗いたくて、探し回っていると、屋敷の周りにそって巡回している傭兵達の姿が見て取れた。

彼らの任は、屋敷の外のくまない巡回にある。

それに、何か異変が起こりでもしたら、そく屋敷内に報せる義務もおっている。

外の警備が、五人では少々、心もとないが、屋敷内の警備も重要なので、人員をそこへ割かなければならなく、それで良しとするしかない。

しかし、ローダ達が、傭兵達の様子を覗っていると、遠くの方で何かの音が聞こえてくることに気付いていた。

それは、長い響きを発するような声で、耳をすますと、しんと静まりかえった闇のなか、明瞭にそれが遠くの方で聞こえてくるのだ。

「狼か・・・？」

その為、ローダは一人、独語していた。

「その様ですな・・・」

ジルも、その声に気付いたらしく、同意の言葉を投げ掛けてくる。

それは、獣が発する遠吠えの声だった。

「この近くに、狼が出るのかしら？」

それは、セルシアの発言だ。

彼女は、聞き耳を立てて、その声を聞いている。

三人は、その鳴き声を聞き、先ほど星を眺めた新鮮な気持ちとは打って変わって、何か異様な空気を肌で感じ取っていた。それは、悪寒がする訳ではない。ただ、月夜でありながら、暗やみに吠える狼の声を聞くと、何か一種、不安になるだけだ。

「五十頭はいるな・・・」

遠くを見つめながら、ローダが言う。

遠吠えの出所は、近くの湖の対岸の方からだ。

そこは、丁度、広くひらけた草原地帯だ。

街外れにある、その場所では、街の酪農家が牛を放牧している。

その事は、ローダ達、三人は知らなかったが、餌を求めて群れで移動しているのだらうと、勝手な推測をめぐらしていた。

飢えた狼は、時と場合によっては人を襲う時もある。

普段は、森に生息する兎や鼠などの小動物を追って、狩りをしているのだが、それが叶わない時には、そういった手段にうったえる時もある。

「まさか、ここまで来ないよな・・・？」

ローダが、一人、何か不気味なものを感じとったのか、身震いをしてそう疑問を投げ掛ける。

「それはどうでしょう。相手は獣ですからな」

ジルは、いつものように、淡泊な答えを返していた。

「大丈夫じゃない？　ここって、人間の住む区域ですもの。狼だって、不用意に立ち寄らないわよ」

セルシアは、いたって楽観的だった。

彼女が、真剣な顔をする時は、戦いの最中だけであるような気もする。

「でも、なんか不気味だよな・・・」

何か、不穏な空気を感じるのか、ローダがぼそりと呟く。

しかし・・・

「ねえ、とにかく屋敷の中へ戻らない？　そろそろ、お嬢様方の身仕度が調う頃よ・・・」

ローダの呟きには答えず、セルシアは本来の仕事に戻るべく二人を促していた。

「そうだな、いつまでここに居ても仕方ないし、戻るか・・・」

そう言うとローダは、きびすを返していた。
そして屋敷の玄関の方へ、つかつかと歩いていく。
その後を、ジルとセルシアも追い掛け、屋敷の中に姿を消していた。
遠くでは、まだ狼の遠吠えが続き、その独特のうなり声を響かせていたが、三人が屋敷に入ると同時に、その声もぱたりと聞こえなくなり、薄闇に浮かぶ二つの月がぼかりと口を開け、笑うようにその場で下界を見下ろしていた。

第二節

パーティーは、既に始まっていた。
屋敷の主人ハンスの冒頭挨拶も終わり、今は、街の有識者が、ホールの奥に備え付けられた壇上で、長たらしい話を口から唾を飛ばしながらまくしたてている。
話の内容は、ハンスの仕事に関することばかりの様だ。
客人は、皆、使用人が運んでくるグラスを手に、壇上で話をしている中年の男に注目しながら、そのグラスの中身を傾けている。
各テーブルには、豪勢な料理が運ばれ、美味しそうに匂い立っているが、今はだれも手を付ける者はいない。
テーブルには、椅子はなく、皿に盛られた料理の品目を、客人が思い思いに手にとって食する立食パーティーだ。
この場に参加している客人は、律儀に正装をしているが、本来ラフな形で行われる為、誰もが十分に寛いでいる様子だった。
有識者の話は、絶え間なく二十分間もつづいた。
話を聞いている者も、飽きる事なくそれに耳を傾けている。
しばらくすると、話も終わり、その有識者が壇上から降壇すると、客人たちはさっそくテーブルに置かれた料理に、手をつけその味を堪能している。
そして、思い思いの場所で幾つもの人溜まりを作ると、やはりグラスを片手に立ち話を始めていた。
エネアとミネアと言えば、今、ローダ達、三人の近くで客人の青年と話をしている最中だった。二人は、この日の為に、相当めかしこんだらしく、口元には艶のある紅をさし、顔におしろいを塗って、女神のように微笑んでいる。耳には大きめのピアス、胸元には二連鎖のネックレスが光り、ドレスも双子の姉妹らしく、お揃いのシックな装いに仕上げている。髪は高く結いあげ、大人の雰囲気醸し出し、細いうなじが白く輝き見るものを魅了してやまないが、その為か、二人は客人の注目の的になっていた。

二人の姉妹の周りには、多くの人だかりが出来ている。

どうやら、彼女たちの可憐さに誘われて、話をしたいらしい。

それをハンスが、客人に対し、順番に自分の娘であることを改めて紹介していた。

彼女たちは、ついこの間、十八になったばかりで、もう既に大人の仲間入りを果たしていた。

その為、それを知った客人に酒をすすめられていたが、それを辞退し断っている様子だった。

また、この前のように、気分を悪くすることを恐れての事だったが、どうやら、狙われているという立場を弁えている様だ。

ローダは、そんな二人の様子を見て感嘆していた。

それは、彼女たちが美しいからではない。多くの客人の前で、その話の輪にとけこんでいる二人の姉妹に、見事な社交性を感じたからだ。

彼女たちは、先程から愛想よく話の輪に加わると、はにかんだり、くすくす笑ったりして、愛嬌をふりまいている。話し掛けられると、持ち前の明るさと無邪気さで、あたり障りなく無難に応答を繰り返している。客人たちも、それに魅了されるのか、話の話題は尽きない様子だ。

まだ若い客人などは、意中の相手はいないのか、婚約者となる男性はいないのか、と、あからさまに聞いて、ある意味、求愛を申し込んでいる人の類も見られる。

そんなところへ、二階から下りてきた、マリーネ夫人とアルジャンも、いつのまにか現れ、談笑に加わっている。

マリーネ夫人の装いといえば、それは地味なものだった。

宮廷夫人並みの優雅さを誇る彼女であるが、それとって念入りにめかしこんだ面影は見られない。

しかし、アルジャンといえば、いまいち不機嫌な顔をして、母親の傍に侍っているだけであった。

どうやら、面白くないらしい。

まだ、十歳にも満たない子供には、この様なパーティーは詰まらないのであろう。

そんな様子を覗いながら、ローダは苦笑していた。

それは、アルジャンの心境を察しての事だ。

しばらくすると、ラドカープがローダ達、三人のもとを訪れていた。

彼は、屋敷内の見回りの最中、二人の姉妹の護衛はどうなっているかを確かめるために、足を止めたらしい。

「よう、どうだ？ お嬢さん方は無事か？」

ラドカープは、ローダの顔を見据えながら、おもむろに話し掛けてくる。

「無事もなにも、見れば判るだろ。ぴんぴんしているよ・・・」

ローダは、至極、当然のようにそう答えていた。

「そうだな、まだ襲撃はないんだ、無事で当然か？」

それは、めずらしく、ラドカープの軽い冗談である。

彼は、そう言うと、「ハハハ」と、軽く笑って口元に白い歯を覗かせていた。

「で、そっちの方は、どうなんだい？」

逆に、ローダが問います。

「ああ、今のところ何もない。いたって平静だよ……」

ラドカーブは、今度は、普通に応えていた。

「でも、このまま襲撃がなければいいわね」

そこへ、セルシアが、横合いから口を挟む。

「それもそうだ、命の危険に晒されるのは避けたいからな」

簡潔であり、短い会話である。

ラドカーブは、そう言うと、再び屋敷内の巡回に行ってしまうていた。

後に残された三人は、ラドカーブの後ろ姿を眺めながら、くすくすと笑いを漏らしていた。

ラドカーブが、冗談を言ったことが、けっこう面白かったらしい。

それは、ちょっとした冗談であったが、顔に似合わぬ者が発すると、意外に面白いようだ。

そうこうしている内に、エネアとミネアは、話の輪から解放されていた。

その合間を見て、ローダ達の許へやってくる。

二人は、ローダ達と目が合うと、微笑みかけ、人懐っこい顔を向けてきていた。

「あら、ローダ様、御免なさい。つまらないでしょ、この様なパーティー……？」

彼女等は、そう言いながら、何か浮き浮き気分を隠しきれない様子だった。

この姉妹は、ハンス同様、根っからの社交家なのかもしれない。

どうやら、人が大勢、集まる場で、話をするのが性にあってる様子だ。

その紫紺色の目を爛々と輝かせ、顔は幾分、火照っている。

「そんな事ないさ、これも仕事のうちだからね。ある種、別な意味で楽しんでいるよ」

「別な意味い……？」

ローダが言いたかったのは、こういう事だ。

ある客人たちの話に聞き耳をたてて聞いていると、家の女房は他の男と浮気しているのだ、この前ひどい夫婦喧嘩をしたのだ、ホモ友達に性病をうつされたのだと、まるで近所の親父達が街のベンチで暴露話をしているような会話が聞き取れ、面白いというのだ。

それは、この様なパーティーの席で、話すような類いの話ではなかったもので、ローダは一体なんて話をしているのだと驚いていたが、話の内容に興味をひかれ、その人達には悪いと思いつつ耳をそばだてていたのだ。

それを聞いた姉妹は、プツと吹き出し、小さく笑ってお互い顔を見合わせていた。

「そう、それはよかった。楽しんでいただけましたか？　でもローダ様、それは盗み聞きというのですよ……」

二人の姉妹は、笑いながらローダにその事を指摘する。

すると、

「ハハ、そうだな、いや悪かった。今度から、注意することにするよ」

そう言ってローダも、笑って誤魔化していた。

両姉妹は、それが面白かったのか、更に声をだしてクスクスと上品な笑いを繰り返していた。

「でも二人とも、大したものね。見たところ、社交界の花って感じよ……」

セルシアが、突然、思い出したように、二人の姉妹を褒めちぎっていた。
「あら、そうですか？ 私達、小さい頃からこの様な場に慣れてしまって、人と話をするのがとても楽しいのです・・・」

二人は、心底、嬉しそうにはにかんでみせる。

そして、優雅にドレスの裾を引いて、おどけた挨拶を見せてくれていた。

それは、あの礼節の指導教師に教わっていた、礼式の挨拶であった。

今は、完璧にその所作をこなしているところを見ると、何の気兼ねのない自由な場で演じる方が、彼女たちにとっては非常に自然なかたちで振る舞えるらしい。

指導教師に睨まれながら演じていた時とは違って、見事なまでのたち振る舞いであるのだから不思議だ。

それを見たセルシアは、多少、羨まじげな視線で彼女たちを見据えている。

彼女も、女性としては、華やかな衣裳を身につけ、この様なパーティーに参加するのが夢なのであるのかもしれない。

しかし、彼女は、女だてらに傭兵になる道を選んだ女性だ、その事においては大した未練はない様子で、二人の姉妹とじゃれあっている。

そんな三人を横目で見据えながら、ローダとジルは、口元を緩めて微笑んでいた。

そうこうしている内に、パーティーは中盤にさしかかる。ふと見ると、ホールの奥には、弦楽器を持った楽隊が現れている様子だった。

先程までの立食パーティーとは違って、これからは、今宵の憂を晴らすための、舞踏会に早変わりするらしい。客人もそれを察してか、踊れるスペースを確保する為に、そそくさと場所を移動し始めている。使用人たちは、屋敷の奥からどこともなく現れると、ホール内におかれたテーブルを、邪魔にならない程度に脇に片付けている様子だ。楽隊は、手持ちの楽器の調整に余念がなく、頻りに調律を繰り返し音あわせに没頭している。

そして、ようやく演奏の準備も整うと、待っていましたがばかりに、舞踏会が始まりを迎えていた。楽曲の選曲はあらかじめ為されていたのか、何の躊躇もなく即座に演奏が始まる。

それは、ゆるやかな音楽だ。

硬質だが、張りをなめとった様な旋律に、各々の楽器が奏でる音楽が調和して、そこに彩りを添える。客人たちは、演奏が始まると、思い思いの相手を手早く見つけペアを組んでいる。

そして、手慣れたようにステップを踏むと、演奏される音楽にとけこむように踊りだしていた。そんな中、ローダ達は、踊っている人の群れとは少し離れた場所で、その光景を眺めていた。舞踏会、独特の雰囲気の中、三人は、その場にとり残されたように佇んでいる。

エネアとミネアといえば、先程、何人かの男性に踊りを申し込まれて、今は舞踏会の一員になっている。

しかし、三人は、二人の姉妹の護衛があるので、なるべく二人が踊っている場所の傍から離れず、かといって近付きすぎない程度に距離をとり、エネアとミネアが楽しそうに踊っている姿を凝視していた。

ローダは、最初、二人の姉妹と一緒に踊ろうと誘われたのだが、着ている服も服だし、こんな舞踏会に参加したことのない彼であった為に、踊り方も知らなかったのも、その申し出を断っていた。エネアとミネアも、断られて残念そうな顔をしていたが、二人一緒には踊れないし、それにその後、何人かの男性に声をかけられていたので、それを断りきれず承諾して踊りの輪の中へ入っていったのである。

そんな経緯がある為、セルシアはローダに「二人と踊れなくて残念だったわね」と、少しからかいの意味も交えて、茶化していたが、当のローダはいまいち気にした風でもなかった。

パーティーは、何の滞りもなく行われている。

曲は、五曲目に入り、曲調も軽快なものに変わっていた。

広いホールの中で行われる舞踏会は、今や最高潮に達している。

屋敷内の、警備を行っている傭兵達も、各々の持ち場で厳しい顔をしていたが、多少、気抜けしている感も拭えない。

襲撃者が、この人混みに乗じて、襲ってくる気配はない。

有るのか無いのか判らない襲撃を待つのは、辛い部分もあるが、警備を厳重にしておくには越したことはなかった。

エネアとミネアは、今、ローダのすぐ傍らにいる。

楽隊の演奏が四曲目を迎えた時点で、早々に辞退し、三人の許へ戻ってきていた。

その場所は、丁度、東側、つまり左の壁ぎわの奥まった部分で、ホール内の全体をよく見渡せる場所に位置していた。

客人たちは、相変わらず疲れを知らずに、踊りに夢中になっている。

これから更に、一時間は、踊り続けるのかもしれない。

別に踊ることは強制ではないので、踊りたくない者は参加せずに傍らで立ち話でもしていても構わない。

しかし、踊りに参加している方が大多数で、参加していない人の方がごくわずかだった。

そんな中、ローダは、先程から屋敷の外のことが気になってしょうがなかった。

二度目の襲撃の時は、外の警備の傭兵達は眠らされてしまっていたので、また、その繰り返しになるのではないかと、危惧していたからだ。

外は、しんと静まり返り、何の音沙汰もない。

ともすれば既に、外の傭兵は、眠らされているのではないかとさえ疑いたくもなる静けさだ。

それは、気になる以上、よけい顕著に感じるのかは判らないが、ローダは、その静けさに何かよからぬ胸騒ぎを感じ始めていた。

ピーー・・・ピィィイツ・・・！！

そんな、時である。

突然、慌ただしく、笛の音が鳴り響いていた。

ホール内は、楽隊の演奏が続く中、その旋律の合間を縫うようにして聞こえてくる笛

の音、それは、確かに外の傭兵達が吹き鳴らす複数の警告音であった。

ローダ、ジル、セルシアの表情が一変する。

最初に、その笛の音に気付いたのは、ローダだった。

彼は、敏感に反応すると、即座に屋敷内の警備を担当している傭兵達を見た。

どうやら、彼らも遅ればせながら、その笛の音に気付いた様子だ。

ローダと同じように、その顔色を変えると、辺りの様子を覗っている。

すると、そこへ、ホールの大扉をくぐりぬけ、飛び込んできた人影があった。

ローダは、最初、それが襲撃者なのではないかと勘違いしたが、どうやら違う様子だ。

その人影は、外の警備の傭兵の一人だ。

彼は息急き切って駆け込むと、手近にいたもう一人の傭兵に荒い息づかいのまま、こう叫んでいた。

「来たぞ・・・襲って来た。五十はいる、気を付けろ・・・」

「襲って来たって誰だ、・・・襲撃者か!？」

一人の傭兵が、問いただす。

しかし・・・

「ち、違う。人じゃない、獣だぁ・・・」

ローダは、確かにそれを聞いた。

その時、

・・・バチン!!

小気味のよい、何かのスイッチの切れる音がして、その方を振り向くと、突然、視界が真っ暗になり、屋敷内が得体の知れない闇に閉ざされた。

辺りは、電灯が消えて何も見えない・・・

・・・ザワザワ・・・ザワザワ・・・

暗やみの中、人々がそれを機にざわめき立つ。

それは、突然のことであったので、客人や傭兵達を含め屋敷内にいた一同は、一時、騒然として、皆がその暗やみの中に埋没していた。

しばらくすると、その暗闇の所々で、『ヴウウツッ!　　ヴウウツッ!』という、耳障りな唸り声が、誰の耳にも明らかに聞こえて来ていた。

一同は、暗やみの中、その唸り声に恐怖心を掻き立てられるのか、やはり騒ついている。

だが、しばらくすると、その騒つきの声も止み、一同はしんと静まり返る。

訳が分からなかったが、皆は、その暗やみに堪えている様子だ。

一二分、そうして居ただろうか?

すると、唐突に屋敷内の明かりが点灯し、再び明るさが戻る。

「きゃーっ!!」

と、その時、突然、誰とも判らぬ女性の悲鳴が屋敷内にこだました。

だが、ようやく明るさを取り戻し、その場に現出されていた光景は、誰もが絶句する戦慄的、光景だった。

獣だ!

獣が、人々を取り囲むようにして、うなり声を発している。

明かりが戻り、この屋敷に集った一同が、最初に目撃した光景はそれだった。

獣の群れが、人の合間を縫って、隊列を組み客人たちを包囲しているのだ。

その数は、数えきれない・・・

体毛は逆立ち、鋭い牙を剥き出しにして威嚇の姿勢をとるその姿は、紛れもなく狼であった。

屋敷に集った客人たちは、皆その獣の集団に囲まれ、身じろぎ一つできない状態に陥っている。本来、金色であるその目は、赤く異様に光り、犬歯を剥き出しにして唸る狼に嘯まれようものなら、一溜まりもない。

一体、この狼たちは、どこから屋敷内に侵入してきたのか、それは疑問だった。

しかし、ローダは、その光景を目撃しながら絶句していた。

何故こんなところに、狼が居るのか？

そう怪訝に思うと、ローダは、二人の姉妹の様子を探っていた。

このような状況下に、ふと彼女たちの安否が不安になっていたからだ。

だが、どうやら彼女たちは、無事ようだ。

ローダが、横を見ると、エネアとミネアの二人は、彼のすぐ傍でやはり絶句したようにその場で棒立ちになっていた。

ローダは、それを見て安堵する。

しかし、次の瞬間、それに安堵するのも束の間、ローダは、屋敷内に生じたある異変を感じ取っていた。

傭兵達がない。

全部ではないが、姿が消えていたのは、この日の為に新たに雇った十人ほどの傭兵達だ。

彼らは、屋敷内の警備を担当して、先程までローダの目の届く位置にいたはずだ。

だが、今は、その姿が見受けられない。

彼らは、一体、どこにいったのか？

ローダは、不審に思い、その姿を探すと、次の瞬間、丁度、自分たちがいる後ろで、絶対的、不穏な空気の流れを感じ取っていた。

彼が、恐る恐る後ろを振り向く。

するとそこには、抜刀した数人の男たちが、極端に気配を断ち切って、険悪な表情を顔に浮かべながら、身構えていたのである。

「お前達は・・・」

その男たちは、先程、姿を消したと思われた、十人ほどの傭兵たちであった。

彼らは、剣を構え、ぎらついた目でローダたちを見据えてくる。

それは、明らかに、敵意を持った人間の鋭い目であった。

『何だ、こいつ等？』

ローダは、その時、その光景をみて、不審に思いそう呟く。

すると、その直後「動くな！ 動けば、お前たちの命はないぞ・・・」と、その十人の中の一人の傭兵が、有無をいわさぬ迫力で叫んで来ていたので、そのまま訳も分からず呆然としたまま立ち尽くしてしまっていた。

「一体、お前達、どうしたんだ！！」

ローダは、その傭兵たちの態度に、驚きつつも、不審に思いそう声を発していた。

すると、その声に傭兵達は答えず、そのかわりに彼らは、その近くにいたセルシアの細腕を突然、掴んで、自分たちの方へグイッと引き寄せていた。

「ちょっと、あなたたち何するの!？」

セルシアは、突然のことであつた為、多少うろたえて傭兵たちに掴まれながらも、抵抗を試みていた。

しかしその時、一人の傭兵が、素早い動きで身を翻すと、彼女、即ちセルシアの鳩尾に強力な拳を一撃たたき込んでいた。

それは、一瞬の出来事である。

「うっ・・・」

それでセルシアは、気を失い倒れこむ。

それを、傭兵達の二人が、抱える様にして担ぎあげていた。

「セルシア!!」

その為、ローダは、危機を察知したが遅かった。

だがその時、一瞬ローダの脳裏に、あることが思い浮かぶ。

「お、お前ら、まさかイルアデフか・・・!？」

「だったら、どうだと言うんだ・・・」

一人の男から、肯定ともとれる言葉が返されてきた。

その男は、そう口ずさむと、酷く残忍な笑みをこぼす。

それにつられて、残りの傭兵達も、口元を歪めて笑いたてていた。

その時、ジルが腰に吊した剣に、手を延ばしていた。

すると、それを察知した傭兵の一人が「動くな!!」と、手元の剣を突き付けて威喝する。

ジルは、それに呼応して、剣のつかに手を延ばすことを躊躇っていた。

「貴様ら、そこを動くなよ。動けば、この獣達をけしかけるからな・・・」

そう言うと、傭兵達は、ホールの出口へじりじりと後ずさって行く。

彼らは、眼光鋭くローダやジルを一瞥すると、二人が動きをとれない隙に逃走を図るらしい。

そして、頃合いを見計らうと、脱兎のごとく、セルシアを数人で担ぎ上げたまま走りだしていた。客人を含めて、他の傭兵達は、その光景を見て一同、呆然としている。

事態の飲み込めない人々は、その逃走をはかる傭兵達に、道をあけてすんなりと脇を通している様子だ。

そんな中、ローダは「待て!」とあって、その後を追おうとしたが、横合いから飛び出してきた数頭の狼に、その行く手を阻まれ、立ち往生していた。

「セルシア————!!」

ローダの叫びが、虚しく屋敷内にこだまする。

その隙に、傭兵達は、セルシアを担ぎ上げたまま、屋敷の外へ逃走し、そのまま夜の暗やみの中へ、その姿を隠し、残り火が断ち消えたかの様に行方を眩ましてしまっていた。

『どうかなローダ・ブレイン。いや、《ユ・デラウ・ウェン・イロード》よ。この余興は気に入って貰えたかな?』

だが、そこへ、茫然自失の体でいたローダの頭のなかに、突然、聞き覚えのある声が流れてきていた。

あの声だ！

老人のように、嗚れた声。

「お前は？」

そう言うとローダは、辺りをどこともなくきよろきよろと見渡す。

それは、その声の出所に、探りを入れようとしての挙動だった。

『どうかね？ この余興、気にいって貰えなかったかね？』

するとまたローダの脳裏に、声が聞こえてくる。

だが次の瞬間、ローダは、その声に気付くと、周りの目も気にせず叫び散らしていた。

「貴様ら！ 一体、何の目的でセルシアを攫ったんだ！ 事と次第によっちゃ、容赦しないぞ・・・！！」

突然、叫びだしたローダを見て、驚いていたのはジルだった。

彼は、隣にいるローダを、不審に思い目を丸くしている。

それを受けて、エネアとミネアも驚きを隠せず、ローダを注視していた。

「一体、どうしたのです若！？ 突然、叫びだすなんて・・・」

ジルは、疑問に思った為か、そう問いただしていた。

しかし、ローダは、その問い掛けには応えず、意識を集中して辺りを何処ともなく見渡していた。

「答えろ！ 答えろと言っているんだあ！！」

ローダの、叫びは続く。

彼は、かなり激怒している様子だ。

いつも身近にいた仲間のセルシアが、連れ去られたことにより、かなり頭に血がのぼっている。それは、何処からともなく聞こえてくる声の主が、この場にいれば、今すぐでも斬り付けていそうな勢いである。

それを見て、ホールに集まっている一同も、怪訝な様子でざわついている。

未だに、狼が威嚇して人々を取り囲んでいるが、皆、怯えて身じろぎ一つしていない。

恐怖が先立って、身が硬直していると言うほうが正解なのかもしれない。

『ほほう、だいぶ頭に血がのぼっているようだが、安心したまえ。君の大事な女性は、我等が丁重に預かることにする。身体に一切、傷は付けぬから、我等の要求に応じてもらいたいね・・・』

ローダが、きよろきよろと辺りを見渡していると、また嗚れた不気味な声で頭のなかに直接的な応答があった。

「要求！？」

彼は、怪訝な表情を浮かべる。

『そう、我等イルアデフの大望の為に、協力してもらいたい・・・君らがバドニスのエセ慈善者カイル・ルヴェッツァーニとかいったかな？ その彼と、もう既に繋がりがあるということは事前に知っている。わたしは、何処にいても何事も透視できる力を持っていてね、君たちの人間関係はお見通しだ。そこで、その者達と手を切ってもらいたい・・・』
「何、言っている。俺達は、ルヴェッツァーニなどと、手を組んだ覚えなどないぞ！！」

ローダは、その事に対し、むきになって叫んでいた。

それは、嘘偽りのない事実である。

彼に仲間になってほしいと誘いをかけられたが、それを断っていた。

そうである以上、その彼と手を切れといわれても、意に介せない部分がある。

『そうか、それならばいい。しかし、バドニス連中ときたらまるでハイエナの様だ。もう我等の行動を嗅ぎ付けて、くだらぬ工作を持ち掛けている。だが、それも一興というもの、いずれは一人、残らず掃討してくれよう』

「おまえは一体、何を言いたいんだ!？」

ローダは、焦れていた。

こう悠長に話をしている内に、セルシアは連れ去られ、手の届かない遠くへ行ってしまう。

それをどうしても阻止したかったが、赤く目が光る獣達に阻まれてはどうする事もできない。

ローダは、そんな状況のなか、黙ってこの場を耐えるしかなかった。

『《イローダ》よ。わたしが言いたいのは、君にバドニスなどの仲間になってもらいたくないのだよ。君には古に課せられた大いなる役割がある。風の王族としてのね。もし君さえよければ、我等イルアデフの大望の為に、君を仲間として丁重に迎えたいと思っているんだ』

「俺を仲間になど？ ふざけるな！ 一歩、間違えても、おまえ等の仲間になどならない!!」

『ほほう、どうやら君は立場をわきまえていないようだね。我等が君の大事な女性をさらったのを忘れてる。君の返事次第で彼女の運命も変わってくるのだが判るかね？ 我等も非道な集団ではない。その返事次第では、君が望んでいる良い方に事が運ぶこともあるのだよ……』

「セルシアを攫っておいて、何を言っている。やり方が汚いぞ妖術師!!」

『その「妖術師」という「俗」な呼び方はやめて貰いたい。私としては《アデルカイド》または「真理の探究者」と呼んでもらいたいのだが……』

声の主は、しばし滔々とした言葉の羅列を以て、応えていた。

それは何か、カルト的、信仰を持つ教主が、盲信する神を叫ぶように悦に入った話方でもある。

「そんな事はどうでもいいだろ。けどおまえ等、やっぱり始めから俺達が狙いだったんだな……」

ローダは、ここに来て、初めてその事に気付いていた。

『ハハハ、そういう事になるね。私達としては、色々と画策を練って君の能力を調べたかったのだよ。何せ君は、十九年間も行方をくらましていたのだ。君が本当に「風の王族」の血をひく者なのか確証がなかったのね。だから、色々と演出もしながら、暗殺者たちをけしかけてみたのだ。しかし君は、やはりアルカーナの研究室から連れ出された、あの時の赤子だ。この前、風の力を駆って暗殺者を倒したことから見ても、それは十分に証明できる。君の父アルスレイドは、口が堅く君の所在を語らなかったが、ようやく捜し当てられてほっとしている。我々としては、君の能力を活かす場を与えたいと

思っている。裏切り者、のバドニスなどと手を組むより、よっぽどその方が君の為になると思うのだけれどね……』

「それじゃ、屋敷に爆弾を投げ込んだことや、エネアとミネアを狙っているという事は、全部、嘘だったって事なのか？」

『そう、おもしろい演出だっただろう？ そちらにいるハンスには、少し、ご協力、願ひ、君を屋敷におびき寄せるために一役かしてもらったからね、十分に感謝しているよ。それに、君の父、いや君を連れ去ったアルスレイドは、我等の組織で預かっている。だから、いくらその消息を捜しても無駄だよ。彼にはまだ、色々と役に立ってもらいたいので、殺しはしないから安心したまえ。ともかく、こういった会話も何だ、後日、こちら側から連絡でもするから、その時まで、わたしが言った事を何もせず、よく考えておくべきだね』

そう言うと、唖れた声の主は、口をつぐんでその音信はびたりと止んでいた。

「おい、ちょっと待て、まだ話は終わっていないぞ！！」

ローダが、慌てて話を引き戻そうとした。

だが、それはもう既に遅い。妖術師の声は、その後、一切、聞こえて来なくなっていた。

頭の中での会話は、一方的に目の見えぬ相手側からだけの送受信であるため、ローダが叫んでも、相手側の力がなければ交信は不可能だ。

その為、もう話をする手立ては、残されていなかった。

「ちきしょう……何て事だ……せるしあ……」

ローダは、唇をつよく噛んで、悔しさを顕わにした。

だが、交信が途絶えて、しばらくすると、人々を取り囲んでいた狼の動きに変化が生じていた。獣達は、何者かの手によって操られているかのように、一頻り、うなり声を発すると、糸で轢いたように、すべての狼が一斉に唸るのをやめていた。

そして先程の逃げた傭兵達と同じように、一頻り辺りに警戒を示すと、さっと退くようにして、一頭また一頭と屋敷の外へ飛び出していく。

その動きは素早い。

統制のとれた狼たちは、次から次に列を為して逃走していく。

そして数えきれない程の数の狼たちが消え去ると、屋敷内に残された一同は、皆、安堵の表情を浮かべて息を大きく吐き出していた。

だが、ローダは、狼たちの牙の脅威がさると、突然、疾風のごとき勢いで屋敷の玄関の方へ駆け出していた。それを見たジルもその後を追う。

それは、連れ去られたセルシアの後を、追うためだ。

ローダは、風になって屋敷のなかを駆け抜けた。

しかし、ローダが、屋敷の玄関まで来て外の様子を覗くと、数人が折り重なるように倒れている男たちの姿を発見した。

外の警備を担当していた傭兵達だ。

その数は、四人。

彼らは、皆、喉元から血をしたたらせて、息絶えている。

「くそう……」

ローダは、軽く舌打ちするとともに、拳をきつく握り締めていた。

おそらく、狼にやられたのであろう。
彼らの喉元には、くっきりと牙の痕が穿たれて残されている。
全員、息はない、即死の状態だろう。
ローダは、それを確認しながら、屋敷の外を見渡す。
しかし、逃げた傭兵達の姿も、セルシアの姿も見当たらない。
それは当然だろう、妖術師との会話で、かなりの時間を取っていた。
その隙に、遠くへ逃げ去っていたのだ。
ローダは、しばしその場に立ちつくすと、呆然としながら屋敷の外を凝視している。
彼の後方からは、ジルと二人の姉妹が駆け付けて来ていた。
すると、ふと気になるものが、ローダの視界の片隅をかすめる。
そこには、一振りの剣が落ちていた。
セルシアの剣だ。
細身で軽いその剣は、彼女の愛用の武具である。
おそらく、連れ去られる時に、彼女の腰から落ちたのであろう。
ローダは、それを片手で拾いあげると、それを凝視しながら一人こう呟いていた。
『セルシア、必ず助けだしてやるからな。それまで待ってて居てくれ・・・』
それは、ローダにとって、悲痛な呟きでもあった。
彼は、そう言うと、その剣を胸に抱き締め、暗やみの地平を見つめ返していた。
その顔は悲壮に満ち、何か決意を漲らせているかのようだ。
ローダは、すっと気を引き締める。
そして、月の光に照らされる闇のなか、一人、孤高を抱くようにその場で風に吹かれて立ち尽くしたのであった。

第三節

狼たちの襲撃があつてからすぐ、今宵、アグデプト家の屋敷で開かれていたパーティーは、もはや、中止という憂き目にあいなっていた。
招かれていた客人たちは、興奮めして、泊まり客、以外の者は残さず帰されている。
「これは、一体、どういう事なんだハンスさん。事と次第によっちゃ唯じゃおかないぞ！！」
三階の一室、開け放たれた扉の入り口、付近からは、先程から声を張り上げる若者の叱責の音が、否応無しに聞こえて来ていた。
「どうも済みませぬ。全て、この私が悪いのです。どうかご容赦を・・・ご容赦、下さい！」
平謝りに頭を下げているのは、この館の主人ハンスだ。
彼は、今、例え様もない卑屈さの中に埋没してしまっている様子で、その顔色を極端

に青くして、向かいの若者に対して、幾度となく謝罪の言葉を繰り返すと、しきりに冷や汗を流し続けていた。

ちなみに、ハンスの向かい側に居る若者とは、ローダである。

彼の隣と、その後ろには、ジルと警備を担当している傭兵達の姿も垣間見えた。

今は、何故ハンスが、一人ローダに責め立てられているのかというと、それは、狼たちの襲撃があった際、どこからともなく聞こえてきたあの妖術師の語った話の内容に、ハンスがイルアデフの策謀に、加担していたのではないかという疑惑があったからだ。

どうやら、ハンスは、始めからイルアデフに少なからず内通していたらしい。「あんたは、一体、どうしてイルアデフなんかと内通していたんだ。まず、その事を伺いたいね・・・！！」

ローダは、相変わらず声を荒らげて、ハンスに詰め寄る。

その表情は、険悪に満ち、相手に掴み掛からんばかりの勢いであった。「それがその、これは言い訳になりそうなのですが、実は、イルアデフの連中に脅かされていて、それでどうしようもなかったのです」

ハンスは、一頻り怯えたような態度を示すと、身を縮めるようにしてそう言葉を紡いでいた。

「脅かされていたって、一体、何を脅かされていたんだ！？」

ローダが、先程よりかは幾分、怒りを抑えて、ハンスに対して追求を続ける。

「実は、あなたをこの襲撃の一件に引き込むことを手引きしなければ、二人の娘たちを本当に殺す、と、そう言われていたのです」

「二人の娘を、本当に殺すう？」

「ええ、そうです。娘のエネアとミネアを殺されようものなら、私はもうこのさき生きてはいけません。ですから、不本意ですが、仕方なしに手引きしました。本当の所イルアデフの連中に、そう話を持ち掛けられて、最初は断ったのですが、相手は闇の組織、私の手におえる相手ではなかったので、半ば強制的に従わされました」

ローダは、その言葉を聞いて顔を歪め、渋い顔をする。

それを隣で話を聞いていたジルも、同じように渋面を作ると、口元の白い顎髭をしごいては、「う～む？」、という唸り声を発しながら、ハンスを複雑な思いで見つめていた。「しかし、脅かされていたからといって、酷いですな。セルシア嬢は、攫われてしまったのですぞ。それをどうするのです、あなたに、その責任がとれますかな・・・」

その言葉を発したのは、ジルだった。

彼も、ハンスに責任があると見て、多少、同情する気もある中、そう追求をしていたのである。

「でもあんたは、最初から俺達を全部だますつもりで、嘘偽りばかり並べ立てていたんだな。俺の親父アルスレイドと、昔、昵懇の仲であったとか、命を助けられたとか、それは全て俺達をおびき寄せるためについた、作り話だったんだろ・・・」

「いいえ、それはとんでもない。その事に関しては、偽りのない事実を述べたのです。アルスレイド殿には、昔、色々とお世話になったという事は、例えようのない事実です。確かに私は、娘たちが命を狙われているという嘘を言って、あなた方をこの屋敷におびきだし、イルアデフと内通して、襲撃事件がでっちあげられました。しかし、私自身は、あ

あなたの方に危害を加えるつもりなど毛頭なかったのです。それを信じて下さい！」

ハンスは、やはり頭を低くしながら、その様なことを口走っていた。

彼が、どこまで今度の襲撃事件と深く関わって、どの様な役割をなしていたのかという事は、ローダ達にとって一番、聞きたいところであった。

「それで、あんたは、イルアデフの連中に、どんなことを強要されていたんだ。この際だから、はっきりその事を伺いたい、話してくれるだろ？」

「それがですな、私は一切、襲撃がどの様に行われるのかという事は、彼らから、知らされていませんでした。ただ、この街にあなた方が滞在しているということを知りまして、屋敷に傭兵として雇えといわれたので、そうしたまでです。私は、あなたがアルスレイド殿の御子息であると知って躊躇したのですが、何度も言うように、彼らから強要されて仕方なく傭兵ギルドをうまく利用して、今回、傭兵として雇ったという事の次第でして、その後、どの様なことが行われるかという事は、一切、携わっていませんでした」

「それじゃ、屋敷に二度目の爆弾が投げ込まれたとき、エネアとミネアを連れて逃げたと言ったのは、どういう見なんだ？」

「実は、私も、貴方たちを騙さなければならないという事に対して、罪悪感がありまして、それに、娘たちを殺すといわれていたことは本当のことで、その様な状況から少しでも抜け出せないかと思い、あの時は、そんな話を本気でもちかけてみたのです。

娘たちには、どうしても幸せになってもらいたい。そこでローダ殿、あなたを見込んでどこか遠くの街でエネアとミネアを一生、匿ってもらいたいと、本気で思っていました。しかし、貴方に、その事を断られたので、落胆したことは事実です。それは、私がイルアデフに脅されて演技していた事情を話さなかったもので、仕方のない事でしたが、今となってはあの時その話をもう少し強引にでも承諾させて、この街から逃げてもらえばよかったと後悔しているのです……」

そう言ってハンスは、口を噤んでいた。

どうやらハンスは、嘘を言っていない様子だ。

顔は俯き加減だが、真剣な表情をしている。

本来、人の良い彼のことで、結果的にローダ達を騙していたことを、本気で後悔しているようだった。

「本当のところを言うと、私も、今回イルアデフという組織の連中に脅されているという事を、何度もあなた方に打ち明けて、危険を知らせたいと思っていたのです。しかし、相手は得休の知れない連中で、もし裏切りでもしたら、手酷い報復があるのではないかという心配があったので、とうとう最後まで言えずじまいでした。

私だけは、どうなっても構わないと思っていたのですが、幼い頃から親のいなかった娘たちを死なせる事はできず、結局、あなた方を騙し通す結果になってしまい、残念に思っています。セルシア殿には、非常に申し訳ないことをしたと思いますが、どうかお許しください。お金で解決できることとは思いませんが、今回、雇った傭兵方には、謝罪金をさしあげます。それは、私からの心ばかりの贖罪のつもりです。どうか、何も言わず受け取って下さい。それが、私にできる、唯一の賠償だからです……」

「では、結局、今回の襲撃事件が、茶番であったという事を知っていたのは、貴方だけ

なんだな。エネアやミネア、それにマリーネ夫人にアルジャンは、その事を知っていたのか？」

「いいえ、知らない筈です。私は妻や娘たち、またアルジャンにも、その事は話しませんでした。ですから、責めを受けるのは、私だけで十分です。なにとぞ、家族には責めをおわないで下さい。こんな事になって、何も出来ない私を卑怯であるとお思いでしょうが、何も返す言葉が見つかりません。どうか、ご容赦願いたい、私に言えることはそれだけなのです・・・」

「・・・ジル、どう思う？」

ローダは、ジルの顔色を覗いた。

「そうですね、まあ、脅されていたのだから、仕方がないでしょう。しかし、元はといえば、私達もこの襲撃が、茶番であるという事を、あのルヴェッツァーニの話を通して幾分かは知らされていたのですから、その忠告を受け入れなかったのも、私達が悪いのです。だから、これ以上、ハンスさんを責めても、しょうがありません。ある意味、自業自得といえるでしょう」

ジルは、ハンスを責めた反面、ある意味、同調も示していた。

人の良いハンスのことだ、脅されてさえないければ、嘘などつける性格ではない事は誰でも知っている筈である。

その事を考えると、余程ハンスは、苦渋の選択をしたのだということが覗えるのである。

「だけど、これは裏切りだぜ。俺も言いたくはないが、セルシアはどうなるんだ。彼女の行方は、判らないんだぞ。奴らに、一体、何をされるか心配だ。それに、セルシアは俺が付いていないと、意外と駄目な部分があるからな・・・早く見付けだして、助けだしてあげなければならない・・・」

だが、

だが、ローダは、苛立っていた。

ジルが、ハンスを擁護することに、同意は示したとしても、それをすんなり受け入れるだけの度量は、まだローダには無かった。

今回の仕事を受ける際、ハンスの人柄に、多大な信頼を寄せて雇われてみたのだと自負していたのだが、このような事態になり、半ば怒りを隠しきれないのは、当然の事のように思っていたのだ。

ローダは、このような裏切り行為を、極端に嫌う人間だから、ジルは、あえてそれ以上、何も言うことはなかったが、彼の怒りがおさまるには、ほとぼりが冷めるまで駄目であろうと、そう思っていた。

ローダには、意外と頑固なところがあると、判りきっていたからである。

「しかし、その妖術師が言うには、セルシア嬢には傷を付けないといていたのではないのですか？ それに、後で連絡をする、などとも言っていたのでしょうか？」

「それはそうだけど、信じられるかぁ？ 奴らは、ルヴェッツァーニが言うように、何をするのか解らない、得体の知れない連中だ。事が悪化しないうちに、セルシアを捜しだし、連れ戻さねばならないだろ。分かるかジル、セルシアに、もしもの事があってからでは遅いんだ。手遅れにならない内に、捜し出す手筈をとった方が利口さ。そう思わ

ないか・・・？」

その言葉を聞いて、ジルは黙り込んでしまう。

セルシアを捜し出す手筈といっても、一体、どの様な手段を用いて捜しだせばいいか、思いつかなかった為だからだ。

「あのう、その事なら、私にも協力させていただきたい。私が知っている情報屋に、裏の世界には詳しい男がいるのです。その男に、イルアダフの動向を探らせれば、セルシア殿の所在が掴めるかも知れません。駄目はもともとで、頼んでみてはいかがですか？」

ハンスは、恐る恐るではあるが、その様なことをローダに提案してみせていた。

彼も、セルシアが攫われてしまったことに関して、責任を感じているらしく、ローダの顔色を覗いながら、試しにそう言ってみていた様子だった。

「判った。その情報屋が、あてになるかどうかは分からないが、何もしないよりはましだろう。お手数だが、頼んでみてくれ、良い情報が掴めると、いいんだが・・・」

ローダは、そう言うと言葉を区切っていた。

それで、セルシアの所在が掴めるかどうかは疑問であったが、情報屋に当たってみるのも、そう悪くない手段だと思い、ハンスの言葉を受け入れたのだ。

「しかし、イルアダフがどこに潜んでいるのかという事は、あのルヴェッツァーニに頼んで、捜してもらえばいいのではないですか？」

「なんだジル、君は、俺にバドニスの仲間になれと、そう言っているのか？」

「いいえ、そうではありません。ただ、この件に関して、少し協力してもらおうと言っているのです」

ジルは、意外と真剣に、その事を力説する。

自分としては、いい思い付きと思ったのであろう。

カイル・ルヴェッツァーニが所属している、バドニスの組織の力で、セルシアの居所を捜してもらえば、案外、早く見つかるのではないかという気がするのである。

しかし、その事に関しては、ローダは、あまり乗り気ではないのか、仏頂面をして、ジルを見据えていた。

「それは、虫がいい話と言うんだぜ、ジル。俺達は、ルヴェッツァーニの誘いを断ったんだ、いまさら協力して欲しいなんて、言える訳ないだろ。あれだけ彼を疑って白い目で見ていた事だし、今更どんな顔して頼めっていうんだ。それに、俺達はルヴェッツァーニと連絡を取る手段を持ち合わせていないんだ、どうする事も出来ないだろ？」

「そうですね、いやはや失言でした。この事は忘れてください。たしかに虫のいい話といえます。彼は、事の真相を明かしてくれたのに、私達がそれを疑い続けたのですから、顔を合わせられる訳がありませんな・・・」

ジルは、そう言うのと、罰の悪そうに頭を搔いていた。

ローダも、それにつられて、頭をぼりぼりと搔く。

それは、傍から見ると、とても間抜けな仕草であった。

ここに、エネアとミネアの両姉妹が居れば、また、笑われていたかもしれない。

しかし、彼等たちは、かなり真剣であった。

セルシアの命がかかっているのだ、冗談を言っている場合ではないのである。

「しかし、イルアダフの連中は、一体、何を考えているのだろうか？ セルシアを攫って、

俺達をおびきよせようとしている様だが、やり方が汚いよな・・・」

「そうですね、やはりそこが闇の組織であるたる所以といえるのでしょうか。姑息な手段を使って、相手を騙したりするのは、奴らの常套なのではないですか？」

「あああっ！　ほんと癪に障るぜ。でも今、気付いたんだが、そう言えばラドカーブはどうしたのだろうか？　この場には居ないようだが、ジルあんたは知っているか、ラドカーブの居所を・・・？」

ローダは、一頻り怒りを顕わにすると、突然、話題を変えてジルに問い質していた。「いいえ、私は知りません。先程から、ここに居るものとばかり思っていました、そう言えば居ませんな・・・」

ジルも、それに気付いたらしく、言い終わると辺りをきょろきょろ見回して、ラドカーブの姿を探す。しかし、警備の傭兵、以外、他に見当たる者は居ない。ローダ達は、ハンスと話をするため、この三階の一室に入室していたが、ラドカーブも居るとばかり思っていた。

だが、現にその姿はない。

ローダ達は、不審に思い、ラドカーブを探すことにした。

だが、屋敷の一階を手始めに、二階、三階と探しても、そこには見当たらなかった。

仕方がないので、屋敷の外に居るのではと思い、探してみると、そこにもやはり見当たらない。

一体、彼はどこに居るのだろうか、ものは試しに、まだ屋敷内に残っていた使用人の一人に、ラドカーブの所在を尋ねてみる。

すると、「ああ、彼なら、先ほど屋敷を出ていきましたよ」と、至極、当然のように言われたので、ローダは絶句していた。

「屋敷を出ていったあ！？　一体、どこへ？」

「さあ、それは解りません。でも、荷物をまとめて出ていったので、もう帰っては来ないのではないですか・・・？」

使用人の一人は、間の抜けたような声でそう呟いていた。

「荷物をまとめて、出ていったってえ！？」

ローダは、驚きを隠せず、そう叫んでいた。

一体、それはどういう了見で、あるのだろうか？

もしかして、仕事が嫌になって、逃げ出した訳ではあるまい。

ラドカーブの事だ、そんな事は、絶対あり得ないだろう。

では、何故ラドカーブは、忽然と居なくなってしまったのであろうか？

それに答えられる者は、誰も居なかった。

ラドカーブに、付き従っていた傭兵達も、その事は解らないという。

彼が消えたという事、それはある意味、屋敷内の小さな騒動へと発展していた。

傭兵達は、使用人の言葉を聞いたにも関わらず、まだラドカーブを探しまわっている。

だが一時間、二時間と探すうちに、時刻は、夜中すぎを指し示し、皆はなかば探すのを諦めていた。

一体、彼は、どこへ行ってしまったのであろう。

それは、何か、深い謎のように、ローダ達の眼前に横たわり、気苦労の種を大きくし

ていたのは事実であったのだ。

第四節

翌日から、セルシアの行方に関する捜索が始まった。

警備の傭兵達といえば、昨日、襲撃事件が本来はジルやセルシア、そしてローダが標的であったことを知り、もう二人の姉妹は狙われる事は無いだろうという結論に達し、警備の仕事は不用になったということもあり、一端は解雇されていた。

しかし今日は、別な意味で、ハンスにより新たに雇われなおされている。

それは、イルアデフという組織に攫われたセルシアを捜し出すには、人手が欲しかったからだ。本来、人の捜索という任は、傭兵達にとって不慣れな任であるといえたが、ハンスの頼みもあり、彼らは快くセルシアを捜しだすことを承諾してくれていた。

今は、一人でも、人手が欲しいくらいである。

猫の手も借りたいという言葉もあるが、今は、あながち本気でそう言える状況であった。

ローダ達は、まず手始めに、昨日の狼による襲撃事件を屋敷の外で目撃している者はいないかという事を調べるため、高級住宅街に住む、住人の一人一人に聞き込みを行うということに決めていた。襲撃は、夜おこなわれたこともあり、おそらく目撃談はごくわずかであるだろうという推測を立てていたが、意外な話、住宅街で狼を見かけたという目撃談は、かなりの数に上った。

それは、傭兵達が手分けして、それらの人々に聞き込みをした結果、得られた解答である。

それらの話を要約すると、こうだ。

狼は、西の湖の対岸、近くから突如としてあらわれ、住宅街に足を踏み入れていた。

数は、おおよそ、四五十頭ほど、皆、銀色の体毛に覆われた狼であった。

夜、外に出て、夕涼みをしていたある一人の住人は、月夜の闇に無数の赤く光る光点を発見して、驚きを隠せなかったという。

その男は、それが狼の大集団であることを知ると、自分の屋敷に取って返して、銃を手にして追い払おうとしたというのである。

しかし、銃を持って屋敷から出てきた時には、もうその姿は無く、たたらを踏んだということであった。

また、他にも、目撃談があった。

それは、やはり住宅街の一住人の、女性からのものである。

彼女が夜、散歩がてらに、ペットの犬を連れて住宅街の路地を歩いていると、猛烈な勢いで走り去っていく、狼たちの集団を見たというのである。

その時、彼女は驚いて尻餅をついたが、ペットの血統犬は、頻りに吠えたてたという。

狼たちは、何もせず黙って走り去ったが、その後に追従する形で一人の女性を抱えた十人程度の帯剣した男たちも、走り去ったということだ。

彼らは皆、その時、一様に西をめざして逃げて行ったという事であったが、それがおそらくセルシアを連れ去った、傭兵達であるという見通しがたったのである。

それらの話を総合すると、どうやら、狼たちは、西から来て西に帰ったということになる。

それに、セルシアを連れ去った傭兵達も、狼の後を追って西に逃げたとすると、ある意味、捜索の糸口が、絞られたといっても過言ではない。

それらの話を聞いて、ローダ達は、まだ捜索を続けていた傭兵達と供に、住宅街の西、湖の対岸にひらける草原に行ってみることにした。

だが、彼らがそこで目撃した光景は、非常に酷たらしい凄惨な光景であった。

そこには、屍があった。

草原一面に、累々と倒れ伏す屍である。

だが人の屍ではない、牛である。

ある農家の家畜と思われる牛達が、二十頭ほども腹から内蔵を引き千切られ、無残にも倒れ伏している姿が目についた。

辺り一面には、死臭が漂い、蠅の集団がどこからともなく現れて、牛の屍に群がっている。

おそらく、これは推測なのだが、この死んでいる牛達は、狼の群れにやられたのではないかと、傭兵達は口々に言う。

ローダとジルも、それに異論はなかった。

ここは、街外れの山林、近く、良質の牧草が群生する草原がひらけた場所だ。

その地理的、適性を活かして、二十軒もの農家がここで牛を放牧しているということだった。

ローダ達は、試しに近くの一軒の農家で、事情を聞いてみる事にする。

すると、推測どおり、その農家の主人は、昨日、狼の集団によって牛が襲われ惨憺たる有様になってしまったと、嘆いていた。

その主人が言うには、ここでは食肉用の牛、五十頭と酪農牛、百五十頭が放牧されているという。その中で、二十頭もの牛が狼に食い殺されたという事は、かなりの痛手であるということだった。

ローダ達は、その話になんか同情を示したが、話の本題はそこにはなかったので、狼に牛が襲われた話に関しては、それ位にしておき、さっそく昨日、一人の女性を連れ去った十人ほどの男たちの姿を見なかったかと、その主人に聞いてみている。

だが、その話に関しては、その農家の主人は知らないと言った。

しかし、それとは別な話であったが、昨日から納屋に置いてあった一台の馬車が、今朝、忽然と消えて無くなっていたというのである。

それは、干し草などや街へ牛乳のつまんだボトルなどを運ぶために使われている荷馬

車で、古いが、まだ現役として使える馬車であるという事であるらしく、主人は、それを失って頻りに残念がっている様子だった。

また、それと関連し付随する形で、二頭の馬も消えていたという話である。

ローダ達は、その話を聞くと、農家の主人に案内されて、その納屋に行ってみる。

すると、その納屋では、意外にも、偶然、見慣れたものが発見されていた。

ローダ達が発見したもの、それは女性ものの防具だ。

革をなめして張り付けられた軽い胸あてに、腕を覆うための鎧、それは確かにいつもセルシアが愛用していた、革製の防具である。

それを見たとき、ローダは確実に確信していた。

セルシアを連れ去った男たちは、この納屋を訪れているのだ。

だが、一体、それは何の為に・・・？

これは、後で判った事なのだが、農家の主人の話によると、納屋の棚の上にかけてあった一房のロープも消えていたという。

ローダ達は、その事を聞いて、悩んだあげく出した結論はこうだ。

おそらく、セルシアを連れ去った男たちは、この納屋で彼女の身につけていた防具一式をはぎ取ったのであろう。

そして、納屋にあったロープで、彼女を縛りその身を拘束した。

それから、逃走用に荷馬車を調達し、それに馬をつないでこの場を逃げ去る。

一人の女性を担いで逃げるには、それ相応の労力がある。

その問題を解消するために、荷馬車を使って逃走したというのが無難な考え方だった。

それは、単純な推理であったが、そう考える以外ほかに推論のしようがなかったのは事実だ。

その後、ローダ達は、農家の主人にお礼を言うと、その場を辞し、また別の農家を訪れて事の次第を聞き回ってみた。

しかし、その搜索業は、思った通りにはいかず、難航を極めたのは言うまでもない。

搜索の成果は、思わしくない。

最初に訪れた農家の納屋で、セルシアがその身を縛られ荷馬車で連れ去られたという事までは判ったが、その後の足取りが掴めない。

おそらく、地理的立場から推測すると、セルシアをさらった傭兵達は、そのまま更に西の方角に逃走したのではないかと思われる。

その周辺にある道は、街へ行く道と、牧草地を抜けて西に行く一本道しかない。

しかし、その西の先は荒涼とした【エルカトル】と呼ばれる原野が広がる不毛地帯だ。あまり人が滅多に立ち入ることのない場所であり、イルアデフが、その地域に潜伏しているのかという事は疑問だった。

ローダ達は、仕方なく一端ハンスの屋敷に帰ることにした。

セルシアの行方を、早く突き止めたいという思いは、皆、一様にあったが、その先の手がかりがない以上、そのまま闇雲に捜し回っても仕方がない。

ここは一端、屋敷に戻り、その後の方策を練った方がいいという傭兵達の意見を聞き入れ、そうすることに決めたのだ。

ローダ達が、不慣れな搜索の任を終えて屋敷に戻ると、さっそく屋敷の主人ハンスや

エネア、ミネア、そしてマリーネ夫人、アルジャンが迎え出てくれていた。

彼らは、皆セルシアの事が気になっていたらしく、帰ってくる早々、捜索の成果を根掘り葉掘り聞きだそうと集まって来ていた。

とくにエネアとミネアは、顕著に心配している様子だ。

彼女たちからすると、セルシアは姉のように気安く接してくれた同じ異性としての女友達であるという思いが強いらしく、本気で心配している様子だった。

屋敷に戻ると、辺りはもうすっかり暗くなり、既に、陽光は西の地平に没している。

残り日が、微かに山の端を紅色に染め上げていたが、その残滓は程なくして絶えていた。

時は既に、十一時二十五分を回っていた。

ローダ達は、ハンスも含め他の傭兵達とともに、明日、引き続き行うセルシアの捜索に関する話し合いの場を設けた後、今、一段落ついたところだ。

後は、明日に備えて眠りに就く。

しかし、その夜ローダは、ある夢を見てうなされていた。

それは、セルシアに関する夢だ。

暗い暗い一室に、ささやかな明かりが灯る。

地下牢の様な石壁のじめじめとした一室で、セルシアが後ろ手に両腕を縛られて座らされている。その光景がしばらく続くと、次にはどこにも扉がないのに一匹の鬼がセルシアの居る一室に入ってきて、不気味な笑いを浮かべる。

そして、手に持つ棘付きの鞭で、セルシアをしばき始めるのだ。

しなりを帯びて打ち付けられる鞭、そのたびに、セルシアは悲鳴を発し悶え苦しむ。

鬼は、それでも容赦なく鞭をふるい、セルシアの体に傷を付けていく。

セルシアは、それに耐えきれず気を失い卒倒する。

それは、短い夢であった。

しかしローダは、その夢の終わりと同時に目をさますと、布団を撥ね除け飛び起きていた。

「セルシア・・・」

ローダの口から、呟きが漏れる。

それはまさしく、悪夢の一つといえただろう。

ローダは、起きると、寝汗をびっしょりかいていた。

そして、窓とカーテンの隙間から差し込む日の光に、目を細めると、手で額の汗を拭っていた。

「もう朝か・・・？」

どうやら、寝込んで間もないと思っていたのに、次の日の朝を迎えていたらしい。

ローダは、ベットから跳ね降りて、服を着替えると、隣のベットに寝ているジルを起こしていた。

ジルも、眠い目をこすりながら、ようやく身を起こす。

「早いですな、若・・・」

ジル、開口一番は、その言葉だった。

今朝は、起床が早いこともあり、朝一番の、日の出を見る事となった。

東には、万年雪をその頂にたたえた、大山脈フェルムートが赤く染まっている。

ローダとジルは、外に出て、その朝焼けを眺めながら大きな深呼吸をしていた。

すると、二人の肺には新鮮な空気が流れこみ、清々しくそして気持ちのいい朝を、体全体で感じ取っていた。

今は、五時すぎである。

ローダとジルは、いつもより早めに起きたこともあり、他の者達はまだ眠っているとばかり思っていた。

しかし、屋敷の外の前庭を見て、その事が誤りであったことが証明されていた。

傭兵達である。

彼らは、ローダとジルが外に出る以前から、そこに集まり朝の立ち話をしていたのだ。「ようローダ、起きたか？ 今日もまた搜索だぞ、よろしくやろうぜ……」

一人の傭兵が、まだ朝早くだというのに、陽気な声で話し掛けてくる。

その男の名は、サンティスという。

今では、ラドカーブがいなくなって、仕方なく彼が傭兵達の取り纏め役をかって出ている。

彼らと、ローダ達は、ハンスの屋敷に来たとき以来の付き合いであるから、その間柄は気安い。ローダは、そんな彼らに、朝の挨拶を交わすと、また朝焼けの太陽を見つめて大きく背伸びをしていた。

今日の予定では、八時からセルシアの搜索を開始する、という取り決めになっていた。

六時二十分を回った頃には、屋敷の主人ハンスや、その家族も寝所から起きだしてきた様子だ。使用人やコックは、朝食の準備に慌ただしく厨房を行ったり来たりしている。

ローダ達や傭兵達は、そんな中、七時に食卓につき朝食のパンにかじりついている。

いま、食事が行われている場所は、ハンスたちがいつも食事時に使用していた、屋敷の大部屋である。

ハンスの配慮で、その大部屋は、ローダ達や傭兵達に開放され、皆が一緒に食事をとっている。もちろん、その席にはハンス一家も同席し、同じ料理をつついているのだ。

それは、今までにない状況である。

ローダとジルはともかく、他の傭兵達までもが、この大部屋で食事するのは初めての事であった。

それは、ハンスの心境の変化もあいまって、そうなったのである。

ハンスは、イルアデフの連中に脅されていたとはいえ、傭兵達を騙していたことには変わりなく、その事にまだ罪悪感を抱くのか、せめて朝、昼、晩の三食は、一同と一緒に食事をとることで、傭兵やローダ達に自分の信頼を回復させようとその席に誘ったのだと思われる。

ローダ達も、それに不満はなく、美味しい食事でありついている。

ローダなどは、まだハンスに対し、その胸に抱いた不審を解消はしてはいないようだが、エネアやミネア、それにマリーネ夫人やアルジャンに対しては、前と変わらず親し

く接しているのである。ローダの、ハンスに対する不審の解消は、いつなされるかは解らないが、ジルの見解からすると、セルシアの所在が判り、その身柄も無事であることが確認されない限り、駄目のような気がしていた。

そんなこともあり、ローダは、ハンスの顔を見るたび不機嫌になる。

それは、ローダの心境を如実に表していたが、その事に関してジルは何も言わなかった。

そうこうしている内に、朝食も終わり、傭兵達は二日目の搜索に意欲を燃やしていた。

今日は、昨日の搜索より、更に西の方角を見回してみようという方針のもと、傭兵達はまた湖の対岸を越えて、エルカトルに足を踏みいれてみることにしていた。

しかし、ローダとジルは、その傭兵達とは別行動をとることにする。

西地方の探索は、傭兵達に任せて、ローダとジルは、ハンスと共に街の情報屋へ行くのだ。

ハンスは、昨日、セルシアの搜索の助けになると思い、情報屋にイルアデフの搜索を依頼していたのだ。

その為、今日は、その成果を途中確認するため、ローダとジルと共に街の裏通りに面した路地にその看板をかかげる、情報屋へと足を運ばなければならない。

ローダ達は、屋敷の門で傭兵達と別行動をとると、何の躊躇もなく市街地に向かって足を進めていた。

情報屋は、エルドバの街の東地区に面した一角にあり、ハンスの屋敷からだど、徒歩で七キロの道程を歩くことになる。

そこまでの距離は、旅慣れしているローダ達にとっては、あつという間の距離である。

しかし、ハンスは、馬車は使わず歩き慣れていない為か、その歩調は緩やかだ。

約一時間半をかけて、その場所まで歩いていくと、ローダ達はその目的とする情報屋の店の前に立ち尽くしていた。

その店は、情報屋としての看板をかかげる以外、それとって何の変哲もない殺風景な店であった。

ローダは、その店の看板を一瞥すると、ハンスを先頭にして店の玄関をくぐっていた。

三人が店内に入ると、そこはまるで別世界のように煙草の煙が蔓延していた。

店に入ってすぐの所に、長椅子が置いてあり、そこへ数人の男女が腰掛けている。

どうやら、それは、順番待ちをしている、この店の客であるようだ。

「あらハンスさん、いらっしゃい。順番がありますので、そこの椅子に腰掛けて待っていただけますか？」

三人が店に入ると同時に、声をかけたのは、この店の受付嬢であった。

彼女は、取り立てて美人ではないが、持ち前の明るさで接客をしている。

ローダ達は、その受付嬢に促されるまま、長椅子に腰掛けて待つことにした・・・

それから、かれこれ一時間は過ぎた。

ようやく他の客もいなくなり、ローダ達の順番が回ってくる。

三人は、店の受付嬢に案内されて、奥の部屋に通されると、一人の陰湿そうな男の前

に腰を下ろしていた。

その男は、ラース・アスタパスとって、この情報屋の主人だ。

彼は、先程から顔に不釣り合いな小さい眼鏡を掛け、ローダ達、三人を見つめている。

しかし、その表情には、どこことなく悲痛感が漂っている感じが、顔に表れていた。

「ところでラースさん、昨日、伺った、情報の件はどんな具合だったのでしょうか・・・？」

そんな男を目の前に、ハンスは単刀直入に、話を切り出していた。

「・・・？　それがですな、大変なことになりましたよ・・・貴方の依頼の件は、イルアダフという組織の潜伏先について、調べて欲しいという事でしたが、酷い話、その搜索は頓挫してしまいました・・・」

「頓挫？　では、その件に関して、いい情報は掴めなかったというのですね？」

ハンスは、ラースの言葉から、それを察して、その様なことを口走っていた。

しかし、

「いいえ、それは、情報を掴むとかいう以前の問題が、発生したのですよ・・・実は、私達は、貴方に今回の仕事を依頼されて、そのイルアダフという組織の潜伏先を探るために、搜索員をこのエルドバ中に派遣したのですが、その直後、何者かにその搜索員が惨殺されて、手酷い痛手を負ったのです」

ラースは、手短かに答えていた。

「ええっ！　搜索員が、殺されたのですか！？」

ハンスは、それを聞いて、驚きを隠せず椅子から転げ落ちそうになった。

「そうです。おそらく、そのイルアダフは、私達、情報屋が搜索を始めたことを悟って、うちの職員を、妨害工作の為に殺したのだと思われるのですが、こちらとしましては、そんな事もあり、もうこの一件から手を退きたいと思っているのです・・・」

ラースは、額に冷や汗を浮かべながら、そう回答をしていた。

「では、今回の依頼は、なかった事にしてくれというのですね？」

ハンスが、疑問気に質問を繰り返す。

「ええ、そういう事になります」

「でも、それは困ります。私どもは、どうしても、イルアダフの所在を突き止めたいのです・・・」

「ですがねえ、こちらは、三人の搜索員が惨殺されているのですよ。もうこれ以上、この件に関わると、どんなことになるか判らないので、冷たいようですが、これ以上は搜索できません」

ラースは、きっぱりと、その事を断っていた。

「そんな、あなた方は情報屋でしょう！？　仕事を受けたからには、最後まで貫徹してもらわないと困ります・・・」

しかし、ハンスは、苦渋の表情で、必死にそう食い下がっていた。

だが・・・

「ハンスさん、もういい。人が殺されたんだ、もうこの情報屋に頼れないだろ。この件に関しては、俺達でなんとかするしかない。これ以上、他人を巻き込むことは出来ないからね」

ハンスは、ローダにそう言われて、口を噤んでしまっていた。

ローダは、正直のところ、この情報屋には、悪いことをしたと思っていた。
イルアデフの一件に関しては、この情報屋では、手におえる相手ではなかったということだ。

それだけ相手は、闇の部分に通達している裏組織である。
彼らにとって、情報屋ごときを、始末するのは容易い事の様だった……

三人は、店の玄関から表に出ると、一頻り息を吸い込み深い溜め息をもらしていた。
その顔に浮かぶ表情は、落胆の色が濃い。
情報屋がダメとなると、後は残されている手段として、別行動をとった傭兵達の搜索業がどう出るかということに、望みが託されていた。

傭兵達は、今頃、西の牧草地を抜けて、不毛の地エルカトルに足を踏み入れている頃だろう。

その搜索業が、吉とでるか、凶とでるかは、神のみぞ知る出来事のように思われていたが、彼らに期待するしか他に方法はない。

ローダ達は、もう情報屋には用はなかったので、足早にその場を立ち去った。

三人が、ハンスの屋敷に帰って来たのは、それから、約二時間、経っての事だ。

ローダは、屋敷に帰ってくるそうそう、敷地内の南側にひっそりと建っている、鳩小屋に足を運んでいた。

そこには、二十羽ほどの鳩が飼われており、独特の鳴き声と共に餌をくちばしで突きつばんでいる。ローダは、その中からある一羽の鳩を探していた。

足に金属製の筒を付けた、鳩である。

西に向かった傭兵達との連絡手段として、伝書鳩を使うことにしていた。

何か問題が発生した場合や、セルシアが見つかった時などに、その伝書鳩を使ってすぐ状況を報せられるように、傭兵達は、一羽の鳩を伴に連れて、西の不毛地帯エルカトルに向かったのだ。

ローダは、その鳩が、鳩小屋に戻って来ていないか確かめてみた。

しかし見当たらない。

鳩は、人に慣れているのか、ローダの近くによってくると、その手にとまって愛敬を振り撒いている。だが、やはり足に金属製の筒を付けた鳩は、見当たらなかった。

今、ローダとジル、そしてハンスは、屋敷の一階の大部屋に腰をおろし、ひたすら傭兵達の帰りを待ちわびていた。

情報屋から帰ってきて以来、三人は何もすることはなく、ただ惚けた顔をして椅子に腰掛けるだけだった。

それを見て、エネアとミネアが心配そうに三人を見据えていたが、ふと思いたって立ちだすと、そんな三人に対してお茶を入れてやることにしていた。

厨房で熱いお湯を沸かし、お茶の葉を用意すると、それを網状のこし器に入れ、熱湯をそそぐ。すると、こされたお茶の葉からは、赤茶色の液体がこぼれ落ちティーカップにそれが注がれる。二人は、それをトレイの上へのせ、大部屋にいる三人のもとへ運びこむ。

「さあ、お茶が入りましたよ。三人とも、召し上がってくださいな・・・」

姉のエネアが、そう言って陽気にふるまい、三人にお茶を勧めていた。

運ばれてきたティーカップからは、淡い湯気が立ち上り、誰もが飲み慣れた紅茶の甘い香りが三人の鼻孔をくすぐる。

それを受けてローダは、二人の姉妹に軽く微笑し、ありがとうと言いつつ、ティーカップを口元に運び、一口くちをつけている様子だった。

ジルとハンスも、それに習い同じ動作を繰り返す。

だが、三人の気分は、晴れた様子はない。

二人の姉妹が、せっかく入れてくれたお茶であったが、やはりこれくらいの事で三人の気をまぎらわす事には、ならなかった様子だった。

エネアとミネアは仕方なく、自分たちも大部屋のテーブルに備え付けられた椅子に腰を下ろして、今度は五人で黙って時が過ぎるのを待っていた。

その沈黙のなか、時計の秒針が時を刻む音だけが、その大部屋に反響し、一分、また一分と時間が過ぎるのを再確認することが出来ていた。

「あら？ あれは、伝書鳩ではないのですか？」

そんな中、唐突に言葉を発していたのは、妹のミネアだ。

彼女は、大部屋の窓から見える、木々の合間を縫ってそれを第一に発見していた。

彼女が指差す方向には、木の枝に羽を休める鳩が一羽そこに止まっていた。

「確かにあれは伝書鳩です、若！ 他の傭兵達が、何かを報せるために放ったのでしょう」

それを受けて、ジルが嬉々とした喜びの声を張り上げながら、ローダに語りかけていた。

「判った、捕まえてみよう」

ローダは、そう言うのと屋敷の外へ走りだしていた。

ジル達、四人も、その後を追う。

屋敷の外に出て、窓から見えた木の枝を探すと、そこにはもう鳩の姿は残っていなかった。

ローダは、不審に思い、辺りを探してみると、どうやらその鳩は、庭に降りて餌を探して歩き回っている様子だった。

ローダは、その鳩にそっと近付くと、手を延ばしてその体をはっきりと掴み取る。

人に慣れた鳩であったので、逃げたりはしなかったが、軽く羽をばたつかせて抵抗した様子だった。

さっそく鳩の足許を見してみる。

するとそこには、確かに、金属製の筒が括り付けてあり、伝書鳩であることが判った。

ローダは、その筒を器用に取り外すと、捕まえていた鳩を放してやっていた。

そして、その場で金属製の筒の蓋をあけ、中に収められている紙を取り出す。

そして、それをまた器用に広げて、折り目をのばす。

すると、そこに書かれていた内容は、ローダ達が予想もしなかった内容だった。

『ずいぶんと姑息な真似をしてくれたね。』

我々としては、無駄な殺生はしたくなかったのだが、事も事だ仕方あるまい。

きみたちの仲間の傭兵達は、皆殺しにした。これは、私達の忠告を聞かなかった罰だよ。

ところで君たちは、《セルシア・リーフミンツ》を捜している様だが、彼女は我等の手の内にある以上、いくら捜しても無駄だよ。

我等は、それほど馬鹿ではない。君等の動向ぐらい把握している。

それから、この前あとで連絡をするといっておいたが、この場を借りて君たちに連絡することにする。

この手紙が届いて三日後、ローダ・ブレイン、君とその仲間ジル・アダトスをともなってエルドバの街の西、エルカトルの遺跡場に来い。

君たち二人だけだ、それを破ると、リーフミンツの命の保障は出来ない。

だが、くれぐれも気を付けて来たまえ、エルカトルは、不毛の大地というからね。

それでは、そこで今回の件に関する決着を付けよう・・・』

イル・アダフ

その手紙の内容を見て、ローダは絶句していた。

それは、西に向かったはずの傭兵達からのものではなく、イルアダフからの通告だった。

どうやら、西に向かった傭兵達は、そこでイルアダフの連中に皆殺しにされたらしい。

手紙の文面を見ると、それは明らかだ。

「くそっ・・・」

ローダは、地獄の底から湧いて出てくるような、深いうめきを洩らしていた。

「若、一体、何が書かれていたのです!？」

状況を知らないジルが、ローダに問いかける。

するとローダは、その手紙の文面をジルに差し示すと、無造作に手渡していた。

ジルは、それを受け取り、急いでその文面に目を通す。

そして次に示したジルの反応も、やはりローダと、同じようなうめきの声であった。

「これは、一体、どうしたものでしょう？」

ジルが、怒りを噛み殺しながら、そう言葉を紡いだ。

「奴らの招待状だ。俺達に、エルカトルの遺跡場に来いと言っている」

「で、そのいい分に、乗るのですか？」

「ああ、そうするしかないだろ・・・セルシアの、命がかかっているんだ」

「しかし、これは罠ですぞ! 手ぐすね引いて待っている相手の懐に、飛び込んでいくようなものです」

ジルは、身振り手振りで、危険であることを、ローダに対し訴えかけていた。

「そんな事は判っている。でも、俺達が行かない限り、セルシアの身の安全は保障されないんだ。セルシアを見捨てるわけにはいかない。なんとしても助けださなければ、死んでいった傭兵達にも、顔向けが立たないじゃないか・・・」

「それはそうですが、でも危険すぎます。二人だけで行くなんで・・・ルヴェッツァーニが言うように、奴らは若の`古の王家の力、を利用しようとしているのですぞ。それなのに、若がこのこと出ていったら、奴らの思うつぼです」

第五卷 第三話

そう言うとジルは、深い嘆息を一つ洩らしていた。

それは聞き分けのないローダを、子供のように見て、嘆いてる趣にも見えた。

「じゃあ、一体、どうしろというんだ。ジルには、この状況をうまく切り抜ける方法があるというのか？」

ローダが切り返して、ジルを問い詰める。

「そ、そう言われると、わたしも困るのですが・・・で・・・でも・・・とにかく、危険です。この後の方策をよく考えねば、イルアデフの術中に陥るでしょう。わたしとしては、それが何より心配の種なのです・・・」

そう言うとジルは、また深い溜め息をして、言葉を区切っていた。

ローダも、ジルの言いたいことは判るのか、あえてそれ以上、批判はしなかった。

その後、二人は、何も言葉を発せず押し黙ったまま腕組みをして、身じろぎ一つせず考えに没頭してしまっていた。

横合いから、ハンスやエネア、ミネアに声をかけられたが、それにも応えずただ押し黙ったままだ。

だが、これから先、ジルとローダの二人には、何が待っているか疑問であったが、しかしてセルシアを助けだすまでの道のりは遠く険しい難事業のように思え、彼らの足下に重くのしかかる、一つの足枷を嵌められたかのように感じて、ふつつつと沸き起こる怒りを抑えつつ、彼らは、その憤りを強く噛みしめて、これから起こるいかなる出来事にも強く耐えてそれらの事に油断なく挑むことを決して忘れはしなかった。

セルシアの安否も心配だったが、ローダとジルの二人は、その決意を漲らせることによって、イルアデフの術中に深く陥らぬことを懸命に思慮し、堅固なる覚悟を以てセルシアを絶対イルアデフから助け出すのだという心情と信念を、その心の臍に強く強く刻むのである。

時の命運はいかに出るか、よく解らないモノではあったが、それが最良の手段として最善でありえる事には間違いはなかったからなのであるのだからだ・・・

第六章 エルカトルの遺跡で・・・

第一節

深い朝焼けが、雲間に映える。

東の空に顔を出す太陽は、血潮のように赤く揺らいでいる。

刻一刻と立ち昇る、その姿は、暗黒の宇宙に浮かぶ天体の神秘を物語るように、日々の輪転を繰り返している。

ローダは、その朝焼けを見るのが、何よりも好きだった。

深淵の暗闇から明ける、その瞬間が、全てのモヤモヤや鬱憤を吹き晴らしてくれるからだ。

辺りでは、朝早くから鳥がさえずり、木々の梢に止まりささやかな賑わいを見せていた。

ローダ達は、五時に起床をすませ、身仕度を調べていた。

洗ったばかりのシャツとズボンに着替えると、腰に愛用の剣を吊す。

そして、自分の荷物からある一つの木箱を取り出すと、それをおもむろに開け、中から一挺の拳銃を取り出していた。

それは、まだ真新しい、リボルバー式の拳銃だ。

あのバドニスという組織に属している、ルヴェッツァーニから贈られた代物である。

ジルによると、その拳銃は、大変、高価な代物であると言っていたが、つい返すのを忘れていまだ手元に残っていたのだ。

ローダは、その拳銃の手触りを確かめると、空の弾倉を開き、中に一つずつ銃弾を詰め込んでいく。その作業がおわると、ホルスターとベルトを取り出し、それを剣をはいた腰にまわして、また括り付ける。そして、ホルスターのホックを外し、拳銃を差し込むと、手早く準備を整えていた。

ふと隣を見ると、ジルはもう既に、準備を整え終わっている様子だった。

ジルは、砂漠の民が愛用する《ザックルス》という刀身の湾曲した剣を腰に吊すと、ローダの準備が整うのを、待っていた様子だった。

二人は、準備を終えると、部屋を後にしていた。

今日は、伝書鳩によるイルアデフからの通告があって、三日後のことだ。

彼らは、エルカトルの遺跡場で、待っていると思われる。

ローダとジルの二人は、今日、そこへ赴かなければならない。

屋敷の二階から下りると、そこにはハンスとエネア、ミネアの両姉妹が待っていた。

彼らも早起きして、多少、不安げな体で、何か落ち着きなくそこにいる様だった。

「もう行くのですか、早いですな。なにとぞ気を付けて行ってきて下さい。私達は、あなた方の帰りを待っていますから、ささやかですが、三人が無事で帰ってくるのを祈っています」

「ローダ様、きっと大丈夫ですよ？　くれぐれも無理はなさらないように、それだけが心配です。セルシアさんを含めて、また皆でお茶などを飲めることを、期待しています。どうか、ご無事で行ってらして下さい！」

「二人とも、頑張ってください。これは、私達が二人で作ったお守りです。これを持って、今日はお向いてください。私達は、あなた方の幸運を、心から祈っていますので、また一緒にお話など出来るといいですね……」

三人は、三者三様の言葉を口にすると、ローダとジルの顔をじっと見つめ返していた。

その後、ミネアがローダとジルの二人に、一つずつお守りを手渡す。

そのお守りとは、小さな袋のなかに磨き上げられた石が入っている、お守りである。

この地方の風習では、一心に、磨き上げた石に願いを込めると、その石には魔力が備わり、携帯する者の身を守ってくれる、という言い伝えがあるお守りである。

それを手渡すミネアの心中は、いくばくのものかは判らないが、二人の身を案じての事は確かで、ローダとジルは黙ってそれを受け取り、自分のポケットへしまっていた。「それじゃ、俺達は行ってくる。きっとセルシアを助けだして帰ってくるから、その時は、皆で手を打って喜ぶことにしよう……！」

そう言って、ローダとジルは、出口の方へ踵を返していた。

そして、屋敷の玄関を抜けると、外へと歩きだしていた。

その後を、エネアとミネアが心配そうに見送っていたが、彼女たちは、何も言わずただ手を繋ぎ合っただけでその場に立ち尽くしていた。しかし、二人の行く末に、幸運の女神が微笑むよう心から祈りを捧げると共に、暗雲を吹き晴らすべく、風の神《レダニア》に、助けを請い、力添えを頼むように、黙祷をするのは忘れなかった……

二人は、今、道を歩いている。

石畳で、舗装されていない道である。

ごつごつとする石が転がっている、とても状態の悪い道だが、ローダとジルの二人は、歩きやすい場所を選んで歩を進めていた。

目の前は、砂と岩の原野、所々に灌木帯が自生しているが、非常に殺風景な景色が広がっていた。

二人は、屋敷を出て、迷わず西に進路を取っていた。

ハンスの屋敷から、三十五キロ西へ行ったところに、エルカトルの遺跡があるそうだ。

これは聞いた話なのだが、この地方は、大昔の戦争で荒廃し、草木が生えぬ平原に変貌してしまったそうだ。

エルカトルの遺跡がある場所も、その戦争の名残で、今は廃墟となった場所らしい。

ローダ達は、その遺跡をめざして、ひたすら歩を進めていた。

その、寡黙的な姿は、死地へ赴く兵士を思わせるほどに、悲壮感が漂っているかの様でもあった。

しかし、意外と本人たちは、健全だった。

ローダは、すくっと眼前を見据え、目を細める。

ジルも、それにつられて、額に手をあてて遠くを眺めてみた。

すると、地平線の彼方に影が見える。

それはおそらく、イルアデフの言っていた、エルカトルの遺跡であるらしい。

眼前に横たわるその遺跡は、いく年もの風雨にさらされて、かなり風化が進んでいたが、それがかるうじて大昔の時代に朽ち果てた、都市の廃墟であることが判った。

二人は、更に歩を進める。

それから、かれこれ一時間弱、歩いたろうか・・・？

目の前には、先ほど眺めた時よりは、より大きな視点で遺跡が横たわっていた。

その遺跡の入り口、付近で、二人はふと足を止める。

「やっと着きましたな。しかし、奴らは本当に、こんなところに居るのでしょうか？」

ジルが、額の汗を拭いながら、そう言葉を洩らしていた。

「居てもらわなければ、困る。俺達だって、無駄足になるのは御免だからね。わざわざ、ここまで足を運んだんだ、ここで全ての決着を付けたいさ・・・」

ローダは、そのジルの問い掛けに、力んだ様に答えていた。

「とにかく、中に入ってその辺を歩いてみよう。奴らが、どこに潜んでいるか判らないから、気を付けろよジル・・・！」

そう言ってローダとジルは、遺跡のなかへ足を踏み入れていた。

遺跡の中は、瓦礫の山だった。

むかし、石作りの家だったと思われる建物が、倒壊して崩れ、今は無残にも大地に平伏している。

ローダの立っている位置からすると、その様な景色が、四方、三キロにも渡って続いていた。

遺跡の中は、石畳で舗装されている道路なども見受けられたが、殆どが、砂と風化した瓦礫によって、埋め尽くされている。

しかし、まだ倒壊を免れている建物や、噴水なども見かけられるので、ローダ達、二人は、ひとまず遺跡の中心部をめざして、歩いてみることにしていた。

二人が、遺跡の中心部へ来ると、そこには高さ二十メートル程もある尖塔と、大昔の寺院である、聖堂らしき建物がひっそりと建っていた。

その朽ち果てた聖堂の前には、大きな広場が展がり、円形の階段が目につく。そこは、遺跡の中でも、かなり開けた場所である。

ローダは、その様な景観を目にしなが、その場でジルとともに佇んでいた。

すると・・・

「よく来たね、君たち、お早いお着きで何よりだ。我々も、待つ時間が短くてよかったよ。この様な場所で待つのは、ちと淋しいからね・・・」

ローダ達が、今いる場所から右の方向に顔を向けると、そこには、緑色のローブを羽織った男が、一人、不気味に立っていた。

その男は、暖れた老人のような声で、そう言葉を紡ぐと、軽く頭を下げて会釈して

いた。

「こんにちは、初めて会えて光栄に思うよ。こんな辺鄙な場所にご招待して恐縮だが、来てくれて嬉しい。これでやっと、直に会って話ができることは、大いなる進展といえるだろうからね・・・！」

そう言って男は、ローブの裾をはためかせ、悠然としてその場に立ち控えていた。

ローダとジルは、その男を見て警戒の姿勢を取っていた。

その男は、フードをめぶか目にかぶって、顔を隠しているのです、その表情は判らない。

しかし、その男から醸し出されている雰囲気は、今が昼間だというのに、闇の暗黒を彷彿とさせる、何かおどろおどろしいものだった。

(こいつが、あの声の主の妖術師か・・・！？)

ローダは、一人、心の内で独語していた。

声のトーンからすると、間違えない。以前、聞いたことのある声で、覚えがある。

嘎れた老人のような声、その声を発する男が、いま目の前にいるのだ。

ローダは、表情を陰しくしたまま、その男を身じろぎせずじっと睨み返していた。

「やっとお出ましか・・・あんたが、この一件の黒幕なんだろう。さっそくだが、セルシアを返してもらおうか。俺達は、その為にここへ来たんだ・・・！」

ローダは、相手を見据えながら、隙のない態度で、まず相手の出方を覗っていた。

「ずいぶんと、気が早いんだね。私達としては、もっと気長に話し合いたいと思っているのだが、そう焦らないでもらいたい。リーフミンツは、無事だよ。いま、その証拠を見せてあげるから、しばし待ちたまえ・・・！」

そう言うと、ローブの男は、右手を挙げ何かの合図をしていた。

すると、妖術師の立つ場所より、少し離れた瓦礫の陰から、二人の男が顔を出し、その姿を現していた。

そして、その男たちに、腕を抱えられるような姿勢で、セルシアも同時に現れる。

彼女は、うなだれて、息をしていない様に脱力した姿勢のまま、左右から男たちに挟まれる格好で、立たされている。

それを見てローダは、一瞬セルシアが死んでいるのではないかと、錯覚するほど、その表情はびくりとも動かなかった。

「お前等、一体、セルシアに何をした！！」

ローダは、叫んでいた。

「何もしていないさ、ただ眠ってもらっているだけだよ。そう気を悪くしてもらいたくないね。彼女は反抗的な女性だ。起きていると、何かとうるさいので、ちょっとのあいだ黙っていててもらいたくて、仕方なくそうしたのだよ・・・」

「何を言っている、明らかに薬を盛っただろ。彼女に、もしもの事があったら、ただじゃおかないぞ・・・！」

ローダは、そう言って怒りを顕わにする。

セルシアは、おそらく、睡眠薬か何かを飲まされたのだろう。

遠目から見ても、彼女の顔色は青い。

しかし、それだけで薬を飲まされたと判断するのは、早計すぎるような気もしていたが、隣に居たジルは、その事に対して何も言わなかった。

「ところで《ユ・デラウ・ウェン・イローダ》よ、この場所に来て、どう思うかね！？
この場所は、君にとって深い意味のある場所なのだが、良ければ感想などを聞かせてもらいたいね……！」

「感想だと！？ 俺にとっちゃ、ここは初めてくる場所だ、そんなもの持ち合わせていない！」

ローダは、きっぱりと、そう言い切っていた。

この遺跡を訪れた感想など、はなっから、念頭にあるわけではない。

ただ、殺伐としているなど思うだけで、ほかに気の利いた感想など思い浮かぶ筈はなかった。

「これは済まなかった、君は知らないのだね。この場所に佇む廃墟は、かのリムル・オール王朝時代に栄えた、小都市の一つだ。この都市の名は【エネムセルク】といい、`輝ける星、の意味を持つ街なのだが、王族としての君には、かつて栄えたであろうこの街を見て、感慨に耽るのではないかと、内心、興味をそそられていてね。でも、そう言えば君は、リムル・オールの遺産について、何も知らされていないのだと、いま気付いたよ……」

ローブの男は、笑う風でもなく、また悩める風でもなく、ただ淡々と自分が思うところの胸の内を、吐露して語っていた。

その口調は、自分の話に酔っている、弁舌家を思わせる口調だったので、ローダは、内心、癖癖して、ローブの男を見据えていた。

「いや、リムル・オールの遺産のことなら、ある男に少しだけ話を聞いて把握している。あんた等が、その遺産を狙って、密かに活動しているということも知っている。その為に、俺が必要なんだということは、一応、理解しているつもりだ。だから、もったいぶらず、話を先に進めてくれ。俺は、あんた等が言う、リムル・オールの遺産などに興味はないが、イルアデフという組織が、一体、どんな目的をもって、その遺産を掘り起こそうとしているのかということには、興味をそそられるから、手短かに事の詳細を話してくれ……！」

「ほおおう、それは話が早くていいね。それで、どこまでその秘密を知っているというのだね。おそらく、君は、バドニスのルヴェッツァーニとかいうエージェントに、その話を聞いたのではないかと思われるが、まあ、あまりバドニス信じない方がいいだろう。彼らは`裏切り者、だからね。我々にとっては、バドニスは、邪魔者の何者でもない存在なのだよ。だが、いいだろ、君が、我々の崇高な目的を聞きたいというのなら、教えてしんぜよう。しばし、長い話になるけど聞いてくれるかね??」

「ああ、構わない、話してくれ。俺達は、もう聞く準備は整っている。いつでもいいぜ！」

そう言って、ローダとジルは、襟を直して楽なままその起立の姿勢を整えていた。

これから話されるであろう、ローブの男からの事の真相を、一言も聞き漏らすことなく聞く準備は整っている。

彼が、何を語り始めるかは、疑問だったが、何を聞いても驚く事は無いように気を引き締め、ローブの男に耳を傾けるのであった。

第二節

「実際、どこから話し始めればいいのか複雑なところもあるが、君たちにはイルアデフという組織の由来についても、知っておいてもらいたいという話の経緯もあるので、まずは、イルアデフの前身アルカーナの話からすることにしよう。

君たちは、この事を知っているかどうかは判らないが、アルカーナとは西の大陸エウロカを発祥の地として活動をしていた理想主義組織の総称だ。別名《アルカックライン》と呼ばれ、`天の三頭牛、という異称も持つ、西の世界では有名な一大組織でもあった。

その組織の創設は、約二百八十年前の《イルム・ケルク》年代期まで遡る。

イルム・ケルク年代期とは、まだ人類が第一期文明期崩壊、以後、おおよそ原始的な生活を余儀なくされていた、時代の頃、《ベルクスト・シュタット》という名の理想家によって、創設されたのがアルカーナである。

アルカーナの事業は、リムル・オール遺跡の発掘および、研究、超常的能力者の育成と保護、第一期文明隆盛期の科学の普及などと、さまざまな事業に取り組み、その組織力を拡大してきた組織である。

彼らは、その中でも前史代文明リムル・オールの遺跡発掘に力を注ぎ、数々の文献と、高度な科学書を発見し、エウロカ大陸の新たなる創世に貢献した実績を持つ。

東の大陸アドアナに比べ、西の大陸エウロカが高度に発達した科学文明を持つようになったのも、ひとえにアルカーナの活動のおかげといっても過言ではない。

彼ら、アルカーナは、救世的な思想をもち、リムル・オールの遺跡から発掘し明らかになった様々な技術を実用化し、それを惜し気もなく社会に流布することで、人類社会の発展と救済を行っていた。彼らの目指すところは、人類社会が利便性に満ちた科学力の恩恵に与り、快適な生活を約束された日々の営みをおくれる世界を創造しようというものだ。

その思想は、多くの国々で受け入れられ、各国はこぞってアルカーナという組織を支持し、援助金を出してその事業を支援していたのである。

今日の現代に至って、発電機や水道設備、天然ガスや蒸気機関などの実用化がなかったのも、アルカーナの功績である。

しかし、そんな思想をもったアルカーナも、八年前に突如として内分裂を起こす。

我等がイルアデフと、バドニスという下部組織の台頭である。

イルアデフは、アルカーナの《アマリッツェル派》と呼ばれる思想主義者によって形成されていた派閥組織だ。そして、その対抗派閥として、バドニスは《クルクスタル派》という票目をかかっていた。

この二大派閥の抗争と台頭により、アルカーナは事実上その組織力を維持できなくなり、イルアデフとバドニスを残して消滅してしまった。

その後、イルアデフはリムル・オールの子の遺跡の発掘権と超常能力者の研究という特権を引き継ぎ、バドニスとイルアデフと袂を分かち、独自の活動をするようになったのだ……！」

ローブの男は、そこまで言うとはローダとジルを見据えて、小さな笑いを洩らしていた。

「いま話した内容が、君たちに判るかな……!?、といった挑戦的な笑いだったので、二人は、複雑な話を頭のなかで整理しながらも、黙って次の言葉を待っている様子だった。「どうかね、これでイルアデフとバドニスの組織の由来が分かっただろ。それに、アルカーナという組織が、どのような活動をしていたかということにも納得がいったと思う。君たちは、バドニスのルヴェツァーニという男から、どのような話を聞いたのかは知らないが、いま私が話した内容は、嘘偽りのない事実だよ。信じてもらえるかな……?」「ああ、分かった信じよう。で、あんた等イルアデフも、バドニスと同じように、リムル・オールの子の遺産を目当てに活動をしているようだが、そのリムル・オールとは一体どんな王朝だったんだ!? それに、俺がそのリムル・オールの子の王族であるということだが、一体、俺は何者なんだ。それらの事をふまえて、掻い摘んで話してもらいたい。どうだい、それが出来るか?」

「判った、それじゃ今度はリムル・オールについて話そう。君たちは、大陸の歴史でリムル・オールについて学んだこともあるかもしれない。だが、その常識的な部分も含めて、その裏の話まで語ろう……！」

そう言うと、ローブの男は、少し一定の間合いをおいて息継ぎし、またおもむろに口を開いて語り出すのであった。

「リムル・オールという王朝は、約一千年前までに栄えていた前史年代文明だ。その事は、どの国の歴史の教科書にも載っている故事である。

第一代王位、ラデクラフト王を初めとし、それからつづく三十五代目の王の時代まで、約二千年間、【ラーダ・エクリアル】界の全大陸を支配していた王朝だ。その歴史は古く、伝統も一言では言い表せないものがある。

王朝は、絶対君主の王を始めとし、エセロワ人と呼ばれる高官たちが、政治の中枢を動かし、国の運営を進めていたらしい。リムル・オールの子の首都デラルームを施政の場とし、大陸各地に、数百にも及ぶ空中要塞を配して、強固な中央集権社会体制を築き上げていた。

国は富み、人びとは何の不満もなく、その人生を开花し、日々の営みを続けていたという。

リムル・オールの子の王族には、人望があった。

公明正大な施政にも定評があり、また司法や科学の分野にも通達していた。

その中でも、科学と魔術を融合させた、リムル・オール王朝、独特の技術が存在したらしい。

その力を駆って、飛翔艇と呼ばれる空を飛ぶ乗り物や、岩塊を虚空に浮かべ王族の離宮を造り、全世界を監督するためにその離宮で四つの大陸各地を巡航視察したとも言われている。

また、その世界の各要所要所には、オベルスクという尖塔を建設し、大宇宙の膨大なエネルギーをそこに凝縮し、供給させ、年中を問わず全都市には煌々とした光が灯り、

人々は貧富の差がなくその人生を大いに謳歌したといわれている。

そして、王族といえば、彼らは不思議な力を潜在的に秘めていた。

それは主に、風を駆る能力である。

リムル・オール王家は、別名、`風の王族、ともいわれ、魔術にも比類する異能を享受していたのだ。

その時代、俗世では、リムル・オール王家と同じような異能の力を秘めた人々もいたようだったが、それはごく少数で、その力も微々たるものであった。しかし、王家の力は違う。それは、どこから来る異能の力であるのかは判らないが、リムル・オール王家は大地を揺るがすほどの、絶大な力を秘めていたといわれている。

これは、歴史の文献には載っていない、裏の話になるのだが、じつは、今で言うところの魔術大系や呪術大系も、そのリムル・オール王家が自らの異能の力の研究に取り組み、系統立てて編みだし確立した二大大系である。

その為、魔術師や呪術師には、リムル・オール王家を魔術と呪術またその他の祖として信奉する向きもある。今の時代に、残されている魔術書や呪術書のたぐいは、おおむねリムル・オール王家の人々が書き上げた、大系書の写本だ。そこから考えてみても、リムル・オールは後世の人々に、大きな功績を残したといっても言いすぎではない。

しかし、その王朝の栄華も、二千年という長きにわたる周期を経ると、しだいに衰亡していく。

それは、国の政務を支える官僚たちの怠慢や、腐敗から、国の統制が取れなくなったのだ。

いつの時代にも、腐敗は絶えないというが、リムル・オールという王朝も、それに関しては例外ではなかったようだ。

リムル・オール王朝、第三十五代王位継承者《ユ・デラウ・オルフェスト・カーナン》王の時代になると、もはやその官僚たちの腐敗は目に余るものにまでなっていた。

その影響で、国自体も荒廃し、不平不満分子が現れ始め、やがてその後は大きな内戦が勃発し、リムル・オール王朝は、国の体制を維持できなくなり、無数に分裂しはじめる。

そんな中、王族と高官や司祭達は、長年にわたって築き上げてきた、リムル・オール王朝文明の魔法科学を象徴とする様々な叡知を含んだ文献や科学書、医術書その他、様々な希少価値をもつ文明遺産を後世の何れかに託すため、ある封印を施し人知れず隠したといわれている。

それは、これまでアルカーナが、リムル・オールの遺跡で発掘してきた文献や科学書の類を、更に上回る高度に超越し、洗練された魔法科学の文献や科学書その他、諸々の文明遺産とされている。

それらの遺産は、リムル・オールの叡知の結晶だ。

それらは、厳重な封印の管理下におかれ、今でも地下の奥深くに眠っているのである。

その後、国は滅び、現代にいたるわけだが、その隠された遺産は今日に至っても暴かれてはいない……」

ローブの男は、そこまで言うと、すくっとローダを見据えていた。

そして、意味不明な鋭い眼差しで、表情を少し強ばらせると、軽く息をすって一息ついている様子だった。

「なるほど、世界の歴史にそんな事があったのか……でも、今の話の筋からすると、俺が、一体、何者で、リムル・オール王家とどう関わっているかという事は、よく判らないぜ。それらの事を詳しく聞きたいし、それにあんた等が目指しているものは何なのかを、はっきりさせてくれ……！」

ローダは、ローブの男を見据えながら、それらの話に興味を覚えるのか、好奇の目でぎゅっと拳を握り締めていた。しかし、ローブの男に対する警戒心は解いてはいない。それから、ジルも同意見らしく、腕組みをしながら控えているが、やはり警戒の色は隠しきれない様子だ。

そんな二人を見据えながら、ローブの男は一頻り苦笑いする。

それは、真剣な顔つきで、問い質してくるローダやジルに対して、横柄に接する態度であった。

「ハハハ、君は好奇心旺盛だね。それに、話の呑み込みも早いと見える。ではいいだろう、お望みどおり、君は、一体、何者なのかを今から語って聞かせよう。しかし言うておくが、今から語る話の内容は、あまり他人には語らないほうがいい。でないと君の身の安全を脅かすことにもなりかねないからね、それだけは言うておく……！」

「ああ、判った。そうする事にするよ」

ローダは、そのローブの男が口にする言葉の意味するところが、今の段階ではあまりよく理解できなかったが、一先ず頷くことにしていた。

「では語ろう《イローダ》よ、しかし、冒頭から結論を言う様で恐縮なのだが、じつは、君は、一千年前に滅んだ、リムル・オール王朝の歴とした生き残りなのだ……！！」

「生き残り……！？」

「そう、つまり君の本当の父親は、リムル・オール王朝の第三十五代王位継承者《ユ・デラウ・オルフェスト・カーナン》王その人なのだ……！！」

率直な話、君はその王族の直系であり、国が滅びていなければ、三十六代目の王位継承権を引き継ぐはずだった、リムル・オール王族の皇太子としてこの世に生を受けたのだ。

リムル・オール王朝が、この世から消滅するときの数ヶ月前、君はオルフェスト・カーナン王と、その妻、エクメラル・アシリアとの間に生まれた待望の長子だった。

また、君には五つ違いの姉がおり、その名を《ユ・デラウ・ウォン・アナリス》といった。

カーナン王と、その王妃アシリアは、君と君の姉を含めて相当、可愛いがったそうだよ。

国の高官たちや、司祭も、君が生まれて喜び、その時は夜通し宴席を開いて、その誕生を祝ったといわれている。

しかし、カーナン王の時代、国は大規模な内戦のさなかにあり、王族には反逆の危機が迫っていた。地方領主のあいつぐ反乱と、大陸の僻地に住んでいた蛮族の台頭により、国は疲弊し、その存続さえ危ぶまれていた時代だ。

そのさなか、君は不運にもその時代に生を受けた。

今の時代に残されている、リムル・オール王家の系図には、君の名は記されていないが、ある筋からの情報によると、君は三十六代目の王としての資質を持つ、王位の継承者であるのは間違えない。

では、何故その一千年前に滅んだはずのリムル・オール王朝の王族の子息が、永き

時を経た現代に存在し生きているのかということ、君は知りたいと思うかねイローダよ!？」

ローブの男は、突然、話を区切るとローダに質問してきた。

「ああ、知りたいね。俺が腑に落ちないのは、そこところさ。話によると、俺は一千年前に生まれた赤子だったということだが、何故、それが今の時代に生き残っているのかということは、最大の疑問だ。果たして、そんな事が可能なかが信じられない……!」
「そうだろう、しかし、それが可能だったのだよイローダ。君は、リムル・オール魔法科学の粋を集めた力によって、現代に至まで生きていたのだ—————

君が、最初に発見されたのは、リムル・オール首都デラルームの地下でだ。そこは、王家が使用していた代々の墓であり、三十五代目に至までの王や王妃達が眠っていた場所でもある。

そこは、厳重な封印がなされていて、なかなか立ち入ることのできなかった未知の領域だったが、アルカーナは、その長年の研究と調査の末、その封印を解き放った。

そして、その墳墓で見た光景は、目を疑うほどに鮮烈なものだった。

そこには、歴代の王族が眠っていた。

通常、人間は死して屍となり、墓に葬られるものだが、そこにあった光景は違っていた。

そこにあった光景とは、歴代の王族は、皆、生前の美しい姿を残したまま葬られていたのだ。

彼らは、たしかに命の命脈を終えていた者達だ。

しかし、死してもその肉体は腐敗せず、まるで生きているかのようにそこで静かな眠りをむさぼっていたのだよ。

それは、アルカーナの人々にとって、とても信じられない光景だった。

しかし、それを上回る光景がその後、発見されていた。

それは、赤子だった。

赤子が、すやすやと寝息を立てて、その墳墓の地下深くで眠っていたのだよ。

その赤子は、地下の第三層付近で、発見されていた。

アルカーナは、その赤子を連れ帰ると、研究室でその体をくまなく調査した。

そして、その赤子が、いかなる素性の者なのかを膨大な文献の中から調べあげ、ようやくその答えを見付けだしていた。

それは、こういうことだイローダよ。君の父オルフェスト・カーナン王は、リムル・オール王家の血統を絶やしてしまうことを危惧して、君をリムル・オール遺産とともに、地下深くに封印したのさ……

それは、君を遺産の封印を解く、鍵の役割も課してね。

リムル・オール王族や高官、司祭達は、国が滅びる一歩手前に、後世また国が再興して栄える夢をもって、まだ赤子だった君に、その思いを託し、地下深く誰も手の届かない場所に封印をしたのだよ。その後、国は滅び王族は自らの命を絶ち側近の者達の手によって墳墓に埋葬された。

高官たちや、司祭は、野に下りその行方をくらましたという。

彼らが、どこへ行ったのかは判らないが、国が滅びる際、何かの密命を帯びたとも言

われている。

そして時代は、いま現在に至るわけだ。

君が、地下で発見されたとき、君は特殊な柩のなかにその体を入れられ、赤子のまま一千年近くその命を永らえていた。

これは、あとで判ったことなのだが、君が収められていたその柩には、特殊な機能が備わっており、いわば生命維持装置としての役割を果たしていたらしい。

肉体の分子結合を維持し、永眠化させ、永きにわたってその肉体を存続させる機能だ。

それは、リムル・オール科学の粋を集めて開発された装置らしいが、その装置のおかげで、君は、一千年を経た現代に至るまで赤子の姿のままその柩で眠りについていただけだよ。

それはまさに、驚異的科学力の賜といえるだろう。

今の科学力では、それらの装置を生み出すことはかなわない。

だからこそ、それらの技術を解き明かす為の、文献や科学書の類が必要になってくる。

その為、どうしてもリムル・オールの遺産を、暴かなければならない。

リムル・オールの遺産は、王族の墳墓より奥深く、地下の第四層に埋蔵されているといわれている。そこは、より厳重な封印がなされており、王家の血統を持つ者にしか立ち入ることが許されていないらしい。

アルカーナは、その封印を解く手段を何度も試みたらしいが、すべて徒労に終わったようだ。

しかし、イローダ、君の発見とともに、事態は急展開した。

アルカーナの連中は、君を王家の血統を引き継ぐ赤子だと知ると、何よりも喜んだ。

彼らにとって、リムル・オールの遺産を暴くことは、永年の彼岸であったからだ。

だから、彼らは、自らの研究室で君を育てた。

異能の力を持つ、他の子供らと一緒にね。

しかし、そこに、不測の事態が生じたのだよ。

ある男が、アルカーナの人々の目を盗んで、その赤子を研究室から連れ出したのだ。

その男の名は、イルバルト・ナスラムと言って、若い頃からアルカーナで働いていた研究員の一人だ。彼は、数いる研究員のなかでも、リムル・オールの遺産に関して造詣が深く、一目置かれる存在だった。

しかし彼は、何を思ったか、アルカーナの研究室から、その赤子を連れだし、どこへとも知れず姿をくらましたのだ。

それを知って、アルカーナの連中は焦った。

ようやく発見したリムル・オール王家の血を引く赤子を、手中におさめたと思っていたアルカーナであったが、その男の突然の裏切りに、目を丸くしたのは言うまでもない。

彼らは、赤子が連れ去られたことを知ると、即座に捜索隊を出してイルバルト・ナスラムを追わせた。しかし、ナスラムは、その捜索の手を逃れて逃げに逃げた。

捜索隊も、必死になってナスラムの消息を追ったが、けっきょく彼は見つからず、その赤子とともに、どこへともなく姿をくらましてしまったのだ。

そのイルバルト・ナスラムという男が、じつはいまイルアデフで軟禁しているアルスレイドという男なのだが、君も知っているとおり、アルスレイドは君の父親を名乗ってい

る男だ。

彼は、名を変えて、大陸各地を転々とし、傭兵となりながら君を養い逃亡を続けていたらしい。

彼が、何の為に、君を連れだしアルカーナから逃げたのかは判っていないのだが、その事をアルスレイドに直にたずねても、彼は口を割ろうとはしないのが現状なのだよ。

だが、そんな折り、そのアルスレイドの消息を追って傭兵稼業を続けているという若者の噂を聞いた。我等イルアデフは、それを不審に思い、人知れず調査を続けると、その若者が十九年前、消息を絶った、あの赤子であるのではないかという事がしだいに明らかになったのだよ。

しかし、それはまだ、それが本当にそうであるという確証はなかった。

そこで我々イルアデフは、一計を案じることにした。

君を、ハンス・アグデプトの屋敷におびき寄せ、そこで君がどのような能力を秘めているかを、確認しようと思ったのだ。

数々の暗殺者をけしにかけて、屋敷を襲わせたのも、それはすべて、君の風使いとしての能力を確かめるためでもある。

だが、それで判ったことは、君がやはり十九年前、消息を絶った《ユ・デラウ・ウェン・イローダ》つまり、王族の子息であるということだ。二度目の襲撃の時、君が風を駆って暗殺者を屠ったことからしても、それは決定的な事実だ。

その事が判り、我々は手を打って喜んだよ。

八年前に消滅した、アルカーナの意志をなかば受け継いでいる我々イルアデフにとっては、またとない朗報だった。

これで、リムル・オール of 遺産を暴くための要因が、揃ったということになるのだからね……」

ローブの男は、そこまでの話を語ると、また一息ついていた。

長たらしい話を立て続けにしたせいか、口の渇きを自分の唾で潤している様子だった。

そんな中、ローダとジルは、ローブの男が語る話の内容を聞き漏らすことなく、一心に聞いていた。そして、その語りが終わると同時に、自分たちも肩の力を抜いて、やはりローブの男と同じように一息ついている様子だった。

「なるほど、あんたが言っていることは、ルヴェッツァーニが言っていたことと、ほぼ同じ内容のことだな。彼が言うには、バドニスという組織は、そのリムル・オール of 遺産を人類の発展の為に使おうとしているということだ。しかし、あんた等のイルアデフという組織は、それを何の目的の為に使おうとしているのか聞かないかぎり、納得いかないね。まさか、バドニスと同じ理想の為に、動いてるというわけではないだろ……！」

そう言ってローダは、相手を極端に鋭い目付きで睨め付ける。

隣で話を聞いていたジルも、それにならってローブの男を睨め付けていた。

「どうも君は、バドニスに毒されてしまったようだね。バドニスが、何と言っているかは知らないが、本当に彼らが人類の発展の為に、リムル・オール of 遺産を使おうとしていると思っているのかね。彼らは、表向き慈善事業などを行っているが、実は、その裏で世界の一極支配を狙っているのだよ。リムル・オール of 遺産を手に入れば、それが可能だからね……」

「それじゃ、あんた等は、どうだって言うんだ。まさか、そのバドニスの目的を阻止しようと動いてるわけではないだろ。それをどう説明する!？」

ローダは憤慨して、問い質す。

別に、バドニスを養護するつもりはなかったが、ローブの男がそのバドニスの行いを否定したからだ。

ローダは、イルアデフよりは、まだバドニスの方が正義に通達している組織ではないかと思い始めていた。しかし、それをあからさまに否定する言葉が紡がれたので、意外にもそれを嫌悪する心境を表していたのだ。

「ハハハ、そう食って掛かるのはよしてくれ。私どもとしては、君を敵にまわしたくない。だが、君は我々の組織が目指している目的を知りたがっているようだから、それを教えることにしよう……」

じつは我々が目指しているのは、ユートピアなのだよ——ユートピア、つまり楽園を築き上げることが、我々イルアデフの最大の目的なのだ!!」

ローブの男は、恍惚とした言葉の響きのまま語り始める。

それは、自分の思うところの全てが、正義だといわんばかりの振る舞いのように見えた。

「ユートピアだって!? それは、一体、どういう事だ、意味が判らないぞ……!」

ローダは、本当に意味が判らなかったので、ローブの男にそう叫んでいた。

それと、ローブの男の語り口調が、もったいぶった口調だったので、それにもいらつき怒りを顕わにしていた。

「まあ聞きたまえ、我々は、アルカーナの思想を受け継いで異能の子供たちの研究を行っている。しかし、それは、一体、何故だと思う??」

それは、いずれ異能の子供たちを集めて、その人々による今までにない優れた人類社会を築くためなのだよ。今の時代は、争いが絶えない。国は国に敵対し、民族は民族に敵対し争いを始めている。その為、世界には戦争というまがまがしい殺戮が絶えない。それは、ひとえに、人間が利己的な愚かな生きものであるからだ。だが、そこに新しい思想を持った人々が登場すればどうなるかね。国の足枷に縛られない、民族の風習に傾倒しない人々がいて、それらの者達が、愚かな人々を支配すればどうなると思う。おそらくそれは、戦争というまがまがしい事態を、この世から消滅させ、本当の意味での平和な時代が訪れるのではないのかね? そこでだ、我々が目指しているのは、そういったわだかまりのない思想を持つ若者を育て上げ、またリムル・オール of 遺産の力も借りて、世界の秩序を新しく造り変えようとしているのだよ。これはまだ実験段階なのだが、我々の研究室では、愚鈍な思想には縛られない新種の人間が多く巣立っている。彼らは、全て異能の能力を持つ、選りすぐられた人間だ。その彼らを、世界の表舞台に立たせ、その秘められた力を示せば、争いを続ける愚かな人間は、皆、彼らに平伏すだろう。

これは、我々が研究して解ったことなのだが、異能の力を持つ子供たちは、他の一般の人々より、その頭脳的面が優れているという研究結果がでた。それは、先天的なものなのだが、彼らは頭がいい。だから、その若者たちに新たな社会を築いていく思想を享受すれば、我々が言うところの楽園を、築き上げることも出来るのだよ」

ローブの男は、いつのまにか、め深目に被っていたフードをはねのけると、その顔を

日の下にさらして独舌していた。

その顔は、嘎れた声に似合わず、端正に整った顔立ちである。

歳は、四十をこえると思われるが、彼の右目は白濁して視力を失っている。

だが、もう一方の目は、妖しい光を宿し、先程から忙しくきょろきょろと動いていた。

それを見てローダは、何か異様な感覚を胸の内に抱いていた。

まさに、蛇だな・・・

それが、正直なところだ。

異様に白いその顔を凝視すると、身震いを起こしそうだ。

だが、ローブの男は、顔を表にさらしたこともあまり気にとめていないのか、自分の話に酔った風な表情をして、さらに横柄な態度で次の言葉を紡ぎだしていた。

「私の話が判ったかね、イローダよ。我等イルアデフの目標は、世界に新秩序をもたらす、そこに樂園を築くことだ。多くの人々は、くだらない既成観念に囚われ、その可能性を見失っている。しかし我等は違う。国や民族、宗教や迷信に囚われず、特にクリアな新思想をもって事に対処する。国に対する愛国心や、他国に対する敵愾心、宗教に対する信仰心や、異教徒に対する疎外など、また、同一民族に見られる団結心や、他民族に対する迫害などのありとあらゆるそれらの障壁を取り払って行われる、一大国家の形成は、万民の道徳性を向上させ、くだらない集団観念を一掃するだろう。

そこでだ、そのそれらの大業を実現させるためには、君の力が必要となってくる。

君には、リムル・オールの遺産の封印を解く「鍵」としての役目をはたしてもらいたいという思いもあるのだが、それ以上に、我々は、君の風の王族としてのカリスマ性を強く欲している。要するに、我々、秘密結社の思想の実現を主管する、盟主の座についてもらいたいと思っているのだよ。

君は、あの偉大な業績をなしたリムル・オール王朝の王の血族だ。君ほどに、異能の力を秘めた若者は、この大陸中では皆無に等しい。その君を、我々が目指す樂園の盟主にすえれば、多くの者は風の血統に跪くだろう。

どうだね、これが我々の目指すところの樂園思想だよ。君が、この遠大な計画に賛同して、我々の大望に手を貸してくれるならば、喜んで君をイルアデフの組織に迎え入れたいと思っている」

「俺を盟主にだって！？ 冗談じゃないぜ！ あんた、寝ごといつているのか・・・！？」

ローダの反応は、敏感だった。

ローブの男を、その双眸の瞳で睨め付けると、口を大きく開閉させて叫んでいた。

(盟主だって？ 冗談じゃない。俺はただの傭兵なんだ。そんな事、出来る訳がないだろ)

それが、ローダにとっての、本音である。

話の経緯上、自分がリムル・オール王家の王族の血統を引き継いでいるということ自体も、驚きであったが、まさか、自分を盟主にすえて理想的樂園を築いていこうとしているなんて、思いもよらない考えである。その為ローダは、イルアデフの思惑に癡癡する以外に他に方法が見いだせないという、そんな心境であった。

(一体、こいつ等、何を考えているんだ！？)

ローダは、そんな心境のまま、ローブの男にさらなる警戒心を抱いていた。

「そんなに、驚くことではないだろう。君、以外、盟主の座につく者の人選が思いつかないのだよ。我々としては、君を丁重に迎え入れて、組織の一員にしたいと思っている。もちろん、今のままでは、君は原石に近い状態だが、我々の組むカリキュラムをこなしてさらなる教育を施せば、君は世界に類を見ない巨大な宝石として輝くことだろう。どうかね、我々のこの申し出に乗ってはくれないかね!? 君は、長年、捜し続けた、リムル・オールのお原石なのだよ。こういっては何だが、君をしがない傭兵としての身分で、その人生を終わらせてしまうのは惜しい逸材だ。君は輝く資質を持つ。その為に、我等が組織でその力を存分に開花させてみてはどうだろうか??」

それは、甘い誘いであった。

ローブの男は、巧みにローダの心を、くすぐるように語りかけてくる。

その語り口調は、一見ローダの立場を慮って紡がれてくるような言葉であったが、その本意とするところは、隠されているという様な気もしていた。

その為ローダは、そのローブの男の問い掛けには答えず、ただ黙ってしばらく相手を見据えていたが、次にはそれとは別な質問をローブの男にぶつけてみることにしていた。「しかしあんたは、一体、何者なんだ。俺達が知らない様々なことを知っている。あんたは、この件に関しての指揮をとっている黒幕のようだが、一体、イルアデフの何なんだ!？」

「ほおおう、これは失礼したね。いま気付いたが、まだ私は君たちに自分の自己紹介をしていなかったようだ。判った、それでは私の自己紹介をしよう。実を言うとね、私はイルアデフの第七幹部の一人《バーク・ダーラント》と言う者だ。おもに、東の世界に派遣されて活動をしている者なのだが、君たちは知らないと思うが、私はイルアデフの組織内では異形の者とされている。それは私の右目を見れば判ることだろう。この右目は失明していてね、残された左の目で物を見るのはなかなか儘ならないのだけれど、今はそんな事どうでもいいことだね」

そう言ってバーク・ダーラントと名乗った男は、手短かに自分の自己紹介を終えていた。

そしてダーラントは、いま居る場所から数歩、前へ進みでると、ローブの裾をはためかせながら、両手を広げて、やはり横柄な態度を崩さぬまま、ローダとジルに次のような言葉を投げ掛けてきた。

「さあ、自己紹介も終わったことだし、先程の話に戻ろうではないか。これからが話の本題だ、じっくり時間をかけて考えてもらっても構わないが、いい答えを期待しているよ・・・」

そう言ってダーラントは、不敵な笑みをその顔に浮かべていた。

その顔は、やはり蛇のぬめりとした捉えどころのない顔に、よく似ていたが、ローダはその事を口に出しては言わなかった。

しかし、この男を好きにはなれない、そんな思いがローダの頭の中を支配して、離れなかったのは事実なのである。

第三節

北北東の空から、強い日差しが照りつけていた。

その日差しは、人の肌を焼くまでには至らない。

だが、それでも人に発汗を促すには足る、強い日差しであるともいえる。

ローダは、その日差しを受けながら、額に浮かんだ汗をシャツの袖口で拭っていた。

しかし、それでも汗はしたたり落ちてくる。

エルドバの街では感じなかったが、ここエルカトルの遺跡では、幾分、気温が高いような気もする。

それは、一二度の違いであったが、それでもそこは暑いといえる気候のまっただ中にある。

そんな中、ローダとジルは、先程からソボソボと話し合いをしていた。

緑色のローブの男、バーク・ダーラントを尻目に見ながら、彼が居るところよりも少し離れた声の届かない位置で、二人して何事か話し合っている。

その光景を見ながら、ダーラントは、余裕の表情でローダとジルの話し合いが終わるのを待っている様子だった。

それから、セルシアといえば、まだ、二人の男に両腕を抱えられたまま、うっすらと虚ろな意識のまま、立たされていた。

そして、三十分後・・・

「さあ、君たち、話し合いの結論はでたかな。これだけ時間を取ったのだ、我々の仲間になるという件は「是」なのか「非」なのか、はっきりして貰いたいね・・・」

ダーラントは、そう言うと、ローダとジルの二人に呼び掛けて、話し合いの答えをせまっていた。

その声をうけて、ローダとジルはおもむろに、ダーラントの方へその顔を向ける。

そして、姿勢を正して、彼の方へ向き直り頭を振り返らせていた。

ローダが、言葉を紡ぐ。

「判った。率直な話、俺達が話し合った結論は結局のところこうだ、是か非の「非」つまり断る、それが俺達の答えだよ！」

ローダは、そう言って、幾分、胸を張る。

それは、虚勢ではない。

二人は、歴とした信念にもとづいて、その答えを出したつもりだった。

「ほほう、君たちは、私の申し出を断るというのかね。それは意外だな。君たちならば、我々の目指すところの楽園思想に賛同して、仲間になってくれると思っていたが、これはなかなか納得のいかない返答だね・・・」

ダーラントは、そう言うと、男にしてはか細いその眉をしかめて、戯けてみせていた。「で、それは一体、どういう訳で、我々の申し出を断るといふのだね。まずその事をうかがいたい、どうかね？」

彼は、釈然としない態度で横柄に言うと、ローダとジルに対し問いただす。

それは、あっさり二人に断られて、多少、不服だった様子だ。

ダーラントとしても、ローダとジルの二人が一つ返事でOKしてくれるとは思っても見なかったが、その訳を聞きたくて、二人に興味をそそられたらしい。

「いいだろ、俺達が、何故あんた等の仲間になることを否定するのか？ それは、あんた等が、まっとうな人間であるとは、とても思えないからだ……！」

「まっとうな人間ではない？ 私達がかね！？」

「そう、あんた等は、俺達の立場から見ると、異常に狡猾のような気がする。ハンスを脅して襲撃事件をでっちあげたのもそうだが、セルシアをさらって、俺達に不利になるような立場を強要しているという点から見ても、それはとても正義に通達している人間の様な行いとはとても言えないだろう。そういった事からしても、あんた等は非人道的部類の人種のような気がする。そんな連中が、樂園思想を掲げているなんて、狡猾以上の何ものでもない気がするからだ！！」

ローダは、きっぱりと、そう言い切っていた。

その瞳は、真剣味を帯びて輝いている。

そこには、何者にも侵されない、真摯な眼差しが強く見え隠れする。

だが、ダーラントは、その言葉を聞いて口を歪めて哄笑をしていた。

その哄笑は、遺跡内の瓦礫に反響して、えも言われぬ音響を呼び起こす。

「ハハハハ、これは痛いところを突かれたね。たしかに我々は、色々な画策をめぐらして君を結果的にここにおびきよせた。しかし、それがどうだといふのかね。我々の目指す大望からすれば、多少、姑息な手段にうったえても、大して罰は当たらないと思うのだが、君たちには、それほど狡猾に見えたのかね？」

それは、悪業をなしても、清々としている罪人の不遜な態度にも似ていた。

ダーラントは、ローダに非難されても、悪怯れた様子もなく、またその顔に薄ら笑いを浮かべると、鋭利な眼差しのまま二人を見据えて、極端なまでの平静さを保っていた。「あんた等、姑息なまねをしておいて、開き直るつもりか！？ もしあんた等が正義に通達している者達であるというのなら、そこに居るセルシアを放してもらおう。そうでないと、こちらも黙ってはいないぞ！！」

そう言ってローダは、一喝する。

それは、余りにもダーラントの態度が不遜かつ横暴に見えたので、それを戒めるための意味も含めて、そう言葉が出ていたのだ。

だが、やはりダーラントは、その言葉に対し何の罪悪感も思い浮かばないらしく、その不遜な態度を、あらためようともせず辛辣な目付きでその場に佇んでいた。

ローダは、そんな態度に内心ひどく憤慨する。

こいつは、自分自身の行いに対して、善悪の判断ができない部類の人間なのか！？

そこには何か、すっぱりと人間として大事な部分を忘れて、道徳心や理性が極端に欠落してしまっている、そんな風にも見て取れる。

彼らは、新思想に基づくユートピアをこの世界にうちたてて、今までにない優れた人類社会を築こうとしているということだが、高邁な理想をかかげているわりには、実際やっていることは、人道的見地からしても非道と呼ばれる部類の行いを天の善なる神さえも恐れずにやってのけようとしている。

それは、人が守るべき、最低限の倫理を逸脱した行いの様にも見え、その理想とは極端に矛盾しているようにさえも感じる。

それは、理想をかかげる者の狂信なのかは分からないが、とても納得のいく事ではない。

しかし、こんな連中に関わっていると、自分たちの正義感に基づく全ての行いが嘲笑われているような気がして仕方がない。

それは何か、自分たちの顔に泥を塗られた様な、そんな屈辱的な心境である。

ローダは、そう思うと、目の前のダーラントを険悪な眼差しで凝視し続けていた。

どうしてもローダには、ダーラントが信用できなかったのである。

「ハハハ、そう怒りなされるな、君たちの言い分はご尤もだ。しかし我等とてようやく捜し当てた君をこのまま手放すことはできない。その為にも、リーフミンツは我々の切り札として使わせてもらうことにする！」

そう言ってダーラントは、その切れ長の鋭い目を極端に細めて、微笑を繰り返す。

「何、言ってやがる。それこそ非人道的だと言っているんだ。あんた等、その事が判らないのか！？ 自分の胸に手をあてて考えてみろ。そうすれば、いまやっているあんた等の行いが、やましい行いであるということが判るだろうよ・・・」

「どうも君は解っていないようだね。我々としては、理想の実現がなるのならば、どんな姑息な手段にうったえても構わないのだよ。我々は、過程より結果を望むほうでね。それがどんな汚い手段であっても、大望が実現できるのであればそれを良しとするのだ・・・！」

そう言うときダーラントの目が、怪しく光っていた。

それは、狂信的な思想を正義と思い込む、質の悪い信仰者の眼差しでもあるようにさえ感じていた。

ローダは、それを見ると、しばらく絶句して言葉がでない状況に陥る。

それは、ローダの価値観からすると、驚くほどに横暴な人種のもの考え方のように思えたからだ。

「あんた等は、狂っている。楽園などという理想をかかげているが、その実態は、悪行もいとわない陰謀家の集団じゃないか！！」

そう言うときローダは、あからさまにダーラントを非難していた。

「何とでも言いたまえ。我々としては、何を言われても意に介する謂われはない。我々は、自らの思うが仮に事を進めることが正義なのだ。だから、君の非難の言葉など痛くも痒くもない。文句があるのなら、君の正義という信念をここに示してみたまえ・・・！」

「貴様あ！！」

それはやはり、不遜な奴の物の言い方であった。

ローダの頭に、カッと血がのぼる。

その直後、ローダは、自分の腰に吊した剣のつかに手を掛けて、抜刀の姿勢をとって

いた。

それだけダーラントの言葉に、怒りを感じたからだ。

両者の間に、険悪な空気が張り詰める。

そしてローダは、手持ちの中剣のこい口を切って、その刀身の一部をそこから少しのぞかせて見せていた。

それは、どうしても相手の物言いが、あまりにも不遜であったために、自らの理性にそぐわず、我慢がならなかった為でもある。

「おっと、君はこの状況を把握していないのかね。リーフミンツは、我々の手中にあるのだよ。君が、不穏な行動を示せば、命の保障がないとは思わないのかい!？」

そう言うとダーラントは、ローダの切っ先を制する。

すると・・・

「ローダ、そんな奴の言うことなんて聞く必要はないわ。私にかまわず、早くその男を斬り捨てて・・・!」

突然、横合いから女性の声が響いてきた。

それは、セルシアだ。

どうやら、彼女は、ローダ達とダーラントが話をしている間に、その意識を取り戻していたのだらしい。セルシアは、二人の男に押さえ付けられながらも、気丈にふるまうと、ローダに対しそう叫んでいた。しかし、男たちは、そのセルシアの言葉をさえぎるように、その両腕に力をこめると、彼女を押さえ付ける。

するとセルシアは、眉根にしわを寄せて苦悶の表情をその顔に浮かべると、左右の男たちの足を頻りに蹴飛ばしている様子だった。

「セルシア、気付いていたのか、無事で何よりだ!」

ローダは、そんなセルシアに対し、安堵の言葉を投げ掛ける。

彼は、ダーラントの動向が気になっていたが、少なからず安心した様子だ。

見たところ、セルシアは元気そうだ。

気を失っている時は、だいぶ心配したが、彼女の声を久しぶりに聞いてひとしおといえる。

だが、まだ彼女の身の安全が、保障された訳ではない。

二人の男に拘束され、人質として捕らわれているのだ。

ローダは、その事を考えると、早く彼女を助けだしてあげたいという思いに打ち拉がれるが、それはなかなか儘ならないことであった。

「あなた達、放しなさいよ・・・やり方が汚いわよ!!」

そんな中、セルシアは、身を振ってあばれている。

それは、左右から彼女をぎゅっと押さえ付けている、男たちの拘束を強引に振りほどこうとしての挙動だった。

しかし、二人の男は、頑としてセルシアを放さなかった。

そして、その二人の男は、懐から短刀を取り出すと、暴れるセルシアの喉元にそれを突き付けて、更に彼女に対する拘束力を強める。

白刃が、彼女の喉元できらりと光る。

「何をしているの!？　早くその男を斬り捨てて。私の事はいいから、ローダ早くやり

なさい！」

だが、セルシアは、その突き付けられた短刀にも動じる気配も見せず、ただ姉のような口調でロードダに対し指示を送ると、ダーラントを鋭い視線でにらみつけて敵愾心を顕わにしていた。

セルシアは、ダーラントのことが気に入らない様子だ。

捕まっていた数日間、何も身に危険が及ぶような事はされてはいないようだが、今こうやって拘束されていることが、彼女の心情を逆撫でしている様だった。

しかし、ロードダは、セルシアにそう言われても、剣のつかに手を掛けた俣、どうすればいいのか、しばらくのあいだ躊躇している様子だった。

セルシアが、短刀を突き付ける男たちに拘束されているのだ、自分がダーラントに対して下手に手出しすれば、彼女は身の危険にさらされる。

それは、ロードダにとっては、どうしても避けたい一つの懸念事項であった。

彼女は、ロードダからすれば、かけがえのない仲間だ。それを見捨てることは出来ない。

だから、不用意に斬り込めば、セルシアが身の危険にさらされるのは目に見えている。

それを考えると、ロードダが斬り込むことを躊躇しても、当然の事である。

セルシアを死なせることは、とても出来ないからだ。

「ハハハ、どうやら手がだせないようだね。我々としては、リーフミンツを切り札としてとっておいたことが功をそうしたようだ。こんな事して君たちには悪いが、これも大望の為だ仕方あるまい！」

そう言ってダーラントは、嘲笑を繰り返す。

ロードダは、その不遜な態度に、カチンときたが、何も口に出しては言いだせず、そのまま口をつぐんでいた。

「さあ、どうするかね。この様な状況だ、君たちはもう我々の仲間になるしか道は残されておるまい。だからもう一度だけ尋ねよう、君たちは、私達の仲間になるかね？ それとも断るかね？ さあこの場で決めてもらおう……」

「そんな事、決まっている。俺達はおまえたちの仲間になどならない。それが答えだといっているだろう。間違っても、非道なおまえたちの片棒を担ぐことはできない。よく覚えておけ！！」

ロードダは、ありったけの侮蔑の意味も含めて、そう言い放つ。

彼は、前言を撤回することは、しなかった。

それは、どうしても、ダーラントが悪の権化のように思えていたからだ。

「ほほう、それでは仕方がないね。では、力づくで君たちを拘束しよう。その後、洗脳を施せば、我等の思うがままに働いてくれるだろうからね……」

そう言うとダーラントは、再び右手を挙げていた。

すると、朽ち果てた大聖堂の陰から、三十人、近くの男たちが顔を出す。

それらの男たちは、皆、片手に剣を携えて、その白刃をぎらつかせている。

彼らは、おそらく、だいぶ前から瓦礫の陰に隠れて待機していたのだろう。どこに隠れていたかは判らないが、ダーラントの合図とともに駆け出して来たところからすると、ロードダには気が付かなかったが、すぐ近くに潜んでいたらしい。

男たちは、息急き切ってロードダとジルの二人のもとへ、駆ける。

そして、二人の目前にまでくると、放射状に隊列を組んで、ローダ達を取り囲み、対峙の姿勢を明らかにしていた。

「貴様！　どこまでも卑怯な奴だな！　セルシアを人質に取ったうえに、多勢に無勢で攻め立てるなんて、とても高邁な理想をかける者のすることじゃないぞ！　恥を知れ！！」

ローダは、それを見て、憤慨しながら言葉をまくしたてる。

だが、「ハハハ、何とでも言い給え。我々にとっては、大望の実現が最優先事項だ。卑怯といわれても構わないよ。君が、我々の手中に落ちればね・・・」

ダーラントは、懲りずに嘲笑を繰り返すだけだった。

「お前たち、構わないから、その二人の男を捕らえろ。くれぐれも死なせてはならんぞ！」
「ハッ！！」

ダーラントの指示に、男たちは、目上の武官に直立不動のまま敬礼をする下士官のように、畏まった返答をすると、彼の言葉をうけてそれを遂行すべく、目の前の二人に鋭い眼差しを送っていた。

そして、全員が胸の前に剣を突き出し、ローダとジルにその切っ先を向ける。

すると、王国の騎士が、隊列を組んで突撃するような姿勢のまま、男たちは、ローダとジルに一步また一步と捻り寄り、じりじりとその包囲網を縮めてきていた。

ローダとジルはそれを見ると、危機を察知して、腰に吊してある剣を引きぬぎ、二人、同時にして身構えていた。

だがそれは、無駄なあがきかもしれない。

セルシアが人質として捕らえられている以上、剣を構えたのはいいが、身動きがとれない。

(まずい、このままでは袋の鼠だ！　この状況をなんとかして打開しなければ、自分たちもセルシアと同じように、捕らわれてしまう・・・)

しかし、二人には、この状況を切り抜けるための、良い方策は残念ながら思い浮かばなかった。

これでは、本当に万事休すだ。

目の前には、剣を突き出した男たちが迫っている。

彼らはみな、ローダとジルの二人を嘲笑うかのように手持ちの剣をもてあそぶと、その包囲網をさらにちぢめて差し迫ってきていた。

そして、ローダ達の、二三步、手前にまで達すると、全員が剣を二人に突き付けて、有無を言わさず、そのまま自分たちの意に従うように目配せして促してきていた。

だが、その時である・・・

ぱーん、ぱーん！！

立て続けに、二発の銃声が轟いた。

(何だ！？)

その音をきっかけにして、その場に居合わせたほぼ全員の者が、その銃声に驚き騒めきたっていた。

それは、突然の銃声、明らかに、この近くで発砲があったようだ。

ローダとジルもそれに驚き、音のした方向に首をめぐらして探りを入れる。

どたっ・・・

だが、その直後、ローダとジルは確かに見ていた。

セルシアを人質にとり、その身を拘束して短刀を突き付けていたはずのあの二人の男達が、つい先程、ウツと言う声もなく、頭から血を流してそのまま倒れていく姿を、一部始終もらすことなく、彼らはその双眸でしっかりと捉えていた。

(一体、何？ 何が起こったの！?)

そんな中、セルシアといえば、一時、放心状態に陥っていた。

それは、唐突の出来事であったのだから、仕方あるまい。

しかし彼女は、数秒の後、我に返ると、目の前に折り重なるように倒れている二人の男たちを一瞥して驚いていた。

彼らは、二人とも絶命していた。

頭部に、銃弾を受けたのだから、それは当然だろう。

だが一体、誰が銃撃をしたのか？

そう思い、辺りをきょろきょろと見回していると、ある一人の男が大きな瓦礫の陰から軽やかに飛び出ると、その右手に銃を携えたままセルシアの許へとかけてくる姿が目映った。

それを見てセルシアは、一時、困惑していた。

それは、彼女にとって見知った、ある人物の姿であったからだ。

「貴方は、カイル・・・カイル・ルヴェッツァーニじゃない。どうしてここへ!？」

「やあ、リーフミンツ、久しぶりだね。元気だったかい？ また君のような美人に会えてとても嬉しいよ・・・！」

そう言うとルヴェッツァーニは、相変わらず歯の浮くような科白をはいて、セルシアの傍へと近付いてくる。

「あんた、ルヴェッツァーニじゃないか？ どうしてこんな・・・こんな所にいるんだ!？」

それを見て、やはり驚きそう言い放っていたのは、ローダだった。

彼は、男たちに囲まれながらも、遠目からセルシアと突然、現れたルヴェッツァーニの動向を確認すると、意外な表情を隠しきれずそう叫んでいた。

この様な場所に、あのルヴェッツァーニがなぜ居るのだ!？

それは、ローダにとって、とても驚きに値する光景であった。

意外な者の突然の登場、それには、ジルも、目を丸くして、怪訝な態度を表面化させていた。

「そんな事よりローダ、こっちは大丈夫だ。リーフミンツは解放したよ。今は目の前の敵に集中しろ。でないと、捕まったりしたらまた状況が不利になるぜ・・・！」

そう言うと、ルヴェッツァーニは、ニッと白い歯をのぞかせて、大げさな笑いを見せていた。

すると、

「ああ、判った話は後でしょう。でも礼をいうぜ、セルシアを助けてくれてありがとう！」

ローダは、そう言うと、ジルとともに、目の前の敵に集中することにした。

せっかくルヴェッツァーニが、今後の活路を開いてくれたのだ。それを無駄にすることは出来ない。

ローダとジルの二人は、それを察すると、剣を胸の前に突き出し、目の前の男たちと対決の姿勢をとり身構える。

だがその頃、当の男たちといえば、突然の銃声と闖入者の登場により、気が動転しているのか、統制が乱れ浮き足立っている様子だった。

「いやああ！！」

そこへローダは、その絶好のチャンスを逃すまいとして、ジルと瞬間的に目配せを交わすと、三十人、近くいる男たちの群れへ、勇敢にも躍り掛かって斬り込んでいた。

ザシュ！！

キン・・・

俄に、肉を切り裂く音や剣戟の音が鳴り響く。

ローダは最初、一番、手近にいた一人の男に躍り掛かると、その胸ぐらを白刃を煌めかせ斬り裂き、そのまま渾身の一撃で、一刀のもとにその相手を斬り倒していた。

「ぐうっ・・・！」

その斬り付けられた男は、意味不明なくぐもったうめきを洩らすと、そのまま地面に倒れこみ絶命する。

ローダのすぐ隣では、ジルも上段からはすかけに斬りつけ、一人の男を目の前にし、いま斬撃をたたき込んでいる様子だった。

それで、二人の男が骸になり、地面に倒れ伏す。

だが、ローダとジルは、それで攻撃の手をゆるめたりはしない。

戦いは、すでに始まっているのだ。

相手が浮き足立っている隙に、攻めたほうがいい。

なにせ、相手は、数の上で優位にあるからだ。

その為にも、この機に、少しでも相手の人員を減らしておきたいという目算がある。

ローダは、今度は、大きく跳躍すると、右隣にいる痩せぎすな男に標的を定めていた。

ザン・・・！

すると、一瞬のうちに、その男の首が飛んでいた。

疾風の動き、それはローダの得意とするところの、戦法であった。

このような多勢に無勢での状況だ、躊躇している暇はない。

ローダの狙い澄ました一撃は、その男の頸動脈や頸椎をも断ち斬って、真横へと抜けると、鋭い切っ先を残して一閃されていた。

そして、ぽとりとその首が地面に落ち、首を失った体がその後を追うように倒れ伏すと、先程の男たちと同様、動かぬ骸となって、その場で息をひきとっていた。

ちなみに、その直後、ジルも一人の男をカチ合いの後、一刀のもとに斬り捨て、その相手の命を奪うと、その男の体を蹴り倒して、地べたに這いつくばらせている様子だった。

「くううう、貴様、よくも仲間を・・・！」

一人の男が、苦渋のうめきを洩らしながら、そう口走る。

仲間を、瞬時に四人も斬り倒されたことで、極端に憤慨している様子だ。

そこへ、

「何をやっているお前たち、早くその二人の男を捕らえろ。失敗はゆるさんぞ！！」

苛立つ声色を押さえながらも、ダーラントの喝がとんでいた。

それを機に、男たちは統制を取り戻し、混乱のさなか、隊列を組み直そうと動きを見せていた。

だが、遅い。

ローダは、それを察知すると、風の力を駆っていた。

意識を集中して、風の精霊の脈動をつかむ。

すると突然、無風状態だった辺りに風が吹くと、一瞬にして、猛烈な勢いの突風が巻き起こり、ローダ達を取り囲もうとしていた男たちが、ほぼ全員、後方へと無残にも吹き飛ばされていた。

グガッ・・・！！

男たちは、そのまま地面や瓦礫の残骸にその体を強打し、血へどを吐いてその場でのたうつように、もがき苦しむ。

だが、それで致命傷を受けたものは、幸にもいない。

風の威力で吹き飛ばされて、つよく体を強打し息を詰まらせたただけだ。

もちろんローダの狙いも、ただ男たちの隊列を打ち砕くためのもので、それ以外の意図は含まれていなかった。

「くそううう！」

すると、次の瞬間、ローダ達のいる横合いから、突然、斬撃が飛んできていた。

二人だ。

それは、おそらく、ローダの放った突風の難を逃れていた、男たちであろう。

先程の風の威力では、男たち全員を吹き飛ばすことは、出来なかった。

斬り掛かってきた男たちは、その中の二人であるようだ。

彼らは、血走った目を大きく見開きながら、剣を上段に構えると、れっぱくの気合いとともに、斬撃をたたき込んできていた。

ギン・・・

それをローダとジルは、剣を胸の前に構えて受けとめる。

その激しい激突に、刀身からは火花が散ったが、ローダとジルは、構わずそれを押し返して、後方へと飛びのき、間合いを取っていた。

ローダの表情に、不敵な笑いが浮かぶ。

その直後、二人の男たちが、また体勢を立て直し、有無を言わず雄叫びをあげて斬り掛かってくる。

今度も、やはり上段からだ。

振り下ろされてくるその刀身は、太陽の光を受けてぎらぎらと輝いている。

しかし、ローダとジルは、それを今度は剣で受けず横へ逃れると、身を翻して跳びずさっていた。

男たちは、標的を失いたたらを踏む。

二人は、剣を素振りした格好になり、前のめりにつんのめって、そのまま倒れそうになっていた。

そこへ、ローダは上段から、ジルは横薙ぎの鋭い一閃で、剣を振るう。

二人の男は、それを察知し身を翻そうとしたが、避けきれず、一人は頭部から血を流したたせ、また一人は胴を酷く斬りつけられて、無残にも倒れ伏していた。

当然、彼らの受けた傷は深く、そのまま絶命し、短い命を終えていたのは言うまでもない。

しかし、ローダとジルは、それを一瞥すると、遠くで戦いを見守っていたダーラントの方へ向き直り、鋭い眼差しで相手を睨み付け、威嚇の姿勢をとっていた。

先ほど風の威力で吹き飛ばした男たちは、まだ、地面から立ち上がってはこれない状況にある。だが、ダーラントといえ、この様な状況になっても、まだその顔に薄ら笑いを浮かべている。ローダとジルの二人からすれば、彼が、どうしてそれほどの余裕の表情を浮かべていられるのが不思議だったが、その場は何も言わず、言葉を飲み込んでいた。

「ほほう、随分とやってくれるね。しかし、バドニスのエージェントがここまでのこのこと現れるとは思っていなかったよ。だが、人質が解放されたからといって、安心してもらっては困るね。我々としては、そうやすやすと君たちをここから帰す訳にはいかない。君たちには、やはりここで捕らえられて貰わなければ、ならないからね！」

そう言うとダーラントは、何事かもぞもぞと口を動かし言葉を唱えだしている様子だった。

(呪文か!?)

それを見てローダは、警戒の色を示す。

「ジル、気をつけろよ。奴は、何か仕掛けるつもりだ。辺りに気を配れ……」

彼は、それを察すると、細心の注意を払って、周囲を見渡していた。

ダーラントの、呪文の詠唱は続いている。

ジルも、それを見ると、ローダと同じように首をめぐらしながら、これから何事が起こるのかを慮って、緊張の度合いを強くしていた。

.....

すると、しばらくの間があって、辺りでは異変が生じていた。

先ほど、風の威力を駆って、吹き飛ばしたはずの男たちが、むくりと立ち上がって起きだして来ていたのだ。

(何だ!?)

だが、ローダは、その男たちの様子が、前とはうって変わって妙に異常であるという事にすぐ気が付いていた。

男たちの眼が、怪しく光っている。

それは、男たち全員がである。

深紅の血の色をした、赤い眼の輝き。

皆が、その双眸を、血の色に染めて、まるで亡者のようにゆらゆらと立ち上がってくる。

それを見てローダとジルは、男たちに、一瞬、気圧されていた。

彼らの姿が、あまりにも不気味であったので、ある意味、不快感をもよおしたからだ。

(こいつ等、操られているのか?)

ローダは、それをすぐ察していた。

ハンスの屋敷で妖術師の手によって操られていたエネアも、その時、赤い眼をしていたが、また、狼が屋敷に乱入してきた際も、その狼たちは赤い眼をしていた。

その点から考えてみても、この者達は、皆ダーラントの術によって、操られているのではないかと、ローダはそう直感していた。

だが、彼がそう思って、考えをめぐらしていると、赤い眼の男たちは、突然、異様な雄叫びを発して、ローダとジルの二人に、その手持ちの剣を振りかざし迫って来ていた。やはり、不気味だ。

その男たちの表情は、無機質の機械を思わせるかのように、感情が欠落している。

それはまさしく、人形の様――――

実際、彼らは、操られているのだから、そう見えてもしょうがないであろう。

ゆらゆらと歩くその姿は、まるで異界の亡者のようだ。

だが、ローダは、その男たちを見据えると、ジルとともに警戒の姿勢をとっていた。

男たちの動向を覗い、細心の注意を払う。

赤く眼が光る彼らは、ローダとジルの前までくると、びたりとその歩を止める。

そして一頻り眼の見えない盲目者のように、何かを探すような悠長な動作で首を左右にめぐらすと、つぎの瞬間には、カット眼を大きく見開いて、意味不明な雄叫びを一際、高く張り上げていた。

そんな中、ローダは、男たちの中の一人と眼があってしまっていた。

その異様に赤く輝く眼を直視したとき、ローダは、自分の体が波打って怖気するような感覚におそわれていた。

ローダは、身震いをおこして、さっとその場から退く。

それは、この男たちには、直に触れてはならないという、何かの勘がそう訴えかけているかの様だったからだ。

だが、次の瞬間、男たちは動いていた。

それは、今までにない敏速な動きだった。

先程までの亡者のような鈍い動きとはうって変わって、今度の動きは素早い。

男たちは、ローダとジルの二人を包囲するように動くと、その中の三人の男が、ローダへ、そして二人の男が、ジルへと、その白刃をきらめかせて躍り掛かって来ていた。

ローダは、その意外に素早い動きに、虚を突かれ、一時は呆然としていたが、天性の勘で体を動かし、その攻撃をぎりぎりのところで避けていた。

ローダは、素早く体勢を立て直して、相手の動向をうかがう。

隣では、ジルが二人の男たちと、早くも剣戟を交わし始めていた。

キン、キンという金属のかち合う独特の音を響かせながら、ジルは、相手の攻撃を受け流している。だが、それは、相手の攻撃に、少々、押され気味のように見えた。

相手の動きは、素早い。

それは、妖術師ダーラントの術に操られているからそうなのかは解らないが、その男たちの戦闘能力は、相当なものであるということが覗えた。

ジルが、相手に何度か、果敢にも斬撃をたたき込む。

しかし、それは難なく、弾き返されてしまっていた。

仕方がないので、ジルは、相手の攻撃を剣で躲しながらも、なんとか隙を覗い、活路を開く算段をしていた。

右と左から、立て続けに剣戟が飛んでくる。

ジルは、それをうまく受け流し、相手の喉元に牽制の一撃を繰り出す。

しかし相手は、それでも怯みを見せない。

おそらく、術の効果で、恐怖心というものが、剥ぎ取られているからかもしれない。

生身の人間同士が剣を交える以上、どのような手練れの者であっても、相手の攻撃に対しては、それなりの恐怖心を持つものだが、いま戦っている相手は、その恐怖心なるものが欠如しているように思える。

ジルが、いくら牽制の一撃を繰り出しても、男たちの顔は無表情でしかも淡々として

いる。

その状況に、ジルは内心、癡癡していたが、剣の手を緩めることはしない。

もし、その様なことをしたら、自分が斬り付けられて、手傷を負うはめになるのは目に見えていたからだ。

相手は、あやかしの術で、ダーラントに操られている。

そして、その戦闘力も、向上しているのだ。

そうならない為にも、ジルは休まず剣を振るっていた。

それは、いつか相手が隙を見せて、こちらに攻勢のチャンスがめぐってくると思っ

ていたからだ。

だが、しばらくすると、相手は案の定、その隙を見せていた。

それは、ジルが相手に、渾身の一撃をみまっただけの事だった。

その攻撃を受けた男が、一瞬よろめいたのだ。

ジルは、その隙を見逃さなかった。

それは、絶好のチャンスである。

彼は、素早く体勢を立て直すと、そのよろめいた相手にすかさず二撃目をたたき込む。

ビシュ・・・！

すると、盛大な血が辺りに噴き出す。

それで相手は、難なく首を斬られ、そのまま即倒して折れ伏していた。

見事な、手並みだ。

その直後、もう一人の男が、横から斬り掛かってきていたが、ジルは身を翻すと、後方へと跳びのき、その勢いを駆って、今度は横薙ぎの一閃で男の胸を斬り裂いていた。

その男も、やはり血を流し、もんどりうって倒れると白い目を剥く。

そして、動かなくなる。

男は、絶命していた。

それだけ、深い傷を受けたのだから、当然であろう。

ジルは、それを一瞥すると、剣を振って、その刀身に付着した血を無造作に振り払っ

ていた。

その後、彼は荒い息を整えようと、軽い深呼吸をする。

するとジルは、気になるのか、ローダの方を見て、その戦況に覗いをたてていた。

その頃、ローダは、やはり男たちと、剣戟を交わしていた。

相手は、三人。

彼にとっては、それほど苦戦するほどの相手ではない。

その証拠に、ローダは今しがた一人の男を、簡単に斬って捨てていた。

それは、前方からの、芸のない一太刀であった。

ローダは、それを難なく躲すと、身を翻して相手を一刀に伏す。

それで相手は、絶命したはずだった。

すると今度は、突然、横合いから別の男が斬り掛かってくる。

それは、なかなか鋭い攻撃である。

だがローダは、それをも身を引いてさらりと躲す。

そして、振り向きざまに、相手の背中を斬り付けると、そこへ禍々しい斬撃を叩き込む。

ローダの攻撃は、素早い。

相手の攻撃を目測して、それを避ける反射神経も相当なものだが、それはひとえに、ローダの剣術に対する天性の勘が、ものを言っているのだろう。

よほどの剣技と反射神経がなければ、ローダを倒すことはままならない筈だ。

それだけローダは、剣技に優れている。

しかし、三人いた中の残りの一人は、それを見ても怯みを見せていない様子だった。

やはり、恐怖心というものが、欠如しているらしい。

ローダの、手際のいい戦いぶりを見ても、眉一つ動かそうとはしない。

恐怖心をなくした剣士は、普通ではなかなか手に負えない、やっかいな戦闘機械だ。

牽制の攻撃や、フェイントの騙しは、なかなか通用しないだろう。

それにはローダも、当惑を隠し切れなかったが、だからといって攻撃の手を緩めることはしなかった。

その男は、いま目の前でうなり声を発している。

それは、相変わらず、意味不明のうなり声であったが、ローダはそれを見てもみぬふりをしていて。そんな事に、かまけても意味はないからだ。

だが、次の瞬間、男は動く。

その攻撃は、今までにない鋭い突きの攻撃だった。

妖術師の術に操られていて、そんな素早い攻撃ができるなんて、不思議に思っていたが、ローダは、その思いを頭の片隅に押しおけると、今は目の前の男に集中することにしていた。

男は、容赦なく突き掛かってくる。

それはある意味、捨て身的な攻撃法とも言える。

だが、ローダは、その攻撃を、やはりぎりぎりのところで躲すと、相手の剣を弾いてそれを吹き飛ばす。

しゅるしゅるしゅる・・・

男の手から離れた剣は、弧を描くように宙を舞うと、そのままカランという音をたてて、地面に落ちる。

相手は、剣を弾かれても無表情だったが、そこへローダは容赦なく斬撃をたたき込んでいた。

ザクッ！

肉を断つ、不気味な音が耳朶を打つ。

男は、ぎゃーと言う断末魔の叫びこそあげなかったものの、地面へと向かってそのまま即倒し、二度と動かぬ骸となったはずだった。

これで、三人目だ。

だが残りの男は、まだまだいる。

おそらく、十九人、近い。

それは、ジルと二人で、十一人ほどの男を斬り捨てた計算になるが、相手はまだ山ほどいるのだ。

その為、ローダとジルは、気を抜くことはできなかった。

気を抜けば、多勢に無勢、完全に包囲されるのがオチだ。

そうならない為にも、気を引き締めるしかない。

そう思うと、ローダは、剣を握り直して再び構える。

そして、次の相手の動向を覗っていた。

すると今度は、四人の男がローダの目の前に現れていた。

男たちが、横一線に並んでいる。

相変わらず、その一人一人の双眸は赤く光ったままだが、ローダはその男たちに弱味を見せる事無く、黙って対峙していた。

彼は、その表情に、シニカルな笑みを浮かべる。

ローダは、このような状況に、自分でも笑うのは変だと思っていたが、それは自然に出た笑いだったのでしょうがない。

だが、そうこうしていると、四人の男がローダを尻目に動いていた。

彼らは、同時に剣を前へと構える。

すると、じりじりと足を地面に擦り付けながら、迫ってくる。

だが、次の瞬間には、一斉に男たちは跳躍していた。

それは、四人、一丸となつての突きだ。

彼らは、一足の乱れもなく、そのままの勢いを駆り、ローダに対して突き掛かって来ていた。

ローダは、それを察知して動く。

相手の狙いは、おそらく、四人、一度の攻撃で、ローダの錯乱を誘うつもりだ。

それは、ダーラントが、その様な意図を以て、男たちを操っているが為でもある。

四人が、一斉に攻撃すれば、ローダがどの相手を標的にすればいいか、迷うという心理的な面をついての攻撃のようだ。

しかしローダは、その攻撃をまともに受ける馬鹿ではない。

彼は、俊敏な動作で、右斜め後にさっと身を翻すと、そのまま相手方の攻撃を既のところでやり過ごす。

男たちは、突然、標的を失い、そこに一瞬の隙が生まれる。

ローダは、その隙をついて、何の躊躇もする事無く、速攻で相手の懐へ飛び込んでいた。

鋭い一閃が、光る。

その太刀筋は、二人の男の胸を斬り裂く。

ローダは、隙をついて、さらに剣を走らせると、次に左側にいた一人の男の喉を掻き切っていた。

男たちは、もんどりうって倒れる。

どうやら、ローダの素早い立ち振る舞いに、男たちは対応しきれていない様子だ。

おそらく、ダーラントの術にも、限界があるのであろう。

術の力によって、戦闘力が向上したとしても、隙をつかれた不測の事態に対しては、男たちは鈍感だ。

これならば、たいして手間取ることはない、ローダはそんな風に思っていた。

相手をできるだけゆさぶって、隙を作ればいい。

だが、そんな事を思っていると、そこへもう一人の男が剣を上段に構え斬り掛かってきていた。

ローダは、それを察知し、腰を低くして身を反らす。

すると、間髪入れず、さらに横へとステップし、それをやり過ごす。

今度は、振り向きざまの攻撃、

ローダは、剣を水平にして、相手の胸に押しつけると、そのまま体をぶつける様にして突進――――

グシュ！！

手応えのある、感触、

剣は見事、男の体を貫通し、そのまま相手を動かぬ骸にかえていた。

それは、鮮やかな一連の手並みだ。

相手に、反撃の隙さえ与えさせない、見事さがある。

ローダは、新たに掛かってきた四人の男を斬り捨てると、辺りを見渡ししながら、一息ついていた。

「妖術師の術も、大したことはないな・・・多少、戦闘力が向上したものの、相手の隙をつけば、斬り捨てるのはそれほど難しいことじゃない・・・」

ローダは、一人そうごちると、ジルの戦いを傍観していた。

ジルは、先ほど一人の男を斬り捨てて、その相手を蹴り倒している様子だった。

彼も健闘している。最初は、心配したが、どうやら大丈夫のようだ。

老齢の身でありながらも、彼はレスターナ王国では、三度も武勲章を授与されている男だ、そう簡単に、やられたりはしないだろう。

ローダの洗練された戦い方とは異なり、ジルの剣さばきは堅実さがもっとうだ。

それで、傭兵稼業をも生き抜いてきた。多少、動きが鈍い部分もあるが、確実に相手を屠るだけの腕前は持っている。

だから、苦戦はしつつも、その戦いは着実である。

だが・・・

そんな事を考えながら、辺りを見渡していると、ローダの眼前に、突然の異様な光景が飛び込んできていた。

立っているのだ。

男たちが、立っている。

しかし、それはまだ、剣を交えていない残りの男たちではない。

傷を負った男たち。

そう、それは、確かに先ほど斬り捨てたはずの、男たちである。

今しがた、喉や胸を切り裂いて絶命させたはず—————だった。

だが、ローダは、それを見て絶句していた。

なぜ、斬り付けて、絶命させたはずの男たちが、いま目の前に立っているのだ!?

確かに、相手の命を奪う程の、致命傷を与えた筈である。

その証拠に、立ち上がってきた男たちには、先ほどローダがつけた生々しい傷痕が残されている。

胸を真一文字に切り裂かれた男、喉をぱっくりと一閃された男、背中に大きな裂傷を残す男、心臓を一突きにされて、背中まで剣が抜け出た男など、それはどの傷も深い。

本当なら、地面に這いつくばって、のたうち回ってもおかしくないほどの傷である。

だが、男たちは、痛くも痒くもないといった表情で、その場に立ち上がってくる。

その顔は、無表情で、手はだらんと下げてまるで怪物のようだ。

それが、むくりと地面から、起き上がってくる。

まだ、剣を交えていない無傷の男たちも含め、死んだはずの全員が、ゆらゆらと挙動不審な動作で、当たり前のごとく剣を構えてくる。

ローダは、そんな男たちの姿を凝視して、自分の目を疑っていた。

『一体なんだ、こいつ等ゾンビか!?!』

しかし彼は、その場でそう言うしか、他に適当な言葉が見つからなかった。

だが、それは案外、当を得た言葉だったかもしれない。

致命傷を負って、立ってられるなど、人間ではない。

これはやはり、妖術師の術の力なのか、と、ローダは、内心そんな風に思っていた。

すると、

その傷ついて倒れていたはずの男たちが、やはり赤い眼をぎらつかせながら、ローダに対しまた躍り掛かって来ていた。

ザン……!

白刃が、空を斬る。

ローダは、それを既のところで避けると、すかさず三発の烈風を刀身からほとばしらせていた。烈風は、シュツという鋭い風きり音を発して、砂埃の波紋を散らせながら、男たちに直進する。

それは、見事、相手の胸ぐらに直撃し、その男たちの体を斬り刻む。

その勢いで、男たちは再び血を吹きだしながら、後へもんどり打って倒れていたが、ローダは、それに構わず、また新たに斬り掛かってきていた三人の男たちを、同じように烈風を放って斬り刻んでいた。

男たちは、うめきこそあげないものの、そのまま大量の血を流して倒れていた。

それを見てローダは、今度こそそれらの相手を仕留めたと思っていた。

それは、それなりの手応えを、感じたからだ。

だが次の瞬間、やはりその思いを覆すような光景が、目の前に現出されていた。

また、立ち上がって来たのだ。

深々と傷を負った男たちが、次々にむくりと起き上がってくる。

それは、とても信じられない。

その光景を見て、やはりローダは、絶句するしか他に方法がなかった。

(どうしてこいつ等は、死なないのだ！？)

ローダは、自分自身に問いかけてみる。

しかし、釈然としない。

あれだけ斬り刻んだというのに、どうして立っていられるのか！？

烈風によって斬り刻んだ傷は、生きているのがおかしいくらい深い傷だ。

だが、現に男たちは、立ち上がってくる。

これが幻であるのなら、どんなにいいかと、ローダはふとそんな事を思っていた。

だが、

「若、これでは限りがありません、どうしましょう！？」

そこヘジルが、ふとローダに対し疑問を投げ掛けていた。

彼は、今やはり斬り捨てたはずの男たちと、再度、剣戟を交えている。

しかしジルは、その攻防にほとんど参っている様子だった。

相手をいくら斬り付けても、死なない。

男たちを、絶命させるほどの致命傷を負わせても、やはりむくりと起き上がってきて、再び剣を構えるのだ。

ある意味、ジルは、その光景に怖気が走る不快感を顕わにしていた。

これはやはり、妖術師のかけた術の効果なのだろうか！？

ローダは、そう考えながら、また一人の男をその剣で斬り倒していた。

だが、いくら斬り倒したとしても、また起き上がってくるのでは限りがない。

一体、どうすればいいのだ。

ローダは内心、困惑を隠し切れなかった。

そして、それと同時に、ジルもその状況を目の前にし、今後いかにして相手を屠ればいいのか、その心の中で、幾許かの迷いを見せたのは言うまでもない。

第四節

「まったく、これじゃ、いくら斬り付けても限りがないぜ！！」

男たちとの乱戦が続く中、ローダは、そう声を張り上げて嘆息にも似た息を漏らしていた。

「しかし若、こいつ等は、本当にダーラントの術によって操られているのでしょうか！？」

ジルは、ローダの近くに擦り寄りながら、その様な疑問を投げ掛けてくる。
「ああ、きっとそうだ。でも、この状況をなんとかしないと、こっちの体力がもたないぜ！」

ローダは、そう言うと、また一人の男を手持ちの中剣で、斬って捨てていた。
「そうですね、でもこいつ等を、どうやれば屠ることが出来るのでしょうか？ それがいま一番、最大の疑問です……！」

ローダとジルは、先程から、まだ三十人、近くいる男たちと、剣戟を交えている最中であつた。

彼らは、そんな中、かなりの苦戦を強いられている様子だ。

なにせ、相手は、斬っても斬っても死なないのだ。

ローダとジルが、いくら渾身の一撃を相手方に見舞っても、男たちは平然として立ち上がってくる。

今まで、何度、相手を斬り付け、一刀のもとに伏しただろう？

おそらく、男たち全員を、二回、以上は斬り伏せたに違いない。

しかし男たちは、傷を負い死ぬどころか立ち上がってくる。

それは、驚異的、生命力ともいえるだろう。

胸や腹部、頭部に致命傷といえる深い傷をまざまざと負っても、それをものともせずゾンビのごとく立ち向かってくる。

それにはローダとジルも、ほとんど参った事態になっていた。

うおおおう！

また一人の男が、意味不明な雄叫びを上げ、ローダに対して斬り掛かってくる。

ザン！！

それをローダが、有無を言わず斬って捨てる。

男の胸元からは、まがまがしい鮮血が吹き出し、辺りを血の海に染め上げる。

だが、今度は六人、ローダは得意の風術を駆ると、右旋回の竜巻を起し自分とその六人の男たちの間に、風の壁を築いて相手を威圧していた。

要するに、不用意に男たちを、自分の近くへ近付けさせないためだ。

ローダは、竜巻によって風の壁を作ると、相手方の動向を悉さに把握していた。

その頃、ジルは、三人の男たちと剣戟を交えている。

ジルは、ローダのように風術は使えない。

だが、奮戦している。

右、左と、交互に突き出されてくる男たちの剣戟を、巧みに掻い潜ると、相手の懐に飛び込み斬撃を放ち一刀両断にして斬り捨てる。

しかし男たちは、斬られても無表情に相変わらずその赤い眼を光らせながら、ジルを取り巻くように包囲をし始めていた。

そんな中、ジルは、更に二人の男を斬って捨てると、脱兎の勢いで駆け出して、ローダの傍近くへと退避していた。

今、ローダのまわりには、風が渦巻いている。

その風で、男たちを牽制しているのだ。

男たちは、その風に煽られながら、獲物を探す獣のように首を左右にめぐらして、物

色している様子だった。

男たち全員が、ジルとローダを取り囲む。

だがローダは、その男たちに必殺の烈風を続け様に五発、その場で剣を素振りして解き放っていた。その烈風は、狙いをそれず、やはり五人の男たちに吸い込まれるように到達すると、その体を無残にも斬り刻んでいた。

その影響で、男たちの何人かは腕を切断されたり、足に深手を負う者達も続出していた。

しかし、やはり、男たちの雄叫びは止まなかった。

うおおおうう！

意味不明なうめきの声をともなって、その雄叫びが続く。

男たちは、もう既にボロボロのはずである。

彼らは、剣術の稽古の時に使われるわら人形のように、体をあちこち斬り刻まれ、本当のところを言えば、もう既に、二三度は死んでいるのではないかとさえ思える。

しかし、現に男たちは生きている。

いや、生きているというのは、語弊があるのかもしれない。

要するに、死んでもその活動は停止せず、ただ操られながら動いていると言った方が正解なのかもしれなかった。

しかし、ダーラントの術は、驚異的である。

つまり、彼は、死者さえも、操れる能力があるらしかった。

彼は、今、聖堂の一段高いところに陣取り、先程から呪文の詠唱に没頭している様子だが、それを見て、ローダはどうにかしてそのダーラントを黙らせなければならないと思っていた。

だが、目の前には、赤くその眼を光らせた男たちが立ちほだかり、それが儘ならない状況であった事は言うまでもない。

そうこうしている内に、男たちは、その何人かが、ローダの風の守りを突き破りながら突進してきている様子だった。

相手は七人、みな剣を上段に構えて、斬り掛かって来るところだ。

ローダとジルは、それを察すると、まずはローダが即座に三発の烈風を放って相手に隙を作らせ、その後、二人してその七人の男たちを相手に、意を決するように躍り掛かっていた。

ギン！！

ギシュ・・・

鋼の刃、同士が、かち合う音が響いたかと思うと、ローダとジルは、次の瞬間、早くも男たちと剣戟を交わし始めていた。

ローダの横合いから、二人の男が肉薄してくる。

もちろん、その動きは素早い。

しかしローダも、それを上回るスピードで、相手の懐に飛び込むと、剣を下から上に一閃し一人の男を斬って捨てていた。

そして、その直後、もう一人いた別の男に、至近距離から烈風をお見舞いする。

ジュシュ・・・！

その烈風は、見事、男の頸動脈を掠め切り、盛大な鮮血を迸らせて後方へと抜け出ていた。

そして、ジルも負けてはいない。

彼も、相手の隙をついて、男たちの真横から肉薄すると、そのまま突進し剣を、二三次、翻しながら切り付けると、即座に二人の男を斬り倒していた。

だが、二人は、先程から、かなり疲れを見せ始めている。

この戦いが始まって、かれこれ、休むことなく二十分が過ぎようとしていた。

しかし、三十人、近くいる男たちの猛攻は止まず、次第次第に彼らは劣勢に立たされつつあるようだ。

そこへ、男たちが、一丸となって躍り掛かってくる。

ローダとジルは、その剣戟を躲しながら、相手の隙をついて後退するが、次々に剣が突き出されてくるので、それを受け流し弾くことで精一杯の様である。

ローダが駆る風術も、肉体とともに精神の疲れも見え始めているためか、今では単発的に烈風と突風をお見舞いするしか、他に術がなくなってきた。

そんな中、さすがにローダとジルは、焦りの色を見せ始めている。

「ちきしょう、これじゃ限りがない。一体、どうしろって言うんだ！！」

男たちの猛攻を受けながら、ローダは、一人そう悔しそうに叫んでいた。

だが、そこへ、やはり男たちが肉薄してくる。

ローダは、それを察知して動くが、その動きにはキレが無くなりつつあった。

しかし、それは、ジルにとっても同じ事であった。

二人は、傭兵でもあり、体力に関しては通常一般の人たちよりも、強靱な体力を持ち合わせている筈である。

しかし、それでも、この乱戦状態では、少なからずその体力の消耗を加速させてしまうのは、仕方のない事であった。

そんな中で、いつまでこの男たちを相手に、戦い続けることが出来るかは疑問だ。

その証拠に、ジルは、今しがた一人の男を斬り倒すと、よろりとしたふらつきを見せられている。

やはり、疲れが脚にきているようだ。

だが、二人は、そんな中でも、手を休める事無く、男たちの撃退に注意を注ぐ事は忘れなかった。

だが・・

だがしかし、そんな折り、先程からその戦いを傍観していたルヴェッツァーニから、ローダに対してある示唆が飛んでいた。

「ローダ、判ったぞ、そいつらは、妖術師のアンデッド化の術によって、一時的にゾンビと同じ活動力を保持している。だから、剣で斬り付けても死なない、頭だ、頭を狙え。君のその銃で、男たちの頭を撃ちぬくんだ！！」

そう言ってルヴェッツァーニは、胸脇のホルスターから銃を引きぬくと、ローダとジルが激戦を繰り広げている戦いの場に参戦してきて、身を翻してきていた。

そして、即座に男たちの頭部目掛けて、銃弾を三発、発砲する。

その銃弾は、狙いを逸れる事無く、三人の男たちの頭部へ炸裂し、グシュッという脳

漿が吹き出す音がして、そのまま後頭部へと抜け出ていた。

それで、その銃弾をあびた男たちは、悲鳴を上げる暇もなく、その場にもんどりうって倒れこみ、二度と動かぬ骸となって大地の砂を舐めることになった。

「銃で撃て、だって!？」

ローダは、それを見ると、自分も半信半疑のまま腰のホルスターから真新しい拳銃を引き抜くと、それを右手で構え、一人の男に狙いを定め銃弾を躊躇する事無く発砲していた。

バーン!

一発の銃声音が、辺りにこだまする。

それで、一人の男が、頭から血の筋を吹きだして倒れていた。

ローダの放った銃弾が、男に、見事、命中したのだ。

だが、ルヴェッツァーニの言う通り、その頭に銃弾をあびた男は、しばらくしても立ち上がってくる気配は見せなかった。

どうやら、これで本当の意味、その男の命を奪うことが出来たらしい。

脳を破壊したのだから、それは当然の事とも言えるかもしれない。

「へええ、銃も、意外と役に立つもんだな・・・？」

しかし、そんな中、ローダは、その場でひどく場違いな感想を一頻り洩らしていた。

どうやら、初めて撃った銃に、感賞を抱いている様子だ。

だがそこへ、

「何やっているんだ、ローダ、相手は、まだまだいるんだぞ。一人、変な感想に浸っていないで、銃を構えて撃ちまくるんだ。でないと、ジルの戦況が危うくなって来ているぞ!!」

と、また、ルヴェッツァーニの指示が飛んでいた。

「ジルが、危なくなっているだって!？」

その指示を受けて、ローダがジルの方へ首をめぐらすと、彼の言うとおりに、今ジルが五人の男たちを相手に、劣勢に立たされている姿が目に見え込んでいた。

それをローダは確認すると、ジルの窮地を救うべく、まだ慣れていないその銃さばきで、ジルと戦っている一人の男に狙いを定め、即座に銃弾を発砲して鉛の弾をお見舞いしていた。

グシュ・・・!

その狙われた男も、次の瞬間には、頭を撃ち砕かれて、その場に血を吹きだしながら即倒していた。

ローダは、銃を扱うのは初めてであるが、その腕前は、なかなか筋が良いらしい。

ルヴェッツァーニは、それを横目で確認すると、小さな笑みをこぼして、また立て続けに五発の銃弾を男たちの、頭部、目掛けて発砲していた。

ルヴェッツァーニの銃の扱いには、見事なものがある。おそらく彼は、銃の扱いに関してはプロなのであろう。

それは、ローダが見惚れるほどの、一連のお手並みなのだ。

彼は、弾倉から空の薬莖を即座に排出すると、手慣れた手つきで、またその弾倉に新たな弾丸を詰め込んで装填を終えていた。

そして、振り向きざまに、また発砲する。

その弾は、おもしろいように男たちの頭につきつぎと命中し、そこへ死体の山を築き始めていた。

「なかなかやるじゃないか、ルヴェッツァーニ。銃の扱いは見事だが、一体、それをどこで習ったんだい？」

そんな中、ローダは、ルヴェッツァーニと、背中、合わせになる形で身をよせ合うと、ふと疑問に思ったことを正直に問い質していた。

「お褒めに預かって、光栄だよ。でも、こんな話をしている暇はないぜ。まだ敵はいるんだ、だから、さっさとこいつ等を片付けてしまおう。話はそれからだ……」

そういつて、ルヴェッツァーニは駆けだすと、やはり、その銃口を男たちに向け発砲を繰り返していた。

もちろん、それに続き、ローダも後れを取るまいとして、銃を乱射する。

ローダが撃ち放った銃弾は、二発はそれだが、残りの一発は見事、相手の頭に命中し、その男を屍に変えていた。

そして、いざ戦いが終わってみると、そこには累々とした男たちの屍で埋め尽くされていた。

途中から参戦してきたルヴェッツァーニの活躍もあり、男たちは、みな頭に弾丸の跡を残して倒れ伏している。

それらは、一見みると酷いようだが、男たちは、ダーラントの術の影響で、頭を銃で撃ちぬかない限り死なないのだ。

だから、それは仕方のない事であろう。

それに加え、男たちは、身体中に無数の切り傷を受け、見るも無惨な状態をさらしている。

しかし、それを可哀相だとは、思っていられない。

この男たちも、やはりイルアデフの仲間なのだ。

それを考えると、死んで当然のような気もしていた。

ローダとジル、セルシアとルヴェッツァーニの四人は、戦いが終わると、瓦礫でうめつくされた廃墟の広場の一角に集まり、颯爽とした姿で一人とり残されたダーラントの方へ向き直って、姿勢を正していた。

そして、眼光、鋭く彼を見据えると、みな無言のまま押し黙って、彼と対峙していた。

するとダーラントは、多少、不服そうな顔をしてしたが、徐に口を開いて次のような言葉を語りだす。

「ハハハハ、意外と、なかなかやるではないか。どうやら、わたしは君達を甘く見すぎていたようだ。わが術の弱点を見抜いて、わたしの部下を銃撃するとは思っても見なかったが、その点に関しては誉めておこう。しかし、よくもまあ私の部下を殺してくれたね。私の可愛い部下であったのだが、君達を恨むよ……」

そう言うときダーラントは、口元を歪め苦笑いを一頻り洩らしていた。

「何を言っている、お前は、その可愛い部下を、操り人形にしたんじゃないのか！？」

本当に部下が可愛いのなら、そんな事、出来るわけがないだろ、恥を知れ！！」

それを受けて、ローダが怒りを顕わにする。

彼にしてみれば、ダーラントが部下を操ってローダたちに戦いを仕向けたということは、ある意味、冷酷であるという行いの様に思っていた。

部下をアンデッド化の術で操り人形にするなんて、常識をわきまえている人間のやることではないと思われる。

しかしダーラントは、それでも平然として涼しい顔をしている。

こいつは、部下を死においやっても、何の感傷も持たない奴なのかと疑わざるおえない。

だが、ローダは、そんなダーラントを、嫌悪の眼差しでねめつけ、見据えることしか出来なかった。

こいつは、何を言っても仕方の無い奴なんだ。

そう思うと、ローダは、死んでいったダーラントの部下たちに、ある意味、深い同情を示したのは確かである。

「しかし、君達には参ったよ。これで、形勢が逆になってしまったね。私としては、ほとんど困った次第だ。八方、手ふさがりというのは、この事を言うのかもしれないね。だが、君達は、私のことを恨んでいるようだが、でも安心したまえ。私は、逃げも隠れもしない、最後まで君達と戦うつもりだよ。それが、君達の望みでもあるようだからね……」

そう言うとダーラントは、残忍な顔をして、一頻り笑いのようなものを洩らしていた。この期に及んで、この態度はなんなのか？

ローダたちにとって、それは意味不明のままだが、彼は、よほどの自信があるらしく、自分、一人だけになっても、まだその横柄な態度だけは崩そうとはしなかった。

「いい度胸だな、一応、黒幕としての責任は持っているようだが、容赦はしないぜ。こっちとしても、使用人と傭兵たちが殺されているんだ。その仇をとらないと、その者達が浮かばれない気がするんでね、あんたには、その罪を償ってもらうから覚悟しろ！！」

ローダは、そう言うと、地面にベッと唾を吐きだしていた。

それはある意味、不敵な態度だともとれなくはないが、ローダは、そうする事によって、ダーラントに対し、宣戦布告をしたつमりの様だった。

するとそこへ、

「どうも手こずっている様だな、俺の助けが必要かダーラントよ。こいつは、意外と手強い相手だぞ。ここは一つ、俺が手助けしてやろう！」

と、突然、横合いから、聞き慣れたような声がローダたちの耳に聞こえて来ていた。

それは、妙に、聞き覚えのある声であったので、ローダたちは、その声のする方に惹きつけられて、首をめぐらしてみると、そこには、大柄な体躯の男が、十人、程度の部下とおぼしき男たちを従えながら、悠然とした気構えで立っている姿が目飛び込んで来ていた。

それを見たとき、ローダとジル、セルシアの三人は、同時に声を張り上げてその男の名を口に出して叫んでいた。

「ラドカープ！！ ラドカープじゃないか！？」

そして三人は、その大柄な体躯の男の顔を、まじまじと見つめ返す。

何故、こんな所に、ラドカーブが？

それは、ローダとジル、セルシアの三人が、同時に抱いた不可解な疑問でもあったからだ。

第五節

時は、正午、過ぎにさしかかっていた。

普段なら、この時間帯は食事時の頃だ。

この場に居合わせていなければ、今頃、その空腹を満たしていたところだろう。

しかし、今は、その様な時ではない。

目の前には、巨漢の男が立っているのだ。

名は、ラドカーブ、《獅子王の爪》の傭兵だ。

彼は、紅の獅子、という異名でも呼ばれ、傭兵の世界では有名な剣士の猛者だ。

彼の名を知らぬという者は、傭兵達の間では、ごくわずかであると謂われている。

しかし、それが本当であるかどうかは判らない。

だが、彼は、歴とした傭兵なのだ。

ローダが、憧れを抱いた男でもある。

その男が、何故か、目の前にいる。

ローダは、その事が解せなかった。

それは、セルシアは別として、ジルもその心境はローダと同じようなものだった。

ハンスの屋敷から姿をくらましたはずの彼が、今ここに居るのは何故か？

それが、今、一番の疑問だった。

「どうして、こんなところに居るんだラドカーブ、捜したんだぜ。あんたが居なくなって、みんな心配していたんだ」

ローダは、その疑問を晴らすべく、ラドカーブに尋ねる。

しかしラドカーブは、そのローダの言葉には答えようとはしなかった。

ずっと口を結ぶと、無言のままローダたちを見据えている。

「何故、答えてくれないんだ、ラドカーブ。あんたが、屋敷から姿を消した訳を聞かせてくれないか？」

そうやってローダは、再びラドカーブにその真意を迫る。

しかし、当のラドカーブは、もの言わぬ彫像のように立ち尽くし、口を嚙むばかりだった。

「私から説明してやろうか、イローダよ。どうやら、彼の口からは言いにくそうだからね。でも、落胆はしないでくれよ、君はまだラドカーブを信じているようだからね・・・」

突然、ローダの言葉をさえぎって、話し掛けてきていたのはダーラントであった。

彼は、やはりその蛇のような面貌に、嘲るような薄ら笑いを浮かべると、そういつて言葉を区切っていた。彼は、何やらローダの反応を楽しむような仕草をすると、次のような言葉をおもむろに話し始めていた。

「実はね、君がラドカープと呼んでいるその男は、我々イルアデフ `黄金の蛇、の工作員なのだよ」

「何だって、ラドカープが工作員？ それは一体、どういう事だダーラント、意味がいまいち解らないぞ！」

ローダは、そう言って、ダーラントの今の言葉に対し、食って掛かる。

それは、彼にとって、とても解せない言葉の内容であったからだ。

それを受けてダーラントは、一つ小さくほくそ笑んでいた。

そしてまた、次のような言葉をその口から発する。

「彼には、君たちの監視役としての任務を負って、ハンスの館に逗留してもらったのだよ。もちろん、ハンスが雇った傭兵達と一緒に交じって、活動をしていたということなのだが、彼はようするにイルアデフの幹部なのだよ、それも潜入部のね。君たちには判らないと思うが、我々の組織には階級があって、彼は七層ある階級の内の第二位に位置している組織の構成員だ。ラドカープという名は本名だが、《獅子王の爪》の傭兵も兼ねている。我々の組織の中では、エリートといってもいいだろうね」

「ラドカープが、イルアデフの幹部だって？ 冗談だろ、俺にはそんな事、とうてい信じられないぜ、あんた馬鹿じゃないのか？」

「信じるか信じないかは君の勝手だが、その馬鹿という言葉は、聞き捨てならないね。嘘だと思ふのなら、彼に聞いて見るがいい、その真偽が、判るだろうから・・・」

ダーラントは、珍しくローダの言葉に不快感を表していた。

馬鹿といわれた事が、相当、癪に障ったのであろう。

しかし、それも束の間、その瞳には人を見下したような不敵な色をたたえと、また嘲るように目を細めて、ローダの反応を窺っている様子だった。

「本当なのかラドカープ。あんたは、イルアデフなんかの幹部じゃないよな。違うと言ってくれラドカープ、俺はあんたを信じていたんだ」

そんな中、ローダは執拗にラドカープに対して、その素性の有無を問い質していた。

ローダにとって、ラドカープは信頼にたる人物であって、非道なイルアデフの仲間であるはずがないと、どうしてもそう思いたかったからだ。

しかしローダは、次に語られたラドカープの物言いに、絶句して口をつげない状態に陥っていた。

それは、ローダの願いに反する、衝撃的な言葉であったからだ。

「悪いがローダ、俺はそこのダーラントが言っているように、イルアデフの構成員だ。前々から密命を帯びて、ハンスの屋敷に傭兵として入り込んでいたのさ。俺の役目は、お前たち三人を監視して、襲撃がうまくいくように手引きすることだった。屋敷の情勢を逐一、報告して、ダーラントに内通していたのさ。それは、俺が傭兵でありながら、イルアデフという組織の一躍を担っている工作員であるということの証しだ。最初から、お前に近付くために、素性を隠して、雇われ傭兵という身分に甘んじていたのだ。信頼を

裏切って悪いようだが、それが事実だ。まあ気を悪くしないでくれよ、これもある意味、余興だ、お前には、イルアデフの大望をかなえる盟主の座に就いてもらわなければ困る。結果的に騙したが、それも一興といえるだろうよ。俺は、その為に、この役をかって出たのだからな・・・」

そう言ってラドカーブは、ローダを意味ありげな微笑を繰り返して見据えていた。

どうやら、ダーラントが言ったことは、本当のようだ。

ラドカーブは、多少、謝罪じみた言葉を交えながら、自分がイルアデフの職員であることを明かしていた。

それは、ローダにとって、とても受け入れられない言葉であったのは言うまでもない。

それと同時に、ジルやセルシアも、その言葉には少なからず衝撃を受けた様だった。

彼らは、ローダと同じように、絶句している。

まさか、ラドカーブが、その様なことを言うとは思っていなかったという心境が、その表情にありありと浮かんでいたのだ。

「冗談だろ、それじゃ最初から、俺達を騙していたって言うことなのか！？ それは裏切り行為だぜ。まさかあんたの口から、そんな言葉がでるとは思っても見なかったよ！」

ローダは、非常に落胆していた。

信じていた者に、裏切られたことが、相当なショックだったらしい。

これでは、ルヴェッツァーニが言っていたことは、全部、本当であったという事ではないか。

彼の言葉を頭から否定していたローダには、何か罰の悪いような思いに苛まれていた。

それと同時に、たとえ様もない脱力感にもおそわれる。

こんな事になるのなら、初めからルヴェッツァーニの言葉を信用していれば良かったと、今更ながらに思う。

しかしそれは、手遅れというものだ。

結局のところ、ルヴェッツァーニから忠告を受けても、その対応を先のぼしにしてきたのだからしょうがないだろう。

「ところでローダ、お前はこの男達を覚えているか？ こいつ等は俺の部下なんだが、見覚えがある筈だ、どうかな・・・？」

そうラドカーブに唐突にいわれ、ローダは、彼の横に控えている男達の顔を、まじまじと見つめていた。

すると、確かにその男達には見覚えがある。

ローダは、自分の記憶を辿って思い出してみると、ある時の光景を思い出していた。

「おまえ等、あの時の男達じゃないか！」

彼がああの時の男達といったのは、ローダとジル、セルシアの三人が、ラドカーブと最初に出会った日のことだ。

ローダ達、三人が、クレナンスの酒場を後にして、宿泊先のホテルへ帰る途中の事だった。

その道の途中、人通りの少ない路地の一角で、ラドカーブを取り囲むように白刃をぎらつかせていた男達がいたのだ。

それは、十人ほどの男達で、みな短剣を片手にラドカーブに斬り掛かろうとしていた。

そこへローダとジル、セルシアが助けに入ったのだが、その時の男達が、いま目の前にいる男達の面貌と酷似していた。

それに気付いた時、ローダはやはり絶句していた。

それはある意味、筋書きが読めたという事もある、憤慨したからでもある。

「どうやら覚えていたようだな。お前たちと最初に会った時は、こいつ等を使って一芝居を演じて見せたのさ。お前たちの力量が、どんなものか見定めておく必要もあったんでね。それで、後の襲撃をどうすればいいか、事前に確かめていたのさ……」

ラドカープが、しれっとした態度で、そう言って来ていた。

「それじゃ結局のところ、何もかも芝居であったという事か。襲われているという事を見せ掛けとして、俺達に近付く算段だったんだろ！」

「そうさ、何もかも芝居だ。そう気を悪くするな、これも大望の為だ、致し方ない」

「その大望という言葉は聞き飽きた。結局あんたも、姑息で非道なイルアデフの仲間なんだろ。所詮は、歪曲した理想主義の為に悪に魂を売り渡した、下賤の者なんだ。あんたは恥ずかしくないのか、イルアデフの片棒を担ぐなんて、正気の沙汰じゃないぜ！」

「それは違うな、俺は正直に言うと、イルアデフの大望なんて本当のところはどうでもいいのさ。しかし、イルアデフの幹部であれば、大金を手に入れることは約束されたようなものだ。その好待遇を、手放したくないんでね。それに、お前たちの監視役をかって出たのも、ローダお前がアルスレイドの息子であるという事で、興味をそそられたからだ。あの『鉄の剣王』の息子が、どんな奴か直に見てみたかったのさ」

そう言うラドカープは、悪怯れた様子も見せず、一頻り苦笑いを指し示すと、戯けてみせていた。

ラドカープは、ダーラントと違って、不遜な態度は示さなかったが、所詮、裏切り者のである事には変わらない。

そんな奴を、尊敬して信じていたなんて、ローダのプライドは痛く傷ついていた。

「二人とも、そんな話はそれ位にして、いよいよ決着をつけようではないか。役者もこれで揃ったことだし、悠長に話ばかりしてられる訳でもないからね」

ダーラントが、横合いから口を挟んでそう言う。

「わかった、それじゃ決着を付けよう。いいかローダ、ここは俺とお前の一対一の一騎打ちで勝負を決めようじゃないか。どうだこの勝負、受けて立つか？」

「ああ、いいだろ。俺も望むところだ。裏切り者を容赦するつもりはないからな。覚悟しろよ！！」

ローダは、強気だった。

しかし、相手はあの『紅の獅子』と呼ばれる《獅子王の爪》の傭兵なのだ、気を抜けばやられてもおかしくない。

だがローダは、臆することなく、そのラドカープの申し出を受け入れていた。

それだけ裏切られ、騙されていたという事に、憤慨していたからかもしれない。

本当はローダとて、ラドカープと剣を交えるのは避けたいと思っていたが、ここまで来て、引き下がることは出来なかった。

「では、勝負を始めようではないか。私が合図したら、二人とも剣を交えるのだ。いいかねでは言うよ……」

「ちょっと待って。その前に、そこにいる男たちを下がらせなさいよ。隙をついて、襲われでもしたらかなわないわ。でないと、この一騎打ちは無しよ。いいい下がらせなさい、不意打ちなんて、卑怯なことは考えないことね……」

そう言って来たのは、セルシアだった。

彼女は、いつのまにか右手に剣を持つと、その剣をダーラントに突き向けて、そうまくしたてていた。

どうやら、その剣は、先ほど撃ち殺した男たちの屍のそばから拾ってきた物であるらしい。

意外と、ちゃっかりしている。

セルシアは、ラドカーブに付き従う男たちを見据えると、険悪な表情で睨みをきかせている。

それは、ローダがラドカーブと一騎打ちをしているところへ、彼に付き従う男たちが加勢しないかを慮っての物言いだった。

「判った、そうしよう。お前たち下がっている、くれぐれも手は出すなよ。これはローダと俺の一騎打ちだ、いくらお前たちであっても、手を出せば容赦しないからな」

そう言ってラドカーブは、十人ほどの部下を後へと下がらせて、ローダに対し向き直っていた。

「でも大丈夫ですかの、若。相手はあのラドカーブなのですぞ。傭兵大将として有名な剣士の猛者です。一步、間違えれば、ただでは済みますまい。気をぬかず真剣に戦って下さいよ。でないと、命がいくつあっても足りませんからのう」

ジルは、小声で心配そうに、ローダに対し耳打ちして来ていた。

彼としてみれば、ラドカーブの噂をよく知っているので、心配になりそう言葉が出ていたようだが、二人の一騎打ちを止めるような事はしなかった。

「大丈夫だ、ジル。俺だってそう簡単に負けはしない。とにかく見ていてくれ。どうしてもこの場は、引き下がれないんだ」

そう言うとローダは、ラドカーブに対して手持ちの剣を構えていた。

ようやく、二人の一騎打ちが始まるようだ。

そんな中、ルヴェッツァーニだけは、その二人の対峙する姿勢に危惧をする訳でもなく、ただ楽しそうに傍観を決め込んでいた。

それはおそらく、これからおもしろい戦いが見られると、内心、手を打って喜んでいるのだろう。彼は、手持ちの銃を胸脇のホルスターに戻すと、腕組みをして二人の様子に覗きを立っていた。

そんな中、ダーラントは、二人のその様な姿を確認すると、始めの合図を口に出す頃合いを見計らっている様子だった。

「いいかね二人とも、では、今から戦いを始めるよ。早く準備をしてくれ」

そうダーラントに言われて、ローダとラドカーブは、手に持つ剣を握り直し構えていた。

ローダはやや幅広の中剣、ラドカーブは大剣と、扱う得物は違うが、両者の気迫は同じように目を見張るものがあった。

そこへダーラントが、おもむろに始めの合図を送る。

「始め！！」

すると二人は、即座に動いていた。

ラドカーブは、右側に弧を描くように移動すると、ローダの死角になる位置へと体を滑り込ませる。しかしローダも、それをさせじと、同じように右回りで移動しラドカーブの意図を挫いていた。

最初は、お互いの動向を窺うことに終始して、剣戟を交える事はなかったが、次の瞬間、ラドカーブが攻勢に出ていた。

「ういやああああ・・・！！」

彼は、れっぱくの気合いのこもった声を張り上げると、上段から剣を構え、ローダに對し斬り掛かっていた。

ローダは、それを察知して、ラドカーブが踏み込めないように牽制の一撃を放つ。

しかし、それをラドカーブは、難なく擦り抜け、剣を振りかざしたままローダに一撃を見舞っていた。

ギン！！

硬質な金属の音が、辺りに鳴り響く。

ローダは、その一撃を剣を突きだして受けると、そのまま押し返そうと力を込めていた。

しかし、相手は巨漢の男だ、力では差がありすぎる。

ローダは、押し返したつもりだったが、今度は逆にラドカーブに押し返されていた。

じりじりと、ラドカーブの剣が、ローダの鼻先に近付いてくる。

ローダは、仕方なく、その場からさっと剣を引いて、横に飛びのくことにしていた。

そして、その勢いを駆って、ラドカーブに對して斬り掛かる。

しかし、その攻撃は、難なくラドカーブに、弾き返されてしまっていた。

彼は、突きかかってきたローダの一撃を、剣を振って受け流すと、後方へと一歩、退いていた。

再び、二人の間に、緊迫した空気が漲る。

ローダとラドカーブは、お互い顔に不敵な笑みを浮かべると、戦いの最中、視線を合わせあって相手の真意を確かめていた。

それは、お互いの力量を認めあった笑いでもある様だが、それを見ていたジルとセルシアは、やはり緊張の色を隠せないでいる様だった。

そんな中、二人の戦いは続いている。

ローダは、ラドカーブに對し、果敢に斬り掛かり相手を翻弄する作戦に出たようだった。

右上段からの一撃、横一文字の一閃、立て続けに鋭い突きを三発と容赦なく斬り掛かる。

しかし、そのどれもラドカーブの剣に弾かれて、相手の体に達する迄には至らなかった。

ラドカーブは、重い大剣を軽々と扱っている。

その臂力は、相当なものだろう。

それで、ローダの一撃一撃を、弾き返しているのだ。

しかし、それがいつまで続くかは、疑問だった。

ローダの動きは、打ち込むほど、その素早さを増している。

それが、ローダの真骨頂といえるのだが、ラドカーブにそれが堪えられるかは疑問だった。

しばらくその攻防が続くと、ローダの剣は、ラドカーブの体を少しだけ捉え始めていた。

ラドカーブの体に、無数の裂傷が走る。

彼は、それに堪え切れなくなって、剣をローダ目掛けて大振りしていた。

ブン！

剣の風圧が、ローダの鼻先を掠める。

ローダは、危機を察知して後へと退くが、そこへラドカーブが無言を言わず斬り掛かって来ていた。

今度は、ローダの左腕に裂傷が走る。

ラドカーブの一撃は、ローダと同じように鋭かった。

だが、ローダが受けた傷は浅い。多少、剣の先がかすただけだ。

戦闘不能になる迄には、至らない。

ローダは、ラドカーブに斬り付けられながらも、今度は先程を上回るスピードで斬り掛かっていて。

ザン・・

ローダの剣が、空を斬る。

ラドカーブは、それを難なく躲すと、ローダの右側に回り込み、一撃を見舞っていた。

しかしローダは、それを剣を横にして受けとめ、再び力勝負となっていた。

ラドカーブは、容赦なくローダの肩口に剣を押しつける。

ローダは、それをありったけの力で耐えていた。

しかし、やはり力では勝負にならない。

しばらくすると、その剣は、ローダの肩口にめり込み始めていた。

そこでローダが、初めて苦悶の表情を浮かべる。

彼の肩口からは、血が滴り始めていた。

「どうだローダ、まだ俺達の仲間になる気はないか！？ お前ほどの逸材、我々のイルアデフに入れば、その能力を存分にいかせるのだぞ。それをしがらない傭兵身分で終わらせてしまうには惜しい。俺達の仲間にならないか？ そうすれば、おおいに歓迎してやるぜ。お前ほどの者だ、盟主の座に就いて、何事も思うがままに事が運ぶんだぞ！！」

「悪いが、俺はその気がない。何度、言われても、答えは変わらないさ。俺を見縊ってもらっては困るぜ。イルアデフなんかの、片棒を担ぐ気はないんでね、残念ながらその申し出は断るぜ！！」

ローダは、そう言うと、不敵な笑いを洩らしていた。

それは、強がりではない。

本当に、その気がないから、素直に答えただけだった。

それを聞いて、ラドカーブは、剣にさらなる力を加える。

すると、その剣は、ローダの肩口にまためり込み、軋みをあげている。

「うぐっ・・・」

ローダは、それに対し、小さなうめきを洩らしていた。

「このままだと、お前の腕が一本なくなるぞ。そうなる前に、俺達の仲間になれ。そうすれば、俺も剣を引く。それが、今いちばん最良の、手段だと俺は思うがな・・・」

「断ると言っているだろ。俺は、お前の指図なんか受けない。盟主の座なんて、屎くらいだ。死んでも、そんなものになるものか！！」

ローダは、そう言って極端な反発を示す。

ラドカープも、それ以上、言葉を紡ぐのは止めにしたようだった。

それ以上、何を言ったとしても、ローダの心は変わらないと思ったからだ。

そんな中、ローダは、自分の剣を反動を使ってうまく跳ね上げると、腰を落としてそのままラドカープの剣の拘束から逃れていた。

それは、一瞬の隙だった。

話に夢中になっていた、ラドカープの虚をついてのことだ。

そしてローダは、すかさずラドカープに斬り掛かる。

それは、横薙ぎの一閃だった。

しかしそれは、見事にラドカープの胸板をかすめ、横へと抜けていた。

今度うめき声を上げたのは、ラドカープの方だった。

彼は、胸板を左手で押さえると、深く息をすっている様子だった。

おそらく肋骨は断ち切れず、肺にまでは達していない浅い傷であったはずだが、その一撃で、相当ダメージを与えた様子だった。

「戦いの最中に、べらべらと話なんかするから、そういう目にあうんだ。以後、言葉を慎んだ方がいいぜ。俺は、容赦しないって言っただろ、聞いていなかったのか！？」

「それは悪かったな、俺は、意外とおしゃべりなのさ。でもよくもやってくれたぜ、これで、戦いが面白くなるというもんだ。まさか、無傷でお前とやりあえるとは、思っていなかったからな・・・」

そう言うとラドカープは、ぜいぜいと息を吐き出しながら、そう言葉を締め括っていた。

そして、次には、猛烈な勢いで斬り掛かってくる。

ローダは、その攻撃を、剣で二三度、打ち払って躲しながら後方へと退く。

しかし、ラドカープは、攻撃の手を緩めたりはしない。

勇猛果敢に、ローダに対し斬り掛かると、渾身の一撃を、ローダに対し打ち放っていた。

ギン！

ラドカープの大剣が、ローダの中剣に激突する。

そこからは、鋭い火花が立ち上がったが、ラドカープは今度はその大剣を水平にして、突き掛かって来ていた。

上段、下段、右、左、中段と、的確に場所を変えて繰り返されるその突きの攻撃は、ローダをしても翻弄される鋭い攻撃だ。

だが、その攻撃の後、やはり上段からラドカープは斬り付ける。

それをローダは、打ち返す。

その時、ローダの持つ中剣は、悲鳴を上げていた。

このままでは、ラドカーブの大剣によって、自分の剣はへし折られてしまうかもしれない。

それだけラドカーブの攻撃は、重く鋭い。

なるべく相手の斬撃を避けて、攻勢にできるしかない。

ローダは、そう判断すると、今度は身を前進させて、ラドカーブとの間合いを極端に詰めた。

間合いを詰めるということは、相手の剣の射程距離内に近づく事を意味している。

しかしローダは、あえてその接近戦を選んでいて。

それは、相手の射程距離内の内側に近付けば、ラドカーブの踏み込みが幾分か鈍り、大剣の渾身の一撃が繰り出しにくくなる、と踏んでの方策であった。

このまま打ち合いが続けば、手持ちの剣をその大剣の威力で、へし折られかねない。

そうならない為にも、ローダとしては、それは苦肉の策であった。

だが、それが功をそうしたのか、ラドカーブは斬撃をたたき込むことを躊躇している様子だった。

ローダは、それを確認すると、すかさず攻勢に出ていた。

剣を横薙ぎに払うと、相手の懐に飛び込んで、斬撃を即座に放つ。

そして、そのまま体制を維持し、今度は連続的に突きをお見舞いしていた。

先ほどラドカーブが見せた、突きの攻撃と同じような戦法であったが、ローダの方が中剣を扱っているせいか、幾分その攻撃は素早いような気がする。

その証拠に、その攻撃は、ラドカーブの身体をかすめ、かすり傷、程度とはいえ裂傷をあたえ始めていた。

ローダは、その勢いを駆って、今度は上段から斬り込む。

それが、見事ラドカーブの肩口に掠り命中、しかしそれは左肩であった。

利き腕ではない。

「ううっ・・・」

ラドカーブが、うめきを洩らす。

それに躊躇せず、今度は下段から上段に斬り込んで、相手の出鼻を挫いていた。

彼は、後退し始めていた。

もちろん、ラドカーブがである。

彼は、ローダの剣戟を避ける様にして、後へ退くと、そこから体勢を立て直して、次の攻撃に備える心算のようだ。

しかしローダは、その暇を与えさせない。

今度も、素早く突進すると、身をひねって軽業師のようにジャンプする。

すると、今度は、ラドカーブの頭上から躍り掛かるような態勢で、斬り込んで来ていた。

ラドカーブは、それを剣を横に構えて受けとめる。

その一撃は、`ギン！！`という衝撃波を残して、弾き返されていた。

ローダとラドカーブの両者の手が、びりびりと痺れる。

それだけ、強い衝撃であった。

ローダは、その後、やはり突きの攻撃に出ている。
ラドカーブに斬り込んでも、隙がなければ先程のように剣で弾かれてしまう。
しかし、突きならば、なかなか剣で弾くのは難しいだろうと踏んでの攻勢方だった。
ラドカーブの手持ちの剣は、重い大剣だ、いくら並はずれた臂力があっても、そう易々とは扱えまい。

ローダは、容赦なくその剣で突きを繰り返す。
ラドカーブは、それを体をひねって躲すが、何発かは体や足にヒットし、その肉を浅くえぐって傷を付けられていた。
「面白いぜローダ、こんなに苦戦するのは久しぶりだ。興奮して、夜も寝られそうにないぜ……」

ラドカーブは、戦闘の最中、そう声を出して話し掛けてくる。
「そうかい、それは良かったな。でも俺は負けないぜ、こんなところで死ぬのは御免だからな！！」

そう言ってローダは、やり返していた。
相変わらず、ローダの猛攻は続く。
噂に名高い傭兵大将のラドカーブを、ここまで追い詰めるのは大したものといっている。

それだけローダは、戦いの勘が優れているのだろう。
しかしラドカーブも、負けてはいない。
ローダの猛攻を、掻い潜ると、再び斬撃を放ってきていた。
ローダは、それを目視すると、後方へ、二三歩退き、体勢を立て直していた。
そして、その場に体を低くして、下から上へと突き上げるように剣を振ると、ラドカーブの中腹を目掛けて、お返しとばかりに斬撃を放っていた。
それは、難なくラドカーブの体に命中して、そこに裂傷を与えていた。
ラドカーブは、苦悶の表情を浮かべ、ローダを睨み付ける。
その顔は、痛々しいかぎりだ。
かなり彼は、痛手を負った様子である。

「なかなかやるな、ローダよ。さすがに、俺が見込んだ男だけのことはある。お前と戦えて、剣を交えられるのは本望だ。そこいら辺にはいない、なかなかの強敵だからな。俺がこのくらいの傷でへばっては、申し訳ない。さあ掛かってこい、お前の全力を振り絞ってな……！」

そう言ってラドカーブは、胸に手を当てたまま再び身構えていた。
あくまで、最後まで戦うつもりのようなのだ。
ローダは、それを受けると、複雑な表情をしていた。
いくら相手は敵だといっても、一時は信頼して憧れていた男だ。
そう簡単に、その時の思いを、払拭できない自分に気付いていた。
やはり、彼とは戦いたくなかった。
それがローダにとっての、今の本音であったからだ。

「どうした、斬り掛かって来ないなら、こちらから行くぞ。お前はまだ俺を憎みきれていないようだが、それが命取りになる場合もあるぞ。それをよく気をつけろよ！！」

それはある意味、ラドカープの教訓でもあるような気がしていた。
彼はローダを、甘いと思っている様子だ。
敵を憎みきれないようでは、いつ命を落としてもしょうがないと言いたいのだろう。
だがローダには、甘いといわれようが、どうにも割り切れないその心境を拭いさることは出来なかった。

少しの間でも、ラドカープとは寝食をともにした仲だ、多少なりと、情はうつる。
しかしラドカープは、それを知ってか知らずか、果敢にも斬り掛かってくる。
だがその攻撃は、傷を負っているためか動きが鈍い。
ローダには、その太刀筋がありありと見えていた。
そしてその時ローダは、その心境とは裏腹に、体の方が勝手に動いていた。
ラドカープの剣戟を既のところまで躲すと、そのまま突進して、ラドカープの目と鼻の先に達する。

すると何の躊躇も見せず、剣を横薙ぎに振るうと、そこで鋭く一閃していたのだ。
その剣は白く光り、ラドカープの首筋をとらえ、頸椎をやすやすと切断する。
その太刀筋は、見事だ。
ラドカープは、そのまま首と胴がはなれた形になり、そのままもんどりうって倒れ込んでいた。生首は、ゴトツという音を発して、あらぬ方向へと転がっていく。
それを一瞥して、ローダは絶句していた。
たしかに今、自分は、ラドカープを斬り裂いてしまっていた。
体がチャンスをつかえ、反射的に剣術の型を反復し、空白になって勝手に動いたのだ。
ローダの意志に、反してである。

「ラドカープううううう！！」
ローダは、絶叫していた。
彼は、突然、途方も無いことをしてしまったという、罪悪感を顕わにしていた。
殺す心算じゃなかった。
でも俺は、なぜラドカープを斬り捨ててしまったんだ！
ローダはそう言いたげに、たとえ様もない、自己嫌悪感に苛まれていた。
だが、戦いの決着はついていた。
ローダが、ラドカープを斬り捨てたことで、一騎打ちの決着はついたのである。
その光景を見て、ジルとセルシアも喜ぶ反面、複雑な心境を露骨に表していた。
彼らも、一時はラドカープを信頼していたのだ、死んでざまあみろとは言えない心境である様子だ。

「ほほう、これは驚いたね。あのラドカープが敗れるとは思ってもいなかった、深く悼んでいるよ。彼は、将来、有望なイルアデフの構成員だったが、これで何も出来なくなってしまったようだね。大したものだ、イローダよ。さすがは風の血族、その能力を称賛すべきだろう」

「黙れダーラント、俺はお前を許さないぞ！ どうして人が死んだのにその不遜な態度を崩さないんだ。お前には、人の心の痛みがわからないのか！？」

ローダは、軽蔑していた。
ダーラントの物言いが、ローダの今の心境を逆撫でしたからだ。

ローダは、鋭い目付きでダーラントを見据えると、今にも斬り掛かっていきそうな勢いで身構えていた。

「おおお、恐い恐い。ラドカーブを屠ったのは君なんだぞ。私に怒りをぶつけても、しょうがないと思うがね」

しかしローダの怒りは、収まらなかった。

ローダは、剣に風の力を漲らせると、すかさずダーラントに対して烈風を放っていた。ダーラントは、突然の事にその場に棒立ちになり、目前に迫ってくる烈風を直視していた。

だが遅い。

それが見事、ダーラントの右腕を直撃する。

その衝撃で、ダーラントの腕は、肘の辺りから切断されて吹き飛んでいた。

腕の切断面は、骨をもきれいに断ち切れ、鋭利な手術用の刃物で切断されたかのような断面を残して、そこに曝しだされていた。

「グオおおおおおッ・・・！！」

ダーラントの叫びが、エルカトルの遺跡内に反響してこだまする。

彼は、凄まじいうめきを洩らし、その場で腕を抱えてのたうち回っているかの様子だった。

「貴様！ 貴様！ 許さんぞ！ 俺を斬り付けるなんて外道だ！！ お前たち、構わないからその男を斬り刻んでしまえ。私を斬り付けた事をあの世で後悔させてやる！！」

それを受けて、ダーラントの態度は、一変していた。

彼は、ラドカーブの部下である十人の男たちに、そうまくしたてると、ローダを殺すように命じていた。

ダーラントは、それまでの余裕の薄ら笑いは消えて、今は憤怒の形相がありありと浮かんでいる。どうやら彼は、自分に危害が加わると、その態度が豹変するらしい。

おそらく、今まで危機的状況に、陥ったことが無かったのであろう。

それは、いつも安全な場所で、部下を手足のように扱い高邁の様に振る舞い続けていた男の、真の正体のように見て取れていた。

「なんだ、俺達を捕らえるんじゃないのか！？ それなら、こっちとしても構わないが、死ぬのはあんたの方だぜ！！」

そうやってローダは、今度は逆に、相手の神経を逆撫でするような言葉を吐いていた。「うむむ、そうであった。お前たち、さっきの言葉は撤回する。殺すのではなく、その者達を捕らえろ。それがお前たちの今やるべき任務だ」

ダーラントは、我に振り返り気付く。

本来、自分に課せられた責務は、ローダを捕らえてイルアデフの本部へ連れ帰ることにある。

一時は、ローダの無惨な攻撃によって、右腕を失い、錯乱して狂気をぶちまけたが、ローダの言葉によって冷静さを取り戻し、初志の目的を貫徹することを選んだようだった。

ダーラントは、ラドカーブの部下たちに、ローダたちを捕らえるように命じると、自分は痛む右腕を押さえながら、何かまた呪文のようなものを唱えだしている様子だった。

それには、なかなか気丈な面も覗える。

右腕は切断されて、激痛が走っている筈だ。
しかしダーラントは、その痛みを押し殺して、呪文の詠唱を止めようとはしていない。
ローダ達は、そのダーラントの挙動に対して、警戒心をかきたたせられていた。
今度は、またどんな事が起こるのかが、疑問であったからだ……

第六節

戦いは、まだまだ続いていた。
それは、ある意味、復讐戦の様相を呈し様としている。
先程の一騎打ちで、ラドカープが死した今、その彼の手下たちは躍起になってローダたち四人に斬り掛かろうとしていた。
だが、男たちは、不用意には踏み込まない。
それは、ローダの攻撃を恐れての事だ。
自分たちの主人、ラドカープを屠った男となると、相当の手練れだからだ。
彼らは、その場でじりじりと靴音をたてて、血走ったその目をぎらつかせている。
ラドカープが殺された事により、男たちは、復讐心を漲らせている様子だった。
しかし彼らは、躍り掛かろうにも、なかなか隙が見いだせず、剣をただイライラともてあそびながら躊躇っている様子だった。
相手は、剣術の手練れだけでなく、風術も駆るのだ。
不用意に斬り込めば、返り討ちにあうのは目に見えている。
そうならない為にも、彼らは、ここが正念場と踏んでいた。
じりじりとした睨み合いが続き、緊迫した空気が張り詰める。
男たちは、ダーラントにローダたち三人を殺すなど命じられているが、その命令を真に受けているかは疑問である。
彼らのやはり血走ったその目が、それを如実にうたえている。
どうやら、ローダたちを、斬り付けることも辞さない様子だ。
そして男たちは、意を決したように動く。
そこで、ようやく戦いの火蓋は、切って落とされたのだ。
彼らは、手持ちの剣を上段に振りかざすと、一齐に突進して来ていた。
五人はローダ、残り五人はジルとセルシアに、剣戟を振りかざし差し迫る。
そこは、たちまち戦場と化し、激しい剣戟の応酬が繰り返される修羅場になるかの様だった。

最初に男たちが狙いを定めた相手は、セルシアだった。

ジルとセルシアの二人を囲んでいた五人の男たちは、まずジルはさておき、セルシアを標的にしたようである。

それは、彼女がいちばん御し易いと、思ったからかもしれない。

五人は、セルシアを睨め付けると、その中の二人が先陣をきって彼女に襲いかかる。

セルシアは、それを確認すると、恐れずに斬り掛かってきた一方の男に手持ちの剣で斬撃を見舞っていた。

それは、後手に回って、相手に優位な立場を与えさせないための、速攻の攻撃だった。

しかし、その男は、難なく身を翻すと、その攻撃を避けていた。

だが、その直後、横合いからもう一人の男が、セルシアに突きを入れてくる。

セルシアは、その攻撃を間一髪でひらりと躲すと、後退してその二人の動向を窺っていた。

今度は右、セルシアはそれを剣で受けると、タイミングをとって見事に弾き返し、そのまま男に牽制の一撃を見舞う。

その一撃は、運のいいことに、男の右肩をかすめて浅い裂傷を与えていた。

彼女は、女性とはいえ、そう易々とはやられたりはしない。

相手が、数の上で優勢であろうと、彼女は少なからず自分の剣の腕に自信がある。

もちろんロードのように、素早い攻撃は出来ないが、相手が相当の手練れでないかぎり、劣勢に立たされることはないだろう。

「私だって、やれるんだから・・・」

セルシアは、そう思うと、再び相手の動向に探りを入れている様子だった。

そんな中、ジルもセルシアの戦いぶりを見て、闘気を漲らせていた。

彼は、セルシアを加勢するべく、敏捷な動きを見せる。

今セルシアが相手にしている二人の男に、注意を向けると、間髪入れず斬り掛かる。

「いやあああ！」

そして右、左と交互に剣を払って、相手に肉薄していた。

だが、それに気付いた残りの男たちが、ジルの突進を防ごうと、その行く手をさえぎっていた。それを、ジルは察知すると、有無を言わずその男たちにまた斬り掛かっていく。

ジルと、その男たちの戦いは、熾烈をきわめていた。

ジルが、懸命に剣戟を繰り出す。

だが男たちは、それを避け横に回り込み、斬撃のタイミングを見計らう。

しかしジルも、それを許さず、出来るだけ動いて攻撃の手を休めない。

すると、やがて両者は剣戟の応酬になり、ジルは相手の懐に飛び込み、何度もその手持ちの剣を振るって斬撃をお見舞いしている様子だった。

一人の相手が、ジルの意表を衝いて剣戟を繰り出してくる。

それを、ジルは懸命に打ち反らすと、相手の隙をついて攻勢にでる。

その直後、横から一人の男が剣を突きだして来ていたが、それを素早く躲すと目の前の男に渾身の一撃を見舞っていた。

しかし、それは、標的をそれ惜しくも空をきる。

だが、気を取り直し体勢を立て直すと、再び気合いの掛け声とともに、相手に対し斬り掛かり、斬撃をおみまいしていた。

だが、その頃、ロードといえば、やはり五人の男と対峙していた。
彼は、五人と視線を交わすと、真剣な顔つきで相手を睨み付けている。
その眼光に、男たちは気圧されるのか、そのまま膠着状態が続いていた。
それだけロードのまとう闘気が、尋常ではないのかもしれない。
しかし次の瞬間には、一人の男が意を決してロードに斬り掛かる。
このまま膠着状態を続けても、意味がないと思ったのであろう。
だが、その男が動きを見せた瞬間、ロードは、一瞬のうちに烈風を放ってその男を一刀のもとに斬り伏せていた。

男が、有無をいわさず倒れこむ。
そこへ四人が、一斉に斬り掛かる。
彼らは、仲間が斬り倒されたことで、やはり頭に血が上っている様子だ。
その目は、さらなる復讐心で満たされている。
しかし、男たちが斬り掛かると、突然、横殴りの突風がまき起こり、その風圧に巻き込まれて四人は、右へと猛烈な勢いで吹き飛ばされていた。
そして、したたか腰を地面に打ち付けて、その場で悶絶する。
もちろんその突風は、ロードから発せられた力だ。
風を駆る力。
やはり多勢に無勢でも、ロードに対し近付くことは至難の業のように見える。
風を操り、自在にそれを駆使する戦法は、驚異的といっていだろう。
男たちは、それを察すると、地面に座り込んだまま、ロードを恨みがましい目で見つめ返してきていた。だがロードは、それを受けても、しれっとした態度でその視線を受け流す。

しかし、そんな中、ロードは次の瞬間、ある異変を感じ取っていた。
その異変は、足元から来た。
ロードたち四人の足元が、ぐらぐらと動き出す。
最初、それは、地震かと思っていた。
しかし、それは違っていた。
ロードたちが立っているそれぞれの足元が、ぐにやりと、蒟蒻のようにひしゃげたのだ。

その足元の地面は、ぐにゃぐにゃと鳴動を繰り返す。
すると次の瞬間、そこから無数の生きもののような触手がのび出てきていたのだ。
それは、乳白色の、淡くやわらかいぬめりとした物体であった。
先が赤く、まるで深海生物の成れの果ての様だ。
「きゃッ！ 何よこれ。足に絡んでくるわ・・・」
それを受けて、セルシアは短い悲鳴をその場であげていた。
ぬめぬめとした触手が、足に絡み付き、次々に這い上がってくる。

それを見てジルも、慌てていた。
彼の足元にも、その触手が絡み付いて来たのだ。
ジルは、それを剣で薙ぎ払い切断する。
ビシュッという切断音とともに、乳白色の液体が飛び散った。
しかし、いくら斬り付けても触手はその断面からまた再生し、その丈を長くのばして四人の足に絡み付いてくる。
「これも妖術師の、術の力なのか？」
それを見てローダは、一人そう呟いていた。
ローダは、自分の足元に絡み付いてくるそれを、ジルと同様、斬り裂くと、横へと飛びのく。
しかし、その後を追うように、またその足元から触手がのび、ローダの足に絡み付いてきていた。
ゆらゆらと、不気味に蠢くその触手は、巨大な磯巾着を思わせる程に、陸に生息する生物とは不釣り合いだ。
四人は、その触手に翻弄されて、戦いもままならない状態であった。
「これでは限りがありません。若、どうしましょう!？」
ジルが、ローダにむかって、悲痛な叫びを洩らしていた。
触手は、次から次に足に絡み付いてくる。
それをジルは、何度も薙ぎ払い、その拘束から逃れようとしている。
これでは、男たちと、剣戟を交えていられる場合ではない。
「判った、一ヶ所に集まろう。別々に行動をとってはまずい。とにかくルヴェッツァーニのところへ……」
そう言って、ローダは、足元の触手を薙ぎ払うと、即座に駆け出していた。

その頃、ルヴェッツァーニは、もがき苦しんでいた。
彼は、右手に銃しか持っていないので、刃物で足に絡み付く触手を斬り捨てることも出来ず、立ち往生していた。触手は、足から腰へと這い上がり、さらに胸にまで達する。
それは、まるで、触手の先には目が付いているのではないかと思えるほど、的確にルヴェッツァーニを狙って絡んでくる。
そんな状況で、ルヴェッツァーニは、銃を足元に乱射してどうにかその状況から逃れようと、試みている。しかし、その弾は、地面の土を虚しくえぐるだけで、何の効果も望めなかった。
そこへローダとジル、セルシアが、駆け付ける。
彼らは、ルヴェッツァーニを一瞥すると、一斉に剣を薙ぎ払い、彼を拘束している触手を斬り刻んでいた。
斬り刻んだ触手からは、やはり乳白色の液体が飛び散り、その飛沫が四人の衣服に染みをつくる。
その細切れになった触手は、地面に落ちると、蛇のようにのたうちまわって、一頻り暴れ、やがて活動を停止していた。それでやっとルヴェッツァーニは、触手の拘束から解放されたのだ。いま少し遅ければ、全身をおおい尽くされていたかもしれない程、そ

の触手の増殖力は、凄まじいものがあった。

「みんな、済まない、助かったよ」

ルヴェッツァーニが、短くお礼の言葉を述べる。

彼としても、さすがにその表情は強ばっている。

得体の知れないその触手による拘束は、ルヴェッツァーニをしても、その顔を青くするほどの効果があるらしい。

その後、四人は、背中を寄せ合わせるように密集すると、男たちを遠巻きにして、対峙していた。

しかし、やはり触手の増殖は止まない。

ローダたち四人がいる足元が、再び揺れだすと、また触手がゆらゆらとのびて、彼らの足を拘束し始めていた。

触手は、靴底から足伝いに這い上がると、膝頭を越え太ももの辺りまで伸長してくる。

そして、さらに伸長を繰り返すと、ついに腰の部分にまで達していた。

先程にもまして、触手のその増殖力は顕著になって来ている。

剣で斬り裂いても、対応しきれず、見る見るその体を強い力で締め付けられるようになっていた。

「このままだと、また身動きがとれなくなるわ。ローダ、どうにかしないと・・・」

セルシアが、危機を察して、鬱陶しそうな声色でそう叫びを洩らす。

だが、そんな様な状況のところへ、男たちが果敢にも躍り掛かって来ていた。

男たちは、有無をいわさない。

ここを、絶好のチャンスと見ての、行動だろう。

ローダたちは、今、足の自由を奪われている。

つまり、その虚について、攻撃すれば、男たちに分があるのは確かだ。

次の瞬間、男たちは、渾身の一撃をお見舞いしようと、剣を振りかぶって来ていた。

白刃の兇器が、ローダたちの目前に迫る。

しかし、男たちがローダたちの目の前に躍り掛かる寸前、突然ローダは、その状況下に得意の風術を駆って、無数の竜巻を起し、鎌鼬の要領で四人の足に絡み付いてくる触手を根元から切断し、粉碎してしまっていた。

そのローダが起こした竜巻は、バリバリバリという切断音を響かせながら、その触手のようなものを一掃していく。

それで四人の足は、その触手の拘束から解放され、自由になっていた。

だが、そこへ、男たちが意を決して、斬り掛かってくる最中だった。

それは、素早い攻撃である。

ローダの目の前を、斬撃がかすめる。

一人の男が、ローダに対し、必殺の一撃を見舞っていた。

しかしそれは、ローダにはあたらず、横へと抜けていた。

ローダは、それを察知すると、後ろへと飛びのいている。

だが、男たちの攻撃は止まない。

今度は、別の男が、セルシアに狙いを定めて、斬り掛かってくる。

男たちは、攻勢のチャンスを逃すまいとして懸命だ。

しかし、それをセルシアは横へステップして、その攻撃をやり過ごす。
そして、脱兎の勢いで駆け出すと、前方にいたもう一人の男へ斬り掛かっていた。
それは、その男の虚をついての攻撃だった。
だが男は、セルシアの攻撃を、身を翻して躲している。
セルシアは、それを見て今度は、フェイントを織り交ぜながら、斬り掛かっていた。
男とセルシアの、打ち合いが続く。
セルシアは、上段から斬り付けると見せ掛け、横薙ぎに剣を払う。
相手の男も、それに乗じず、素早く剣を動かすと、セルシアの攻撃をうまく受け流していた。
横合いから、三回、上段から二回、斬り込んだが、セルシアの剣はうまく弾き返され空を切る場面も見受けられた。
それでもセルシアは、剣戟を繰り返す。
彼女は、上段から相手の剣をへし折る勢いで、斬撃を放つと、男は一瞬、怯んでいた。
セルシアは、その隙を見逃さず、すかさず次の攻撃を繰り返す。
その攻撃は、相手の右腕をとらえ、そこに深い裂傷を与えていた。
しかし、そこにもう一人の男が割って入る。
割り込んできた男は、セルシア目掛けて斬撃を打ち放ってきたが、それを彼女は手持ちの剣で受けて横へと弾いていた。
その直後、セルシアは、しなやかな肢体をしならせて、男の懐へ掻い潜り、斬撃をたたき込む。
男は、その攻撃を受けて、足を押さえてその場で蹲ってしまっていた。
セルシアの放った斬撃は、男の右足をえぐっていたのだ。
だがセルシアは、その男を一瞥すると、今度は別の男に対して斬り掛かっていた。
再び、剣戟の応酬が始まる。
セルシアは、疲れを見せず剣戟を放ち続けた。
その後、彼女は、戦いの最中、ジルと背中合わせになる形で合流すると、今度は二人のコンビネーションをふるに活用して、男たちを翻弄する。
最初にセルシアが斬り付けて男たちを牽制すると、その横合いからジルが応戦して相手に斬撃を見舞う。その攻撃法に、数で勝る男たちも、さすがに斬り込みを入れるタイミングを見失っていた。
それは、セルシアとジルの、息の合った見事なコンビネーションであったからだ。
それを見たローダは、自分も負けじと、男たちに対して斬り掛かる。
ローダは、一人の男に標的を定めると、疾風の勢いで躍り掛かっていた。
その標的となった男は、その剣幕に脅えて、横へと身をそらして逃げたが、それは甘かった。
ローダは、男の一步、手前でやはり身を翻すと、容赦なくその男に斬撃を見舞う。
その斬撃を受けた男は、胸板を斬り裂かれ、もんどり打って倒れる。
どうやら、剣が肋骨を破り、肺にまで達したようだ。
ローダの、その一撃は、剃刀のように鋭かった。
骨さえも、やすやすと断ち切るその太刀筋の見事さは、ひとえに剣に漲らせた闘気の

たまものであるともいえるだろう。

ローダの剣は、今や、怪しい輝きを放っている。

その刀身には、烈風を放つ時のような、不思議な魔力が備わっている。

闘気を剣に漲らせることにより、その切れ味を、数倍、増幅させているのだ。

ローダは、その剣を駆り、男たちに斬り掛かる。

しかし、男たちは、そのローダの攻撃を恐れてか、後方へと退き剣を交えようとはしなかった。それでローダは、肩透かしを食らったように、その場でたたらを踏む。

それは、明らかに、ローダを警戒しての挙動だった。

(なんだ、意外と根性のない奴らだな・・・)

そんな男たちに、ローダが一人感想を洩らしていると、そこへまた地面がぐにゃぐにゃと揺らぎ始めていた。

ローダの足元だ。

一二秒の後、その地面からは、再びまたあの触手がのびると、ローダの足をジワジワと拘束し始めていた。

触手は、くねくねとその身を振らせ、ローダの足に絡み付いてくる。

しかし、その様な状況の中、一人の男が意を決してローダに対し、斬り掛かって来ていた。

おそらくそれは、ローダが地面から生える触手に拘束されて、気をとられている為、それを見計らったの不意打ちであるのだろう。

しかし、ローダは、その男が自分の目の前に到達するよりも早く、剣を払って躍り掛かってくる男に対し、飛び道具とも言える烈風をお見舞いしていた。

猛烈な風圧をともなって、鋭い風が刃となり駆け抜ける。

ブシュッ！

男は喉に烈風の直撃を受け、そのまま鋭く掻き切られ血飛沫を上げる。

その男にとって不運だったのは、ローダの体が、その触手によって完璧に拘束される前に、斬り掛かっていただけからだろう。

もう少し、頃合いを見計らって斬り付けていれば、そんな事にはならなかったが、今更どうしようもない。

だがローダは、相手を屠ったのも束の間、その後、触手に全身をおおいつくされ、身動きがとれない状況に陥っていた。

腕を動かそうとしても、身動きがとれない。

足を動かそうとしても、触手が無数に絡み付いて、びくともしなかった。

ローダは、首の上の頭だけを残して、その外はすべて触手によって繭のようにおおいつくされてしまっていた。

どうやら、ダーラントは、一番、手強いローダに対し、触手の拘束を強化した様だった。

四人に分散させず、ローダだけにその触手の拘束を集中させることにより、彼の身動きを封じる心算のようだ。

その証拠に、今までにない数の触手が、ローダに対し絡んでいる。

彼の足元は、無数の触手によっておおわれ、足の踏み場もない。

それを機に、四人の男たちが、ローダを取り囲む。

四人の男たちは、ローダが身動きをとれない事をいいことに、薄ら笑いを浮かべて剣を突き出し、包囲網を完成させていた。

ローダは、苦渋のうめきを洩らす。

(このままでは、危ない。なんとかしなければ……)

彼は、触手に拘束されたまま、一人ごちる。

それを知ってか知らずか、その直後、四人の中の一人の男が雄叫びを上げてローダに対し斬り掛かる。

すると、

「危ないローダ、前から敵よ！」

セルシアが、その危険を察知して、ローダに叫んでいた。

しかしローダは、それには慌てず、その体の内部から気を発散させて瞬時にして、その触手による拘束を打ち破っていた。

その気とは、やはり風の力である。

体の中心部から、猛烈に風の力を四方八方に発散させ、爆発的に放ったのだ。

斬り掛かってきた男は、もろにその風圧の直撃を受けて、後方へと吹き飛んでいた。

だが、死んだ訳ではない。

ただ背中を地面に打ち付けて、しばらく息が出来ない状態に陥っただけだった。

ローダは、すかさず細切れになった触手の残骸を、体から引き剥がすと、黙って男たちと対峙していた。

そして、横目でダーラントの方を見る。

彼は今、右腕の傷の痛みを懸命に耐えながらも、途切れる事無く呪文の詠唱を続けている。

それを見るとローダは、どうしてもダーラントの呪文の詠唱を止めなければならないと、思っていた。

「ルヴェッツァーニ、悪いがダーラントの呪文の詠唱を止めてくれないか？ 奴の術を封じないと、埒が明かない。たのむ、俺の願いを聞いてくれ！」

そう言ってローダは、ルヴェッツァーニに期待をかける。

彼は、銃撃のプロと言っていい、そのルヴェッツァーニに、ダーラントを任せれば、呪文の詠唱を止められると思ったようだ。

自分は、男たちと対峙して、とてもダーラントにまでは手が回らない。

しかし、ルヴェッツァーニならそれが出来る。

「判ったローダ、あいつの口をふさげばいいんだろ。なんとかしてみせるさ」

それを受けると、ルヴェッツァーニは納得したのか、ローダの頼みを受け入れていた。

そしてホルスターから即座に銃を引き抜くと、その照準を合わせ、呪文を唱え続けているダーラントに向けて狙いを定めていた。

バーン……

一発の銃声音が、辺りにこだまする。

ルヴェッツァーニから放たれた銃弾は、狙いをそれる事無くダーラント目掛けて直進する。

しかし、その直前に、ダーラントは、銃撃を察知してか呪文を唱えながら、横へと身

を翻していた。

「チッ！」

ルヴェッツァーニは、軽く舌打ちする。

よもや、ダーラントが、今の銃撃をさけるとは思ってもいなかった様だ。

しかし、ルヴェッツァーニは、それを見ると、気を取り直して今度は立て続けに三発の銃弾をお見舞いしていた。

彼の銃から放たれた弾丸は、空気の層を突き抜くように唸りをあげる。

すると先の二発はそれ、後の一発は、見事ダーラントの肩口にヒットしていた。

「くうう！」

ダーラントが、苦鳴を洩らす。

それによって、ダーラントは、その呪文の詠唱を中断し、肩口を押さえてやはりのたうちまわっていた。

「ローダ、今だ！ そいつらを斬り捨てろ！！」

そう言うと、ルヴェッツァーニは、またダーラントに銃の照準を合わせ、発砲のタイミングを見計らっていた。

しかしダーラントは、ルヴェッツァーニの銃撃を嫌って逃げ回る。

ルヴェッツァーニは、それを見て、立て続けに三発の銃弾を、ダーラント目掛けて発砲する。

だが、そのどれも、標的をとらえる事はなかった。

ダーラントは、妖術師にしては、素早い動きで前後左右に移動すると、ルヴェッツァーニの銃弾を予測して避けている。

それでは、さすがにルヴェッツァーニが銃撃のプロといっても、儘ならない状態だった。

その頃、ローダは、三人の男たちと剣戟を交わしていた。

突然、斬り掛かってくる男に烈風をお見舞いし、その体を両断する。

当然、その男は、屍となって地面に転がっていたが、その上をまた次の男たちが乗り越えて、ローダに迫り斬り掛かって来ている。

斬り掛かってきた相手は、二人だ。

ローダは、体をひねってその二人の男の間に割り込むと、横薙ぎで一人の男を一閃し、もう一人の男は振り返ったひょうしに顔面へ肘鉄を食らわせて、鼻っ柱をへし折っていた。

「ぐうっ・・・」

だがその時、突然ジルのくぐもった苦鳴が聞こえて来ている。

ローダは、その声に驚き、横を振り向くと、今しがたジルが男に斬り付けられて血を流している姿が目飛び込んで来ている。

「ジル！ 大丈夫か！？ 傷は？」

ローダは、ある意味、焦ってジルに問い質していた。

「大丈夫です、若、ちょっと油断して、軽く斬り付けられただけです。心配せず目の前の

相手に集中して下さい、私はまだ戦えますから……」

そう言ってジルは、手持ちの剣を握り直していた。

ジルが受けた傷は、左腕だ。

ちょうど、その二の腕のところに裂傷が走っている。

だが、たいした傷ではない。

少し痛むが、浅い切り傷にひとしかった。

ジルの目の前では、セルシアが果敢にも躍り掛かっている。

彼女は、二人ほどの相手を巧みな剣さばきで翻弄すると、鋭い斬り込みを入れている様子だ。

そこへジルも、剣を構えて参戦する。

すると、再びジルとセルシアは、巧みなコンビネーションで、男たちを翻弄し始めていた。

セルシアが、上段から相手の隙をついて、一刀のもとに斬り裂く。

それで、斬られた男は、脳天を粉碎され絶命する。

その直後、ジルも剣を横へと一閃して、一人の男を斬り刻んでいた。

ローダは、それを見て安心し、目の前の敵に向き直っていた。

相手は一人。

これならば、負けはしない。

ローダは、気合いのこもった掛け声を発すると、疾風のごとき素早さで、相手へと斬り掛かっていた。それはまさに、風のごとき立ち振る舞いである。

右から二回、上段から三回と、ローダは剣戟を繰り返す。

すると、ローダと剣戟を交えている男は、その猛攻に癖癖し、後退を余儀なくされる。

そこへローダが、腰だめに剣を構えて突きかかる。

それで相手は、難なくその体を串刺しにされて、断末魔の叫びを残しながら倒れ伏していた。

結局、戦いが終わってみると、十人いた男たちは、みな屍に変わっていた。

ジルとセルシアは、残っていた一人の男を斬り捨てると、ローダのもとへ歩み寄ってくる。

そして三人は、その場で息を整えると、ダーラントとルヴェッツァーニの様子に覗いを立てていた。

残るは一人、妖術師バーク・ダーラントだけだ。

彼は今、ルヴェッツァーニの銃撃を必死になって、躲している様子だった。

ルヴェッツァーニは、手早い動作で弾倉に弾を詰め替えると、またダーラント目掛けて発砲を繰り返している。

その銃撃を受けて、さすがにダーラントは、呪文の詠唱を中断したまま、前後左右に逃げ回っているだけの状況であった。

ローダは、その光景を見て、自分も手持ちの銃をホルスターから抜き放つと、ダーラントに対して照準を合わせていた。そして、即座に二発の銃弾を発砲する。

その直後、ローダは、銃を携えたまま、ダーラントへ接近するために、意を決して駆けだしていた。

ダーラントは、聖堂の廃墟の一段、上の場所にいる。

そこへ、疾風の勢いで駆け上る。

ダーラントは、ルヴェッツァーニの銃撃に気をとられていて、ローダが銃を構えている事に気が付かないらしい。

ローダはそれを察すると、すかさずまた二発の銃弾を放っていた。

その銃弾は、一発は反れたが、二発目は彼の脚に見事、命中していた。

すると、ダーラントが、その場でバランスを崩し体を支えきれず倒れていた。

そこヘルヴェッツァーニとローダが、駆け付ける。

彼ら二人は、ダーラントが倒れている瓦礫の丘の辺りまで来ると、再び銃を構えて威嚇の姿勢をとっていた。

そして、その威嚇の姿勢を保ちながら、ゆっくりと倒れているダーラントへ近付いていく。

ダーラントは、右腕を烈風によって切断され、左肩と右足に銃弾をあびている。

それで、即死はしていないが、どれも痛々しい傷であったことは確かだ。

その傷の痛みのせいで、もう身動きはとれないだろう。

彼は、何とか座り込んでぜいぜいと荒い息を吐くと、傷口を押さえて苦悶している様子だった。

そして、近付いてきたローダとルヴェッツァーニを、敵意のこもった凶悪な目で睨み付ける。

だが、その後ダーラントは、その状況にもかかわらず、薄笑いを浮かべて、ふてぶてしい態度をとっていた。

彼は、この期に及んで、二人に銃を突き付けられても、脅えた風な素振りは見せなかった。

それはおそらく、彼にも、イルアデフの第七幹部としてのプライドがあるからなのかもしれない。

そのプライドをかなぐり捨てて、命乞いに走ることは出来ない様子だった。

「これで万事休すだな、ダーラントよ。ようやくあんたも年貢の納め時だ、ここで観念したらどうだ。もうお前の命令を聞く部下もいない筈だ、だれも助けには来ないぞ……」

そう言い放っていたのは、ローダだった。

彼は、ふてぶてしい態度をとり続けるダーラントを目の前に、軽く息を整えながら銃を頭に突き付けると、そう言葉を紡いでいた。

しかし、

「クッククックッ、確かに私にとってこの状況は不利だ。だが私を舐めてもらっては困る、イローダ、君を捕縛してイルアデフの本部へ送還するという当初の計画はこれで御破算になってしまった。だが、我々の意志を継ぐ者はまだいるのだ、その者達がきつとお前を付け狙うだろう、我々の大望の為に君がどうしても必要だからね」

そう言ってダーラントは、口を噤んでいた。

ダーラントは、これで全てが終わった訳ではない、と言いたいようだ。

イルアデフは、またローダを狙って、捕縛の人間を差し向けてくるという事らしい。

それを聞いて、ローダは、複雑な表情を隠し切れなかった。

まるで、その首に賞金をかけられた、逃亡犯のような心境といえる。

その事を考えると、ローダは、何か意識が遠のくような感覚に苛まれていた。

イルアデフという組織が存在している限り、自分の身柄を付け狙う者達がいると思うと、何かひどい重荷を背負ってしまったようなそんな風な心境だ。

「さあどうするね、君達、このまま私を殺すかね。殺すならさっさとしたまえ、私は死を恐れたりはしない、イルアデフの大望の為に死ぬるのならば本望だ。死んで天国へ行けるとは思っていないが、死は一つの状態の変化というからね。死して生まれ変わりまたこの地上に生を受けて、君を付け狙うかもしれないよ……」

ダーラントは、またクククと笑いを繰り返す。

それは、自分の死に様さえ、笑い飛ばしている、狂信家の様でもあった。

「こんな奴、殺してしましましょう。このままのさばらせても何の得もないわ。所詮、世間に害毒をなす、狂信家の輩よ。生かしておく、またどこかで悪さをするに決まっているもの、悪の芽を事前に断つことも必要よ。その銃で頭を撃ちぬきなさいローダ、そしてこの件に、決着を付けましょう……」

そう言葉を発したのは、セルシアであった。

彼女は、ジルと共にローダとルヴェッツァーニがいるところまで駆けつけてくると、有無を言わずそう言っていた。

「そうです、こんな奴、生かしておく価値はありません。一思いに殺しても、罰などあたりませんまい！」

どうやら、ジルも同意見のようだ。

彼は、不審の目で、ダーラントを睨め付けている。

それはまるで、汚い雑巾でも見るような、嫌悪感をただよわせた目付きだ。

それだけダーラントが、信用できない、不遜の輩のように見えるのであろう。

しかしローダは、ここにきて躊躇していた。

いくら相手が非道の者とはいえ、身動きのとれない一人の男を容赦なく撃ち殺すことは、彼の倫理に反する行いのように思えていたからだ。

だからダーラントの頭に銃を突き付けても、その引き金に力を込めることが出来ない。

それはローダにとって、苦渋の選択でもあった。

「何を躊躇っているローダ、そいつは、非道なイルアデフの幹部だぞ。生かしておく禍の種になる。君が出来ないのなら、俺が引き金を引こう。イルアデフは狡猾だ、油断のならない相手だからね……」

「待ってくれルヴェッツァーニ、こいつはもう身動きが出来ないんだ、このままここへ置いて帰ろう。後は野晒しになって、干乾びるだけさ、それが最後の情けだ。所詮、一人だし、この傷では、このエルカトルを抜け出すことは出来ないに決まっている。だから、もう血を流すのはやめよう。今回の件で多くの人が死んだ、血を見るのはもう沢山だ……」

ローダは、そう言って、ルヴェッツァーニの挙動を制していた。

「しかし、こいつはイルアデフの幹部なんだぞ。このまま見逃すわけには行かない」

それを受けて、ルヴェッツァーニは、ローダの意見に反発を示す。
「でも、動けない者を撃ち殺しては、俺の倫理に反するんだ。確かにこいつはやり方の汚い薄汚れた奴さ。でも、所詮、一人では、もう何も出来ないだろう。だから、このままにしても何も問題はないと思う。だからもうこれで終わりにしよう。俺は、人としての最低限の倫理は最後まで守りたいんだ」

「判った。君がそこまで言うのなら、俺も銃を引くよ。それでいいんだろ。確かにこいつにとっては、野晒しになり、鳥の餌にでもなったほうがお似合いだ。鳥葬という手もあるからな・・・」

そう言ってルヴェッツァーニは、その甘いマスクから、ニッと白い歯を覗かせていた。彼は、多少、不満はあっても、ローダのその言葉を、受け入れた様子だった。
「でも、最後に聞きたいダーラント。俺の親父アルスレイドは、イルアデフに軟禁されているという話だが、それは一体、何処なんだ。親父の居る場所は西の大陸なのか・・・？」

ローダは、駄目は元々で、ダーラントに詰問していた。

しかしダーラントは、その詰問に対し、意味不明な笑顔で答えていた。
「フフフ、いいだろう、教えてしんぜよう。君の父アルスレイドは、イルアデフの本部ディルガームのアステークに居るよ。アステークは、ディルガーム帝国の首都だ。難攻不落な要塞都市としても有名だ。そこに君の父アルスレイドは居る。しかし助けだそうとは思わないことだね。我々イルアデフは、闇の結社、一人の男の命を左右することは容易い。それに、君達が近付いても、見付けだすことは適わないと思うよ。だから、アルスレイドの消息を追う事は、あきらめるべきだね。それが無難な選択肢といえるだろう・・・」

そう言い残すと、ダーラントは、ぐったりと地べたへ這いつくばって、身じろぎ一つあげない状態になっていた。

それをローダたちが驚いて、ダーラントの様子を覗くと、どうやら彼は自分の歯で舌を噛み切って絶命している様子だった。

その証拠に、ダーラントの口元からは、血が筋をひくように滴り落ちている。

それを見てローダは、絶句していた。

これである意味、ダーラントの処分は、自分で自らの命を絶ったという事で決着がついたが、ローダにとって、その結末はいまいち納得のいくものではなかった。

「結局こいつは、不遜なまま死を選んだって言うことか・・・？」

そう言ってローダは、一人そう呟く。

「そうね、不遜な者の最後にしては潔いけど、これで決着がついたのだからいいんじゃない？ 結局このダーラントという男も、馬鹿だったって言う事よね。ローダを盟主の座に祭り上げて、樂園を築こうだなんて、妄想もいいことだわ。狂った理想をおうからこういう事になるのよ。でもこれで、この件に関しては安泰ね。これでしばらくイルアデフは、この地方での活動は望めないでしょうから、闇は去ったというべきよ・・・」

セルシアは、そう言って手持ちの剣を、用なしとばかりに瓦礫の中へ投げ捨てていた。投げ捨てられた剣は、カランという音を残して地面に落ちていた。

その剣を拾って、再び戦うことはないだろう。

ダーラントの死で、一応の決着はついたのだ。

「さあ帰りましょ。もうここには用はないわ」

そう言うと、セルシアは踵を返す。

「そうだな、決着はついたし帰るか？」

ローダも、そう言って踵を返す。

「あ～あ、何かどっと疲れましたの・・・」

ジルは、淡泊な顔をしてそう言っていた。

その後、ローダとジル、セルシアの三人は、エルカトルの遺跡に男たちの屍を残したまま、ハンスの屋敷へと帰っていったのである。

王国の騎士が戦いに勝利して、凱旋をするようにだ。

エピローグ

エピローグ

「本当に、行ってしまうのですね？」

紫紺色の目、水色のルージュの唇、軽くウェーブした金髪の巻き毛がよく似合う一人の娘、エネアが、ローダに対し問い掛けていた。

「ああ、全ての決着はついたからね」

黒髪に茶褐色の目、中肉中背でいかにも精悍そうな若者、ローダがそう言うと、名残、惜しそうな笑みを洩らす。

その顔の表情に去来するものは、難局を乗り越えて勝利した若者の、ささやかな矜持というべき態度が覗える。

ハンスの屋敷に、雇われ傭兵として訪れたときから今日まで、いろんな事があった。

二度目の爆弾による別館の炎上、一度目の襲撃や二度目の襲撃、三度目、屋敷のパーティー会場へ、狼の群れが乱入して裏切った傭兵たちにセルシアが攫われたこと。またエルカトルの遺跡でのイルアデフとの死闘。そのどれもが、ローダたちに致命傷となる傷を負わせることもなく、無事に今ハンス一家とこの場に立ち合って話ができるのは、ひとえに運も味方したローダたちの活躍があつての事だろう。

「でも、これでお別れだなんて、少し淋しい気もします。どうかあと数日でも、この屋敷に逗留して行って下さいませんか？」

やはり紫紺色の目、それに赤のルージュを唇にさした巻き毛の娘、ミネアがそう言う。「それは俺達も、急いでここを去るのは、名残、惜しいけど、もう決めた事なんだ。どうか引き止めないでくれ・・・」

ローダとジル、セルシアの三人は、エルカトルの遺跡から帰ると、もう次の日にはハンスの屋敷を去ることに決めていた。

ローダとジルが、ハンスの屋敷にセルシアを連れて戻ったとき、エネアとミネアそしてハンスは、飛び上がらんばかりに喜びを表していた。

中でもハンスは、セルシアがイルアデフに攫われた責任は、自分にあると責めていた様子で、食事も喉を通らないぐらいローダたちの身の安全を心配していたのだ。

もちろんエネアとミネアも、心配してその日はずっと神に祈りを捧げていたという。

だが、ローダたち三人は、エルカトルの遺跡に出掛けたその日の内、日が西へと沈む夕刻の時間には、ハンスの屋敷へと、無事、戻ってきていた。

ジルとローダは、多少、体に傷を負っていたが、エネアとミネアの手当てを受けて命に別状もなく無事、生還していたのだ。

エネアとミネアの二人は、ローダとジルと一緒に帰ってきたセルシアを見ると、抱きついて涙を流しその無事を喜んでいた。

この二人の姉妹にしても、相当、気に病んでいた様子だ。

セルシアは、二人の姉妹にとって姉のように親しくしてくれた女性だ。

その彼女の無事を、心から喜ぶのは、二人の姉妹にとって、至極、当然の事であったのだ。

また、マリーネ夫人やアルジャンも、その心境は同じで、ローダとジルに労いの言葉をかけたのは言うまでもない。

その日の夜は、ハンス一家とローダ達、三人で、ささやかな酒宴をもよおしたのだ。

皆で一階の大部屋に集い、グラスを傾けて、三人の無事を祝う。

その席でハンスは、あらためて、ローダたち三人に涙ながらの謝罪をしていた。

イルアデフに脅されていたとはいえ、やはりハンスにも、それに対するいくばくかの罪悪感を抱いていたのは隠し切れなかった。

そこでローダ達、三人に、土下座して謝ったのである。

もちろんローダとジル、セルシアも、その事に関してはすっかり水に流していたが、ハンスはそれでも納得がいかず、ひたすら頭を下げて謝り続けていた光景を覚えている。

それにエネアとミネアも、ローダ達に感謝することを忘れはしなかった。

少しの間でも、自分たちの身を守るために、彼らは死力を尽くしてくれていたという経緯があるのだ。その事を忘れて、不義な態度をとる二人の姉妹ではない。

その事に関して、エネアとミネアは大恩を感じている。

それを一生、忘れてはしないだろう。

ローダ達、三人の活躍で、イルアデフの脅威は去った。

この件に関しては、もう安泰といいようだろう。

エネアとミネアも、もう命の危険にさらされる事もない。

その日の夜の宴は、それで幕を閉じていた。

そして次の日の朝、三人はハンスの屋敷の門扉の前でハンス一家に別れを告げていた。

ローダ達、三人は、夜のうちに話し合っ、この屋敷を次の日の朝、去る事を決めていたのだ。

彼らにとっても、この屋敷を去ってハンス一家と別れるのは名残、惜しいという心境もあったが、もうそれは決めた事だった。

仕事はもう、終わったのだ。

当初、この屋敷に訪れた目的とは違った結末になったが、一応、仕事は滞りなく果たしたと思っている。これでこの一件は、終局したといいよう。

しかし、今エネアとミネアの二人は、ローダを悲哀のこもった目で見つめていた。

「では、どうしても、行かれるというのですね？」

姉のエネアが、もどかしそうに確認の意味を込めて、そう問い質していた。

「ああ、これで二人ともお別れだね。ここ数日間いろんな事があったけど、ある意味、楽しかったよ。君達に会えて本当に良かったと思っている。でも、そんな悲しい顔をしないでくれ。別に死に別れになる訳ではないんだ。この場合は、笑って別れようじゃないか」

「ええそうですね。でもまたいつか会える時もありますよね。私たちは、貴方たちがここ

へ再び訪れてくれることを信じています。その時まで、待っていてもいいでしょう？」

そう言うとエネアとミネアは、名残、惜しそうに涙をその瞳に浮かべていた。

「そうだね、きっとまた会える時もあると思うよ。その時まで、しばしのお別れだ。それまで君達も壮健でいてくれよ。二人には、笑顔が一番、似合っているから、その笑顔を絶やさないように、判ったかい？」

ローダは、そう言って涙ぐむ二人を慰めていた。

「そうよエーネ、ミーネ、ローダがいなくなっても、気を落としちゃ駄目よ。ローダってね、意外とうぶだから、貴女たちのことが好きって言えないのよ。だから、私が代わりに言ってあげるわ。だからメソメソしないで、次に会えることを期待してなさい。きっと貴女たちを迎えに来るかもしれないわよ。今度は花嫁として……」

セルシアは、そう言うと意味ありげに二人に対して、にこっと笑ってみせていた。

そう言われて、エネアとミネアは顔を赤らめて俯く。

そして、しばしローダの顔色を覗っている様子だった。

そんな中、ローダは、その場をどう対処していいか分からず、頭を掻くばかりだった。何か自分が、惨めな晒し者になっているような気分だった。

しかしローダは、その直後、意を決して別れの言葉を口にする。

「それじゃ二人とも、俺達は此れでさよならだ。また会える日を楽しみにしているよ」

そう言うとローダは、踵を返す。

それにつられて、ジルとセルシアもそれに倣っていた。

「あの、ちょっと待って。最後に一つだけお願いがあるの。それを聞いて下さらない？」

エネアとミネアの二人は、その場を立ち去ろうとするローダたちを呼び止めて、懇願するような眼差しを向けてきていた。

「お願いってなんだい。俺に出来る事なら良いんだけど？」

「あのローダ様、目をつぶって下さいな。そうしたら私たちの願いがかなうのです」

二人の姉妹は、そう言って口をつぐむ。

「目をつむる？ 一体、それはどうして？」

ローダは、怪訝な表情をしてそう問いたです。

しかし、

「いいから、目をつむればいいのよ。早くしなさい！」

と、セルシアに肘で突かれながらそう急かされていたので、仕方なく言う通りにする事にした。

「判った、それじゃ目をつむるよ。これで良いかい？」

ローダは、そう言うと、目をつむったままその場に立ち尽くしていた。

そこへローダを挟み込むような形で、エネアとミネアが顔を近付けてくる。

エネアはローダの右の頬に、ミネアは左の頬に、そっと背伸びをする形で唇を添える。

すると二人は、ローダのその頬に花の苔のような唇を押しつけると、軽く口付けをして、しばらくそのままの姿勢で、三人は風に吹かれていた。

セルシアは、その光景に軽い笑みを洩らす。

彼女は、その光景を、多少、大目に見てもいいという気がしていた。

まあ、この際だから仕方がない。

だがローダは、その行為に驚いて目をあけると、目の前には先程とはうって変わってにこやかな二人の姉妹の顔があった。

「これって、縁結びのおまじないなのです。きっとローダ様が、私たちの旦那様になってくれることを願って、おまじないをしたのです」

そう言って二人は、くすくすと小さな笑いを洩らしていた。

その笑いは、いつもの無邪気な二人の笑いのそれであった。

このささやかな願いが、かなうかどうかは別として、ローダは目を丸くして照れ笑いを浮かべたのは言うまでもない。

きっと縁結びの神様も、それを祝福して、この三人に微笑みかけてくれるかもしれない。

艶やかな、その愛の御歌を唄いながら……

《自認認証：表明表記》

自認認証：表明表記

小説タイトル：風剣伝説① エルドバよりの誘い

著者：秋月しょう一郎

初期考案年日：1989年～1990年頃

執筆期間：2001年08月中旬頃～2001年12月下旬頃まで・・・

備考：第八回スニーカー大賞 応募作品

(多分、選考外失格作品・・・でも当時の選考委員の先生や当時の最前衛で活躍していたプロの作家陣やスニーカー文庫編集部の方等が読んだ作品であると思う)

※表紙画像借用：Briiz による Pixabay からの画像

風剣伝説① エルドバよりの誘い

著 秋月しょう一郎

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
